

袖ヶ浦市文脇遺跡

— 主要地方道千葉鴨川線単道路改良(幹線道路網整備)
工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

平成7年3月

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

そで が うら ふみ わき

袖ヶ浦市文脇遺跡

— 主要地方道千葉鴨川線県単道路改良(幹線道路網整備)

工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 —



序 文

房総半島は良好な自然環境に恵まれ、先人の残した遺跡が数多く知られています。中でも袖ヶ浦市周辺には数多くの遺跡が所在し、古くから生活に適した環境であったことを物語っています。現在、この一帯は千葉新産業三角構想に基づくかずさアカデミアパークを始めとして、東京湾横断道路、東関東自動車道千葉富津線などの大規模な事業が進行し、大きな発展が期待されています。これに伴い、交通量の増加が見込まれるため、新たな交通網の整備が望まれるようになってきています。特に東関東自動車道千葉富津線へ接続する道路の整備が強く求められ、この一環として、主要地方道千葉鴨川線道路改良事業が計画されました。

千葉県教育委員会では、この道路改良事業に先立ち、事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県土木部道路建設課を初め関係諸機関と協議を重ねた結果、事業の性格上工事計画の変更は避けられないとの結論に達し、やむなく発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、財団法人千葉県文化財センターが昭和63年6月から11月まで実施し、先土器時代の石器集中地点を初めとして弥生時代後期と奈良時代の集落の一部分とみられる竪穴住居跡群、古墳時代の方墳、中世の土地造成跡などが検出されました。中でも、古墳時代の土壙墓に副葬された小銅鐸と玉類・鉄製品等の検出は、検出例の少ない小銅鐸の機能・用途を考える上で非常に貴重な資料と言えます。このたび、整理作業を終えて報告書を刊行する運びとなりましたが、本書が学術資料としてはもとより、広く文化財への理解を深めるために役立てば幸いです。最後になりますが、本書の作成に当たって、発掘調査から整理作業を経て刊行に至るまでの間、御指導・御協力をいただいた千葉県教育委員会を初め、関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 奥 山 浩

凡 例

1. 本書は、千葉県土木部による主要地方道千葉鴨川線県単道路改良事業（幹線道路網整備）に伴う埋蔵文化財調査の報告書で、千葉県袖ヶ浦市野里ほか所在の文脇遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、千葉県の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 調査で使用した遺跡のコード番号は、481-003である。
4. 発掘調査は、昭和63年度に実施し、整理作業は平成4年度・6年度に実施したが、期間・職員・担当者等は下記のとおりである。

発掘調査 昭和63年度 昭和63年6月1日から11月30日

調査部長 堀部 昭夫 部長補佐 岡川 宏道 班長 佐久間 豊
担当者 主任調査研究員 西口 徹 調査研究員 笠生 衛

整理作業 平成4年度 平成4年9月1日から平成5年1月31日

調査部長 天野 努 部長補佐 深澤 克友 班長 鈴木 定明
担当者 班長 鈴木 定明 班長代理 加藤 正信

平成6年度 平成6年4月1日から10月31日

調査研究部長 西山 太郎 市原調査事務所長 石田 廣美
担当者 分室長 加藤 正信

5. 本書の執筆分担は以下のとおりである。編集は加藤正信が行った。

加藤 正信 第1章、第2章1. 2. 3. の遺構 4. 5. 6.、第3章
大谷 弘幸 第2章3. の遺物

6. 報告書内の遺構名は、特殊なものを除き調査時のものを踏襲した。
7. カラー図版1及び3は堀越知道氏の撮影による。
8. 発掘調査から、本書の刊行に至るまで、下記の関係各位から御指導・御協力をいただいた。
ここに記して感謝の意を表します。

千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部君津幹線道路建設事務所、袖ヶ浦市（調査
当時君津郡袖ヶ浦町）教育委員会、財団法人君津都市文化財センター、山本哲也、永塚後
司、堀越知道（以上敬称略）

目 次

序 文
凡 例
目 次

第1章 序 章

1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の位置、環境	1
3. 調査の方法、経過、概要	6

第2章 検出した遺構と遺物

1. 旧石器時代	11
2. 縄文時代	41
3. 弥生時代	41
4. 古墳時代	98
5. 奈良・平安時代	112
6. 中世	123

第3章 ま と め

1. 旧石器時代	137
2. 弥生時代	138
3. 古墳時代	139
4. 奈良・平安時代	140
5. 中世	140

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 文脇遺跡と周辺遺跡	2	第24図 石器集中地点Ⅲ b 出土 石器(4)	28
第2図 文脇遺跡周辺地形図	4	第25図 石器集中地点Ⅲ b 出土 石器(5)	29
第3図 文脇遺跡調査状況図	7	第26図 石器集中地点Ⅳ石器出土状況 一石材(左)・器種(右)	30
第4図 文脇遺跡遺構配置図	9	第27図 石器集中地点Ⅳ出土石器	30
第5図 大グリッド・小グリッド 設定図	10	第28図 18号土坑実測図	41
第6図 調査区と石器集中地点Ⅰ～Ⅳ	12	第29図 1号住居実測図	43
第7図 大グリッドと小グリッド	12	第30図 1号住居出土遺物	44
第8図 基本層序	12	第31図 2号住居実測図	44
第9図 石器集中地点Ⅰ遺物出土状況	13	第32図 2号住居出土遺物	45
第10図 石器集中地点Ⅰ出土石器	13	第33図 4号住居実測図	45
第11図 石器集中地点Ⅱ石器出土状況 一石材	15	第34図 4号住居出土遺物	45
第12図 石器集中地点Ⅱ石器出土状況 一器種	15	第35図 5号住居実測図	46
第13図 石器集中地点Ⅱ出土石器(1)	16	第36図 5号住居出土遺物	47
第14図 石器集中地点Ⅱ出土石器(2)	17	第37図 6号住居実測図	47
第15図 石器集中地点Ⅱ出土石器(3)	18	第38図 6号住居出土遺物	47
第16図 石器集中地点Ⅱ出土石器(4)	19	第39図 7号住居実測図	48
第17図 石器集中地点Ⅱ出土石器(5)	20	第40図 7号住居出土遺物	49
第18図 石器集中地点Ⅱ出土石器(6)	21	第41図 8号住居実測図	49
第19図 石器集中地点Ⅲ石器出土状況 一石材	23	第42図 10号住居実測図	50
第20図 石器集中地点Ⅲ石器出土状況 一器種	24	第43図 10号住居出土遺物	51
第21図 石器集中地点Ⅲ a 出土石器(上段) ・Ⅲ b 出土石器(1)(下段)	25	第44図 12号住居実測図	52
第22図 石器集中地点Ⅲ b 出土 石器(2)	26	第45図 12号住居出土遺物	53
第23図 石器集中地点Ⅲ b 出土 石器(3)	27	第46図 13号住居実測図	53
		第47図 13号住居出土遺物	53
		第48図 14号住居実測図	55
		第49図 14号住居出土遺物	55
		第50図 15号住居実測図	56
		第51図 15号住居出土遺物	57

第52図	1 6号住居実測図	59	第84図	3 5号住居実測図	90
第53図	1 6号住居出土遺物	60	第85図	3 5号住居出土遺物	91
第54図	1 7号住居実測図(1)	62	第86図	3 6号住居実測図	93
第55図	1 7号住居実測図(2)	63	第87図	3 6号住居出土遺物	94
第56図	1 7号住居出土遺物(1)	64	第88図	3 7号住居実測図	94
第57図	1 7号住居出土遺物(2)	65	第89図	3 7号住居出土遺物	95
第58図	1 8号住居実測図	66	第90図	4 1号住居実測図	95
第59図	1 8号住居出土遺物	67	第91図	4 2号住居実測図	96
第60図	1 9号住居実測図	69	第92図	4 3号住居実測図	96
第61図	1 9号住居出土遺物	69	第93図	あぜ状遺構実測図	97
第62図	2 0号住居実測図	70	第94図	方墳1実測図	99
第63図	2 0号住居出土遺物	71	第95図	方墳1遺物出土状況	100
第64図	2 1号住居実測図	72	第96図	方墳1出土遺物(1)	101
第65図	2 2号住居実測図	72	第97図	方墳1出土遺物(2)	102
第66図	2 3号住居実測図	74	第98図	5号土坑実測図	104
第67図	2 5号住居実測図	75	第99図	1 4号土坑実測図	105
第68図	2 5号住居出土遺物	76	第100図	1 4号土坑出土遺物(1)	106
第69図	2 6号住居実測図	77	第101図	1 4号土坑出土遺物(2)	107
第70図	2 6号住居出土遺物	78	第102図	3号土坑・6号土坑・ 1 7号土坑実測図	110
第71図	2 7号住居実測図	80	第103図	1 9号土坑・2 0号土坑 実測図	111
第72図	2 7号住居出土遺物	81	第104図	2号土坑・3号土坑・ 6号土坑・1 9号土坑・ 2 0号土坑出土遺物	112
第73図	2 8号住居・2 9号住居 実測図	82	第105図	3号住居実測図	113
第74図	2 8号住居出土遺物	82	第106図	3号住居出土遺物	114
第75図	3 0号住居実測図	83	第107図	9号住居実測図	116
第76図	3 0号住居出土遺物	83	第108図	9号住居出土遺物	117
第77図	3 1号住居実測図	84	第109図	1 1号住居実測図	118
第78図	3 1号住居出土遺物	86	第110図	3 8号住居実測図	118
第79図	3 2号住居実測図	86	第111図	3 8号住居出土遺物	119
第80図	3 2号住居出土遺物	87	第112図	3 9号住居・4 0号住居	
第81図	3 3号住居実測図	88			
第82図	3 4号住居実測図	88			
第83図	3 4号住居出土遺物	89			

実測図	121	第120図	溝1・8号土坑・9号土坑・ 10号土坑・11号土坑
第113図	39号住居出土遺物	実測図	132
第114図	40号住居出土遺物	第121図	12号土坑・13号土坑・ 15号土坑・21号土坑・ 22号土坑実測図
第115図	24号竪穴実測図	第122図	12号土坑出土遺物
第116図	24号竪穴出土遺物	第123図	133
第117図	地形造成跡実測図	グリッド等出土遺物	135
第118図	地形造成跡区画B実測図		
第119図	地形造成跡区画C実測図		

表 目 次

第1表 石器集中地点I遺物	観察表	33	第4表 石器集中地点III b 遺物	観察表	35・36
第2表 石器集中地点II遺物	観察表	33・34	第5表 石器集中地点IV遺物	観察表	36・37
第3表 石器集中地点III a 遺物	観察表	34・35	第6表 石器組成と母岩別分類表	37～39	
			第7表 14号土坑出土玉類計測表	108	

写真図版目次

カラー図版1 小銅鐸及び玉類	図版7 石器集中地点II出土石器(1)
カラー図版2 14号土坑小銅鐸等出土状況	図版8 石器集中地点II出土石器(2)
カラー図版3 小銅鐸	図版9 石器集中地点II出土石器(3)
図版1 文牆遺跡周辺空中写真	図版10 石器集中地点II出土石器(4)
図版2 発掘調査前状況	図版11 石器集中地点III a・III b 出土石器 (1)
図版3 旧石器時代土層断面、石器集中地点 II出土状況	図版12 石器集中地点III b 出土石器(2)
図版4 石器集中地点III出土状況	図版13 石器集中地点III b 出土石器(3)
図版5 石器集中地点IV出土状況、18号土 坑	図版14 1号住居、2号住居
図版6 石器集中地点I・IV出土石器	図版15 2号住居、4号住居
	図版16 5号住居、6・7号住居

- | | | | |
|------|----------------|------|--------------------------------|
| 図版17 | 8号住居、10号住居 | 図版40 | 11号住居、38号住居 |
| 図版18 | 12号住居、13号住居 | 図版41 | 38号住居、39号住居 |
| 図版19 | 14号住居 | 図版42 | 39号住居 |
| 図版20 | 15号住居 | 図版43 | 24号竪穴、地形造成跡 |
| 図版21 | 16号住居 | 図版44 | 3号土坑、6号土坑、8号土坑 |
| 図版22 | 17号住居、18号住居 | 図版45 | 10号土坑、11号土坑、12号土坑 |
| 図版23 | 19号住居 | 図版46 | 13号土坑、17号土坑、19号土坑 |
| 図版24 | 20号住居 | 図版47 | 20号土坑、21号土坑、22号土坑 |
| 図版25 | 21号住居、22号住居 | 図版48 | 溝1、溝13、溝14 |
| 図版26 | 23号住居、25号住居 | 図版49 | 出土遺物(1)(2・5・10・14・15・16・17号住居) |
| 図版27 | 26号住居、27号住居 | 図版50 | 出土遺物(2)(17号住居) |
| 図版28 | 28・29号住居、31号住居 | 図版51 | 出土遺物(3)(20・26・27・32・35号住居) |
| 図版29 | 32号住居、34号住居 | 図版52 | 出土遺物(4)(35・36号住居、方墳1) |
| 図版30 | 35号住居、36号住居 | 図版53 | 出土遺物(5)(3・9・38号住居) |
| 図版31 | 37号住居、41号住居 | 図版54 | 出土遺物(6)(38・39号住居、グリッド一括、24号竪穴) |
| 図版32 | あぜ状遺構 | 図版55 | 出土遺物(7)(14号土坑) |
| 図版33 | 方墳1 | | |
| 図版34 | 方墳1、5号土坑 | | |
| 図版35 | 14号土坑 | | |
| 図版36 | 14号土坑 | | |
| 図版37 | 14号土坑 | | |
| 図版38 | 3号住居 | | |
| 図版39 | 9号住居 | | |

第1章 序 章

1. 調査に至る経緯

千葉県は、東関東自動車道千葉富津線等の高速道路網の建設に伴う周辺交通網の整備のため、接続道路の一つである主要地方道千葉鶴川線の道路改良事業を計画した。千葉鶴川線は東関東自動車道から外房方面への主要な幹線道路となり、交通量の増加が見込まれることからそれに応じた改良工事が必要となったものである。この道路改良事業に当たって、千葉県土木部道路建設課は、千葉県教育委員会に対し事業予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会をした。これに対して千葉県教育委員会から事業用地内に遺跡が所在する旨の回答があった。その後、遺跡の取扱いについて協議が重ねられた結果、事業の性格上現状保存は不可能で、記録保存の措置を講ずることで協議が整った。そこで用地買収の終了した地区から発掘調査を実施することとなり、財團法人千葉県文化財センターが調査を実施した。

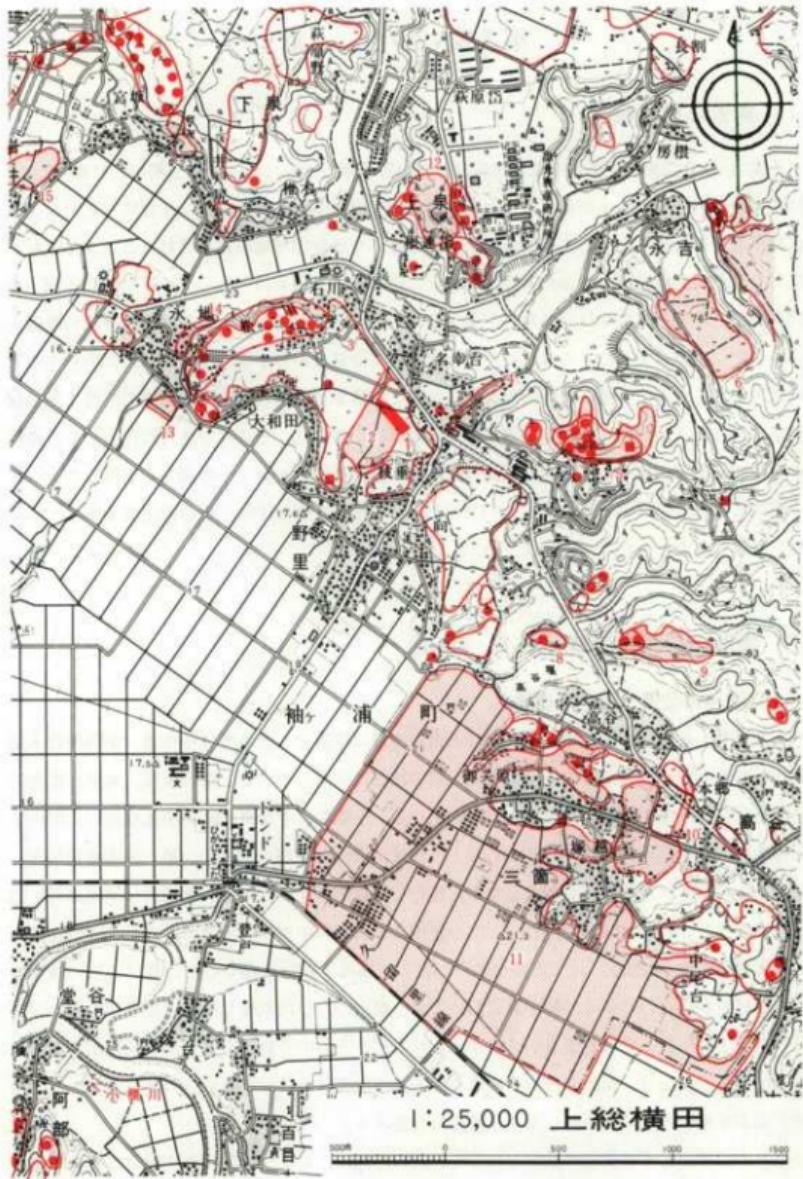
調査は昭和63年6月から11月にかけて3,150m²の発掘調査を行い、その後平成4年度・6年度に整理作業を行った。

2. 遺跡の位置、環境（第1図・第2図）

（1） 遺跡の位置、周辺の環境

千葉県袖ヶ浦市は、房総半島中央部分の東京湾岸に位置し、北東側は市原市、南西側は木更津市に接し、東京湾岸から内陸部の房総丘陵の端部に立地している。市の南側、木更津市との境界付近には小櫃川が流れ、東京湾に注いでいる。小櫃川は千葉県南部の房総丘陵の清澄山系に源を発し、半島中央を縦断しながら深く、複雑に開析しながら北流し、袖ヶ浦市横田周辺で流路を西にかえ、沖積平野を形成しながら蛇行し東京湾へ注いでいる。千葉県は県境以外には大河川がなく、中小河川ばかりであるが、小櫃川はそれらの中では最大級のもので、流路長88km、流域面積273.2km²を測る。河川流路全域にわたって曲流・蛇行を繰り返し、特に先述の袖ヶ浦市横田付近から河口に至る沖積平野においては、豪雨のたびに氾濫し流路の変更がたびたびみられた。また小櫃川には支流もいくつかみられるが、その中で最大級の支流の松川が横田で合流している。松川は、房総台地の市原市と袖ヶ浦市境界付近に源を発し、台地を浸食しながら袖ヶ浦市永地付近で沖積平野に至り小櫃川に合流する。

以上的小櫃川とその支流の松川との合流付近の北側に、ここで報告する文脇遺跡を含む上泉遺跡群の所在する台地が位置する。遺跡付近の沖積平野の標高は約17mを測り、台地上は34mから45mを測る。遺跡周辺の台地は、上総台地と房総丘陵との境界付近に当たり、沖積低地か



第1図 文脇遺跡と周辺遺跡(国土地理院発行1:25,000地形図 上総横田を使用)

一段上位の台地上は、ほぼ平坦でまとまった広さをもつ河岸段丘低位面とみられる。標高は30mから40mの高さである。そこから上位には丘陵状のやせ尾根が続き、標高は80mから100m前後である。特に遺跡の東側に続く丘陵は、最高所で小櫃川流域と養老川流域との分水嶺となり南北方向に連なる。台地は、小櫃川の現河道から北東へ2.5kmほど沖積低地を進んだ所に位置している。台地上の平坦面は北西から南東にかけて延び最大幅約0.5km、長さ約1.5kmほどの広さを持っている。海岸方面から小櫃川をさかのばってくると、本遺跡の位置する台地がまとった広さを持つ最後の台地となっている。周辺の台地上の遺跡と比較して、本遺跡の遺構密度の高さの要因となりうる台地の立地状況である。調査区は台地上ではほぼ平坦であるが、南東側は南から入り込む谷頭に接し、緩く傾斜しながら開析支谷へと続き小櫃川の沖積低地へと連なっている。

本遺跡の位置する地点は、袖ヶ浦市野里に属すが、近接する主要地方道千葉鴨川線は上泉であり、調査地点周辺が大字の境界近くとなっている。このため上泉遺跡群のかなりの部分は上泉所在であるが、君津都市センター調査区と当センター調査区は野里に所在する。また調査実施時には、君津郡袖ヶ浦町であったが、調査終了後の平成3年4月1日から、市政を施行し袖ヶ浦市となった。このため遺跡の市町村コードは袖ヶ浦町の「481」が付けられている。遺物への注記等もそれが用いられているため市町村コードは変えずにそのまま踏襲し、行政上の名称のみ袖ヶ浦町から袖ヶ浦市とすることにした。またここでは資料等文献の都合上、明記されている場合を除いて袖ヶ浦市を用いている。

(2) 周辺の遺跡、歴史環境

本遺跡の位置する上泉遺跡群は広大な面積をもち、周辺にも各時代にわたって多数の遺跡が周知され、また近年の開発に伴う調査事例の増加に比例して、数多くの重要な資料が提供されつつある。一方、文脇遺跡は当センターの調査だけでなく、財團法人君津都市文化財センター（以後、君津都市センターと略称）によって、袖ヶ浦市平岡公民館及び運動広場建設に先立つ広範囲にわたる確認調査及び本調査が実施されている。その調査区に隣接して当センターの調査区が位置しているが、遺跡の主要部分は君津都市センター調査地区の方である。君津都市センターから「文脇遺跡」として報告書が刊行されている⁽¹⁾ので、文脇遺跡の概要及び遺跡の概観はそれに譲ることにし、ここでは周辺の各時代ごとの主要遺跡について列挙してみたい。

1. 文脇遺跡（今回報告分）
2. 文脇遺跡（君津都市文化財センター報告分）
3. 上泉遺跡群（古墳群）
4. 上泉遺跡（当センター報告分）
5. 寒沢遺跡（古墳群）
6. 遠寺原遺跡（永吉台遺跡群）
7. 西寺原遺跡（永吉台遺跡群）
8. 清水井遺跡
9. 下向山遺跡（古墳群）
10. 荒久遺跡
11. 三箇遺跡群
12. 打越岱遺跡
13. 水地遺跡
14. 上泉遺跡（当センター報告分）
15. 念仏塚遺跡

*遺跡のスクリーントーンは調査歴のある遺跡



第2図 文脇遺跡周辺地形図(袖ヶ浦市発行 1:2,500地形図より縮小編集)

ア、先土器時代

先土器時代の調査例はあまり報告されていない。これは姉崎付近から袖ヶ浦市にかけてを境に、基盤となる層に大きな変化があることが要因とみられる。この境界以南は、硬質の岩盤が基盤層となっており立川ローム層の安定した堆積がみられないためであろう。ただし、近接する上泉遺跡（『袖ヶ浦市上泉遺跡』所収）⁽²⁾では良好な立川ローム層の堆積がみられ、立川ローム層Ⅱ層中から比較的まとまった石器群が検出されていることから、本遺跡周辺が良好な立川ローム層の堆積の南限に近いものとみられる。

イ、縄文時代

縄文時代では、中期・後期を中心に著名な遺跡が分布する。東京湾岸は貝塚が集中して分布することで知られているが、大規模な馬蹄形貝塚の分布は当地域をほぼ南限とする。特に著名なものとしては木更津市祇園貝塚（中期・後期）⁽³⁾、袖ヶ浦市山野貝塚（後期・晩期）⁽⁴⁾等があげられる。このほかにも小櫃川下流には袖ヶ浦市飯富から大曾根にかけて、伊丹山遺跡⁽⁵⁾をはじめとする縄文時代中期・後期の遺跡が多数分布している。

ウ、弥生時代

周辺には、木更津市芝野遺跡⁽⁶⁾が存在し、弥生時代中期の水田跡とそれに関連する遺構・遺物が良好な遺存状況で検出されている。集落遺跡は、袖ヶ浦市境遺跡（中期環濠集落）⁽⁷⁾、溝ノ口向台遺跡（後期）⁽⁸⁾、美生遺跡⁽⁹⁾、寒沢遺跡⁽¹⁰⁾等が調査されており、今後の報告が期待される。文臨遺跡では、君津都市センター調査報告からみても、遺跡の最も中心をなすのは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺構である。

エ、古墳時代

遺跡の東約2kmには桶爪遺跡⁽¹¹⁾が所在し、集落を形成している。古墳は、上泉遺跡群の中にも古墳群も含まれる。台地の西側部分に所在するが、発掘調査等がほとんど行われていないので詳細は不明である。一方遺跡東側には寒沢遺跡が位置し、古墳群として後期の群集墳もふくまれている。近年、君津都市センターが調査を行っている。

オ、奈良・平安時代

文臨遺跡の東約1kmに所在する永吉台遺跡群⁽¹²⁾がまずあげられる。台地上に営まれた平安時代の集落遺跡で、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土坑墓、寺院跡、土器作り工房跡などが検出されている。さらに東約3kmには、萩ノ原遺跡⁽¹³⁾が所在する。平安時代の集落跡から寺院跡、製鉄工房などが検出されている。両遺跡の間にある、東郷台遺跡⁽¹⁴⁾から寺院跡とみられる遺構が検出され、川原井廃寺として知られている。

カ、中世

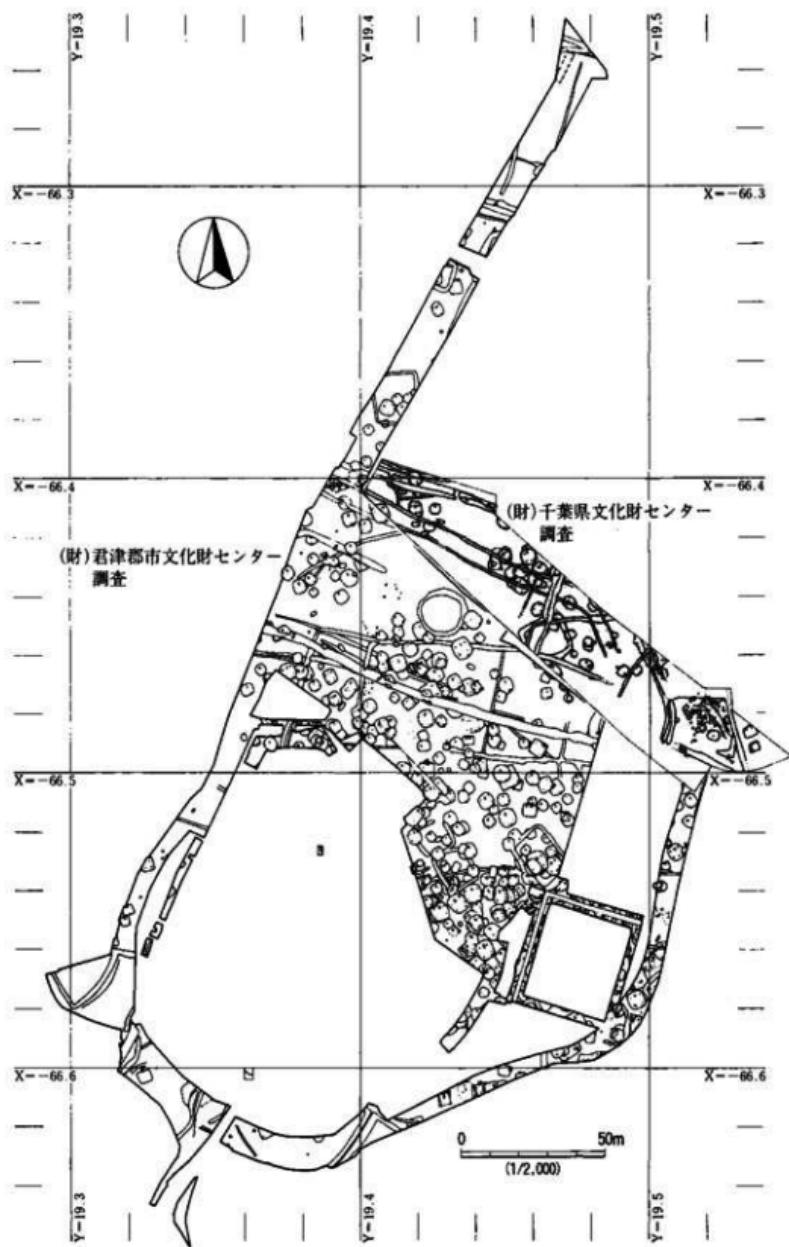
文臨遺跡の南東約2kmには、14世紀から15世紀にかけての居館と集落遺跡とみられる荒久遺跡⁽¹⁵⁾が所在する。下流の袖ヶ浦市大曾根では中世の鎌倉街道に沿った「市」とみられる遺構

が検出された山谷遺跡⁽¹⁶⁾が所在する。城館遺跡では遺跡より小堀川やや上流の馬来田からさらに東の房総丘陵内に位置する15・16世紀の長南武田氏の居城真里谷城跡⁽¹⁷⁾、その支城で遺跡より下流に下った木更津市笠子の笠子城跡⁽¹⁸⁾などがあげられる。

- 注（1）「文脇遺跡一千葉県袖ヶ浦市一」（財）君津都市文化財センター 1992
（2）「袖ヶ浦市上泉遺跡」（財）千葉県文化財センター 1993
（3）『祇園貝塚』千葉県文化財調査抄報第4集 千葉県教育委員会
（4）『袖ヶ浦町山野貝塚』千葉県都市公社 1973
　　「袖ヶ浦市山野貝塚」千葉県教育委員会・（財）千葉県文化財センター 1993
（5）『袖ヶ浦町伊丹山遺跡』伊丹山遺跡発掘調査団 1979
（6）『木更津市芝野遺跡』千葉県文化財センター年報No17』（財）千葉県文化財センター 1992
（7）『境遺跡』（財）君津都市文化財センター 1985
　　「境No2遺跡」（財）君津都市文化財センター 1985
　　「境遺跡-第2次調査-」（財）君津都市文化財センター 1989
（8）『袖ヶ浦市流ノ口向台遺跡・大作古墳群』（財）千葉県文化財センター 1993
（9）『美生遺跡群』I・II・III・IV（一部未刊）（財）君津都市文化財センター
（10）（財）君津都市文化財センター平成元・2・3・5・6年度調査、現在整理作業中
（11）『桶爪』桶爪遺跡発掘調査団 1979
（12）『水吉台遺跡群』（財）君津都市文化財センター 1985
（13）『千葉県萩ノ原遺跡発掘調査報告書』日本文化財研究所 1977
（14）『東郷台遺跡（川原井廬寺）-千葉県袖ヶ浦町一』（財）君津都市文化財センター 1986
（15）『袖ヶ浦市荒久（2）遺跡』千葉県文化財センター年報No17』（財）千葉県文化財センター 1992
　　加藤正信・笹生 衛 「荒久遺跡の概要」『研究連絡誌』第37号 （財）千葉県文化財センター 1993
（16）『袖ヶ浦市山谷遺跡』千葉県文化財センター年報No19』（財）千葉県文化財センター 1994
　　柴田龍司 「鎌倉道と市一袖ヶ浦市山谷遺跡の成果から」『研究連絡誌』第41号 （財）千葉県文化財センター 1994
（17）『真里谷城跡』木更津市教育委員会
（18）柴田龍司 「笠子城跡の概要」『研究連絡誌』第37号 （財）千葉県文化財センター 1993

3. 調査の方法、経過、概要（第3図～第5図）

昭和62年度から平成元年度にわたって君津都市センターが隣接地の32,160m²を対象に確認調査を実施し、そのうちの16,570m²を本調査している。そのため当センターが調査を着手する際には遺跡の状況はかなりの精度で掌握されていた。そこで確認調査は行わず調査対象の3,150m²について当初から本調査を実施した。両センターの調査区が隣接しているため調査区にまた



第3図 文脇遺跡調査状況(君津都市文化財センター発行「文脇遺跡」より編集)

がって遺構が所在していたので、両センターの調査担当者の話合いによって、担当遺構を配分し調査を実施した。

調査に当たっての地区割りは、既に昭和62年度に君津都市センターが広範な範囲にわたってグリッド割りを設定していたが、連絡が不十分で当センターは独自のグリッド割りを設定して調査を実施したので、当センターと君津都市センターとのグリッド名称は同一ではない。ただし両者ともに公共座標区系に基づいて、東西南北方向に20m間隔の方眼を組んだので、方眼の区画は同じ座標で区画されている。

小グリッドを調査の必要に応じ設定したが、上記の大グリッドを東西南北に10分割し計100コマに分け、北西から東に00から09、南の列に移って西から東へ10から19、同様に繰り返し90から99に至る100コマに分割した。これによって大グリッド-小グリッド（例 2B-35、5F-63）の組合せによって2m単位でのグリッド表示ができるようになった。

発掘調査は昭和63年6月から着手し、上層遺構は、表土である畠の耕作土を重機を用いて排土し、人手で遺構確認面を清掃し、検出された遺構を調査した。その後下層遺構について、対象面積の4%に当たる面積の確認調査を実施し、遺物の検出されたグリッド周辺を遺物出土層位の近くまで重機によって排土し、調査区を拡張して人手によって本調査を実施した。その結果、遺物集中出土地点が4地点検出され調査を実施した。下層遺構の調査を終了し、昭和63年11月末に発掘調査を終了した。

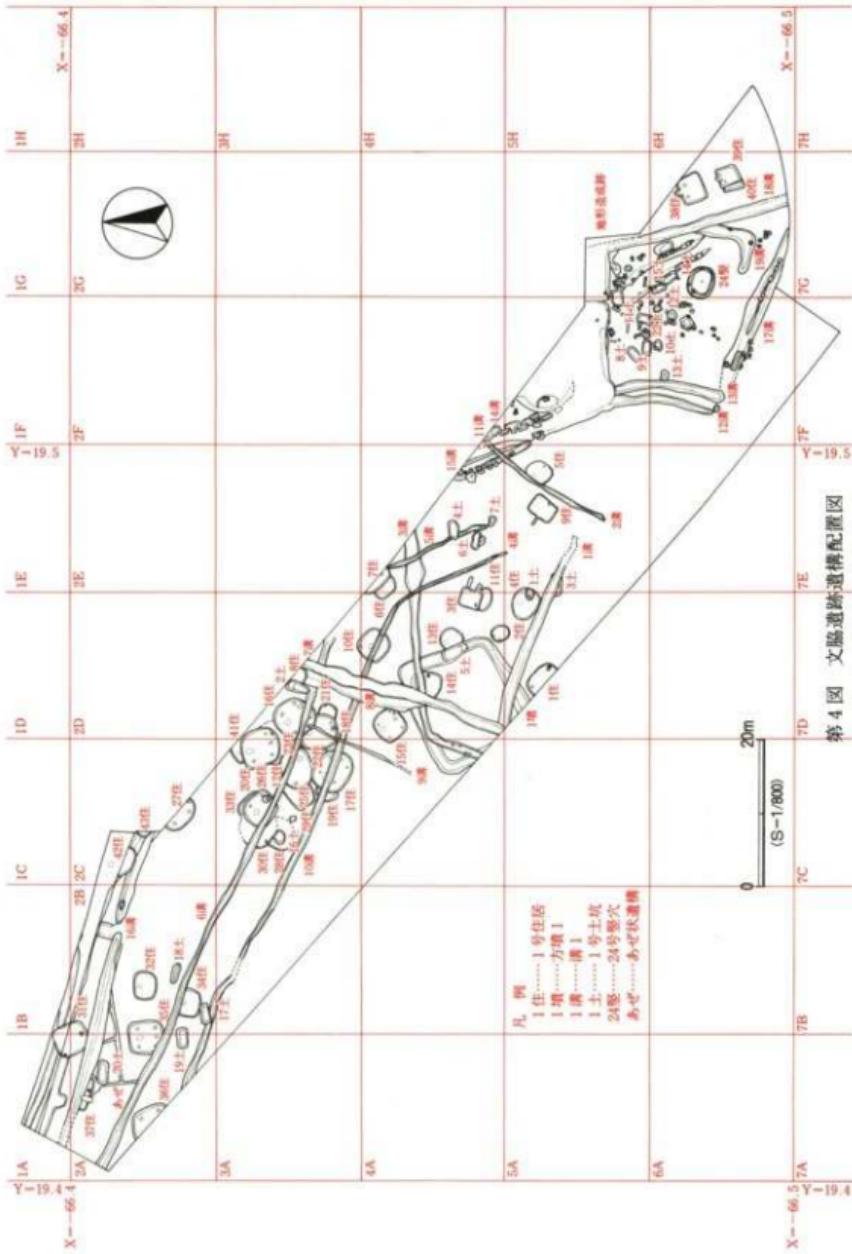
下層遺構は、確認調査の結果遺物の集中して検出された4地点を、4か所の調査区として拡張調査した。遺物は、立川ローム層第2黒色帯に当たる第Ⅳa・c層を中心として出土し（土層は当時の呼称方法、現在千葉県文化財センターでの呼称方法ではⅣ～Ⅴ層にあたる）、総数約100点ほどとなった。

上層遺構は、縄文時代の陥穴1基、弥生時代後期の竪穴住居跡36軒、古墳時代の方墳1基、土坑7基、奈良・平安時代の竪穴住居跡6軒、中世の地形造成面と小ピット群、溝9条を検出調査した。これらの遺構の中では、古墳時代の土坑の7基のうちの1基から、小銅鐸1点、ガラス玉17点、琥珀玉1点、水晶製糸玉1点、鉄製品4点、土製品1点が出土した。土坑への遺体の埋葬に際し副葬されたものとみられ、調査時点では千葉県内で4例目的小銅鐸の出土例となった。全8例（平成6年8月現在）を数える小銅鐸のうち出土遺構が明瞭で伴出遺物の明確なものとしては、当時県内で初の出土例となり注目を集めた⁽¹⁾。

注 (1)「君津都袖ヶ浦町文脇遺跡（千葉鴨川線）」『千葉県文化財センター年報No14』

（財）千葉県文化財センター 1989

古内 茂・西口 淳 「千葉県袖ヶ浦町文脇遺跡出土の小銅鐸」『考古学雑誌』第75巻第2号
日本考古学会 1989



	G	H	I	J	K	L	M	N	
1	1A	1B	1C	1D	1E	1F	1G	1H	20m
2	2A	2B							
3	3A	3C							
4	4A		4D						
5	5A			5E					
6	6A				6F				
7	7A					7G			
8	8A						8H		

(S-1/4,000)

枠外の数字・アルファベットは
君津都市文化財センター調査時
大グリッド呼称。
枠内のものは、当センター調査
時大グリッドの呼称。

大グリッド

Ⓐ

00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11								
20		22							
30			33						
40				44					
50					55				
60						66			
70							77		
80								88	
90									99

(S-1/400)

小グリッド

第5図 大グリッド・小グリッド設定図

第2章 検出した遺構と遺物

1. 旧石器時代

(1) 石器群の概要 (第6図・第7図)

本遺跡は小櫃川下流域右岸に位置し、北側の支谷によって形成された舌状台地上に立地している。千葉県下での旧石器時代遺物がまとまって出土した例の中では最南端に位置し、本遺跡のほかにはⅩ層中から良好な資料を検出した南青野遺跡が挙げられる。南青野遺跡は本遺跡から北東方向に直線距離で13kmの位置にあり、養老川下流域右岸の台地上に立地している。

旧石器時代の石器集中地点は調査範囲の南西部分にある。本石器群の出土層位は主に第二黒色帯下部が中心である。調査時においてはⅦa層とⅧc層出土として取り上げていたが、遺物の垂直分布図や石器群の内容からはそれらを明確に分離する積極的な根拠を見いだせないと判断し、各集中地点の石器群を大略同一時期のものと捉えた。

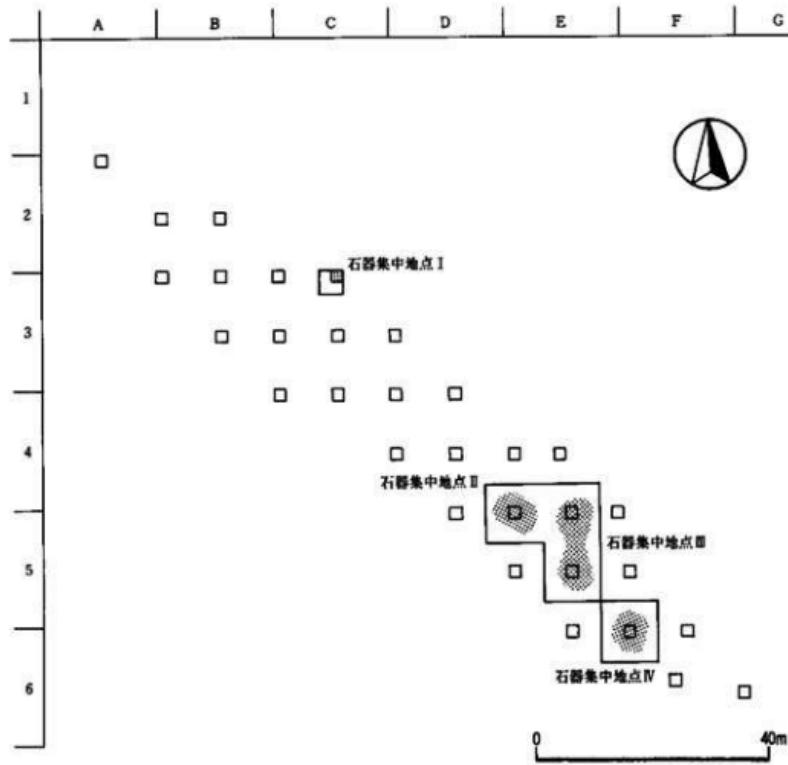
石器集中地点は大きくは4地点に分離される。それぞれ石器集中地点I～IVと呼称する。そのうち集中地点Ⅲはさらに2つに分離され、Ⅲa・Ⅲbと呼ぶ。各集中地点とも規模は小さく、中でも集中地点Iは石核の単独出土である。また、組成する石器の器種は質量とともに貧弱で、主なものには台形様石器、石錐、石斧、礫器、叩き石を挙げるのみである。利用石材は頁岩・安山岩・チャート・黒色緻密安山岩が主体的であり、砂岩・泥岩・メノウ・凝灰岩・黒曜石が客体的に存在する。

(2) 層位について (第8図、図版3)

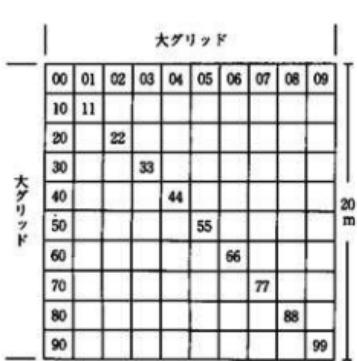
下総台地での立川ロームの細分については様々に解釈されてきた。しかし現在、暫定的ではあるが標準的な層位が示され、その解釈も一定のところに落ちつきつつある。本遺跡は昭和63年に調査された関係で今日の解釈と若干異なっているため、混乱を避ける意味でも、ここで調査時の見解に若干の訂正を加えて示すこととする。

はじめに調査時の立川ロームの細分の記載をそのまま紹介する。

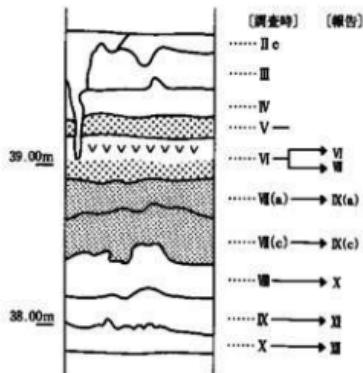
I 層	表土層
IIc 層	暗褐色土 縄文時代の遺物包含層
III 層	黄褐色土 立川ローム最上層 ソフトローム層
IV 層	黄褐色土 一部ソフト化した部分がみられる。粘質。
V 層	暗黄褐色土 ハードローム層 第1黒色帯に相当。粘質。クラックが激しい。
VI 層	明黄褐色土 始良テフラ層が主体を占める。乾くと板状に大きく剥がれる。
VIa 層	暗黄褐色土 スコリア(赤い粒)が若干含まれる。しまりあり。一部の遺物が検出された。いも石も多く出土。



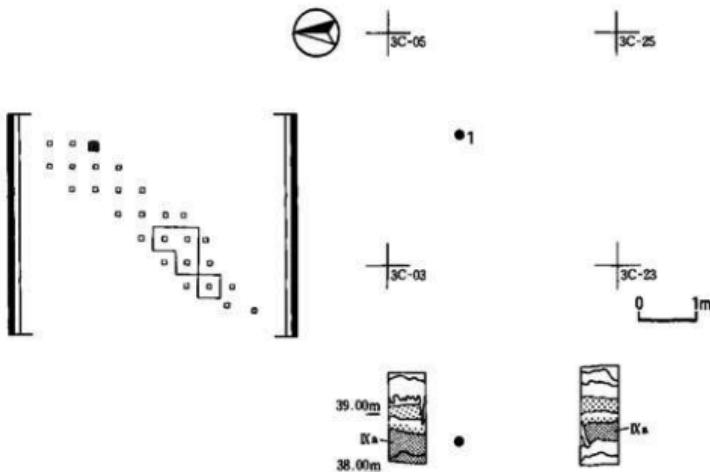
第6図 調査区と石器集中地点Ⅰ～Ⅳ



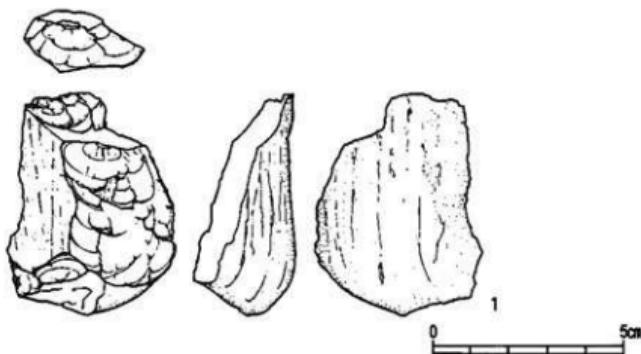
第7図 大グリッドと小グリッド



第8図 基本層序



第9図 石器集中地点I 遺物出土状況



第10図 石器集中地点I 出土石器

VIIc層 暗褐色土 第2黒色帯に相当する。最も多く遺物が出土した。

V層 暗黄褐色土 立川ローム最下層 一部遺物が出土した。ややクラックがみられる。

IX層 青褐色土 武藏野ローム最上部に相当。少し水を被った感じである。

X層 青褐色土 武藏野ローム

調査時には立川ローム最上層から最下層に至るまでⅢ～Ⅴ層に細分している。始良丹沢火山灰（AT）層の上位については多くの遺跡でソフト化によってⅣ層の検出が困難であったり、V層の第1黒色帯が検出できない場合が多いが、本遺跡では安定したⅣ・V層が確認できたこ

とは注目される〔島立・新田・渡辺 1992〕。A Tを包含するVI層はかなり厚い層厚で捉えられているが、これはA Tの下位への拡散が影響しているといえよう。つまり、このVI層の下半部は第2黒色帯上部に属し、現在でいうVI層に対応すると考えられる。したがって、遺物包含層であるVIa・VIc層は現在ではIXa・IXc層に相当すると考えられる。

以下に調査時の見解から本報告で使用する層位の訂正部分についてまとめる。

VI層上半→VI 層 [ほぼ純粹にA Tを包含する層]

VI層下半→VII 層 [第2黒色帯上部]

VIIa層 →IXa層 [第2黒色帯下部上半]

VIIc層 →IXc層 [第2黒色帯下部下半]

VII 層 →X 層 [立川ローム最下層]

(3) 石器集中地点 I (第9図・第10図、第1表・第6表、図版6)

他の石器集中地点とは離れて、3C-05グリッドから頁岩製の石核1点のみが検出された。便宜的に集中地点Iと呼ぶ。出土層位はIXa層である。石核の裏面には自然面を残し、平坦打面から剥片を剥離しているが、節理が縦横に走り良好な剥片剥離は認められない。作業面の一部には節理面が残る。

(4) 石器集中地点 II (第11図~第18図、第2表・第6表、図版3・図版7~図版10)

4E-90グリッドを中心に広がる集中地点で、平面分布から3つの集中域に分離される。出土層位はIXa~IXc層である。

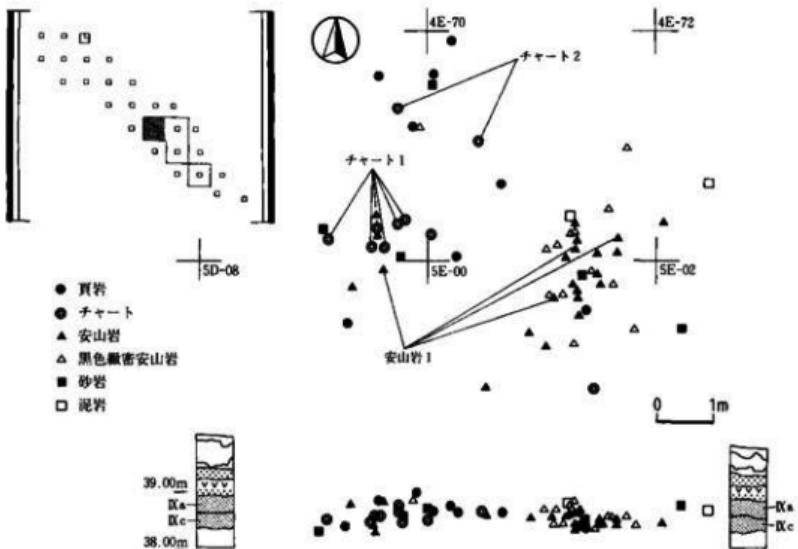
ア、石器組成

石錐1点、石核6点、礫器1点、剥離痕のある剥片6点、剥片40点、碎片2点、礫・破損礫7点で合計63点の石器が出土した。

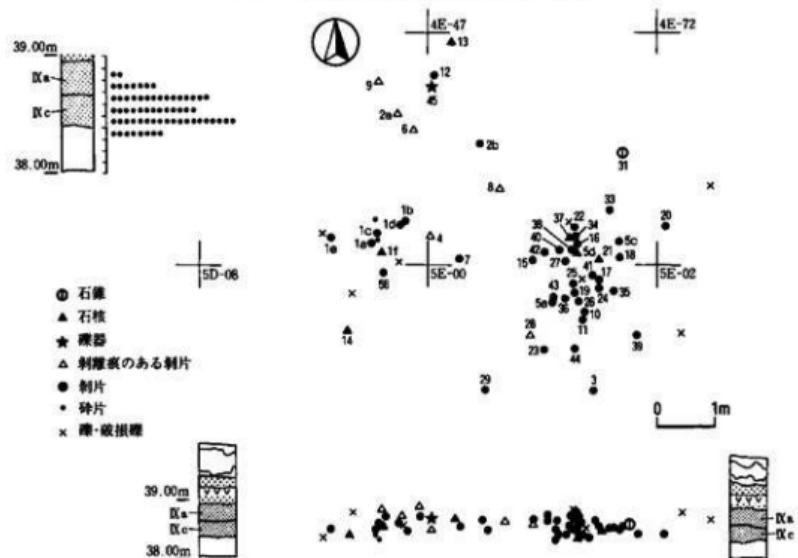
31は黒色緻密安山岩製の石錐である。剥片剥離時の打面相当部を、主に腹面側から調整を施し刃部を形成している。石核は1f・5d・13・14・21・37の6点が出土した。石材はそれぞれチャート1・安山岩1・頁岩・頁岩・安山岩・黒色緻密安山岩である。剥片素材のもの(13・14・21)と礫素材(1f・5d・37)のものがある。前者には比較的多く打面転移が認められる。45は砂岩製の円礫に調整を施した片刃の礫器と考えられる。所属時期は縄文時代である可能性がある。

イ、石材 (母岩分類)

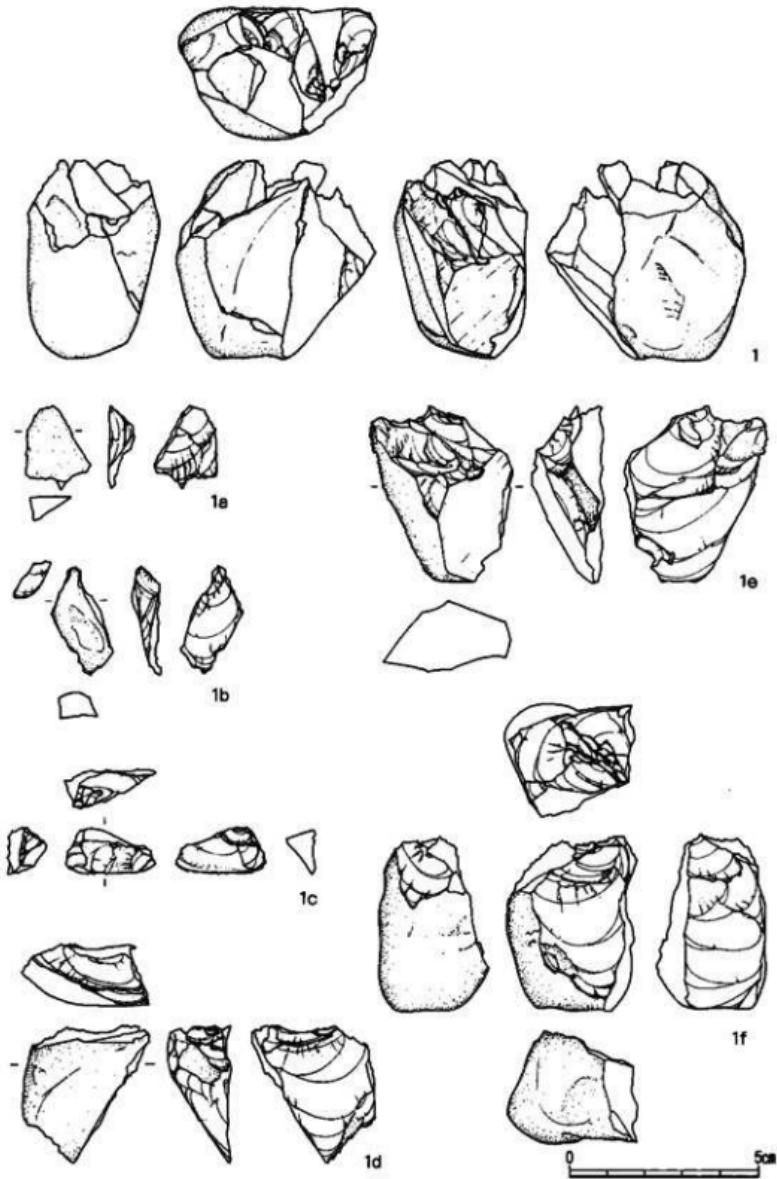
利用石材は安山岩・黒色緻密安山岩・チャート・頁岩・砂岩・泥岩である【点数比：35.6/22.2/15.9/14.3/7.9/3.2% 重量比：14.9/5.1/16.3/15.5/47.4/0.8%】。特に安山岩・黒色緻密安山岩は他の集中地点と比較して、特徴的に出土している。母岩分類の可能な資料はチャート1・2と安山岩1の3母岩に過ぎない。しかもこれらはすべて接合関係がみられる資料である。



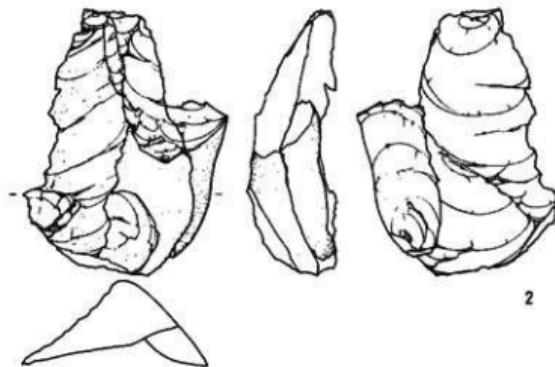
第11図 石器集中地点Ⅱ石器出土状況一石材



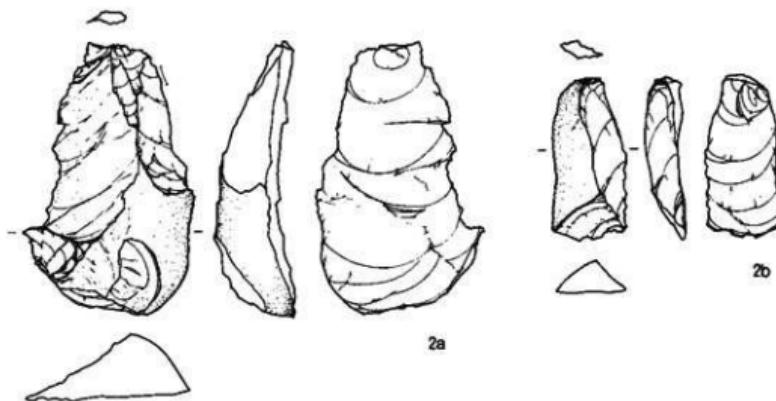
第12図 石器集中地点Ⅱ石器出土状況一器種



第13図 石器集中地点Ⅱ出土石器(1)

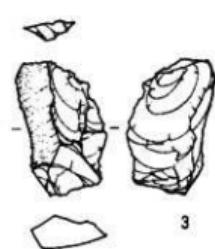


2

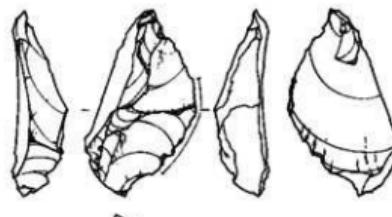


2a

2b



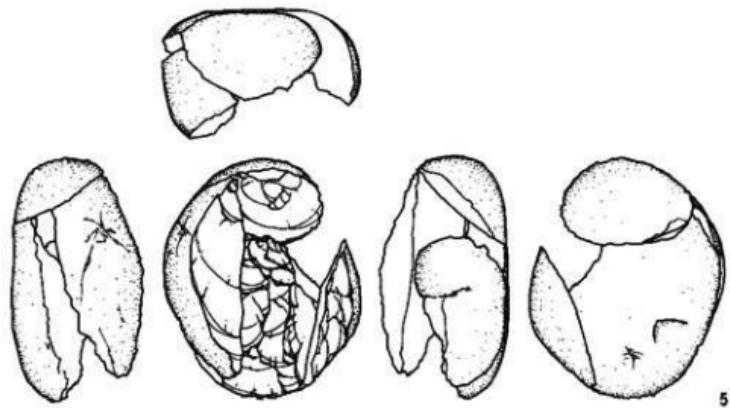
3



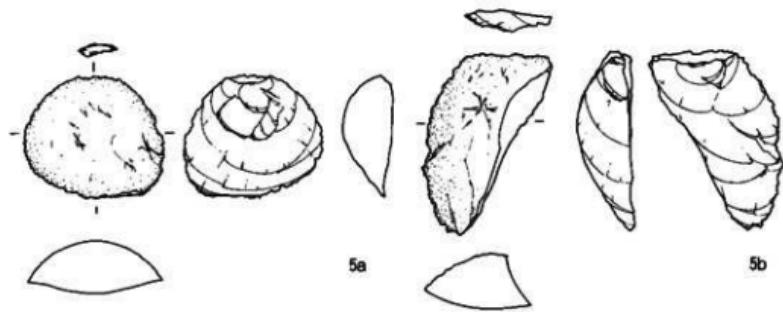
4

0 5cm

第14図 石器集中地点Ⅱ出土石器(2)

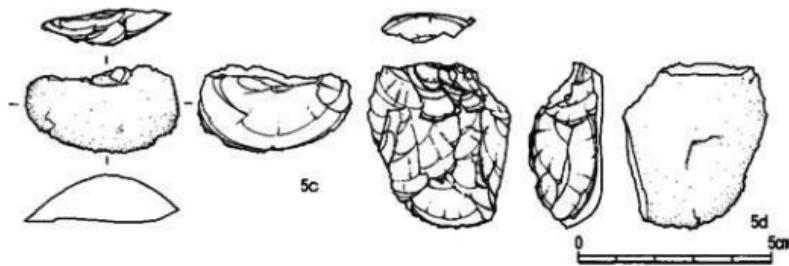


5



5a

5b

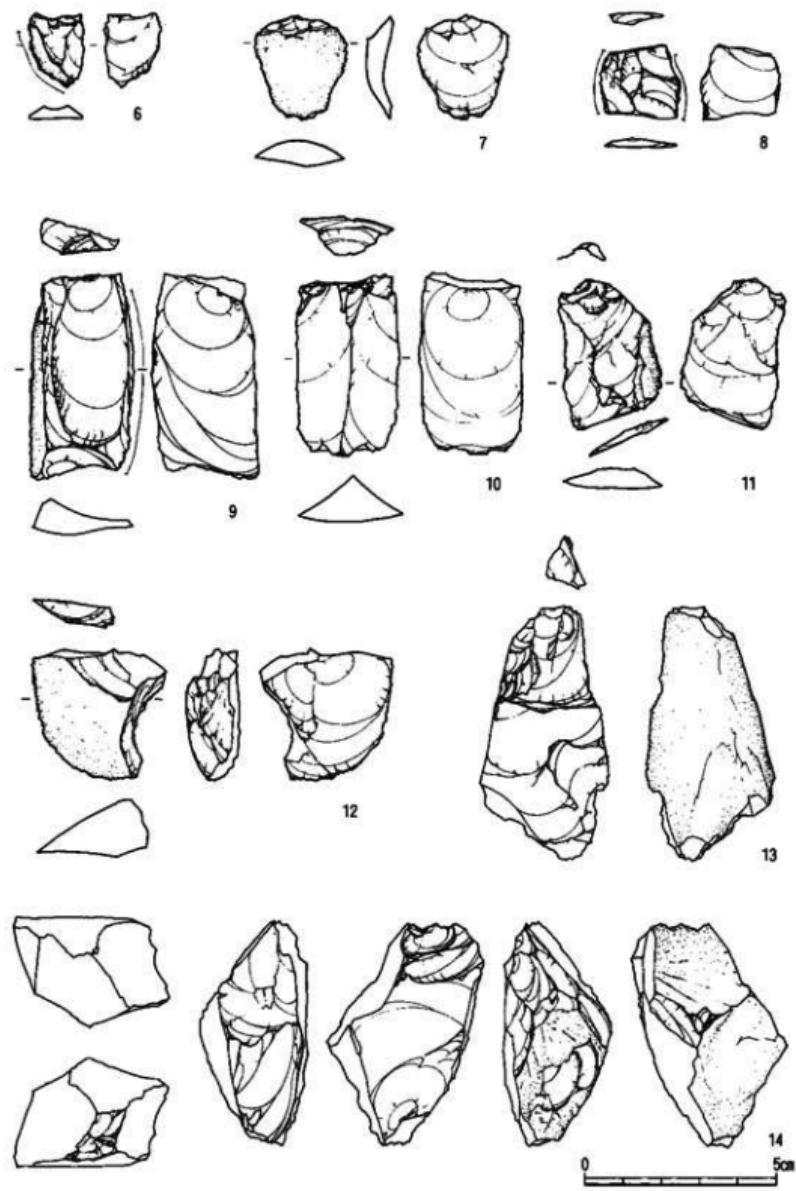


5c

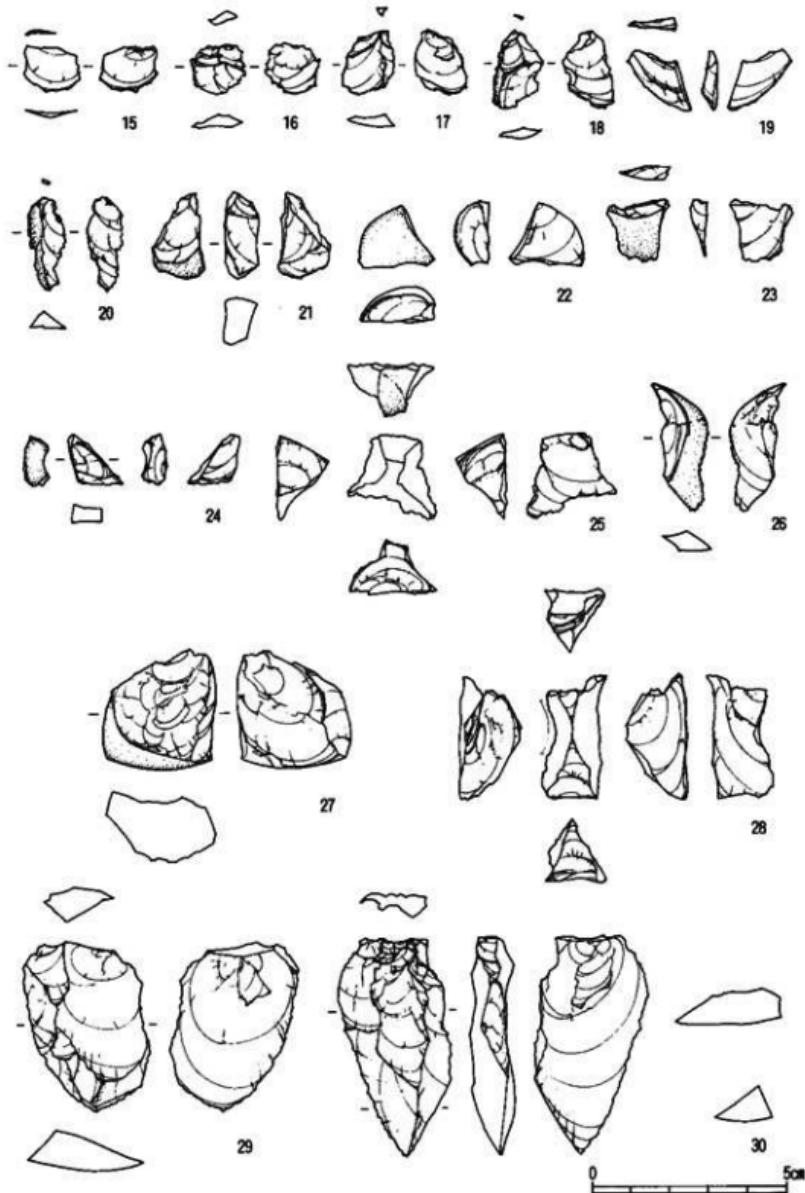
0

5cm

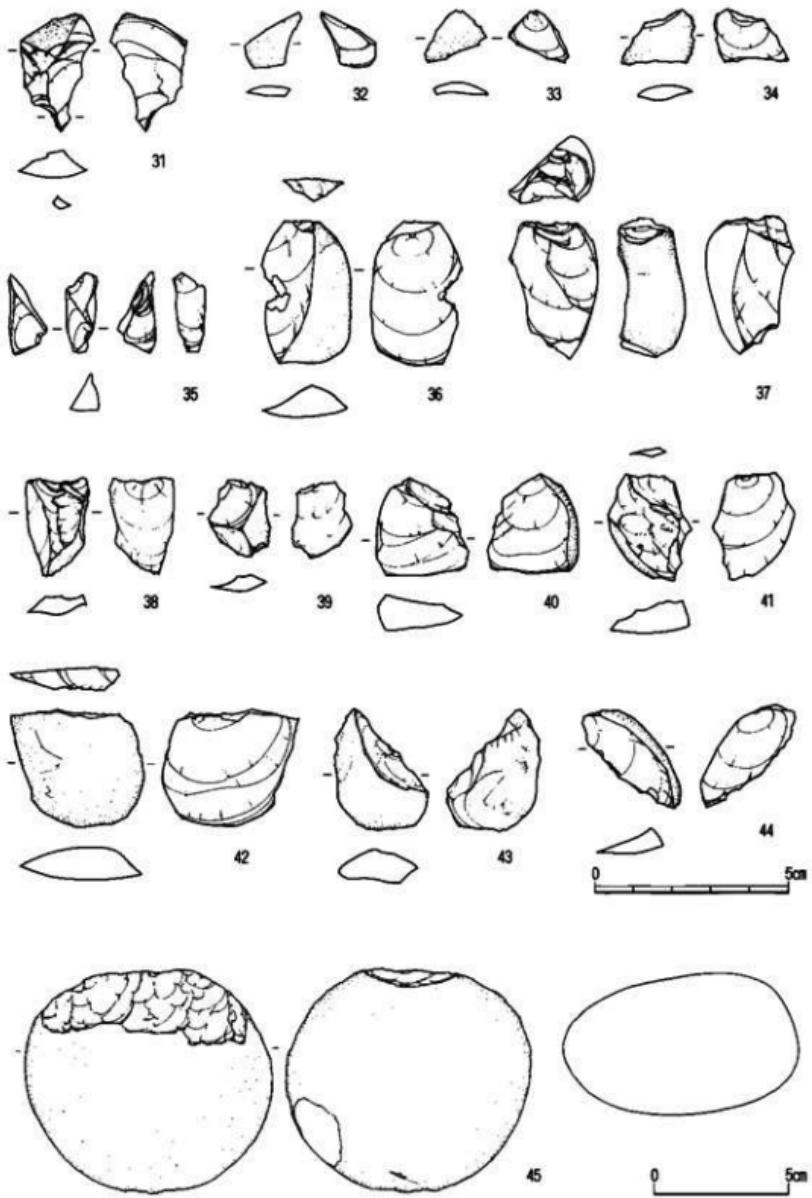
第15圖 石器集中地點Ⅱ出土石器(3)



第16図 石器集中地点Ⅱ出土石器(4)



第17図 石器集中地点Ⅱ出土石器(5)



第18図 石器集中地点Ⅱ出土石器(6)

1は節理面で一部分割されたチャート製の小円碟を利用して剥片剥離を行った接合資料である。チャート1に分類される。打面形成は両刃の碟器の刃部形成のように交互にやや幅広の剥片を剥離して(1a/1b)形成している。そして、打面調整を作業面側から施した後、やや大きめの剥片を剥離している(1d/1e)。2は両設打面をもつ石核から剥離された剥片の接合資料である。チャート2に分類される。2a・2bともに平坦打面をもち、打面調整はみられない。自然面を残し、2aの背面には上設打面からの剥離痕が観察される。5は安山岩の小円碟を利用して剥片剥離を行った接合資料である。安山岩1に分類される。まず長軸方向に円碟を分割するよう大きく剥離を行う。その後、この剥離面は5aの打面に設定される。また5bの側面にも分割時の剥離面の一部が残っている。つまり、90°転移して打面形成のための剥離を施し(5a)、そして打面調整を施すことなく数枚の剥片を剥離する(5b)。次に作業面側からの側面調整が施され、幅広の剥片が剥離され(5c)、さらに初めに設定した平坦打面からの剥片剥離を継続している。

ウ、分布(平面・垂直)

石器の垂直分布から本来的な出土層位はIXc層にあると考えられる。平面分布の範囲はほぼ8m四方に広がる。安山岩・黒色緻密安山岩とチャート1とチャート2の3つの集中域が認められる。接合関係はチャート1・2はそれぞれの集中域で収束しているが、安山岩1は2つの集中域にまたがって接合している。集中域によって器種の偏りは特にみられない。

(5) 石器集中地点Ⅲa・Ⅲb

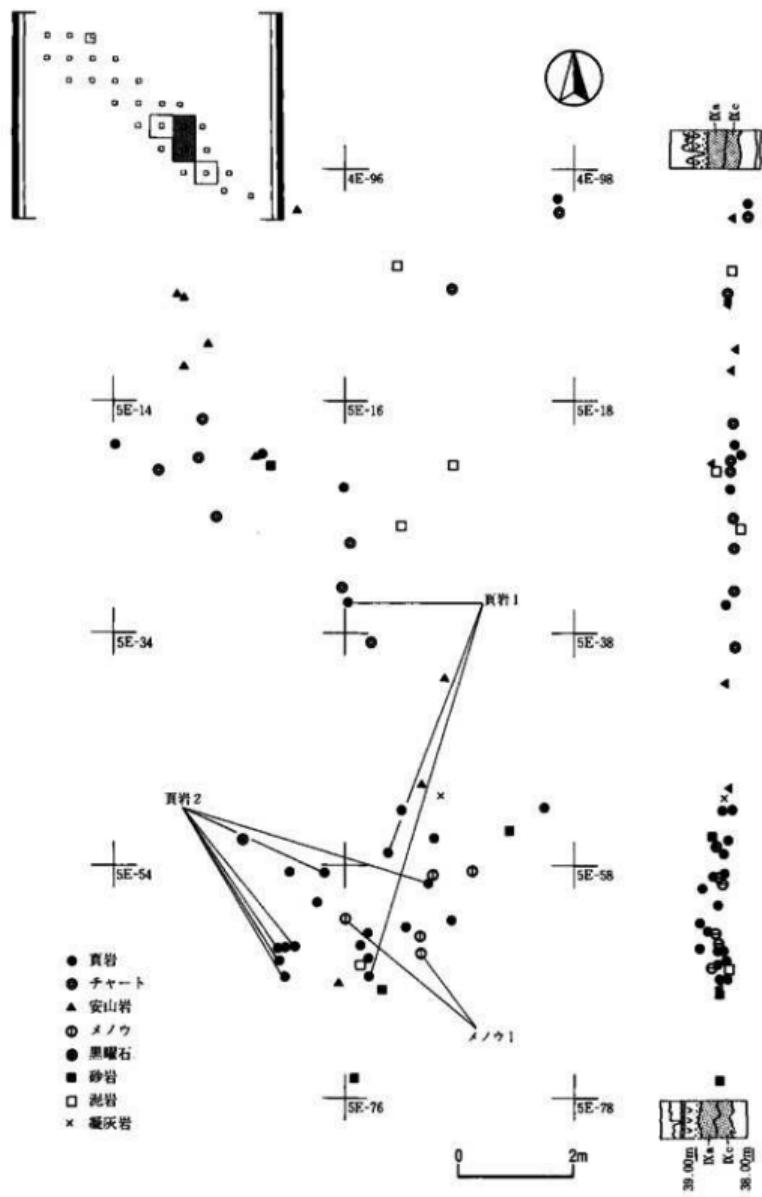
(第19図～第25図、第3表・第4表・第6表、図版4・図版11～図版13)

平面分布が8×16mに広がる集中域で、南北方向に若干傾斜しているが、出土層位はIXa～IXc層である。北寄りの集中域(Ⅲa)と南寄りの集中域(Ⅲb)に分離される。

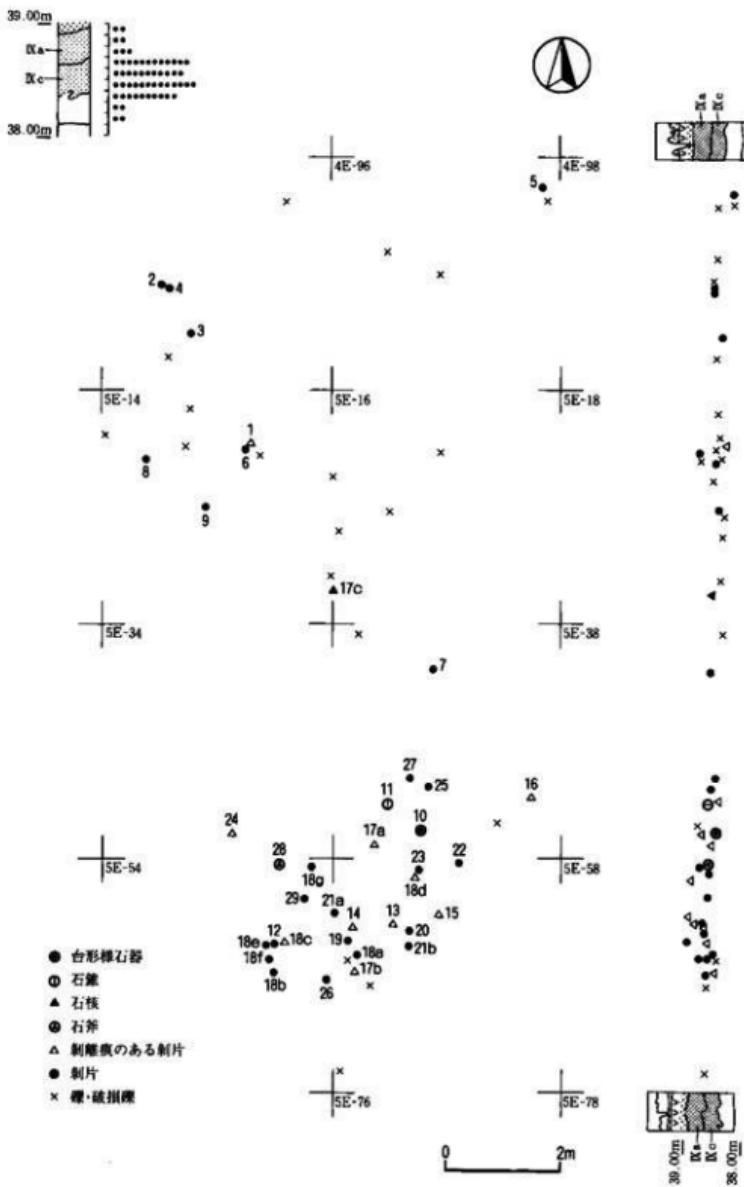
ア、石器組成

台形様石器1点、石錐1点、石核1点、石斧1点、剥離痕のある剥片10点、剥片24点、碟・破損碟19点の合計57点と本石器群では質量ともに最も良好な集中地点である。

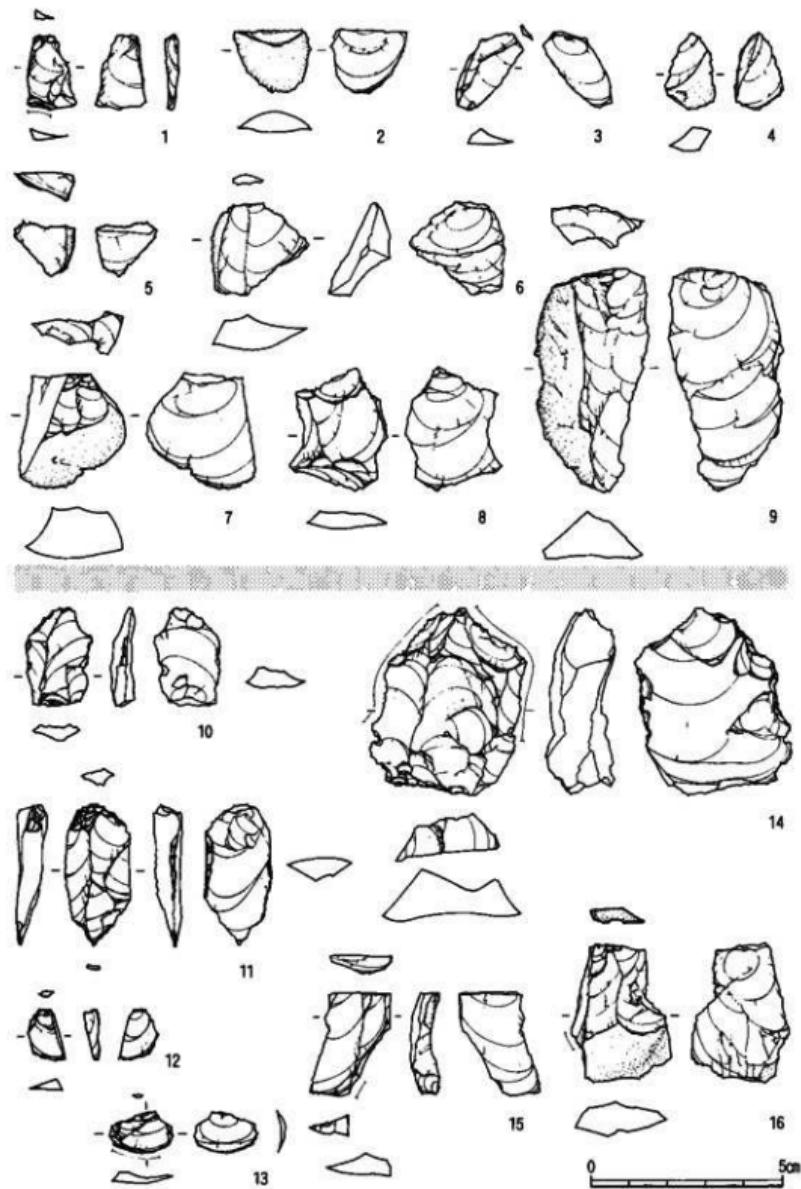
第21図10は単独母岩である茶褐色を呈した頁岩製の台形様石器である。左側縁上部に腹面側から調整を施している。素材となった剥片の剥離時には頭部調整を施し、平坦な打面を残している。また、先端部と左側縁の腹面側には後世の剥離痕が観察される。第21図11は石錐と解釈した。これは単独母岩である緑灰色を呈した頁岩を利用したものである。先端部には両側縁に急角度の調整が施され、他に左側縁には背面からの丁寧な調整が施されることにより、直線的な側縁を形成している。また、右側縁には微細な剥離痕が観察される。素材となった剥片の剥離時の平坦打面は残っている。側縁への調整や使用痕などから、尖頭器、あるいはナイフ形石器と考えた方がよいかもしれない。第25図28は刃部磨製石斧である。梢円形の碟を素材にして浅い角度で大きく剥離して刃部を形成している。刃部の一部には研磨痕と思われる範囲が観察



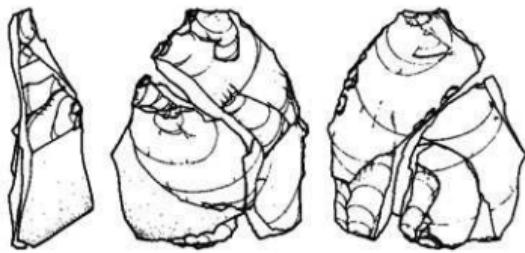
第19図 石器集中地点Ⅲ石器出土状況一石材



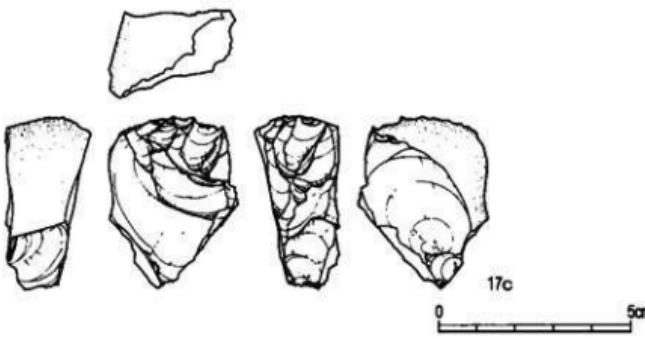
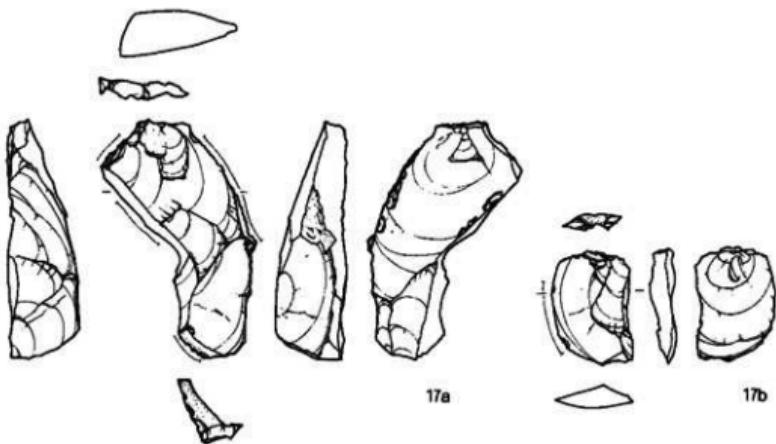
第20図 石器集中地点Ⅲ石器出土状況一器種



第21図 石器集中地点IIIa出土石器(上段)・IIIb出土石器(1)(下段)

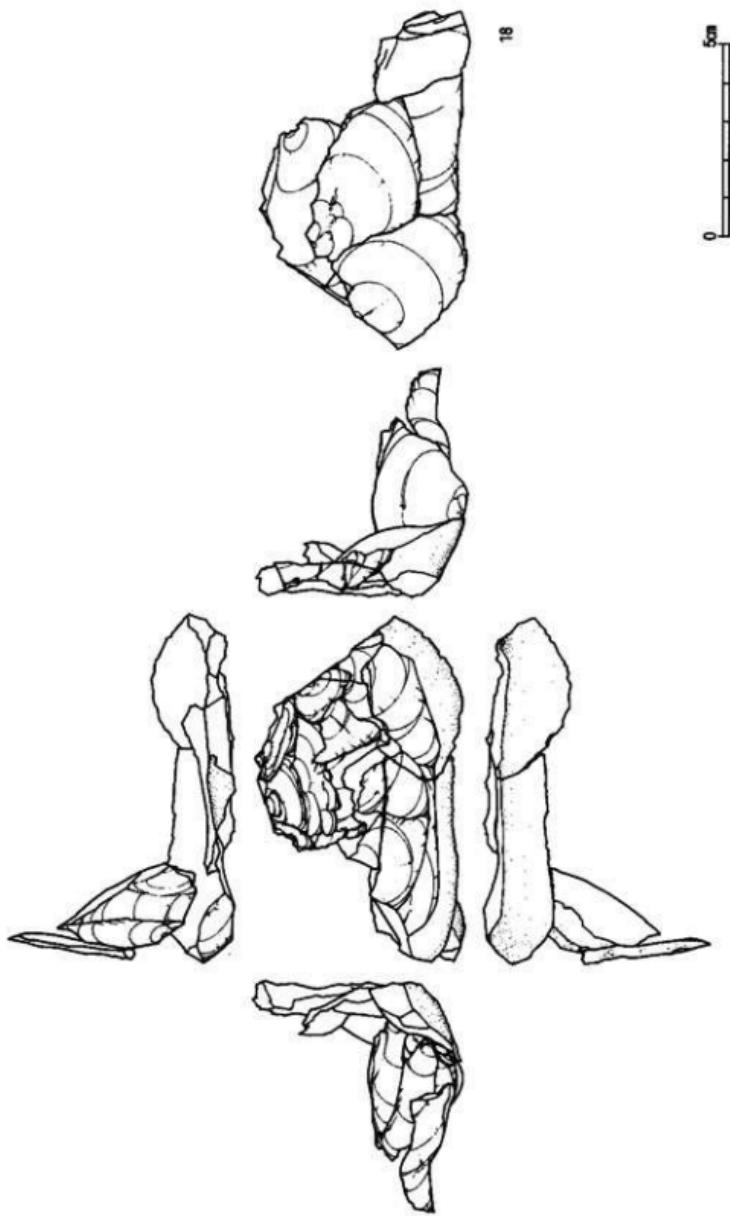


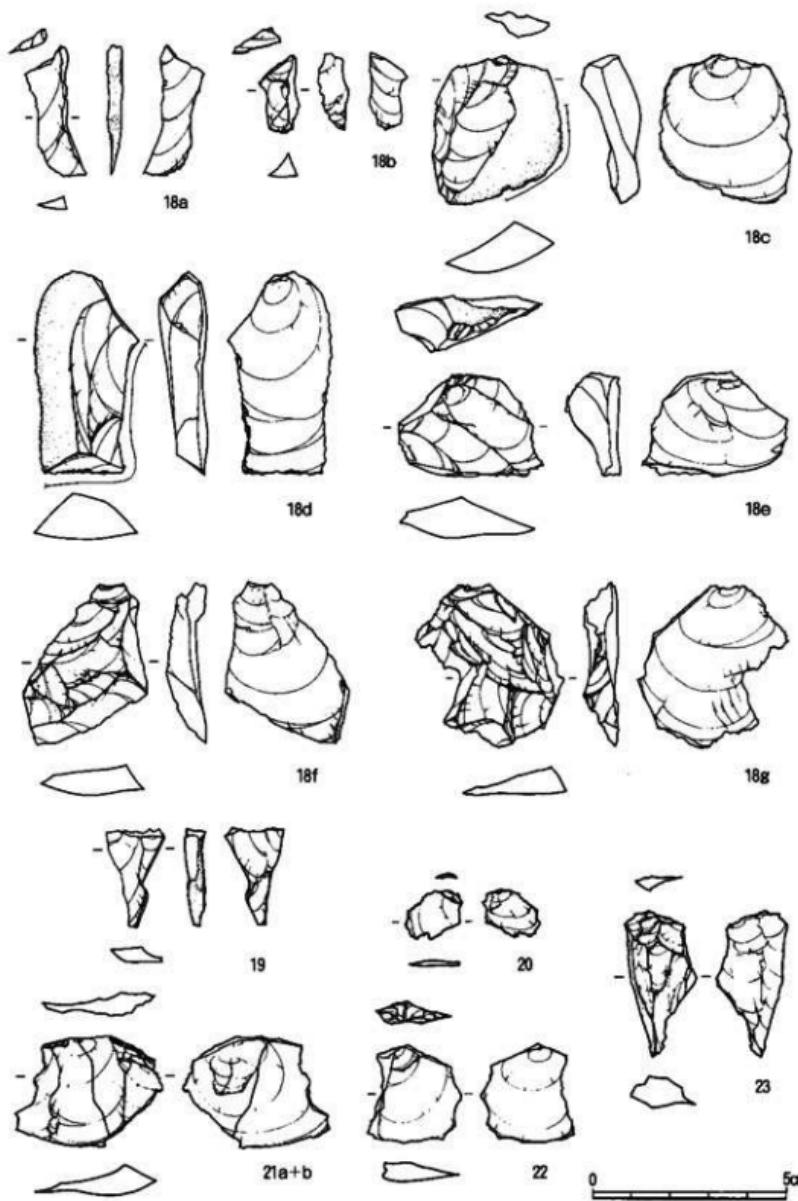
17



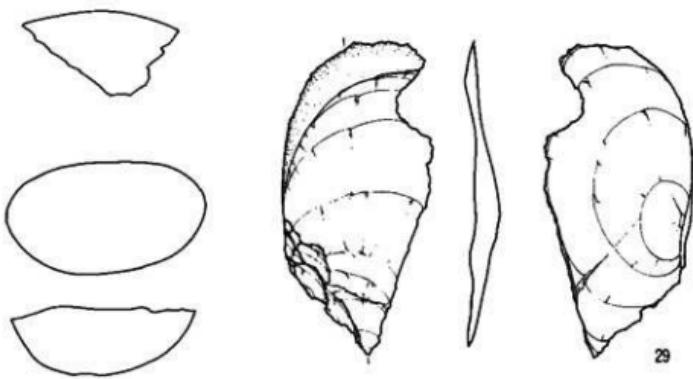
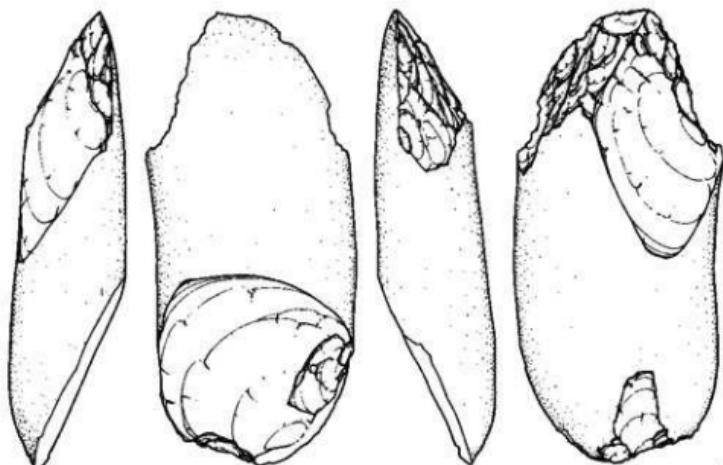
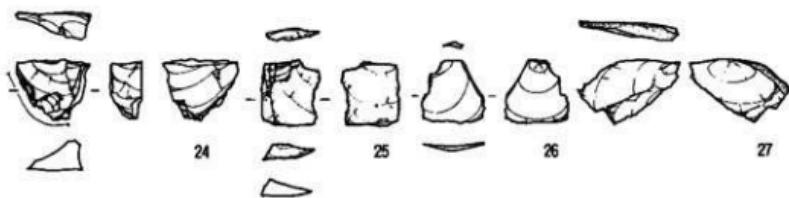
第22図 石器集中地点Ⅲb出土石器(2)

第23圖 石器集中地點Ⅲb出土石器(3)

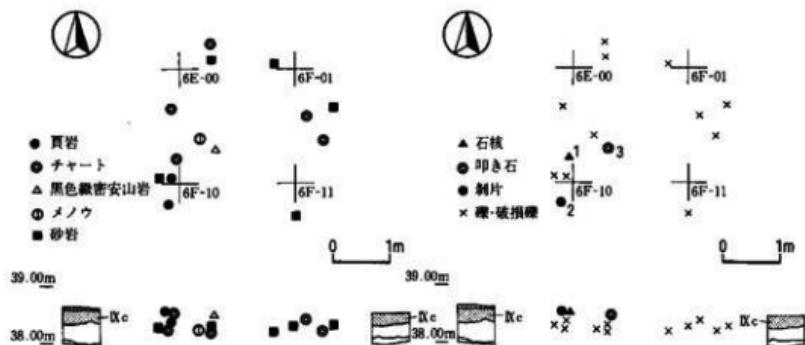




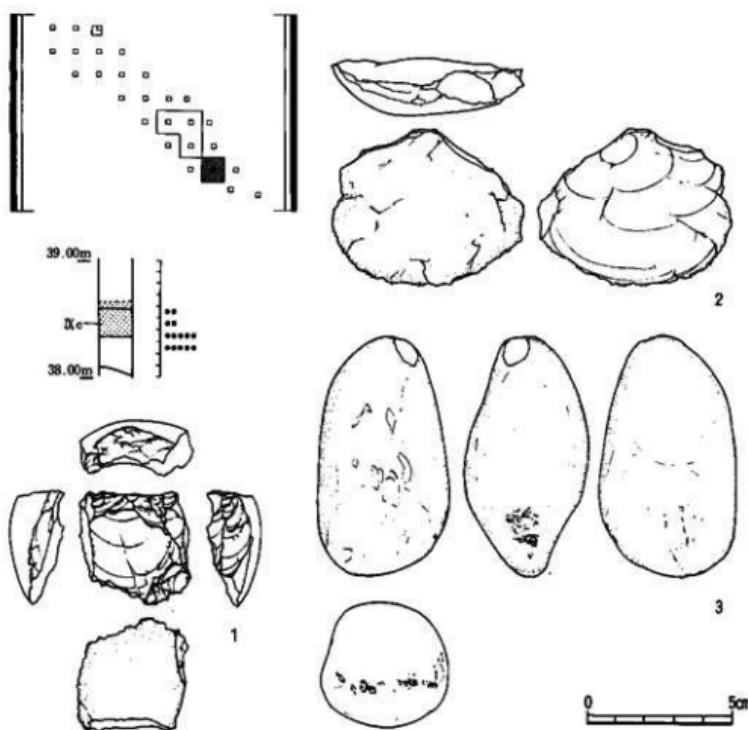
第24図 石器集中地点IIIb出土石器(4)



第25図 石器集中地点Ⅲb出土石器(5)



第26図 石器集中地点IV石器出土状況 一石材(左)・器種(右)



第27図 石器集中地点IV出土石器

される。また基部には刃部形成剥離とは逆の面に急角度の大きな調整が両側縁から施され、結果的に尖った形状を呈している。両側縁の自然面には装着に関係したと考えられる光沢痕が観察される。同一母岩と考えられる幅広の剥片が1点出土している(29)。

イ、石材（母岩分類）

石材は頁岩・チャート・安山岩・メノウ・砂岩・泥岩・凝灰岩・黒曜石と豊富である【点数比：42.1/15.8/15.8/8.8/7.0/7.0/1.8/1.8% 重量比：65.5/16.7/5.3/2.2/4.0/5.8/0.2/0.4%】。特に他の集中地点に比較して頁岩の保有率が高く、メノウ・黒曜石・凝灰岩はいずれも少数であるが本集中地点のみで検出されている。**Ⅲ a**に比べて**Ⅲ b**の方が石材の種類は豊富である。母岩別分類の可能であったのは頁岩1・2・3とメノウ1・2・3である。

17は剥片を利用して剥片剥離を行った接合資料である。頁岩1に分類される。分厚い、やや大きめの剥片の末端部に残る自然面を打面に設定して新たに剥片剥離を行うが、すぐに分割によって17aは石核として機能を失う。17b+cは先の打面を利用し剥片剥離を継続するが、新たに下設打面を設け、数枚の剥片剥離を行っている。18は7点接合した資料であるが、母岩が大きいために剥片剥離体系全体を復元することはできない。頁岩2に分類される。打面は少なくとも4か所存在することから打面転位は頻繁に行っていたようである。特に大きく転位を行ったのは18a・eを剥離する際にそれまでの作業面を打面として設定している箇所である。

ウ、分布（平面・垂直）

石器の垂直分布から本来的な出土層位は**Ⅹ c**層にあると考えられる。**Ⅲ a**・**Ⅲ b**とともに8×8mの範囲に広がる。前者はチャート・頁岩・泥岩の疊・破損疊が主体を占め、後者は頁岩1・頁岩・メノウ等の剥片石器が特徴的に出土している。

(6) 石器集中地点IV（第26図・第27図、第5表・第6表、図版5・図版6）

疊・破損疊を中心とした小規模の集中地点で、集中地点**Ⅲ a**と様相が類似している。

ア、石器組成

石核1点、叩き石1点、剥片1点、疊・破損疊11点の合計14点出土した。2はチャートの小円疊を利用した石核で、作業面と打面以外は自然面が残置している。打面は平坦打面で細調整は施されていない。3は黒色緻密安山岩製の叩き石である。疊面の一部には線刻のようなものが観察されるが、石質がもろいため、後世のものとも考えられるので断言はできない。

イ、石材（母岩分類）

利用石材はチャート・砂岩・頁岩・黒色緻密安山岩・メノウである【点数比：35.7/35.7/14.3/7.1/7.1% 重量比：17.1/20.1/16.1/45.4/1.3%】。母岩別分類の可能な石材はない。

ウ、分布（平面・垂直）

垂直分布では疊・破損疊が**Ⅹ**層にくい込んで出土しているように見えるが、地形の傾斜に影響されたものと考える。分布範囲は5m四方に広がる小さな集中域である。

参考文献

- 「八千代市坊山遺跡」 (財) 千葉県文化財センター 1980
- 「中山新田」遺跡Ⅳ層」 「石器文化研究』 2 石器文化研究会 1989
- 「八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡」 「東葉高速鉄道引き込み線及び車庫用地内埋蔵文化財調査報告書」 (財) 千葉県文化財センター 1989
- 「印旛郡本埜村五斗荷遺跡」 「千葉県北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書」 (財) 千葉県文化財センター 1993
- 「市原市南青野遺跡」 (財) 千葉県文化財センター 1994
- 佐藤宏之 「台形様石器研究序論」 考古学雑誌73-3 1988
- 佐藤宏之 「後期旧石器時代前半期石器群構造の発生と展開」 法政考古学15 1990
- 佐藤宏之 「日本旧石器文化の構造と進化」 柏書房 1992
- 田村 隆 「草刈六ノ台」 「房総考古学ライブラリー 1 先土器時代」 (財) 千葉県文化財センター 1984
- 「中山新田遺跡」 「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告」 (財) 千葉県文化財センター 1986
- 田村 隆 「A T降灰以前の下総台地における石器群研究の現状と課題」 「房総風土記の丘年報」 10 1986
- 田村 隆 「二項モードの推移と巡回—東日本におけるナイフ形石器成立期の様相—」 「先史考古学研究』 2 1989
- 「大林遺跡」 「佐倉市南志津地区埋蔵文化財調査報告書」 (財) 千葉県文化財センター 1989
- 「八千代市権現後遺跡」 (財) 千葉県文化財センター 1984
- 「八千代市ワサル山遺跡」 (財) 千葉県文化財センター 1986
- 「四街道市内黒田遺跡群」 「内黒田特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」 (財) 千葉県文化財センター 1991

第1表 石造集中地點Ⅰ遺物目録

件名番号	遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	厚さ(mm)	重量(g)	打面	打角(°)	打面	打角(°)	打面	打角(°)	打面	打角(°)	打面	打角(°)	打面	打角(°)	
1	3C 05 1	石板	58.3	43.8	22.9	55.69	22.9	55.69												

第2表 石造集中地點Ⅱ遺物目録

件名番号	遺物番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	厚さ(mm)	重量(g)	打面	打角(°)	打面	打角(°)	打面	打角(°)	打面	打角(°)	打面	打角(°)	打面	打角(°)
1a	4D 99 7	剝片	21.3	16.6	7.0	1.69	1	120	C		F	手づつ-手	1							
1b	4D 99 10	剝片	27.1	15.8	6.4	2.26	1	109	C+T2		F	手づつ-手	1							
1c	4D 99 3	剝片	12.0	23.3	10.4	1.82	54)	76	T1+R1		H	手づつ-手	1							
1d	4D 99 7	剝片	25.0	15.8	5.8	1.58	1	78	C		F	手づつ-手	1							
1e	4D 99 4	剝片	44.8	38.4	18.8	25.46	1	115	C+J+H4		F	手づつ-手	1							
1f	4D 99 5	石板	45.0	34.7	27.5	56.25		108	C+J+H3		F	手づつ-手	1							
2a	4D 89 2	剥離版のある剝片	70.1	43.5	21.0	42.48	1	108	C+J+H3		F	手づつ-手	2							
2b	4E 89 4	剝片	41.4	19.3	9.2	7.46	1	107	C+T2		F	手づつ-手	2							
3	5E 11 1	剝片	35.5	20.5	9.3	6.34		117	J+H3+T2		F	手づつ-手	1							
4	4E 90 4	剥離版のある剝片	(46.1)	(29.8)	11.7	(19.73)		119	H3+T3	O	F	手づつ-手	1							
5a	5E 01 6	剝片	31.6	36.2	14.0	34.34	1	119	C		F	安山岩								
5b	5D 09 1	剝片	46.8	33.3	14.8	17.66	1	112	C+H1		F	安山岩	1							
5c	4E 91 3	剝片	24.5	39.8	11.4	10.08	1	108	C		F	安山岩	1							
5d	4E 91 15	石板	43.9	37.9	19.0	31.31		113	B3+T1		F	安山岩	1							
6	4D 89 3	剥離版のある剝片	(19.3)	(15.0)	12.7	(19.7)		121	H4		F	石								
7	4E 90 3	剝片	27.4	24.0	7.5	3.97	L	126	C		F	瓦								
8	4E 90 1	剥離版のある剝片	(19.5)	(30.7)	3.2	(1.44)		113	H1+T3		R	瓦								
9	4D 89 1	剥離版のある剝片	53.6	26.9	12.1	17.58	2	113	H3+T1		H	瓦								
10	5E 01 7	剝片	45.2	27.1	12.2	16.15	2	121	H4		H	瓦								
11	5E 01 8	剝片	(38.6)	(29.7)	5.5	(5.64)	3	121	H4		F	瓦								
12	4E 89 2	剝片	33.5	34.9	12.3	12.90	1	95	H1		F	瓦								
13	4E 89 1	石板	32.5	64.6	19.7	43.37					F	瓦								
14	5D 09 3	石板	56.9	45.0	27.6	60.24					F	瓦								
15	4E 90 2	剝片	11.6	14.4	3.4	0.26	1	120	H1		F	安山岩								
16	4E 91 14	剝片	12.7	14.1	3.4	0.53	1	82	H2+R1		F	安山岩								
17	4E 90 2	剝片	17.0	14.0	3.6	0.74	1	107	H3	O	F	安山岩								
18	5E 91 4	剝片	20.3	12.2	3.5	0.71	P		C+H2+R1		F	安山岩								
19	5E 01 12	剝片	(16.5)	(17.4)	4.3	(0.71)			H2		F	安山岩								
20	4E 92 2	剝片	24.5	9.5	5.0	0.77	P		C+H1		H	安山岩								
21	4E 91 5	石板	21.9	9.2	12.3	2.75					F	安山岩								
22	4E 91 1	剝片	16.0	(20.6)	9.0	(3.27)	82	C			F	安山岩								
23	5E 01 11	剝片	(16.7)	(16.1)	4.8	(1.07)			Bi+R1		F	安山岩								

第2表 石器集中地点II遺物類聚表(2)

標記番号	遺物番号	器種	厚さ(mm)	長さ(mm)	幅さ(mm)	重量(g)	IT面	打角(')	背面	側面	末端	底	材	層位	標高(m)	備考
24	SE 01 13	剝片	12.8	(14.0)	6.4	(1.05)	L1		O	安山岩			II c	38.412		
25	SE 01 4	剝片	20.7	23.5	13.1	3.90	65	T3	F	安山岩			II c	38.407		
26	SE 01 5	剝片	(31.3)	(15.2)	6.8	(2.25)	C+L1		F	安山岩			II a	38.445		
27	4E 91 9	剝片	30.0	30.8	18.6	19.43	2	H2		安山岩			II c	38.446		
28	SE 00 1	剥離度のある剝片	(31.1)	(15.5)	15.3	(6.36)	D1+V5		F	安山岩			II c	38.550		
29	SE 10 1	剝片	45.6	32.7	10.9	14.85	1	H3+R1+L1		F	安山岩			II c	38.450	出土地点不明/ナイフ形石器?
30	AD 96 1	剝片	55.4	(29.2)	10.8	(9.01)	1	H6+R1		F	安山岩			II c	38.633	
31	4E 91 1	石礫	29.8	19.3	7.2	2.40	H4		F	黑色玻璃安山岩			II c	38.548		
32	AD 89 4	剝片	(18.7)	(15.8)	(2.7)	(0.41)	C		F	黑色玻璃安山岩			II a	38.710		
33	4E 91 2	剝片	13.2	(16.4)	3.2	(0.55)	P	C	F	黑色玻璃安山岩			II c	38.522		
34	4E 91 13	剝片	(13.9)	(16.9)	4.5	(0.98)	C		F	黑色玻璃安山岩			II c	38.595		
35	SE 01 1	剝片	(20.3)	(17.8)	9.6	(1.05)	1	H1+D6		F	黑色玻璃安山岩			II c	38.528	
36	SE 01 14	剝片	36.7	23.7	8.5	6.45	1	C+H1	H	黑色玻璃安山岩			II c	38.560		
37	4E 91 7	石礫	25.9	22.8	17.4	13.95	L		F	黑色玻璃安山岩			II a	38.665		
38	4E 91 8	剝片	24.9	16.4	5.4	1.97	H6+R1		F	黑色玻璃安山岩			II a	38.790		
39	SE 01 9	剝片	19.1	15.9	4.7	1.14	1	H4+L2		F	黑色玻璃安山岩			II c	38.419	
40	4E 91 10	剝片	25.0	23.3	8.0	4.06	L	C+H3	H	黑色玻璃安山岩			II a	38.680		
41	SE 01 16	剝片	26.0	22.0	8.6	3.84	1	C+H5	F	黑色玻璃安山岩			II c	38.510		
42	4E 91 11	剝片	(30.4)	(33.6)	8.5	(8.86)	C		H	黑色玻璃安山岩			II c	38.687		
43	SE 01 15	剝片	(31.1)	(24.0)	(8.0)	(5.24)	C+R1		F	黑色玻璃安山岩			II c	38.410		
44	SE 01 10	剝片	28.4	24.4	7.0	2.40	71	C+L1	F	黑色玻璃安山岩			II c	38.570		
45	4E 90 3	砂岩	61.0	91.5	53.6	484.89				砂岩			II a	38.650		
46	4D 99 1	砂片	8.6	9.4	3.0	0.17				安山岩			II c	38.470		
47	AD 99 6	砂岩塊				1.10				砂岩			II c	38.566		
48	4D 99 8	砂岩塊				1.46				砂岩			II c	38.354		
49	AD 99 9	砂片	15.6	8.8	4.6	0.88				安山岩			II c	38.420		
50	4E 91 6	砂岩塊				7.05				砂岩			II a	38.786		
51	4E 92 1	砂岩塊				1.54				砂岩			II c	38.620		
52	5D 09 2	砂岩塊				2.34				安山岩			II a	38.766		
53	SE 01 3	砂				3.19				砂岩			II c	38.472		
54	SE 02 1	砂岩塊				5.66				砂岩			II a	38.783		

第3表 石器集中地点III a遺物類聚表(1)

標記番号	遺物番号	器種	厚さ(mm)	長さ(mm)	幅さ(mm)	重量(g)	IT面	打角(')	背面	側面	末端	底	材	層位	標高(m)	備考
1	SE 15 3	剥離度のある剝片	(19.7)	(13.1)	3.8	(0.79)	1	H3		F	頁岩			II c	38.227	
2	SE 04 1	剝片	(16.6)	(20.1)	5.9	(1.80)	C+H1		F	安山岩			II c	38.470		

表3表 石器集中地点Ⅲa遺物調査表(2)

検出番号	遺物番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	打痕	打痕(°)	背面	側面	底面	石	骨	部位	標高(m)	備考
3	5E 04 3	刮片	(18.8)	18.6	4.0	(0.94)	1	111	H3		F	安山岩	II c	36.318		
4	5E 04 2	刮片	(20.0)	13.2	6.0	(1.43)		C+H1			F	安山岩	II c	36.469		
5	4E 97 1	刮片	(14.6)	(15.7)	(6.7)			L1			F	安山岩	II c	36.449		
6	5E 15 1	刮片	(25.3)	25.4	10.1	(4.93)	1	116	C+H2		F	安山岩	II a	36.710		
7	5E 38 2	刮片	30.9	27.9	14.9	11.45	1	66	C+H5		F	安山岩	II c	36.534		
8	5E 34 3	刮片	31.2	25.2	6.0	3.68	1	118	H1+T1+L2		F	チサト	II c	36.408		
9	5E 34 4	刮片	(56.9)	29.5	14.5	(21.54)	1	61	C+H1		F	チサト	II c	36.384		
17c	5E 26 2	石核	45.2	37.1	21.8	29.93			開拓1			II c	36.514			
	4E 95 1	破損核			3.15							II c	36.380			
	4E 96 1	核			5.93							II c	36.400			
	4E 97 2	核			29.54							II c	36.171			
	5E 04 4	核			7.72							II c	36.436			
	5E 06 1	核			13.05							II c	36.455			
	5E 14 1	核			6.76							II c	36.380			
	5E 14 2	核			3.48							II c	36.417			
	5E 34 4	核			4.44							II c	36.348			
	5E 15 2	核			11.35							II c	36.327			
	5E 16 1	核			9.40							II c	36.462			
	5E 16 2	破損核			10.70							II a	36.688			
	5E 25 1	核			15.71							II c	36.364			
	5E 26 1	破損核			17.11							II c	36.322			
	5E 26 3	核			19.37							II c	36.274			
	5E 36 1	破損核			1.13							II c	36.310			

表4表 石器集中地点Ⅳb遺物調査表(1)

検出番号	遺物番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	打痕(°)	背面	側面	底面	石	骨	部位	標高(m)	備考
10	5E 46 4	台形様石器	25.0	17.0	5.6	2.13	1	119	H5		F	頁岩	II c	38.470	刀身30mm
11	5E 46 3	石核	36.2	17.2	6.9	3.75	1	112	H5		F	頁岩	II c	38.580	刀身37mm/先端約5mm/ナット?
12	5E 35 8	刮片	(13.1)	(9.5)	4.2	(0.44)		103	H2		F	頁岩	II c	38.550	測量調整あり
13	5E 56 3	剥離核の小核片	10.4	16.3	0.40		P	H3			F	頁岩	II a	38.637	
14	5E 56 4	剥離核の小核片	(47.6)	41.8	14.0	(22.77)		H5+T4			F	頁岩	II a	38.626	
15	5E 56 2	剥離核の小核片	(26.7)	(20.9)	7.0	(3.98)		H2+T1	O		F	頁岩	II a	38.606	
16	5E 47 1	剥離核の小核片	(36.0)	(26.3)	8.5	(7.87)		101	C+H1+R1+L1		F	頁岩	II c	38.428	
17a	5E 46 5	剥離核の小核片	(60.6)	(41.2)	18.7	(27.90)		95	H1+L4+D1+V1		F	頁岩	II c	36.542	
17b	5E 46 6	剥離核の小核片	29.5	20.8	6.0	3.66		101	H3+T1		F	頁岩	II c	36.489	
18a	5E 36 12	刮片	(33.6)	(14.9)	(4.0)	(1.12)		C+H1			F	頁岩	II c	36.466	

第4表 石器集中地点III b遺物調査表(2)

標本番号	遺物番号	器種	長さ(m)	幅(m)	厚さ(mm)	重さ(g)	打削面	打削角(°)	背面	側面	底面	材	部位	標高(m)
18b	5E 55.6	剝片	—	(20.9)	(10.3)	(7.8)	(1.03)	—	96	D3+V1	F	瓦石2	R.c	38.594
18c	5E 55.4	剥離度のある剝片	—	39.5	32.3	15.2	13.41	1	96	C+L3	F	瓦石2	R.c	38.598
18d	5E 55.1	剥離度のある剝片	51.7	27.3	11.6	14.97	—	102	C+T1+L3	F	瓦石2	R.a	38.695	
18e	5E 55.3	剝片	27.0	38.8	14.1	9.30	—	107	L5	H	瓦石2	R.a	38.643	
18f	5E 55.5	剝片	(45.0)	32.0	8.3	(9.29)	—	—	H3+L5	F	瓦石2	R.c	38.607	
18g	5E 55.2	剝片	(42.0)	(39.0)	7.7	(8.03)	—	—	H5+R3+L1	F	瓦石2	R.a	38.685	
19	5E 56.6	剝片	(26.8)	(15.5)	5.0	(1.25)	—	—	C+H2	F	瓦石2	R.a	38.620	
20	5E 59.9	剝片	12.0	15.3	1.7	6.28	L	H2+R1	F	メノウ2	R.c	38.637		
21a	5E 56.5	剝片	29.0	(24.8)	4.3	(2.45)	C	H2	O	メノウ1	R.a	38.667		
21b	5E 56.10	剝片	42.5	22.1	7.3	(3.75)	—	95	H3	メノウ1	R.a	38.714		
22	5E 57.1	剝片	(25.2)	(23.9)	5.7	(2.65)	(7)	H4	H2	メノウ2	R.c	38.626		
23	5E 56.11	剝片	(36.8)	(17.7)	9.1	(4.51)	1	107	H5+R1	F	メノウ2	R.c	38.572	
24	5E 45.1	剥離度のある剝片	(15.0)	(19.2)	(8.0)	(2.16)	—	H3	—	塊石	R.a	38.664		
25	5E 46.2	剝片	(16.4)	(14.8)	4.7	(1.15)	—	H3	—	塊石	R.c	38.520		
26	5E 65.1	剝片	16.4	(16.3)	2.0	(0.45)	1	96	H1	P	安山岩	R.a	38.660	
27	5E 46.1	剝片	16.4	25.3	3.8	1.42	—	101	H1+R2	F	安山岩	R.c	38.648	
28	5E 55.1	石斧	115.0	51.5	29.3	26.25	—	—	—	P	安山岩	R.c	38.596	
29	5E 55.7	剝片	39.3	79.4	8.4	20.31	—	103	C+L6	F	瓦石3	R.c	38.597	
30	5E 66.2	破損端	—	—	—	1.97	—	—	—	P	瓦石3	R.c	38.614	
31	5E 47.2	石斧	—	—	—	3.97	—	—	—	P	安山岩	R.a	38.700	
32	5E 66.1	石斧	—	—	—	1.18	—	—	—	P	安山岩	R.c	38.619	
33	5E 56.7	破損端	—	—	—	0.22	—	—	—	P	瓦石	R.c	38.669	

第5表 石器集中地点IV遺物調査表(1)

標本番号	遺物番号	器種	長さ(m)	幅(m)	厚さ(mm)	重さ(g)	打削面	打削角(°)	背面	側面	底面	材	部位	標高(m)
1	6E 69.2	石棒	28.6	38.4	19.4	30.78	—	—	—	—	—	R.c	38.519	
2	6E 19.19	石棒	53.5	66.4	18.1	67.25	93	C	—	—	—	R.c	38.569	
3	6F 00.1	聯合石	79.0	43.5	42.1	191.32	—	—	—	—	—	R.c	38.642	
4	5F 90.1	破損端	—	—	—	13.68	—	—	—	—	—	砂岩	38.319	
5	5F 90.2	破損端	—	—	—	22.44	—	—	—	—	—	砂岩	38.265	
6	5F 90.3	石斧	—	—	—	15.30	—	—	—	—	—	砂岩	38.268	
7	6E 09.1	石斧	—	—	—	12.30	—	—	—	—	—	砂岩	38.240	
8	6E 09.3	石斧	—	—	—	23.13	—	—	—	—	—	砂岩	38.312	
9	6E 09.4	石斧	—	—	—	0.73	—	—	—	—	—	砂岩	38.398	
10	6F 00.2	石斧	—	—	—	5.66	—	—	—	—	—	砂岩	38.255	
11	6F 01.1	破損端	—	—	—	0.91	—	—	—	—	—	砂岩	38.402	

第5表 石炭集中地点評議物質統計表(2)

地図番号	遺物番号	名	種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	角度(°)	直角(°)	斜面	横	縦	斜	角	層化	高さ(m)	備考
6F 01.2	石	(海綿状岩)				25.66									38.310	
6F 01.3	基岩					5.56									38.208	
6F 10.1	透出層					6.90									38.319	

第6表 石炭組成と母岩別分類表(1)(上段:点数、下段:重量(%))

石炭種別	台	形	石	塊	石	系	石	性	單	石	塊	石	角	直	縦	斜	片	砂	炭	鉱物	合	計	百分率(%)
瓦 砂	(海綿状岩)																				1	100.00	
石炭合計																							100.00
重量合計 [g]																							100.00
点数百分率 [%]																							100.00
重量百分率 [%]																							100.00

石炭中鉱物Ⅰ

子-タ-ト I																							6	9.52
子-タ-ト 2																							102.56	9.30
子-タ-ト (母岩別分類)																							2	3.17
子-タ-ト																							49.36	
瓦 砂	(海綿状岩)																						2	3.17
瓦 砂	(海綿状岩)																						17.57	1.66
瓦 砂	(海綿状岩)																						9	14.29
瓦 砂	(海綿状岩)																						162.56	15.32
瓦 砂	(海綿状岩)																						4	6.35
瓦 砂	(海綿状岩)																						75.39	7.20
瓦 砂	(海綿状岩)																						19	30.16
瓦 砂	(海綿状岩)																						2.24	80.77
黑色雲母安山岩(母岩別分類)																							14	22.22
黑色雲母安山岩(母岩別分類)																							53.3	5.09
粉 灰	(母岩別分類)																						4	7.94
粉 灰	(母岩別分類)																						496.3	47.40
瓦 砂	(母岩別分類)																						2	3.17
瓦 砂	(母岩別分類)																						8.59	0.82
瓦 砂	(母岩別分類)																						63	100.00
瓦 砂	(母岩別分類)																						1047.10	100.00
瓦 砂	(母岩別分類)																						2.12	100.00

第6表 石墨組成と母岩別分類表(2) (上段:点数、下段:重量(㌘))

石墨中鉱物組成 a		合計	百分率(%)				
石	岩	片	粒・結晶	片	粒	合計	百分率(%)
金 - ト 3				2		2	6.00
金 - ト 1	(母岩別未分類)			25.32		25.32	11.08
月 岩 1	1				7	7	25.00
月 岩	(母岩別未分類)	29.93			78.68	78.68	34.43
安山岩	(母岩別未分類)			1		1	4.00
伟 岩	(母岩別未分類)			0.79	0.91	13.84	15.54
点数合計				20.55	5	2	7
重量合計 [g]				10.87	31.42	13.75	
点数百分率 [%]					1	1	4.00
重量百分率 [%]					11.85	11.85	5.19
累積百分率 [%]					3	3	12.00
石墨合計					35.8	35.8	15.56
月 岩	(母岩別未分類)						
月 岩 1	0	0	1	0	1	15	25
月 岩	(母岩別未分類)	0	0	0	0.79	46.78	0
月 岩	(母岩別未分類)	0	0	0	0	151.04	228.54
点数合計 [g]					0	60.00	100.00
点数百分率 [%]					0	60.00	100.00
重量百分率 [%]					0	66.09	100.00
石墨中鉱物組成 b							
月 岩							
月 岩 2							
月 岩 3							
月 岩	(母岩別未分類)	1		2	6		
月 岩	(母岩別未分類)	2.13	3.75	20.55	30.63	58.11	14.92
月 岩	(母岩別未分類)			20.51	1		
月 岩	(母岩別未分類)			4	1		
月 岩	(母岩別未分類)			39.12	0.44	45.44	11.67
月 岩	(母岩別未分類)				2	2	6.25
月 岩	(母岩別未分類)				1.87		
月 岩	(母岩別未分類)					1.87	0.48
月 岩	(母岩別未分類)					3	9.38
月 岩	(母岩別未分類)					7.42	1.91
月 岩	(母岩別未分類)					1	3.11
月 岩 1					0.22	0.22	0.06
月 岩 2					2	2	6.25
					6.20	6.20	1.59
					3	3	9.38
					7.44		7.44
							1.91

第6表 石炭組成と母岩別分類表(3)(上段:灰岩、下段:頁岩〔a〕)

	石	粉	石	灰	石	灰	粉	灰	片	粉	灰・鐵礦	合	計	百分率(%)
總灰岩 〔總數百分比〕												1	3.13	
總頁岩 〔總數百分比〕												2.16	0.55	
点数合計	2.13	3.75	208.25	1	0	0	0	0	1	1.15			1	3.13
重量合計〔g〕	3.13	3.13	3.13	0	0	0	0	0	9	16	0	4	1.15	0.30
点数百分率〔%〕	3.35	0.96	53.48	0	0	0	0	0	28.13	50.00	0	12.50	100.00	100.00
重量百分率〔%〕	0.35	0.96	53.48	0	0	0	0	0	25.53	47.52	0	1.96	100.00	100.00
石炭地中地點N 中+下 〔1977年分類〕												4	5	35.71
灰岩 〔母岩別分類〕												41.05	71.83	17.05
黑色無色岩層〔母岩別分類〕												1	2	14.29
黑色無色岩層〔母岩別分類〕												67.25	0.73	16.13
6) 灰岩 〔母岩別分類〕													1	7.14
7) 灰岩 〔母岩別分類〕													191.22	43.38
点数合計	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0			
重量合計〔g〕	0	0	0	0	30.78	191.22	0	0	67.25	0	0	132.11	421.36	100.00
点数百分率〔%〕	0	0	0	0	7.14	7.14	0	0	7.14	0	0	78.57	100.00	
重量百分率〔%〕	0	0	0	0	7.30	45.36	0	0	15.96	0	0	31.35	100.00	

観察表について 観察表は『佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡』(田島 1991)を参考にした。

①持図No. 実測図として掲載した遺物の通し番号。この番号は分布図の遺物番号と写真図版の番号に一致する。

②遺物No. 遺物の取り上げ番号(注記番号)。

③器種 石器の器種を記載する。確定できないものに関しては備考で触れた。「(微細な)剥離痕のある剥片」については、従来、「加工痕のある剥片(Rフレ)」「使用痕のある剥片(Uフレ)」などと呼称されていたものであるが、基準があいまいで判断が困難なものがあるため、今回は「(微細な)剥離痕のある剥片」として一括して呼称する。また「碎片」は、長さ・幅の両者が10.0mm未満のものを指す。

④長さ・幅・厚さ 0.1mm単位で計測。完形以外は()を付けている。

⑤重量 0.01g 単位で計測。完形以外は()を付けている。

⑥打面 Cは自然面、Jは節理、Pは点状打面、Lは線状打面、1は平坦打面、2～は複剥離打面、空欄は欠損等による打面なし・計測不可を示す。平坦打面、複剥離打面のうち、negative bulbをもつものは()内にその数を示した。

⑦打角

⑧背面構成 腹面の剥離方向を基準として、背面を構成する剥離面の種類と数を示した。素材を大きく変形させたものは書かないが、素材の背面構成が窺われるものに関しては、観察される範囲で書く。Cは自然面、Jは節理、Hは頭部側、Tは尾部側、Rは右方、Lは左方、Dは背面側、Vは腹面側(DとVは作業面調整剥片・角柱状の剥片など90°に近い剥離角をもつ剥離面の場合)、後続する数字はその剥離面の数を示す。

⑨末端 FはFether end、HはHinge fracture、OはOutre passeを表す。

⑩石材 石材の種類と母岩別資料の分類を示す。同一母岩として個体認識された遺物については石材名称に後続してアラビア数字で示した。本遺跡で検出された石材は頁岩・安山岩・チャート・黒色緻密安山岩・砂岩・泥岩・メノウ・凝灰岩・黒曜石である。これらのうち頁岩・チャート・メノウについては、個体識別が可能であるため、単独母岩以外のものに関して、これを示した。しかし、安山岩・黒色緻密安山岩については、風化が激しく、個体識別が不可能であったため母岩別分類を行わず接合資料による抽出のみを行った。上記の石材以外に関しては、いずれも単独母岩であることを断っておく。

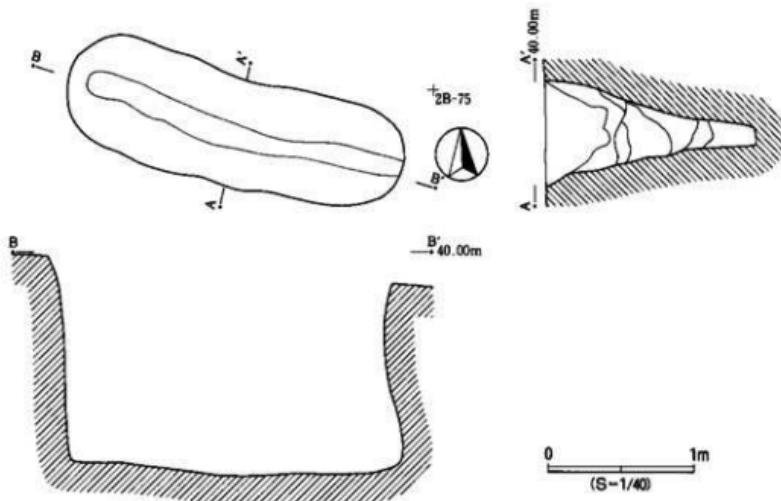
⑪層位 調査時の出土層位を訂正して記載した[V a→IX a・V c→IX c]。

2. 縄文時代

今回の発掘調査で検出されたのは、陥穴1基のみである。隣接する君津都市センターの調査区でも広範な調査範囲内(本調査面積16,570m²)で、竪穴住居跡が前期前半の関山式期1軒、諸磯式期3軒の計4軒、陥穴12基、土坑1基である。当センターの調査区南側に隣接する君津都市センターの調査区では、陥穴が散漫な分布状況を示していることから、同様な遺構の分布状況を示していると考えてよかろう。

(1) 18号土坑(第28図、図版5)

2B-73・74グリッド周辺に位置する陥穴で、主軸を北北西—南南東に向け、長軸2.4m、短軸0.8mを測り、平面形は長円形を呈する。横断面はV字形を示し、上端幅0.8m、下端幅0.1m、縦断面は箱形を呈する。底面は極長円形を呈し長さ2.3m、幅0.1~0.2mで、ほぼ平坦である。覆土は上層は黒色土を主体とし、下層はロームブロックを主とするものであった。出土遺物はなかった。



第28図 18号土坑実測図

3. 弥生時代

本遺跡の主体をなす時期である。遺跡周辺で最も多く検出された遺構はこの時期のもので、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡からなる集落跡で、その数36軒を数える。

ただし竪穴住居跡の時期決定・区分について、本遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落は、特に画期を示さずに連続と継続しているようにみえ、弥生時代と古墳時代の明確な判断基準を提示できない状況である。そのため弥生時代と古墳時代前期との時期区分を特にせずに、該期の遺構をここでは弥生時代としてまとめて取り上げていくことにする。そのため次の節で取り上げた古墳時代の遺構と関連を持つものがこの節に含まれる可能性は高い。

(1) 1号住居（第29図・第30図、図版14）

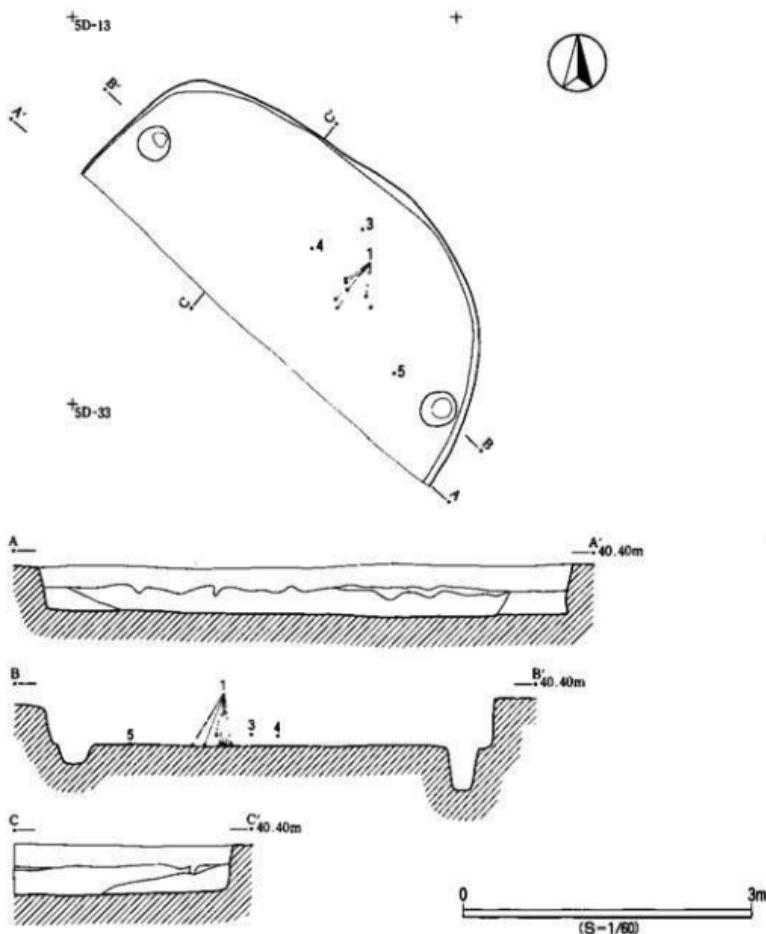
5D-23・24グリッド周辺に位置する竪穴住居跡である。調査区の南西側約半分が君津都市センターの調査区にかかり、両者の調査区の間には少しの未調査範囲ができてしまった。君津都市センターの『文脇遺跡』報告書では138号住居址として報告されている。当センターで調査できた範囲は、長軸4.9m、短軸2.1mで、当該遺構の約半分を調査できたと考える。形態はややいびつな小判形で、遺構の主軸はちょうど調査区の境界線の方向になるとみられ、遺構確認面からの掘込み深さは0.3m、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、床面はハードローム層に達し固く踏み固められている。炉は調査区内には検出されず、君津都市センター調査区内にも検出されていないことから、両者の境界に所在していたものとみられる。床面に壁溝はなく、調査区の北西側と南東側の壁際には柱穴とみられるピットが1基ずつ検出された。ともに径0.3~0.4m、深さは0.45m、0.2mであった。

遺物は、住居中央部から若干量出土している。図示したのものは、すべて床面付近の出土である。1は甕の底部片で床面直上から出土している。底径7.4cmを測る。胎土には粗い石英、長石粒、白色針状物を含み、二次的に火熱を受け器壁が剥落している。2は壺の口縁部で、口唇部を折り返し、外面端部に繩文原体による押圧を施している。3、4は壺の胴上部であろう。3は上部に3条のS字状結節文を施し、その下にR L-L Rの2段の単節繩文を施している。4はL Rの単節繩文を2段施す。5は砥石である。明灰色の砂岩製で、表裏両面とも磨耗して溝状にすり減っている。

(2) 2号住居（第31図・第32図、図版14・図版15・図版49）

4D-97グリッド周辺に位置する小型の竪穴住居跡である。形態はややいびつな円形で、南北2.8m、東西2.5mを測る。遺構確認面からの掘込み深さは約0.2mで、畑の耕作による擾乱が多くみられ、遺構の遺存状況はよくなかった。壁の立ち上がりは緩く壁溝はなく、床面はソフトローム層中にやや固く踏み固められていた。炉は中央からやや北西寄りに1基検出され、径0.4×0.3mの楕円形、深さは0.05mで、炉床はよく焼けていた。床面にピットが2基検出され、1基は炉のすぐ北側に径0.4×0.3m、深さ0.4m、壁に向けて外側に傾いて掘り込まれている。もう1基は北西壁際に径0.2m、深さ0.2mを測り、柱穴とみられる。

出土遺物は少なく、図示したものが床面からやや浮いた状態で出土している。1はミニチュア高坏の脚台部である。脚先端は複合口縁状に段を形成し、端部にはヘラ状工具でキザミを施し、

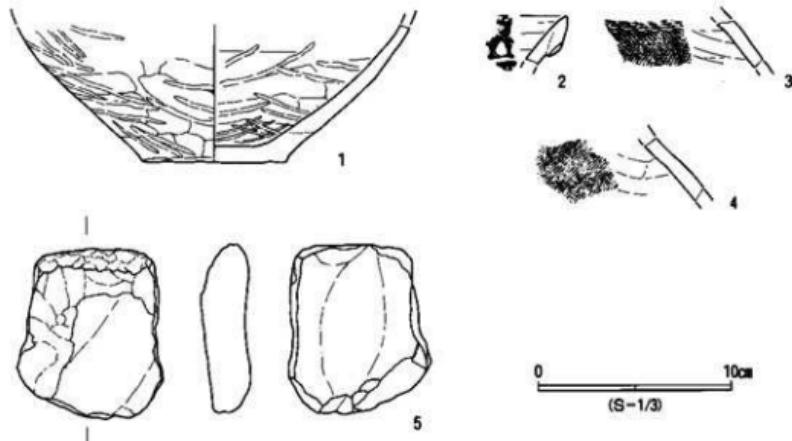


第29図 1号住居実測図

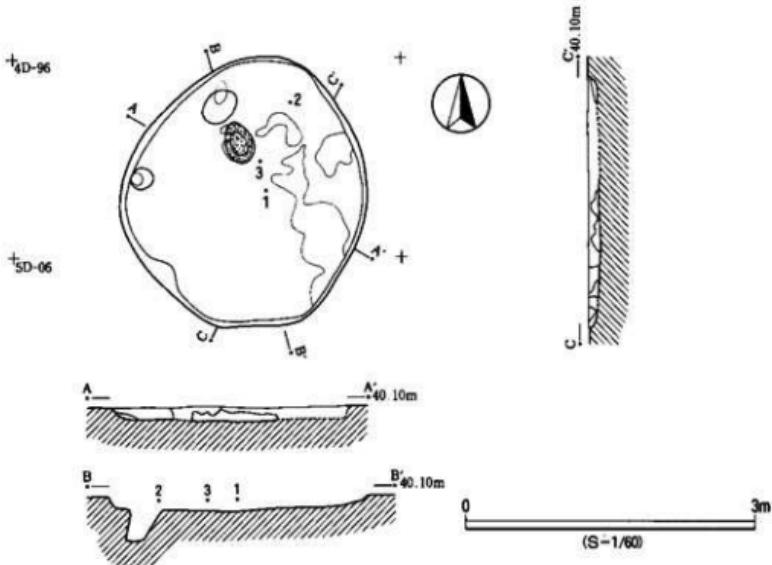
その下に L R の単節縄文を施している。底径は3.4cmである。2は椀の胸上部であろう。複合口縁状に段を形成し、縄文原体による押圧が施されている。3は壺の破片である。上部に R L の単節縄文を施し、下部に2条のS字状結節文が施文されている。

(3) 4号住居（第33図・第34図、図版15）

5 D-18・19グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、形態は楕円形で長軸4.3m、短軸2.5mを測り、主軸方向を北西から南東方向に向いている。遺構確認面からの掘込みは浅く0.1m、南東側には1号土坑が掘り込まれ、本遺構を切っている。さらに畑の耕作によって擾乱が多く



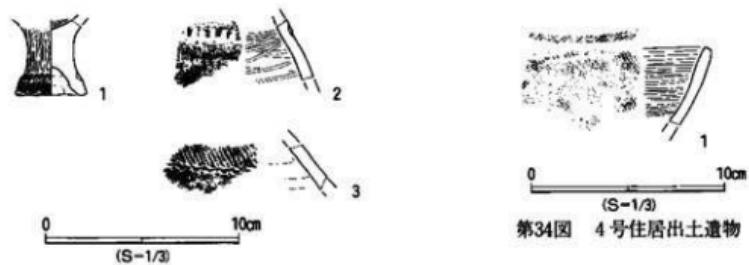
第30図 1号住居出土遺物



第31図 2号住居実測図

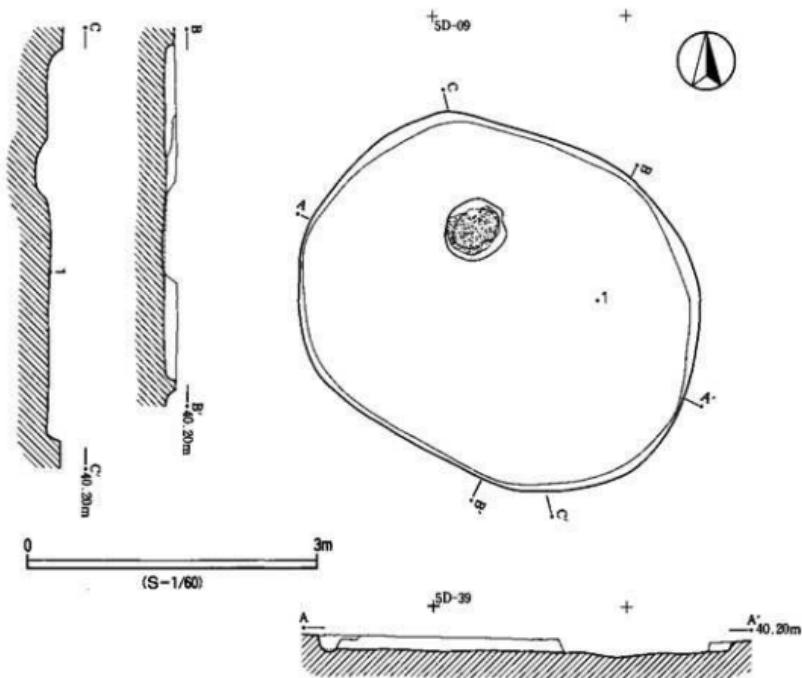
遺存状態はよくない。床面はソフトローム層中で、壁溝はなく固く踏み固められていなかった。床面の中央やや北寄りに炉が検出され、径0.6mのほぼ円形を呈する。柱穴等のピットはみられなかった。

遺物の出土は少なく、図示できるものは1点のみであった。1は鉢の口縁部である。口唇部



第32図 2号住居出土遺物

第34図 4号住居出土遺物

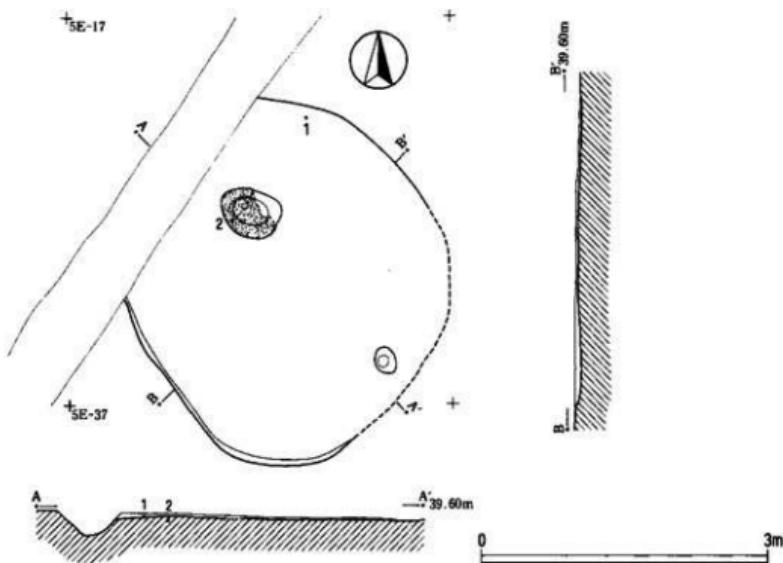


第33図 4号住居実測図

に L R の単節縄文を施し、外面上部には R L - L R - R L - L R の4段の単節縄文の下に、S 字状結節縄文が施されている。内面は丁寧なヘラミガキが施してある。なお、下部断面には粗跡が認められる。

(4) 5号住居 (第35図・第36図、図版16・図版49)

5 E-27・28グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、形態は橢円形とみられるが、遺構の北



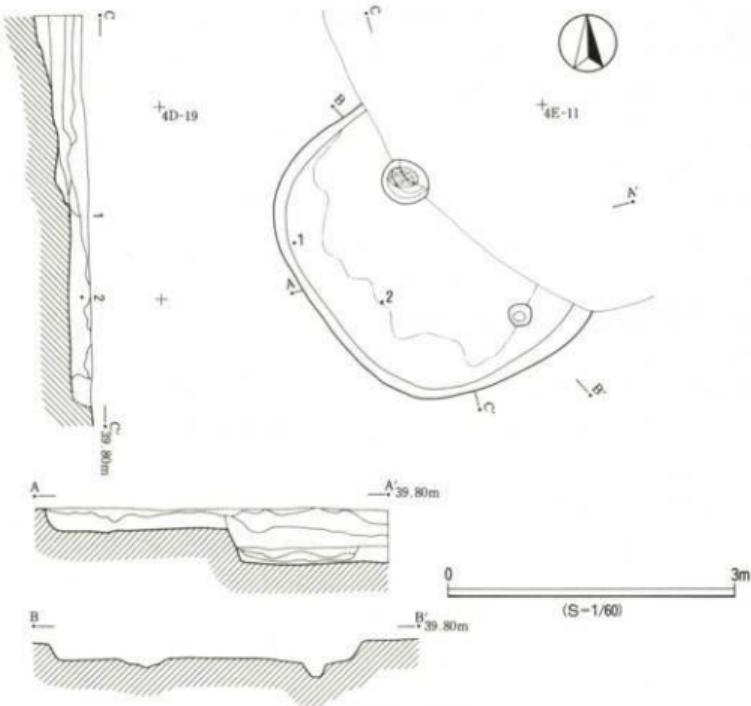
第35図 5号住居実測図

西端を溝2によって切られ、また全体的に遺存状況が悪いため全容は不明である。一応主軸を北西から南東に向けるものとみられ、推定長軸4m、短軸3.2m、掘込み深さは非常に浅く0.05mほどである。床面はソフトローム層中で柔らかく、壁溝はなく畠の耕作による擾乱が著しく、遺存状態は悪い。床中央からやや主軸北寄りに炉が検出され、径0.6×0.5m、深さ0.1mの大きさで炉床は焼けている。床面の主軸南壁際にピットが1基検出され、径0.3m、深さ0.2mを測る。

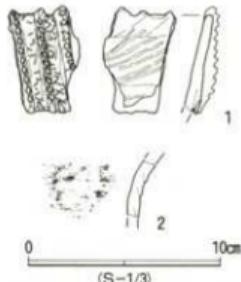
遺物は、ほとんど出土せず、図示できるものは2点のみである。1は壺口縁部片である。網目状燃糸文を地文とし、ヘラ状工具によって刻みを施した棒状浮文が3本付けられている。胎土中には荒い石英、長石粒、白色針状物を含んでいる。2は壺の頸部で炉内覆土から出土している。輪積痕を3段残す。

(5) 6号住居 (第37図・第38図、図版16)

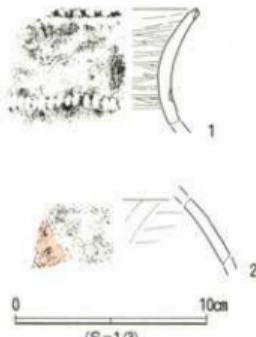
4E-10グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、北東側で7号住居と重複している。本遺構の方が古く、後述の7号住居に切られ南西側約半分の遺存である。形態は梢円形となるとみられ、主軸を北西から南東に向かって長軸3.3mを測り、短軸は7号住居に切られているため不明である。壁の立ち上がりはやや緩やかで、掘込みの深さは0.2m、床面は壁際以外のほぼ全面にわたって、固く踏み固められている。床面には、壁溝はなく主軸中央のやや北寄りに炉が検出



第37図 6号住居実測図



第36図 5号住居出土遺物



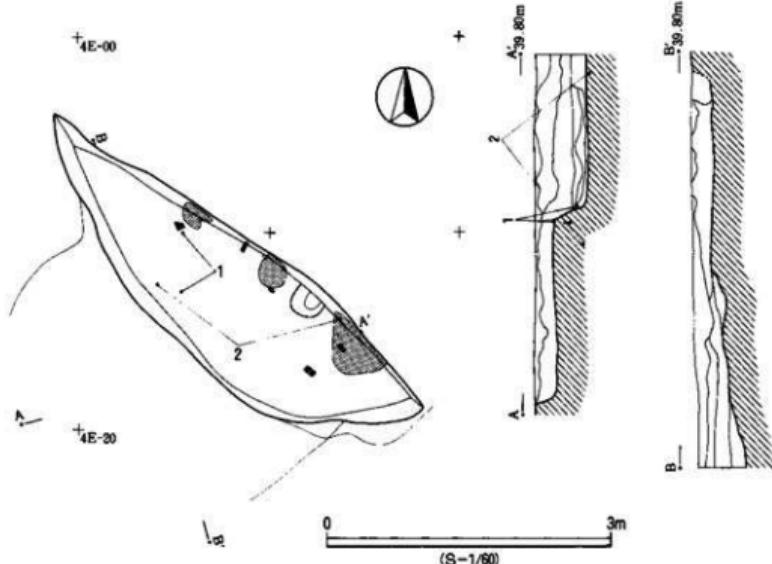
第38図 6号住居出土遺物

されたが、一部は7号住居に切られ上端は一部が破壊され、下端はかろうじて遺存していた。大きさは径0.5mのゆがんだ円形で、深さ0.15m、炉床はやや焼けて硬化していた。主軸の南東寄り壁際にはピットが1基検出され、径0.2m、深さ0.15mを測る。

遺物は、少量出土しているが、図示できるものは2点のみであった。1は甕口縁部片で床面上から出土している。口唇部には刻みが施され、小波状を呈している。胴部との境には縄文原体による押圧が施されているが段は形成していない。2は壺の胴部片である。上部に2条のS字状結節文を有し、下段にR L - L Rの単節縄文を施してある。また、沈線による区画文様を施し、内部の縄文を磨り消し、赤彩を施している。

(6) 7号住居（第39図・第40図、図版16）

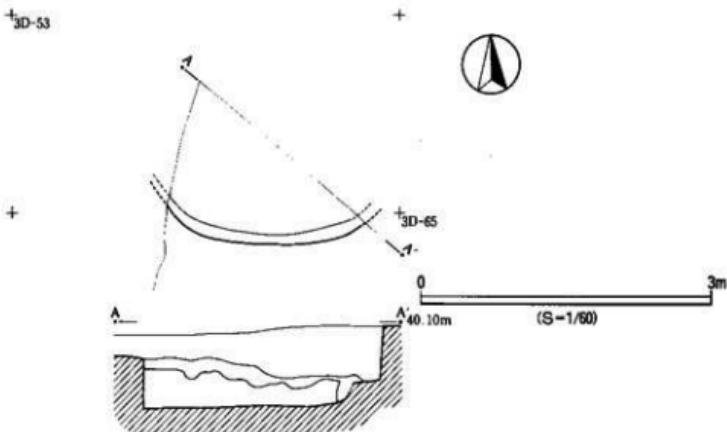
4E-00・10グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、南西側は6号住居と重複し、北東側は調査区外にかかっているため全容は不明である。6号住居との重複関係は先述のとおり本遺構の方が新しく、6号住居を切って構築されている。形態は多分長円形になるものとみられ、調査できた範囲では長さ4.9m、幅1.3mである。壁の掘込みは深くしっかりととしており、0.5mの深さがあった。壁溝はない。本遺構は、火災住居で焼土・炭化材片が覆土下層からやまとまって検出されたが、床面からではなく、0.1mほど浮いた状態からの検出であるので、廃棄後に焚き火等によって形成されたものとみられる。床面の中央付近にピットが1基検出され、径約0.3m、深さ0.35mを測る。炉は検出されなかった。



第39図 7号住居実測図



第40図 7号住居出土遺物



第41図 8号住居実測図

遺物は、ごく少量出土している。1は壺の胴上部である。口唇部に刻みが施され、小波状を呈している。胴部との境には、縄文原体による押圧が施されている。6号住居出土の1と同一個体であると思われる。

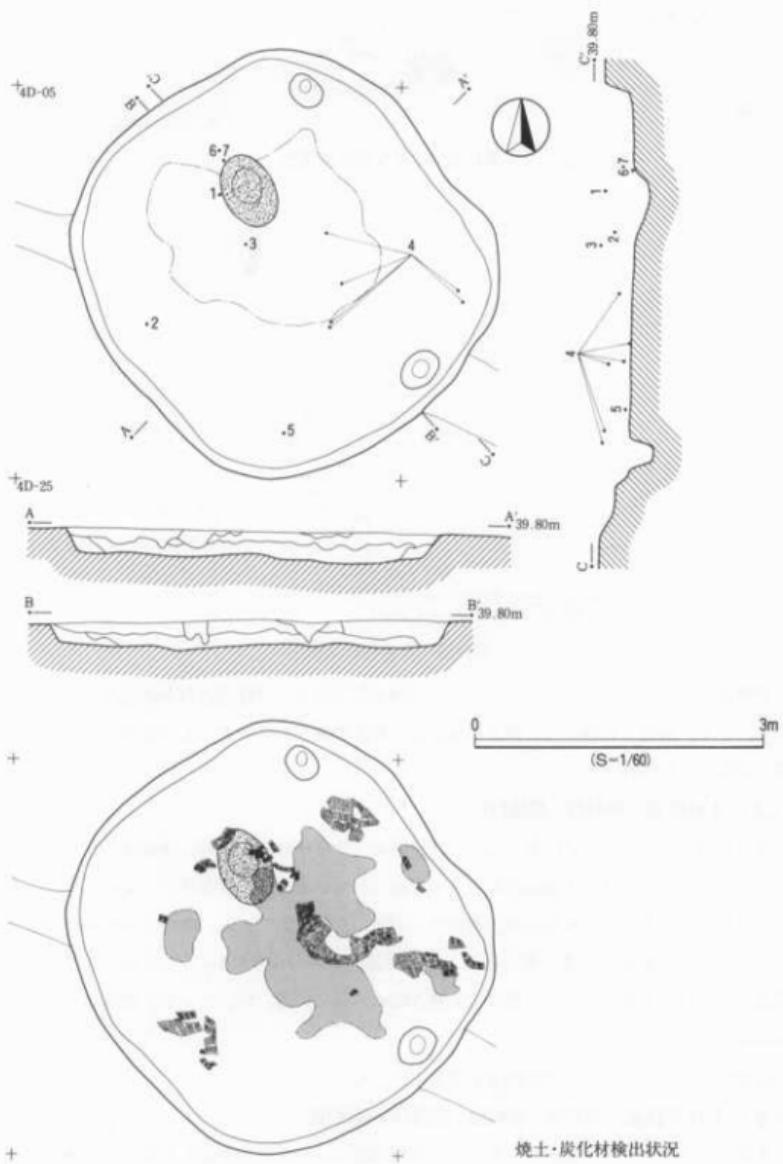
(7) 8号住居 (第41図、図版17)

3D-54グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、北東側は調査区外、西側は2号土坑によって切られ、さらに遺構の上面は溝8によって切られているため、遺存状況は極めて悪い。形態は長円形になるものとみられるが、遺存状況が悪いため不明である。調査できた範囲は、1辺2mほどの三角形状である。掘込みは、遺構確認面からの深さ0.3mでしっかりしている。床面はハードローム層に達し、全体によく踏み固められている。炉、ピット、壁溝等の掘込みはみられない。

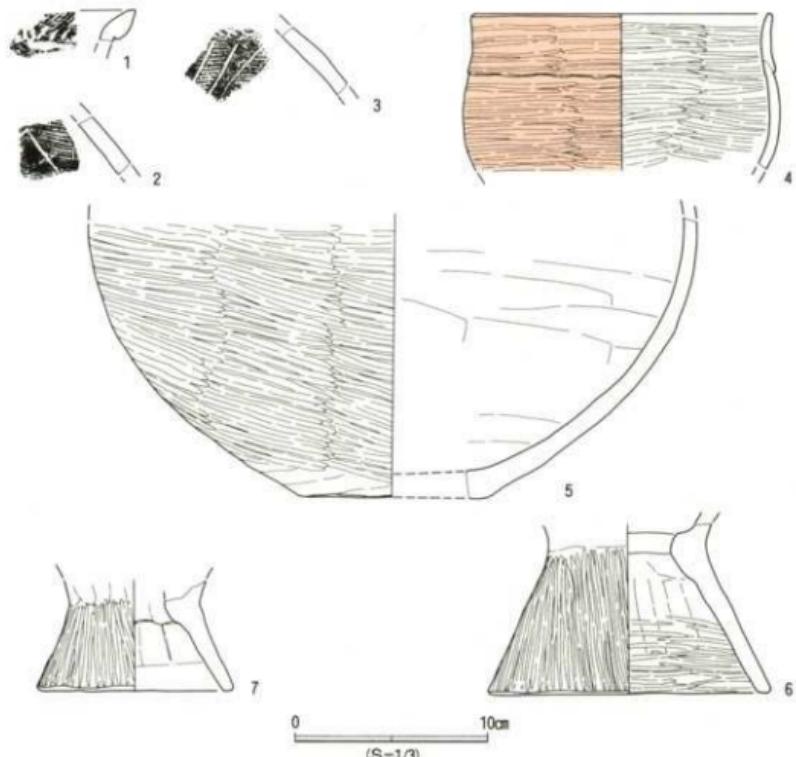
遺物は、少量出土しているが図示できるようなものはない。

(8) 10号住居 (第42図・第43図、図版17・図版49)

4D-06・16グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、中央付近上面を主軸方向に溝4によって切られている。形態は楕円形で、主軸を北西から東南へ向け、長軸4.2m、短軸4mを測る。壁はしっかりしており、ほぼ垂直に掘り込まれている。遺構確認面からの掘込みの深さ0.25~



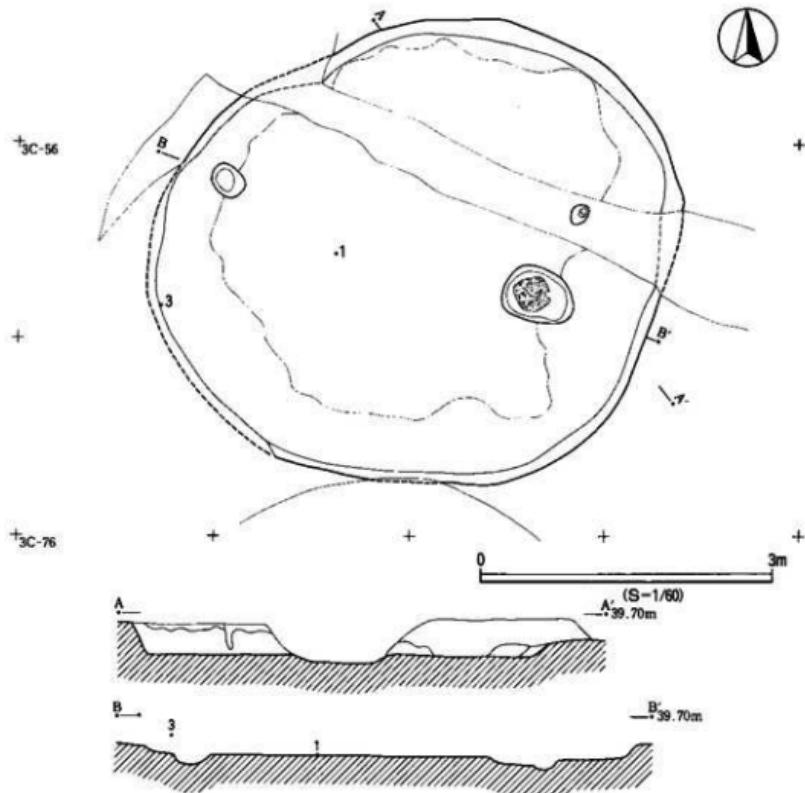
第42図 10号住居実測図



第43図 10号住居出土遺物

0.3mを測る。床面はハードローム層に達し、中央付近は固く踏み固められている。壁溝はなく、中央付近の主軸やや北西寄りに炉が1基検出され、径 0.8×0.5 mの楕円形を呈し、深さ0.1mで炉床はよく焼けていた。床面の北側壁際と主軸の南東壁際の2か所にピットが検出され、柱穴とみられる。北側のものは径 0.4×0.3 m、深さ0.2m、南東のものは径 0.4×0.3 m、深さ0.35mを測る。炭化材・焼土が床面上に多くみられ、本遺構は火災による焼失と考えられる。

遺物は比較的まとまって出土している。1は壺口縁部片である。複合口縁を呈し、L Rの単節繩文を施し、端部に繩文原体による押圧が施されている。2、3は壺の胴部片である。2は山形沈線間に単節繩文を充填し、下部には3条のS字状結節文を施してある。3は上下に3条のS字状結節文を有し、その間に右傾の平行沈線による区画文を施し、交互に単節繩文が充填してある。4は広口壺である。復元口径は15.6cmを測る。胴部上段に粘土貼り付けによる段を作り出し、全面にわたって丁寧なヘラミガキが施されている。また、外面に赤彩の痕跡が認められる。5は壺の胴下半部である。復元底径は9.4cmを測り、外面には丁寧なヘラミガキが



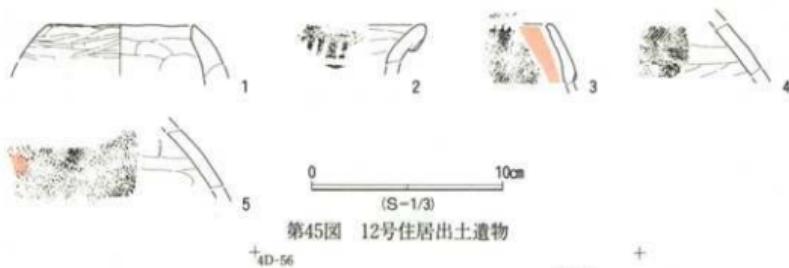
第44図 12号住居実測図

施されている。6、7は器台である。6は炉付近から出土しており、底径14.4cm、口径10.1cm、器高8.7cmを測る。外面はヘラナデの後、丁寧なヘラミガキを施している。脚部内面に1か所、櫻痕跡が認められる。7はやや小振りで底径10.0cmを測る。

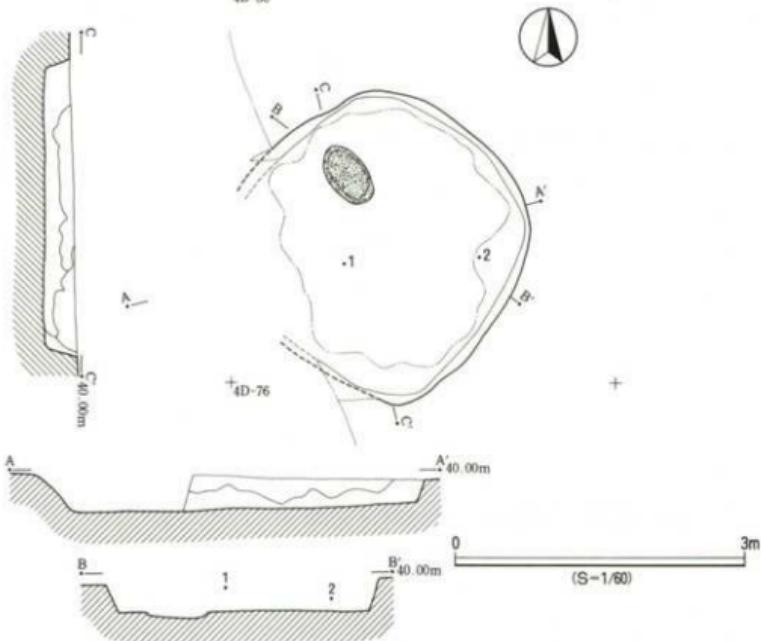
(9) 12号住居 (第44図・第45図、図版18)

3C-57-58グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、竪穴住居跡が最も高い密度で集中している地区である。遺構密度が高いため重複関係も複雑となり、本遺構と重複関係をもつものが17号住居、22号住居、23号住居、26号住居と4軒あり、そのほかに隣接する位置関係から同時存在はあり得ない竪穴住居跡が16号住居、18号住居、20号住居と最低3軒はあげられる。これらの中で直接新旧関係があるものをあげると、22号住居・23号住居・25号住居より新しく、17号住居より古いという構築順になる。

本遺構はほぼ中央を東西方向に溝6によって切られ、その部分は床面まで破壊されている。

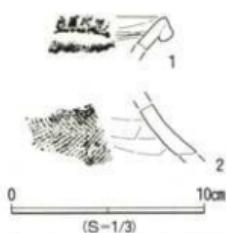


第45図 12号住居出土遺物
+
4D-56



第46図 13号住居実測図

造構の形態は楕円形で、主軸方向はほぼ東西方向となる。長軸は5.5m、短軸は4.8m、造構の掘込み深さは確認面から最深で0.3mだが、旧造構の掘込み等があり実質の深さはもっと少ない。床面はハードローム層に達し壁際以外はよく踏み固められている。壁溝はなく、中央部やや南東寄りに炉が1基、西側壁近くと炉の北側の溝で切られた部分にピットが各1基検出され



第47図 13号住居出土遺物

た。炉は径 0.75×0.55 m、深さ0.1mで炉床の中央部が焼けて硬化していた。西側のピットは、径 0.4×0.3 m、深さ0.1mと浅く、炉の北側のものは径0.2m、深さ1m以上であった。

遺物は、少量出土しており、その中で図示できるものは5点のみであった。1は炉器台の上部であろうか。口縁部が内湾しており、外面にやや雜なヘラナデが施されている。2は壺の口縁部である。複合口縁を呈し、折返し端部に繩文原体による押圧が施されている。3は複合口縁を呈する椀の口縁部であろうか。口唇部にLRの単節繩文を施し、LR-R L-L Rの3段の単節繩文が施文され、折返し端部にはヘラ状工具による刻みがみられる。内面は赤彩されている。4、5は壺胴部片である。4はLR-R L 2段の単節繩文の下にS字状結節文が1条施文されている。また下部には鋸歯文を思わせる沈線が2本施文されている。5は全面に繩文が施され、一部に沈線が認められる。また円形の赤彩文が1か所施文されている。

(10) 13号住居 (第46図・第47図、図版18)

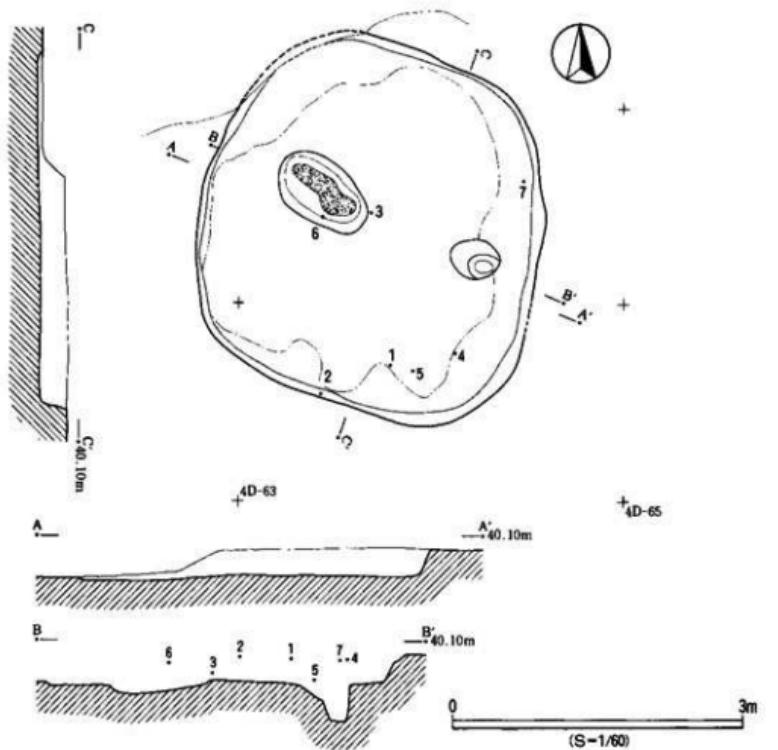
4D-66・67グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、遺構の南西側を大きく方墳1(調査時の遺構番号一溝11)に切られている。形態はほぼ少し角をもつ円形とみられ、径2.9mを測る。掘込みの深さは、確認面から0.3mほどで、やや緩い傾斜だがしっかりした掘込みである。床面はハードローム層に達し、ほぼ床全面に硬質の踏み固めが認められた。壁溝はなく、中央北西側壁に近い部分に炉が検出され、径 0.7×0.4 m、深さ0.1mと浅く、炉床の焼け方も少なかった。ピット類は検出されなかった。

遺物は、ごく少量出土しているが、図示できるものは2点のみであった。1、2ともに壺の破片である。1は複合口縁で外面端部に繩文原体による押圧が施されている。2は頸部片で、R L-L Rの単節繩文が施文されている。

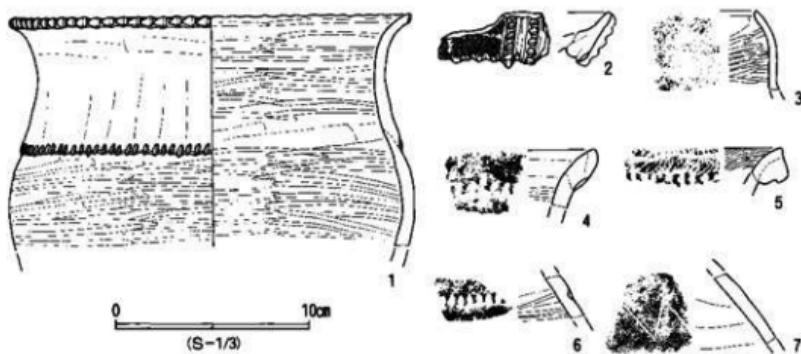
(11) 14号住居 (第48図・第49図、図版19・図版49)

4D-43・44グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、遺構の北側を方墳1に切られ、そのまま南側上部を溝3に、西側上部を溝7に切られてかなり遺存状況は悪い。形態はややゆがんだ少し角をもつ円形で、長軸3.7m、短軸3.6mを測り、確認面からの掘込み深さは0.3mあり、やや壁の立ち上がりが緩いもののしっかりした掘込みの部類に入る。ハードローム層に至る掘込みで、床面はほぼ全面にわたり固く踏み固められている。壁溝はなく、床面中央のやや西側に、大型の炉が1基検出され、径 1.1×0.65 mの楕円形を呈し深さは浅く0.05mほどである。炉床の中央付近が焼けて硬化していた。炉の反対側にはピットが1基検出され、径 0.5×0.4 m、深さ0.4mほどで2段に掘り込まれている。

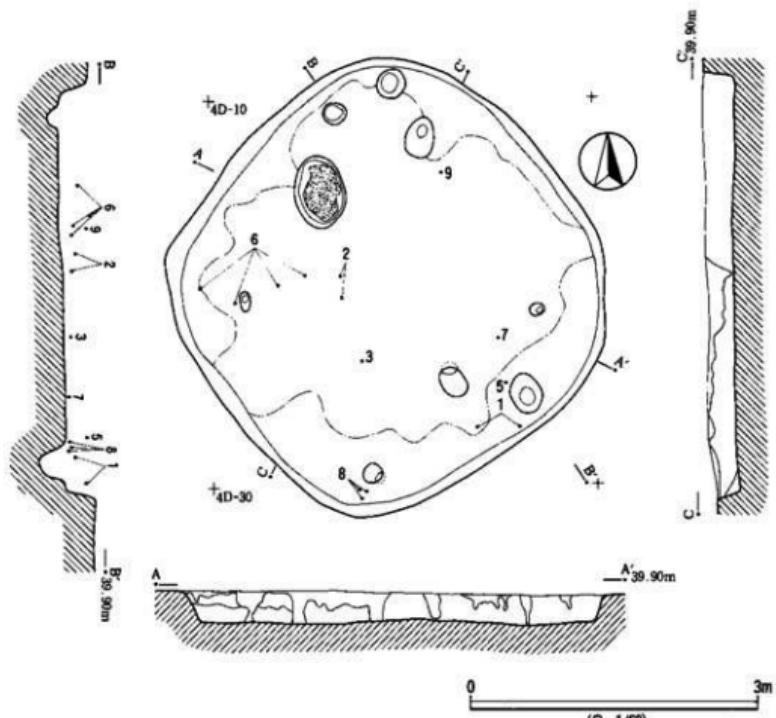
遺物の多くは遺構のやや南側から浮いた状態で出土している。1は壺で、口径と胴部最大径がほぼ同じ大きさを呈しており、復元径で口径20.8cm、胴径21cmを測る。口唇部にヘラ状工具による押圧を施し、胴上部には輪積痕による段を形成し、その上にはヘラ状工具による刺突が施される。なお、外面には一部スヌの付着が認められる。2、3、4、5は壺の口縁部片であ



第48図 14号住居実測図



第49図 14号住居出土遺物

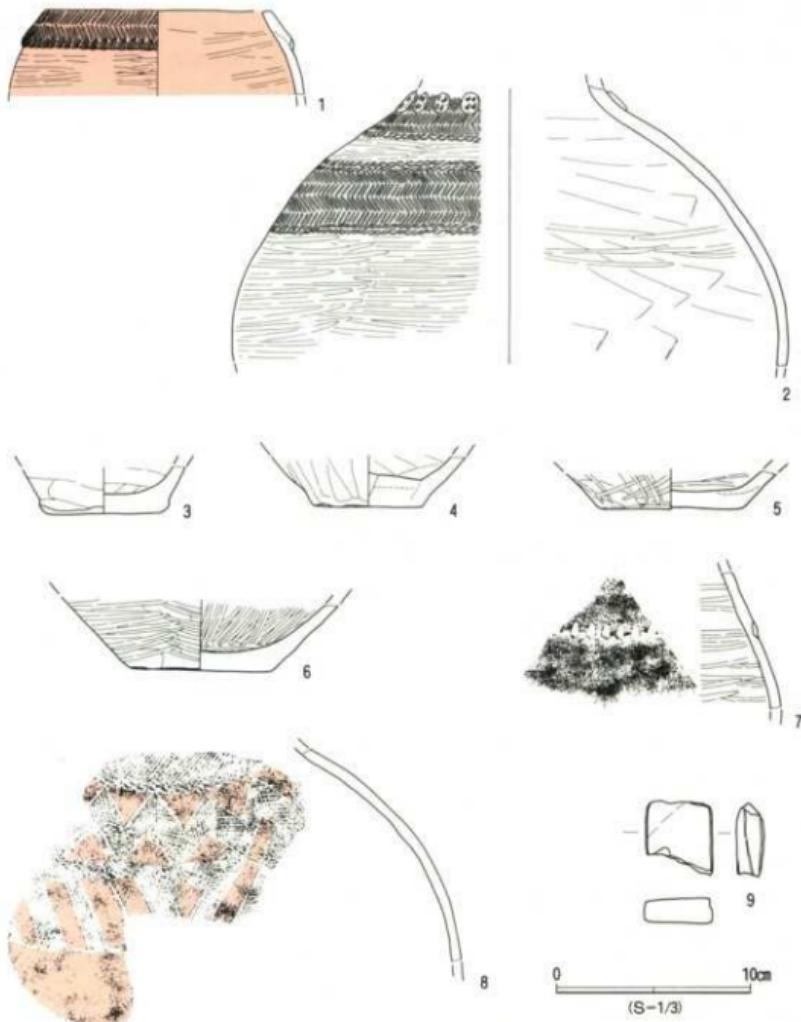


第50図 15号住居実測図

る。2は受け口状の複合口縁で、R L - L Rの単節縄文の上面に押圧を持つ3本以上の棒状浮文が貼付されている。また、口縁下端部には、縄文原体による押圧が施されている。3は口縁がやや内湾し、R L - L R - R L - L R - R Lの5段の単節縄文が施文されている。4は複合口縁で、端部に縄文原体による押圧が施されている。5も複合口縁で、L Rの単節縄文を施文し、下端にヘラ状工具による押圧が認められる。6は壺の胴部片で、輪積痕跡を残し、その上に縄文原体による押圧が施されている。7は壺胴部片で、L R - R Lの単節縄文の上に山形沈線文を施文し、沈線区画外側をすり消している。また、無文部分は赤彩されている。

(12) 15号住居 (第50図・第51図、図版20・図版49)

4D-10・20グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、形態は少し角をもつ円形を呈し、径4.3mほどである。畠の耕作による搅乱が多いが、確認面からの掘込みが0.3mほどあるしっかりした掘込みの竪穴住居跡のため遺存状況はよい方である。掘込みはハードローム層中に及び、床面は壁際を除いて固く踏み固められていた。壁溝はなく、床面中央から北西寄りに炉が1基検出され、そのほかに小ピットが8基検出された。炉は径0.75×0.65mの梢円形で、深さは



第51図 15号住居出土遺物

0.05mと浅い。炉床の中央付近は焼けて硬化している。ピットは柱穴状のものから非常に小さいものまであり、径0.15~0.4m、深さ0.1~0.5mのものまで計8基ある。柱穴や補助柱穴、出入り用の梯子穴などであろう。

遺物は、比較的多く出土し、図示できるものは9点であった。1は小型の鉢または椀で、推定口径11.6cmを測る。口縁は複合口縁を呈しやや内湾している。口唇部にL R、外面にL R -

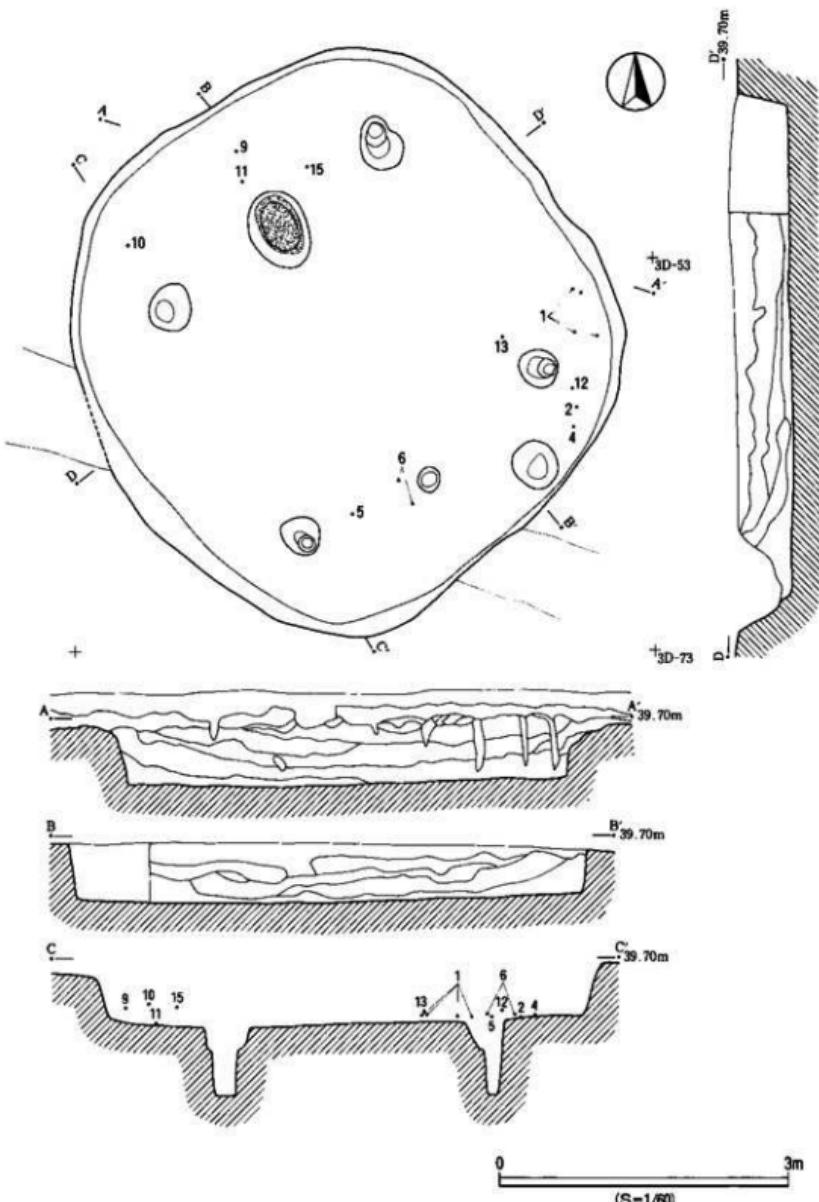
R L の単節縄文を施し、端部には縄文原体による押圧を施す。内外面に赤彩がみられる。2は壺胴上部片である。推定胴部最大径は28.8cmを測る。球形を呈する器形の上部2段に文様が施されている。上段は、R L - L R - R L 3段の単節縄文の下に3条のS字状結節文を施し、縄文原体によって押圧された円形浮文が認められる。下段には上下を3条のS字状結節文によって区画された内部にR L - L R - R L - L R 4段の単節縄文が施文されている。3、4、5、6は壺または壺の底部で、いずれも使用による損耗は少ない。3は底径6.7cm、4は5.7cm、5は7.2cm、6は7.3cmを測る。なお、6の内面中央と5の内側に粗圧痕が1か所ずつ認められる。4は多量の長石粒、石英粒を含む。6は内外面共に丁寧なヘラミガキが施されている。7は壺の胴部片である。輪積痕を思わせる段を形成し、端部に縄文原体による押圧を施している。8は壺胴部片で、3条を1単位としたS字状結節文と沈線によって、3段の文様帯が構成されている。上段はL R の単節縄文を施し、中段は沈線による山形文の内部をL R の単節縄文で充填している。下段は傾斜している平行沈線の中を交互に単節縄文を施文している。なお、無文部分は全て赤彩が施されている。9は砥石である。長方形を呈し、中央部分で欠損している。形状などから流れ込みの可能性が高い。

(13) 16号住居(第52図・第53図、図版21・図版49)

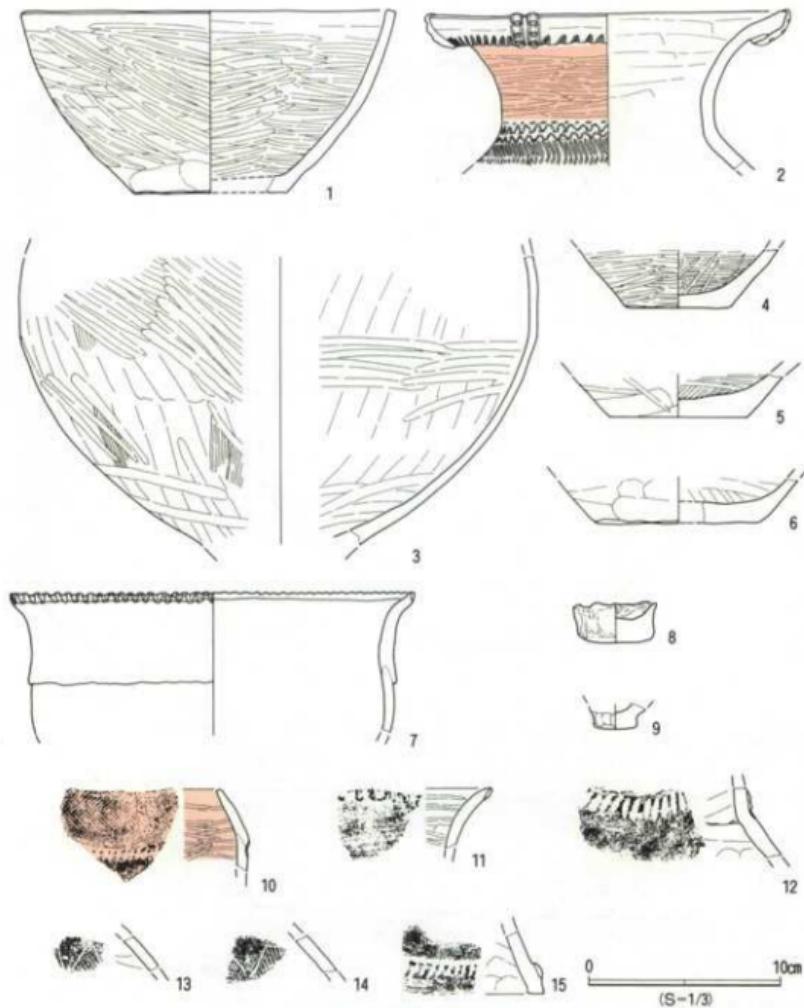
3D-50・51グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、複雑な重複関係をもつ竪穴住居跡群のうちの1軒である。18号住居・23号住居を切って構築され、溝6に上部を切られている。形態は少し角をもつ整った円形で、主軸を北西から南東に向け、長軸5.5m、短軸5.4mである。掘込みは深くしっかりとしており、壁も垂直に近く立ち上がっている。確認面からの掘込みは0.5mを測る。床面はハードローム層に達し、ほぼ全面が固く踏み固められていた。壁溝はなく主軸上の中央やや北西側に炉が1基検出され、径0.85×0.6m、深さ0.2mで、炉床近くには非常によく焼けた焼土層が堆積していた。平面形の円形の角に当たる部分のほぼ対角線上にピットが4基検出され、径0.4~0.6m、深さ0.6~0.8mのしっかりとした掘込みの柱穴と考えられる。柱穴の掘り方からみると住居廃絶後に柱の抜取りをしたような形態が観察される。炉の反対側には補助柱穴か梯子穴とみられる小ピットが1基検出され、それと同じ側の壁際には、やや大振りの径0.5m、深さ0.25mのピットが1基検出され貯蔵穴とみられる。

遺物は、遺構の南北両隅に比較的大型の遺物がまとまるような状態で出土している。

1は鉢である。無文で全面にわたって丁寧なヘラミガキが施されている。口径19.5cm、底径7.9cm、器高9.5cmを測る。2は壺の上部片である。複合口縁を呈し、端部には縄文原体による押圧が施されている。また2本を1単位とする棒状浮文が6か所貼付され、浮文上は縄文原体が押圧されている。頸部下端から胴部上面にかけては、2条のS字状結節文とR L - L R 2段の単節縄文が施文され、頸部の無文帯には赤彩の痕跡が認められる。3は壺の胴下半部であろう。長石粒、石英粒を多く含み、ヘラケズリの後粗いヘラミガキが施されている。4、5は壺



第52図 16号住居実測図



第53図 16号住居出土遺物

底部片、6は甕底部片であろう。底径は4が5.8cm、5が7.1cm、6が8.5cmを測る。なお5と6には底部外面に糀圧痕が認められるが、5は稲穂の状態での圧痕も確認できる。7は甕である。口唇部は縄文原体による押圧がみられ、頸部と胴部の境には輪積状の段を形成している。外面には全面にわたってスヌの付着が認められる。口径21.1cmを測る。8、9はミニチュア土器の底部である。器種は不明。指によるナデ調整が認められる。底径は2.4cmを測る。10は椀

の口縁部片であろう。内湾した複合口縁を呈し、端部はヘラ状工具による押圧が施されている。口唇部にはLR単節繩文、外面にはLR-R L-L R 3段の単節繩文が施されている。なお、内外面ともに赤彩されている。11は妻の口縁部片で、口唇部にはヘラ状工具による押圧が施され小波状を呈している。12は広口壺の頸部片であろう。輪積痕状の段の上に繩文原体による押圧が施され、その上部にS字状結節文が2条確認できる。13、14は壺の胴部片である。両者とも山形沈線の内部を単節繩文で充填している。15は高壺の脚部であろう。脚先端を折り返して段を形成し、端部には繩文原体による押圧が施されている。

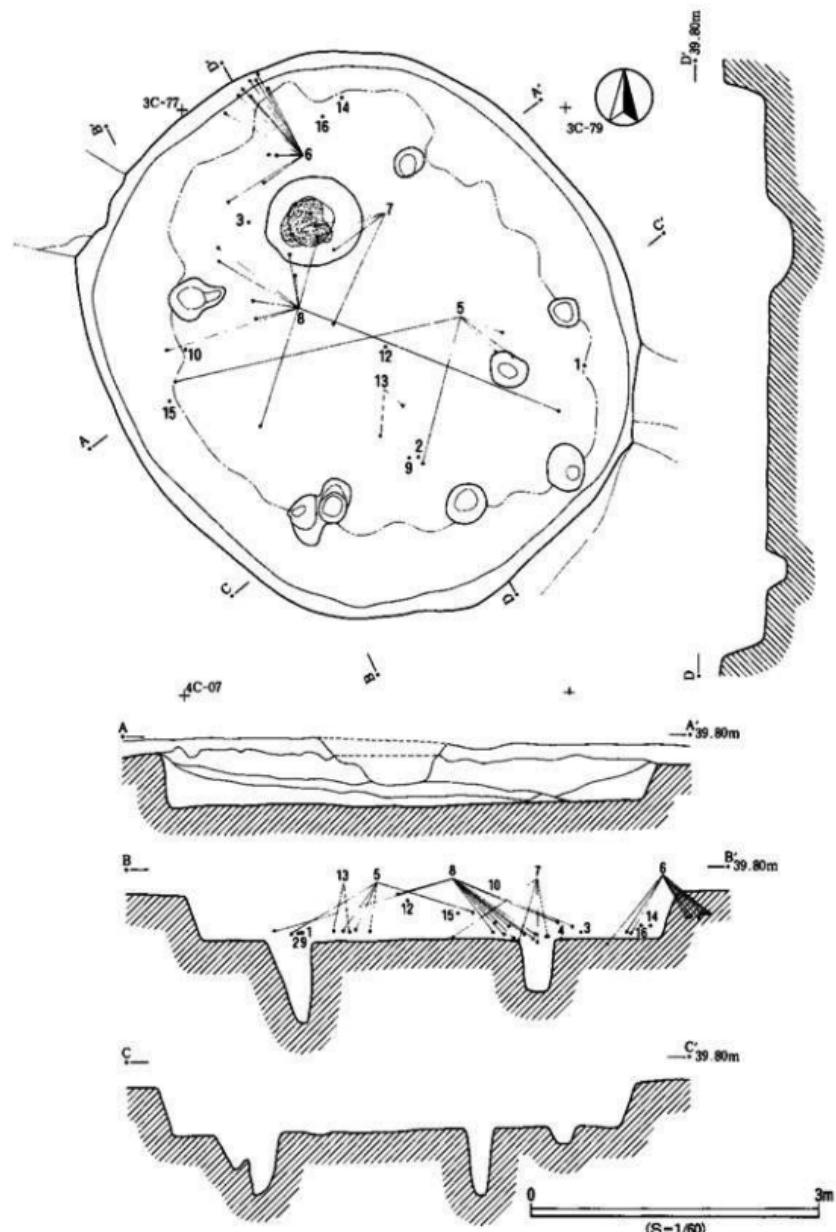
(14) 17号住居(第54図～第57図、図版22・図版49～図版50)

3C-77-78グリッド周辺に位置する竪穴住居跡である。本来は建替えによる2軒の竪穴住居跡のようであり、2軒の竪穴住居跡として報告すべきであるが、古い遺構の平面形等が把握できなかったので、ここでは新しい方の竪穴住居跡の中心として報告し、古いものと分離できた項目のみ古い遺構として取り上げる。特に断らない場合は新しい方の竪穴住居跡のことである。

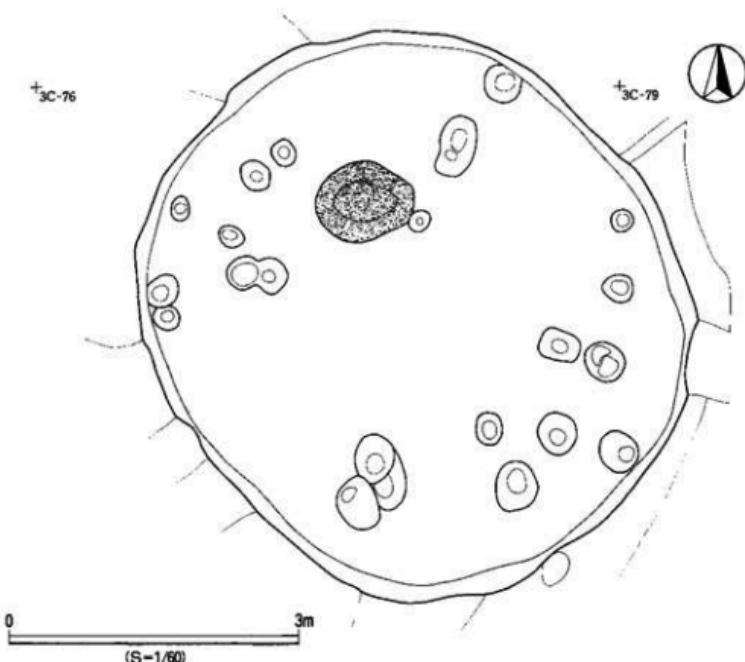
本遺構周辺は、遺構密度の最も高い部分で、新旧の切り合い関係があるほかの遺構の中で最も新しいとみられる竪穴住居跡である。12号住居・19号住居・22号住居より新しいが、溝4に切られている。形態はやや長円形に近い円形で、長軸5.9m、短軸5.2mを測る。主軸を北西から南東に向け、主軸上の中央よりやや北西に炉が1基検出されている。床面はハードローム層に達し、ほぼ全面にわたって固く踏み固められている。壁溝はなく床面からは炉が1基とピットが7基検出されている。また、この床面の2～3cmほど下にさらにもう一面の床面が存在し、ピットが20基ほど検出されている。これらの柱穴状ピットのうち、当初検出されたものは炉をはさんだ両側に位置するものなど計7基である。これらのうちで、柱の抜取り痕とみられる状況の柱穴もあり、竪穴住居跡廃絶時の柱穴等のピットの状況を示していると考えられる。それ以外のピット群は旧竪穴住居跡と周辺に位置する別の竪穴住居跡に間連するピットとみられる。

炉は、床面中央からやや主軸方向北西に寄ったところに位置し、径1m、深さ0.3mの円形で、掘込みの底面部分は火熱によって赤色硬化していた。柱穴は炉をはさんだ両側と短軸を対称にした反対側に2基ずつ位置し、炉の反対側には出入口用の梯子用ピットとみられるピット、その北側の壁際には、貯蔵穴状のピットが1基検出されている。さらに補助柱穴状のピット1基がみられる。柱穴のピットは、径0.3～0.4m、深さ0.5mほどで、一部のものに抜取り痕とみられる状況が確認された。梯子用ピットは、径0.4m、深さ0.2m、貯蔵穴状ピットは径0.5m、深さ0.35mほどの大きさである。

本遺構の床面には焼土・炭化材が多くみられ火災住居であることがうかがえる。柱穴の一部にみられる抜取り痕と考え合わせると、廃絶時に柱の抜取りを行い、不要の用材等の焼却を行



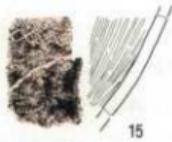
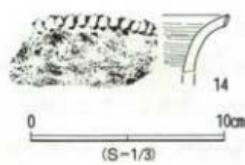
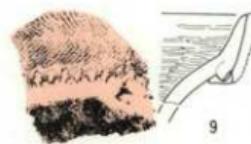
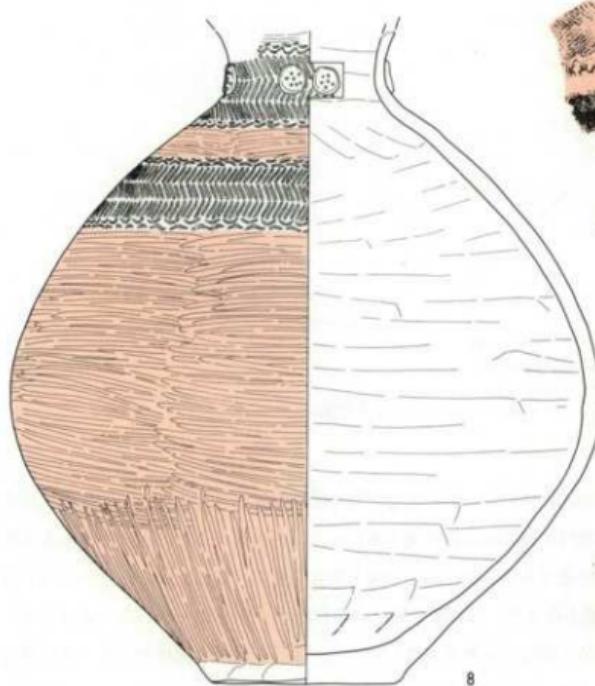
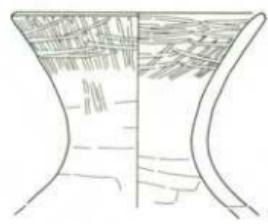
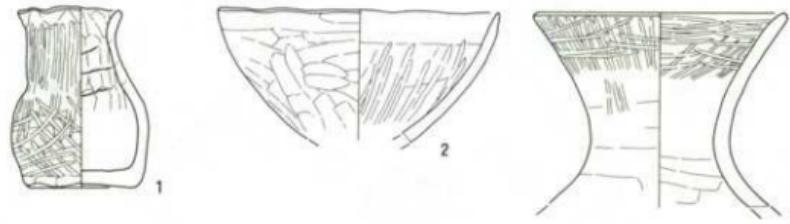
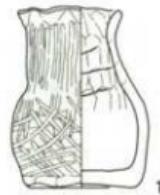
第54図 17号住居実測図(1)



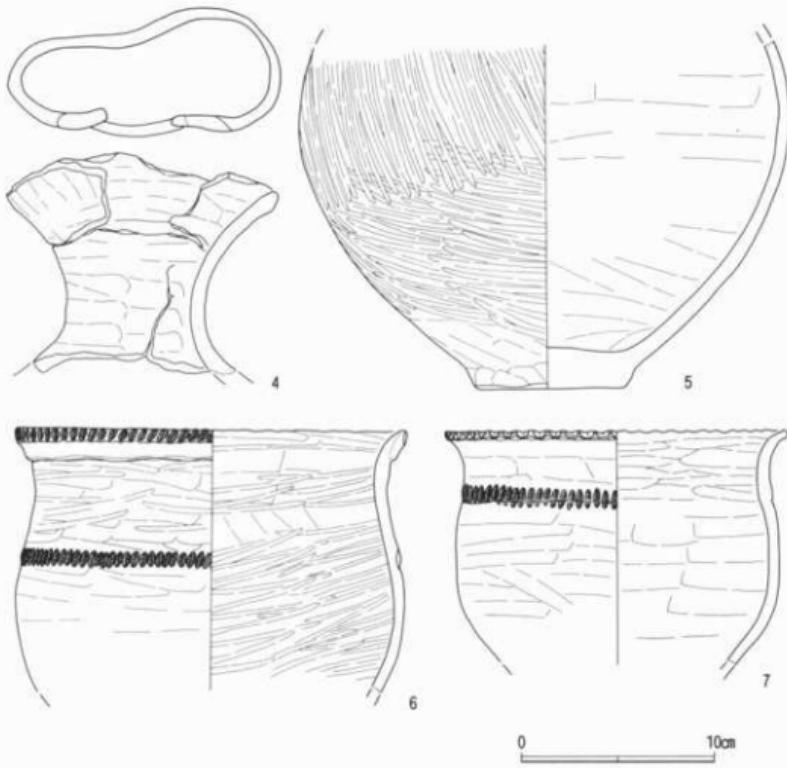
第55図 17号住居実測図(2)

つたのであろう。

遺物は、出土量が他の竪穴住居跡よりも大型の破片が多くあった。しかし、生活状況を表すものではなく遺構廃絶時の焼却前後の廃棄とみられ、二次焼成による焼きゆがみのある土器もみられる。1は小型の壺である。口縁部の一部を除き完形で、底径5.5cm、口径5.3cm、器高9.5cmを測る。やや粗雑な作りで、口唇部や頸部内面に指ナデ痕を残している。2は高壊の壺部片であろうか。比較的丁寧なナデ整形を施している。3、4は壺上部片である。3は頸部上段から肩部にかけて、4は頸部下段から口縁部にかけて強く被熱し変形している。住居焼失時または炉器台への再利用などが考えられる。5は壺刷下半部片である。底径は7.8cmを測り、全体にヘラミガキが施されている。6、7は壺である。6の口縁部は複合口縁を呈しており、口唇部には縄文原体による押圧が施されている。また、頸部と胴部との境付近は輪積痕と思われる段を作り、端部は縄文原体によって押圧されている。口径は20.4cmを測る。7は口唇部にヘラ状工具による押圧が施され、頸部と胴部との境にある段の下段には縄文原体による押圧が施されている。二次的被熱により変形している。8の壺は、胴部がほぼ球形を呈しており、細くくびれた頸部と胴上部に文様が施文されている。頸部の文様は、上から2条のS字状結節文、



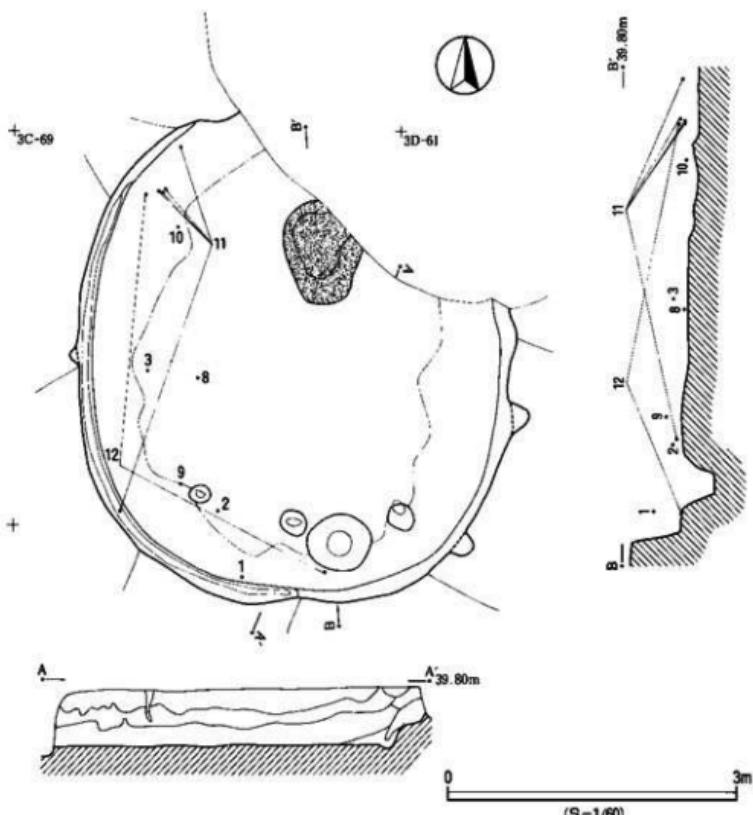
第56圖 17號住居出土遺物(1)



第57図 17号住居出土遺物(2)

R L - L R - R L 3段の単節縄文、2条のS字状結節文が施文され、中央に刺突文を有する2個一対の円形浮文が4か所貼り付けられている。胴上部の文様は、2条のS字状結節文、L R - R L - L R 3段の単節縄文、2条のS字状結節文が施文されている。また、無文部分は丁寧にヘラミガキされ、赤彩が施されている。9の口縁部片と同一個体である可能性が高い。底径9.7cm、胴部最大径30.6cm、頭部8.2cmを測る。

9、10、11、13は壺口縁部片である。9は複合口縁を呈し、やや受け口状になっている。上からR L - L R 2段の単節縄文を施し、端部にヘラ状工具による押圧がされている。また、2本以上の棒状浮文が施文されていた痕跡が認められる。外面には赤彩が施されている。10も複合口縁で、L R - R L の単節縄文と端部に縄文原体による押圧が施されている。11は複合口縁を呈し、R L の単節縄文を施し、端部にヘラ状工具によるキザミを施している。13は複合口縁を呈しているが、縄文などの施文はない。14は壺の口縁部である。口唇部には縄文原体による

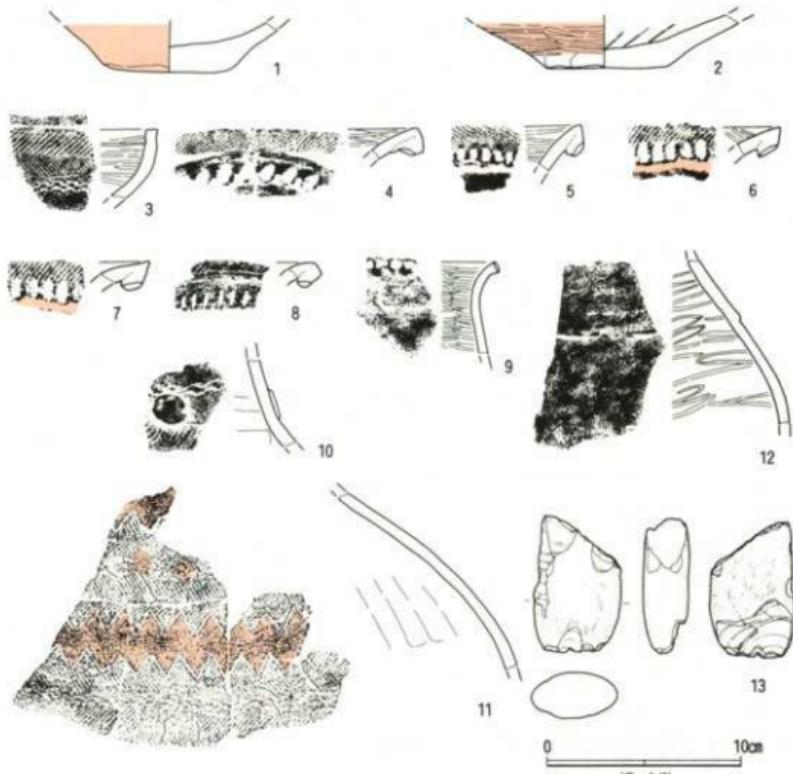


第58図 18号住居実測図

押圧が施されており、全体にススの付着が認められる。12は鉢の口縁部であろう。複合口縁で、外面に L R - R L 2段の単節縄文と端部に縄文原体が押圧されている。また、下段には S字状結節文が2条施文されている。15は壺胴部または鉢片である。R Lの単節縄文の下段に S字状結節文が2条施文されている。外面には赤彩が施されている。16は壺の胴上部片である。輪積痕の段を作り、端部に縄文原体による押圧が施され、外面全体にススが付着している。14の壺口縁部と同一個体の可能性が高い。

(15) 18号住居 (第58図・第59図、図版22)

3D-60・70グリッド周辺に位置する竪穴住居跡である。複雑な重複関係をもち、21号住居・22号住居・23号住居より本遺構の方が新しく、16号住居は本遺構より新しく構築されている。形態は、北東側の一部を16号住居に切られているが長円形で、復元長軸5m、短



第59図 18号住居出土遺物

軸4.5m、長軸をほぼ南北方向に向け周辺の竪穴住居跡とやや方向性が異なる。確認面からの掘込み深さは0.5mと深く、壁の立ち上がりも垂直に近くしっかりした掘込みの竪穴住居跡である。床面はハードローム層に達し、中央部分は踏み固めによって硬化していた。西から南にかけての壁際には壁溝が存在するが全周せず、幅0.15m、深さ0.05~0.1mほどの規模で、長さ5.5mにわたって存在する。長軸上の中央やや北寄りに炉が1基位置し、北東側を16号住居に切られているが、径1.1×0.8m、深さ0.1mの大きさを測る。炉の反対側の南側にはピットが4基検出され、うち3基は径0.2~0.3m、深さ0.15~0.2mの小ピットであり、残りの1基は径0.7m、深さ0.4mの貯藏穴状のピットである。北側にはピット類は検出されなかった。炉の西側の床面に少量の焼土がブロック状に検出されている。

遺物は、比較的量が多く、遺構の西側に集中していた。1、2は壺底部であろう。1は底径6.6cmを測り、底部稜線がやや磨耗している。外面は底を含め、すべて赤彩されている。2は

底径6.4cmを測り、外面上部から赤彩が施されている。11の胴部片と同一個体の可能性が高い。3は腕の口縁部であろう。内面に1条の沈線が施され、口唇部にはLR、外面にはLRL2段の単節繩文、2条のS字状結節文が施文されている。4、5、6、7、8は全て壺口縁部片であり、複合口縁を呈している。4は口唇部にLRの単節繩文を施し、下端に繩文原体による押圧がみられる。5は口唇部にLRL2段の単節繩文を施し、端部に繩文原体押圧を施す。6、7は同一個体で、口唇部にLRの単節繩文、端部に繩文原体押圧を施す。頸部は赤彩されている。なお、7には擦圧痕が認められる。8は口唇部にLRL単節繩文、端部にヘラ状工具による押圧が施されている。9は壺口縁部片で、口唇部に繩文原体による押圧が施されている。外面全体にスヌの付着が認められる。10は壺頸部である。上から2条のS字状結節文、RL-LRLの単節繩文が施文され、無文の円形浮文が貼付されている。11は壺胴上部片である。上部と下部の2段の文様帯からなる。上段の文様体は、上下を山形沈線文によって区画し、内部にはRL-LRLの単節繩文、2条のS字状結節文、RL-LRLの単節繩文で充填しており、S字状結節文部分には円形の赤彩が施されている。下段の文様帯は、山形沈線文の下にLRL-RL単節繩文、2条のS字状結節文、LRL-RLの単節繩文が施文してある。なお、ヘラで磨り消して無文になっている部分には、赤彩が施されている。また、内面は損耗が著しい。12は壺の胴上部片であろうか。上部に輪積痕を1段残している。内面は丁寧にミガキが施されている。なお、外面に擦圧痕が認められる。13は砂岩製の打製石器である。細長い蝶の一方を打ち欠いて刃部状に整形している。上下面に当たる自然面には磨耗の跡がみられ平滑になっている。長さ6.9cm、幅4.5cm、厚さ2.4cmを測る。

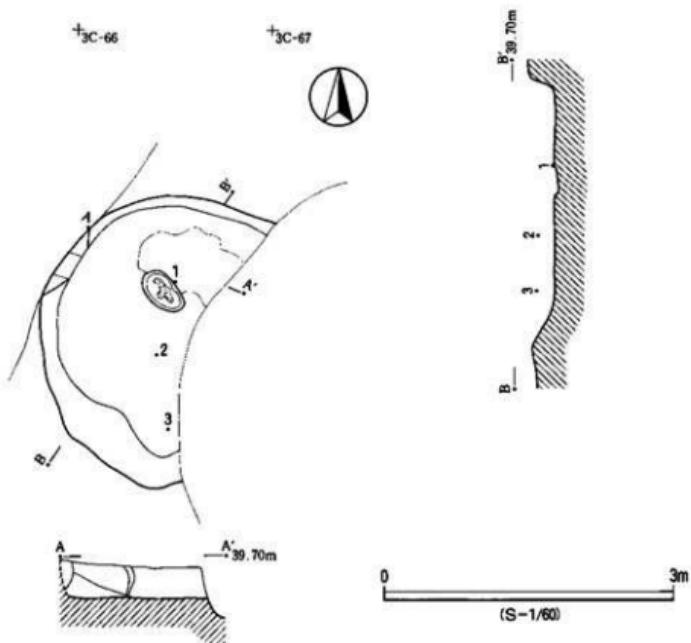
(16) 19号住居 (第60図・第61図、図版23)

3C-76グリッド周辺に位置する小型の竪穴住居跡で、17号住居に切られ、上面は溝4に切られている。東側は17号住居に切られているため遺構全体からみると約半分の調査であるが、推定径3mの円形になるとみられる。南西側は緩やかな掘込みで確認面からの深さ0.2m、床面は一部分だけ踏み固めて硬化していた。床面の中央や北寄りに炉が1基検出されている。径0.5×0.3m、深さ0.05mと浅い掘込みで、炉床の中央部分が焼けて硬化していた。床面にはピットではなく、東側の17号住居内の壁際には小ピットが2基ほどあることから、これらが19号住居のピットの可能性もある。

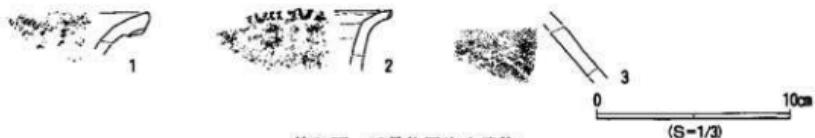
遺物の出土量は少なく、図示できるものは3点のみであった。1は壺口縁部片である。複合口縁を呈し、口唇部にはLRL-RLの単節繩文が施され、端部には繩文原体が押圧されている。2は壺口縁部片である。口唇部には繩文原体による押圧が施されている。3は壺胴部片である。上からLRL-RL単節繩文、2条のS字状結節文、LRの単節繩文が施文されている。

(17) 20号住居 (第62図・第63図、図版24・図版51)

3C-29・39グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、23号住居・41号住居を切って構築

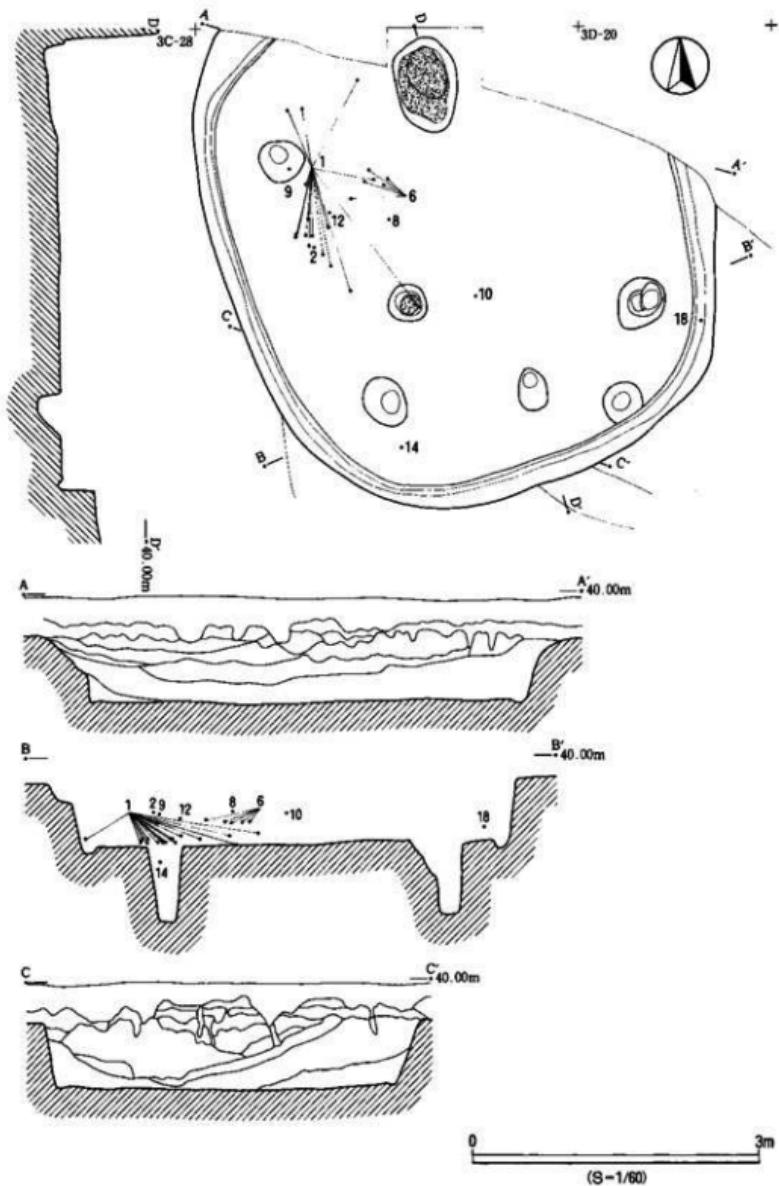


第60図 19号住居実測図

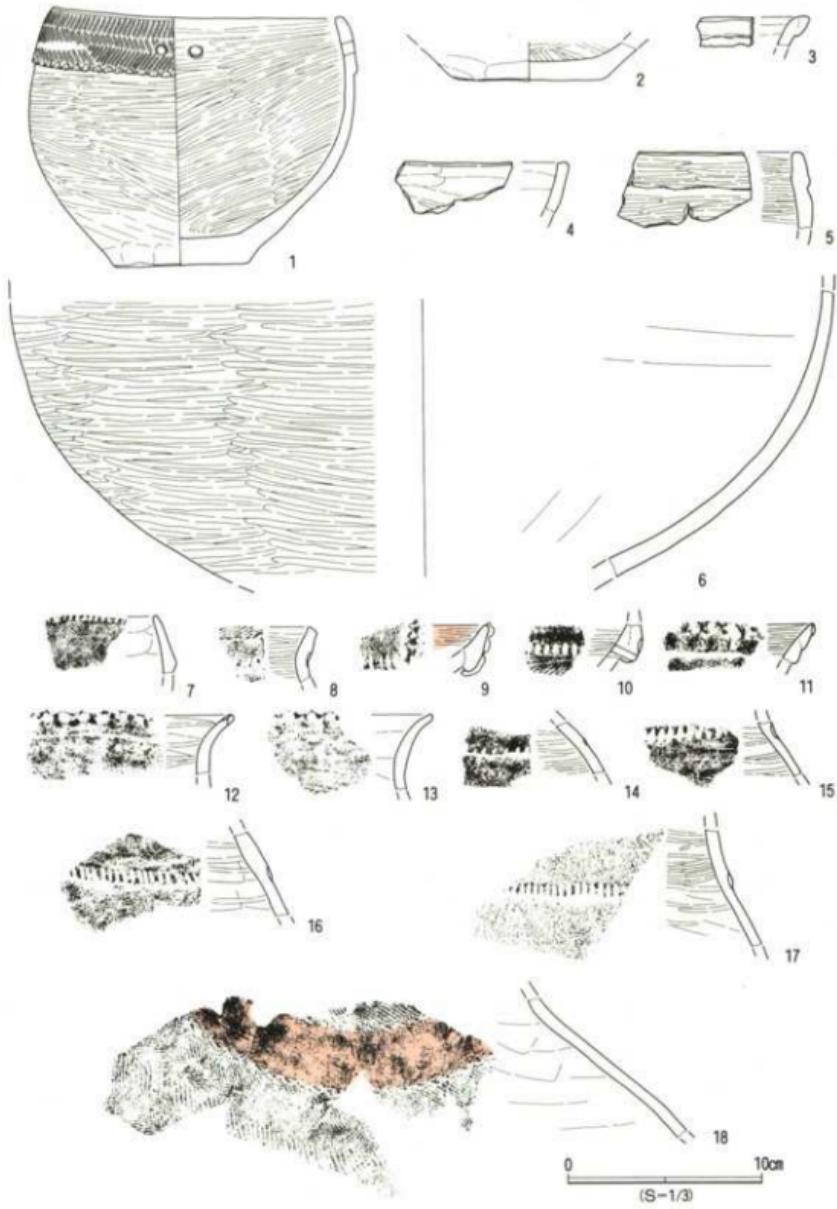


第61図 19号住居出土遺物

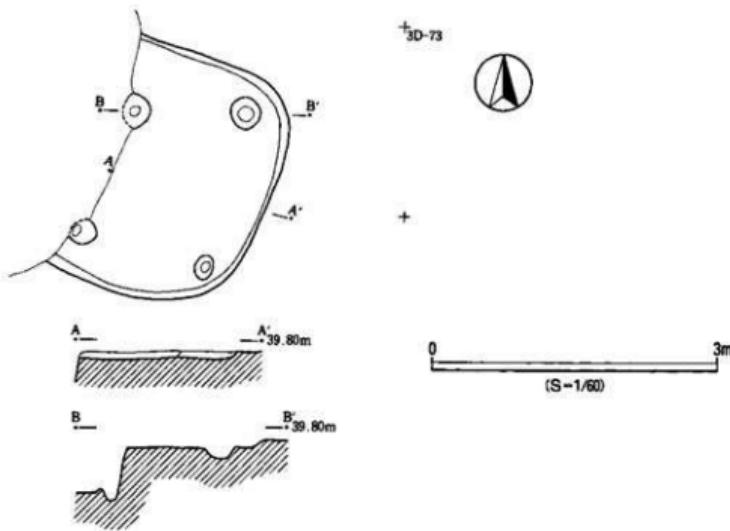
されている。形態は長円形で整った形態を呈し、長軸5.5m、短軸5mを測り、主軸を北北西から南南東に向ける。掘込みはハードローム層に達し、踏み固めによる硬質の床面が形成されていた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは0.6mあり、当遺跡の中では最も深い部類に含まれる。床面と壁との境には壁溝が全周し、幅約0.2m、深さ0.05~0.1mほどの規模である。床面の長軸線上中央よりやや北側に炉が1基検出されている。径1×0.6m、深さ0.1mの規模で、ほぼ炉全体にわたり火熱によって赤色硬化していた。中央やや南西側に小規模な炉がさらにもう1基検出され、径0.4m、深さ0.05mと小さく浅いものであったが、炉床中央部は火熱によって赤色硬化していた。大型の本来の炉とは異なった用途で用いたものだろうか。柱穴とみられるピットが3基検出され、径約0.5m、深さ約0.8mとほぼ規模を同じくし、柱間距離も2.9~3mと規則正しい正方形配列となる。柱穴の内1本は、抜取りがされたよう



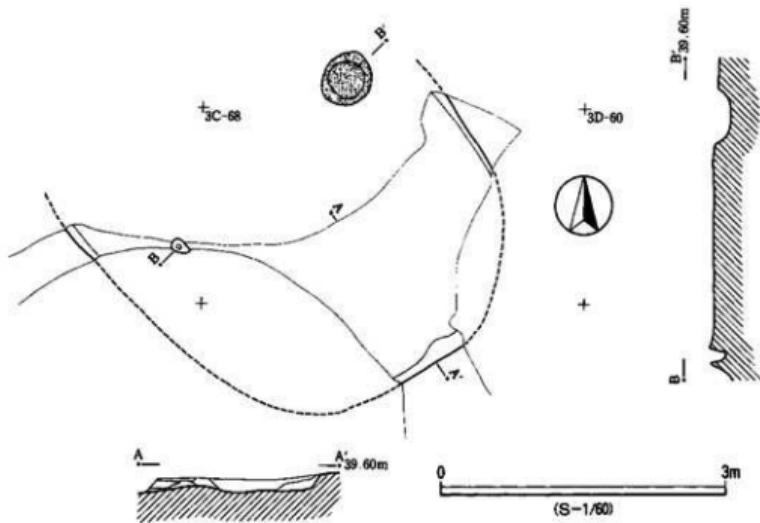
第62図 20号住居実測図



第63図 20号住居出土遺物



第64図 21号住居実測図



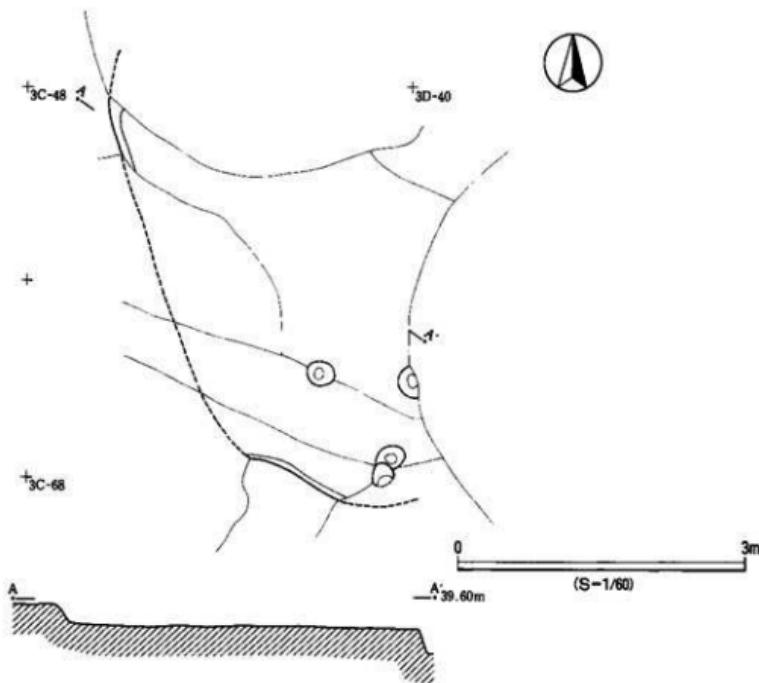
第65図 22号住居実測図

な形態の掘り方を呈している。炉の反対側の短辺には、梯子穴ピットがあり、径 0.5×0.3 m、深さ0.2mを測る。梯子穴ピット東側の壁際には、貯藏穴状ピットがあり、 0.4×0.3 m、深さ0.1mを測り、そのピット東側に接して径0.2mほどの粘土ブロックが床面にあった。加工用の粘土を置いていたものだろうか。

遺物は、北西側に比較的まとまって出土している。1は椀である。複合口縁を呈し、口唇部は無文である。外面には、LR-R L-L R 3段の単節繩文が施され、端部は繩文原体によつて押圧されている。また、2個一对の小孔が1か所あけられている。胴部及び内面は丁寧なヘラミガキが施されている。口径15cm、底径6.7cm、器高12.9cmを測る。2は壺または甕の底部である。外面はヘラナデ、内面は粗いヘラミガキが施されている。底径は7.7cmを測る。3は壺の口縁部であろう。複合口縁を呈している。4と5は椀または鉢の口縁部であろうか。4は外面は粗いヘラナデが施されている。5は複合口縁を呈し、外面はヘラナデ、内面はやや丁寧なヘラミガキが施されている。6は壺胴部である。外面はヘラミガキを施しているが、焼成が悪く、特に内面の損耗が著しい。7は鉢または椀の口縁部である。複合口縁を呈し、上からR L-L R-R L 3段の単節繩文を施し、端部は繩文原体を押圧している。8、9、10は壺口縁部片で、すべて複合口縁を呈している。8は口唇部にLRの単節繩文を施し、段下端部には繩文原体が押圧されている。9はやや受け口状を呈し、上からLR-R L 2段の単節繩文、下端部に繩文原体による押圧が施されている。また、繩文原体による押圧を施した棒状浮文が貼付されている。内面は赤彩されている。10は上部にLR単節繩文、その直下に繩文原体による押圧が認められる。なお、端部付近に小孔が1か所認められる。11、12、13は甕口縁部片である。11は2段以上の輪積痕跡を残し、口唇部には繩文原体による押圧が施されている。12、13の口唇部は交互にヘラ状工具による押圧が施され、小波状を呈している。14、15、16、17は壺胴部片で、すべて輪積痕状の段を作り、端に繩文原体による押圧がみられる。また、14、15には外面にススの付着が認められる。18は、壺胴上部片である。上下2段の文様帯からなる。上段はLR-R L 2段の単節繩文、2条のS字状結節文、下段は2条のS字状結節文、RL-L R-R L-L R 4段の単節繩文が施されている。無文部分は赤彩されている。なお、外面には擦圧痕が認められる。

(18) 21号住居(第64図、図版25)

3D-71グリッド周辺に位置する堅穴住居跡で、西側を18号住居に切られている。形態は隅のかなり丸い隅丸方形となるとみられ、調査できた一辺の最長部分で2.7mを測り、他辺もほぼ同様の長さとみられる。主軸方向は、西北西から東南東を向くものとみられる。掘込みは非常に浅く0.1m、ソフトローム層中で留まり、床面についてもほとんど踏み固められていない。壁溝はなく、炉も検出されずやや浅めのピットが4基検出された。そのうち西側の18号住居に接するもの2基は、やや形態が不明確であるがおおよそ径0.3~0.4m、深さは一様ではなく



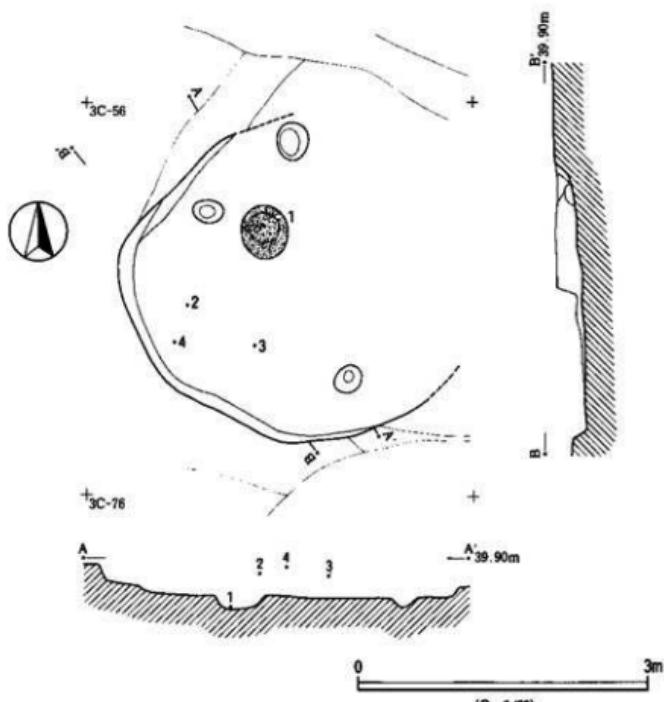
第66図 23号住居実測図

0.1~0.5mあり、ピットの用途は同一とは考えがたい。

遺物は、1点出土したが図示できるようなものはなかった。

(19) 22号住居(第65図、図版25)

3C-68グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、周囲の竪穴住居跡にすべて切られ、この群内では最も早い時期に構築されている。周囲に位置する12号住居・17号住居・18号住居のすべてによって切られている。そのため形態・概要などが知れる残った部分が少なく遺存状況は悪い。同様の状況の竪穴住居跡が隣接するが(23号住居)、それとは重複関係はないものの同時に存在できるほど離れた距離ではないので、本遺構と23号住居との間にも新旧関係が存在するはずであるが、切り合い関係にないので両者の新旧関係は不明である。周囲の遺構の合間に残されたわずかな部分から、本遺構を推し量ると長軸4mほどの長円形になるものとみられる。掘込みは確認面からの深さ0.1m、遺構の遺存が悪く掘込みが浅いために床の状況も明確にし得なかった。壁溝はないようで、12号住居の床下部分に炉が遺存しており径0.5m、深さ0.15mを測る。ただしこの炉はやや壁に近すぎるような位置である。12号住居



第67図 25号住居実測図

と17号住居とのわずかな間に小ピットが1基遺存し、径0.2m、深さ0.2mを測る。

遺物は、1点出土しているが図示できるようなものはなかった。

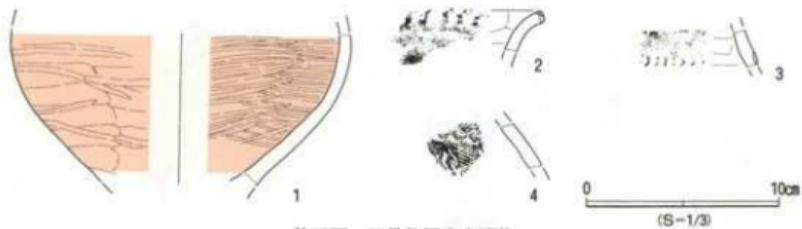
(20) 23号住居(第66図、図版26)

前述の22号住居と同様に周囲の遺構からすべて切られ非常に遺存状況の悪い竪穴住居跡である。3C-49グリッド周辺に位置し、12号住居・16号住居・18号住居・20号住居のいずれよりも古い。遺存が悪いため形態は不明で長円形になりそうな点だけを指摘する。確認面からの掘込みは0.2mほどあり、床面は踏み固めによって硬化していた。壁溝はなく、床面に小ピットが3基検出されたが用途は不明である。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

(21) 25号住居(第67図・第68図、図版26)

3C-56グリッド周辺に位置する竪穴住居跡である。12号住居に遺構の東側を切られ約半分程度しか残っていない。形態はややいびつな椭円形になるとみられ、主軸方向は北西から南東に向かって、長軸約3.4m、短軸約3mになるとみられる。掘込みはやや浅めで確認面から約0.2



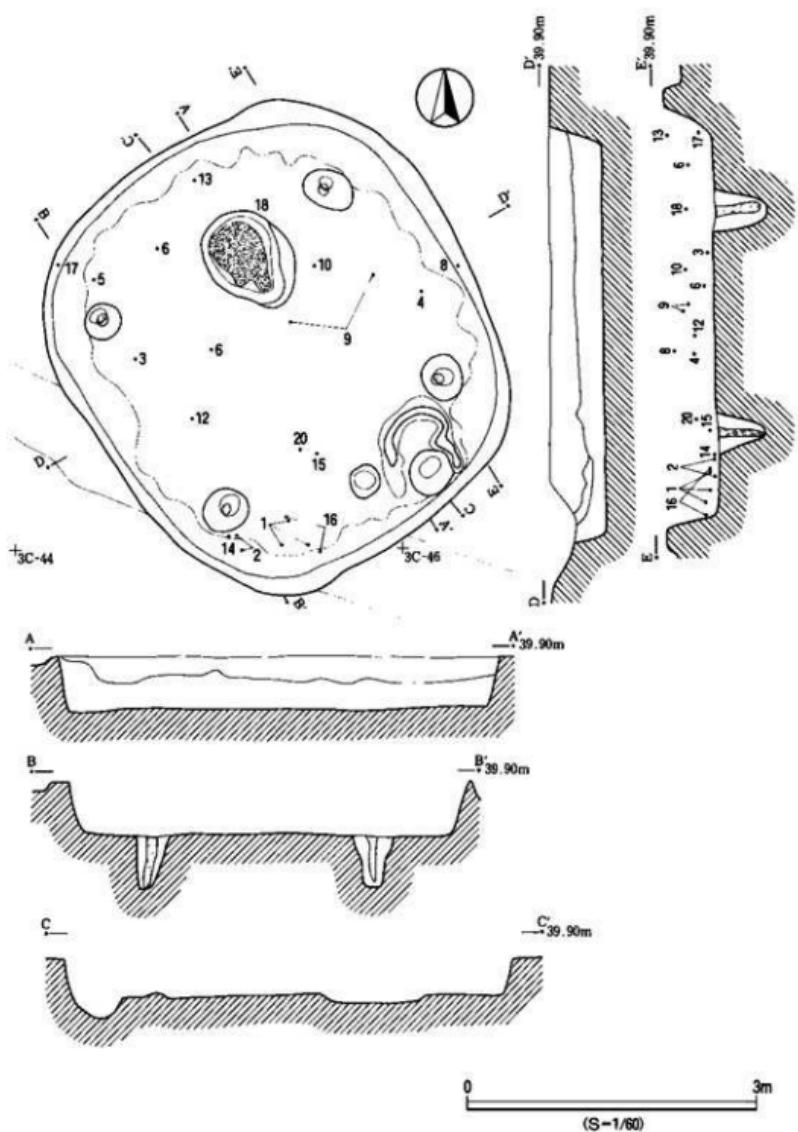
第68図 25号住居出土遺物

mの深さをもち、床面はあまりよく踏み固められていなかった。主軸方向の中央からやや北西寄りに炉が1基検出され、径0.5m、深さ0.15mの掘込みをもち炉床はあまりよく焼けていなかった。炉の北西側と、主軸の南東壁寄りにピットが各1基検出され、ともに径0.3m、深さ0.1mほどの大きさである。1・2号住居との境界近くにやや大きめのピットが1基あるがこれは1・2号住居の梯子穴ピットであろう。

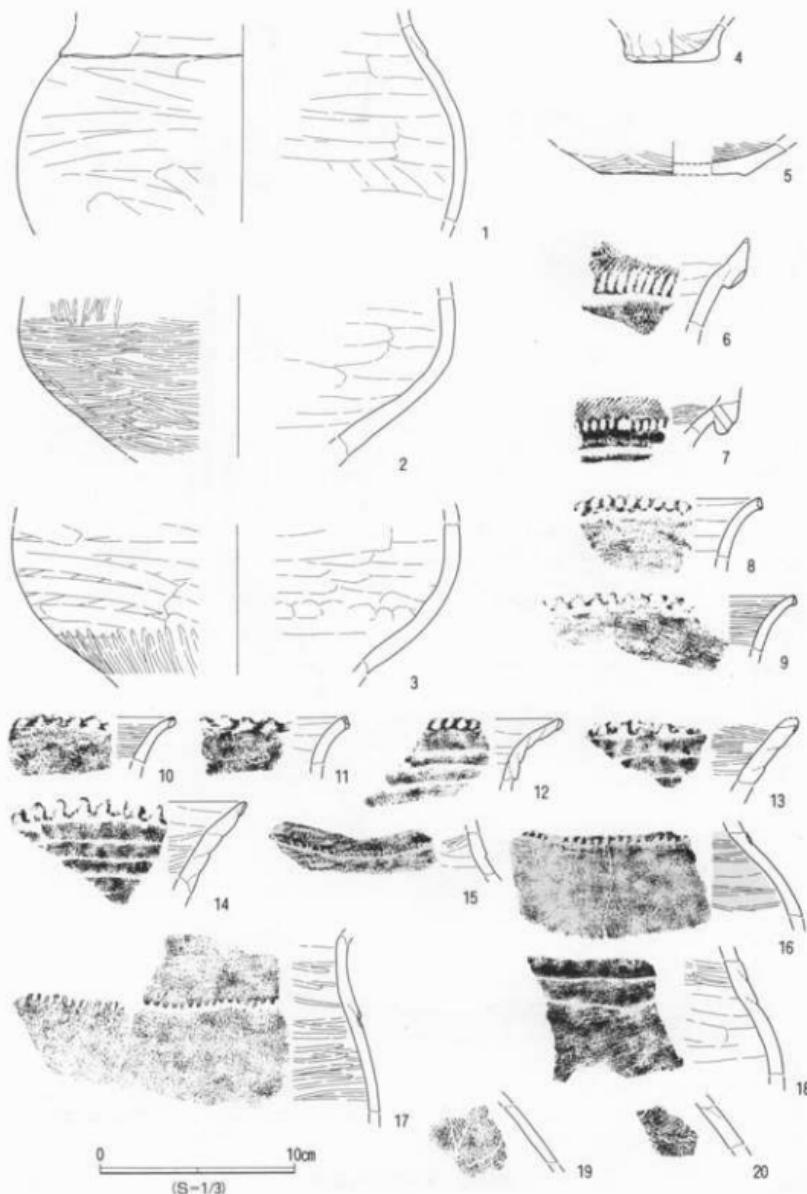
遺物は非常に少なく、図示できたものは4点のみであった。1は高壺の壺部であろう。やや球形をしており、内外面共に赤彩されている。2は甕口縁部片で、口唇部は両側から交互に繩文原体による押圧が施されている。また口唇部から外面にかけてススの付着がみられる。3は甕頸部片である。輪積痕状の段下端部に、繩文原体による押圧が施されている。4は壺胴部片であろう。L Rの単節繩文の下に2条のS字状結節文を施し、斜めに2条1単位のS字状結節文で区画した内部を単節繩文で充填している。

(22) 26号住居 (第69図・第70図・図版27・図版51)

3C-25・35グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、周囲の遺構を切って構築されている。2・8号住居・3・0号住居・3・3号住居の3軒の竪穴住居跡を切って構築されており、このブロックでは最も新しい遺構である。形態は胴張りのする隅丸方形で、長軸を北西から南東に向かって長さ4.7m、短軸は4.3mを測る。掘込みはほぼ垂直にハードローム層まで掘り込まれ、深さ0.5mを測る。床面は壁際を除いてほぼ全面が踏み固めによって硬化していた。壁溝はなく、主軸線上中心からやや北西寄りに炉が1基検出され、径1.1×0.8m、深さ0.1mと浅いが、炉床は火熱によって赤色に硬化していた。柱穴が4基検出され、ほぼ竪穴住居跡の四隅に位置し、柱間距離は主軸方向が2.3m、短軸方向が2.6mを測る長方形状の規則正しい配置を示している。柱穴の径は0.4~0.6m、深さ0.5mで、4本ともに柱痕跡が確認され、それによると柱の太さは0.1~0.12mであったとみられる。柱の周囲はきれいに固く埋め戻されており、柱を立てた跡の丁寧な埋め戻し状態が確認され、廃絶時には柱の抜取りはされていない。主軸上の炉と反対側の壁近くには梯子穴ピットがみられ、径0.3m、深さ0.2mを測る。さらにその東側には、土堤状遺構に囲まれた貯蔵穴状ピットが1基みられ、ピット径は0.4m、深さ0.2mで、壁際に掘り込まれている。そのピットの掘込みの壁際から、ピットを取り囲むようにややゆがんだコ



第69図 26号住居実測図



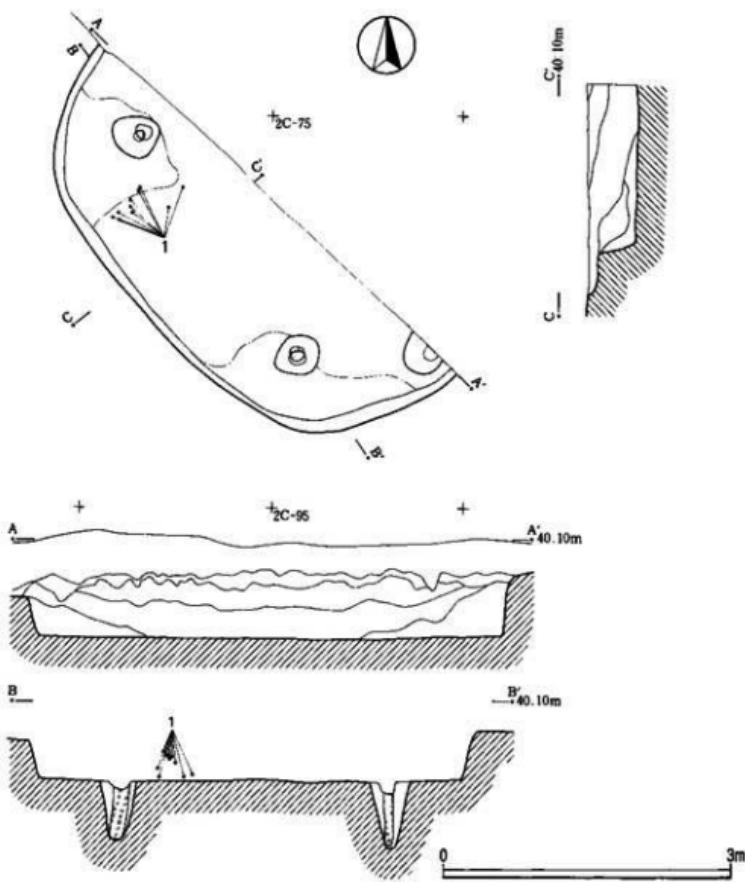
第70図 26号住居出土遺物

の字状に縦横約1mの部分に土堤状の浅い高まりがある。土堤の幅は約0.2m、高さは約0.02~0.03mと非常に低い。竪穴住居跡の内側に向かって、ピットと土堤の間には平坦な場所があり、幅0.4×0.3mほどの楕円形になっている。これらは貯蔵穴とその前面の物置場所であろうか。ただし土堤状遺構・ピット周辺での遺物の特徴的な出土状況等はなかった。

遺物は、ほぼ全面から出土しているがあまり量は多くない。1は壺胴部片である。胴部は球形をなし、最大径23.2cmを測る。胴部と頸部との境には、輪積痕状の段を形成している。また土器胎土中には多量に砂粒子を含んでいる。2、3は壺胴部片である。2は外面はヘラミガキ、内面は指ナデを施している。胎土中には、多量の長石粒等を含み、内面の損耗は著しい。最大径は22.6cmを測る。3は外面は木口状工具によるナデの後に指ナデ、内面はヘラナデが施されている。外面にはススの付着が認められ、楕圧痕がみられる。最大径は23.3cmを測る。4は小形の壺底部で、底径は4.8cmを測る。5は壺底部片である。底径は推定で7.6cmを測り、内外面共にヘラミガキを施している。6、7は壺口縁片で、すべて複合口縁を呈している。6はやや受け口状をしている。R L-L Rの単節繩文を施し、端部には繩文原体が押圧されている。7は口唇部にL Rの単節繩文を施し、折返し部中段に繩文原体による押圧が施されている。なお、2か所に小孔があけられている。8、9、10、11、12、13、14はすべて壺の口縁部片である。8、9は口唇部に繩文原体の押圧がみられる。また8は外面にススの付着が認められる。なお、9は30号住居出土遺物の2と同一個体である。10、11は口唇部に内側、外側交互に繩文原体を押圧しており、小波状を呈している。12、13、14の口唇部には繩文原体による押圧が施され、12、13は4段、14は5段の輪積痕を残している。また、この3点はすべて外面にススが付着している。15、16は椀の胴上部片であろう。15は輪積痕状の段の下端部に竹管などによる円形刺突文が施されている。16は輪積痕状の段を作り、下端部には繩文原体による押圧が施されている。また15は外面、16は内外両面が赤彩されている。17、18は壺胴部片である。17は頸部と胴部との境に輪積痕状の段を作り、下端部にはヘラ状工具による刺突が施されている。18は球形の胴部になるものと思われ、頸部には2段以上の輪積痕が残されている。また外面にはススの付着が認められる。19、20は壺胴部片である。19はR L-L R単節繩文と2条のS字状結節文を施したあと、山形沈線を施し、沈線間を交互に磨り消している。20は、L R単節繩文と2条のS字状結節文を施し、上下に沈線を施してある。また無文部分は赤彩されている。

(23) 27号住居(第71図・第72図、図版27・図版51)

2C-74グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、遺構の北東側約半分は調査区外となっており調査できなかった。調査できた範囲で判断すると、主軸は北西から南東に向けるとみられ、調査部分の長さ5.2m、幅1.8mである。形態は多分胴張りのする隅丸方形とみられる。掘込みは、ハードローム層に達し確認面からの深さ0.4~0.6mほどである。床面に壁溝はなく、柱穴の外側以外のはば全面にわたり踏み固めによって硬化していた。炉は検出されず多分調査区外

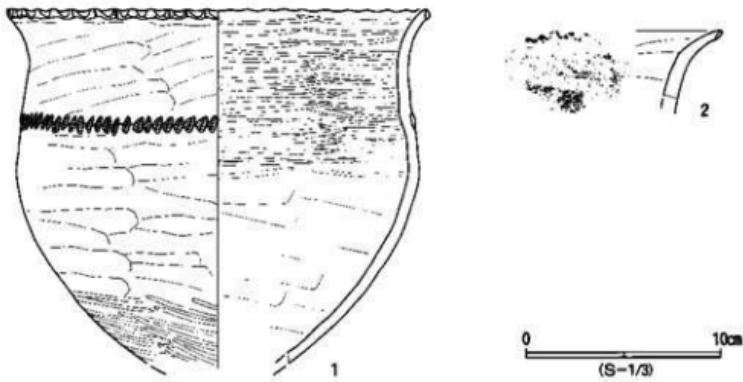


第71図 27号住居実測図

に位置するものとみられる。柱穴は2基検出され、径約0.5m、深さ約0.6mを測り、それぞれのほぼ中央に柱痕跡が確認された。柱痕跡からは柱の太さは0.12mとみられる。南東壁際には梯子穴ピットが検出されたがほぼ半分しか調査できず、径0.4mほどになるものとみられる。

遺物は、1は壺である。口唇部に刻みが施され、小波状を呈している。胴部との境には輪横痕状の段を形成し、その上に縄文原体による押圧が施されている。口径22.0cm、胴部最大径21.0cmを測る。2も1と同様な壺の口縁部片で口縁部はやや開きぎみである。口唇部に刻みが施され小波状を呈している。

(24) 28号住居 (第73図・第74図、図版28)



第72図 27号住居出土遺物

3C-43・44グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、遺構の北側は30号住居に切られ、中央は16号土坑によって切られている。さらに加えて遺構の掘込みが非常に浅く、確認面からの掘込みがほとんど認められないため(5cm以下)、遺構の遺存状況は極めて悪い。一部検出された壁の状態から推定すると、主軸を北西から南東へ向ける長円形状になるものとみられる。掘込みは非常に浅くソフトローム層中に留まり、確認面から5cm以下の高さで、北西側の長さ約4mにわたって壁の立ち上がりが確認された。床面は16号土坑を中心にして4×3mの範囲にわたって踏み固められた硬質面が確認されているが、形態の判断まではできなかった。炉・ピット等は検出されなかった。

遺物は小片で、図示できるものは2点のみであった。1は甕の頸部で、3段の輪積痕を残している。また外面にはスヌの付着が認められる。2は甕の底部である。復元底径は6.4cmを測る。外面にはスヌが付着している。

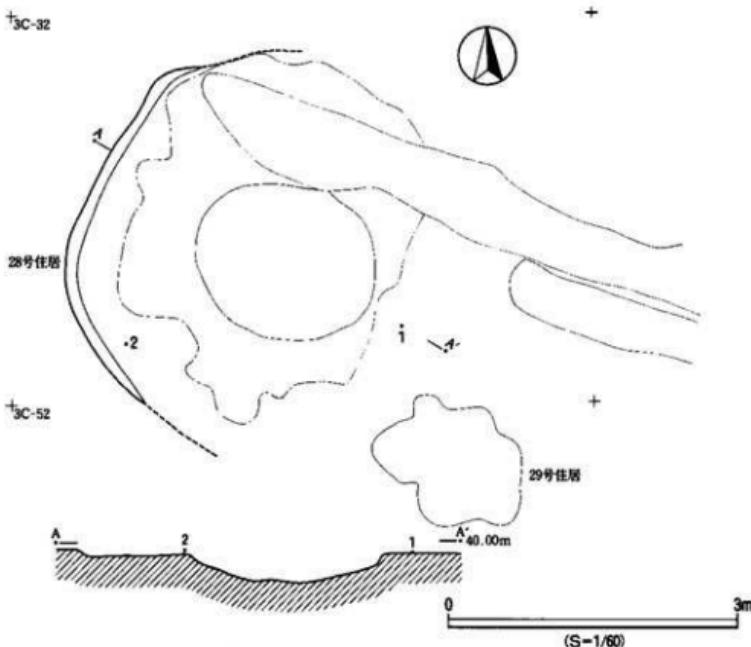
(25) 29号住居 (第73図、図版28)

3C-54周辺に位置する竪穴住居跡とみられるがその実体は不明確である。28号住居のすぐ東側に、踏み固められたように周囲よりやや硬質の床面状の平坦面が、1.6×1.2mの範囲にわたって認められたこと、28号住居の想定範囲よりやや外側まで広がっていることから竪穴住居跡の存在を認定した。しかし硬質面の高さが28号住居とほぼ同じであることや、広がりが非常に狭いことから、28号住居内に含まれる可能性もある。

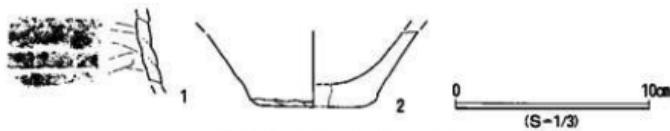
遺物は出土しなかった。

(26) 30号住居 (第75図・第76図)

3C-23・33グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、遺構の東側を26号住居に切られ、逆に南側の28号住居を切って構築されている。遺構の遺存状況が悪いため、形態は不明である。確認できたのは、南西側の壁とみられる立ち上がりの一部と、踏み固めによるとみられる硬質



第73図 28号住居・29号住居実測図



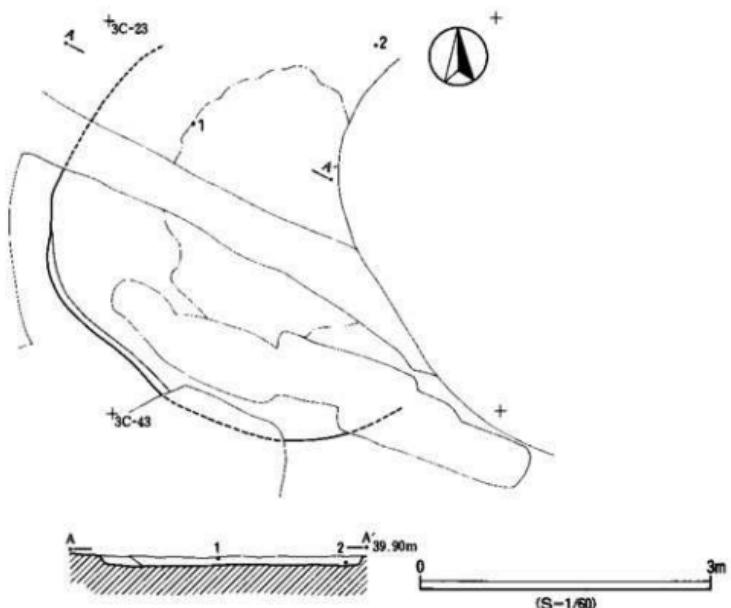
第74図 28号住居出土遺物

面だけである。掘込みは非常に浅く、確認面からの深さ0.05mほどでソフトローム層中に留まっている。2.8×2mの範囲にわたって踏み固めによるとみられる硬質面がみられ、床面であると判断した。床面には炉、柱穴等は検出されなかった。

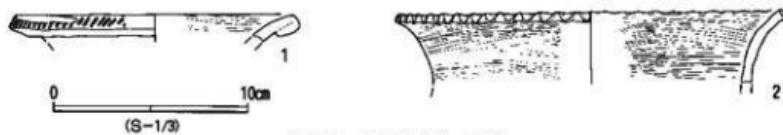
遺物は、ごく少量検出されているが図示できるものは2点のみであった。1は壺口縁部片で、復元口径は14.3cmを測る。複合口縁を呈し、口唇部にはL R 単節繩文が施文されている。2は壺口縁部片で、復元口径は19.9cmを測る。口唇部には繩文原体が押圧されている。26号住居出土遺物10と同一個体である。

(27) 31号住居(第77図・第78図、図版28)

1A-99・2A-09グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、北側は現道部分となり遺存が非常に悪かった。形態は隅のかなり丸い隅丸方形で、長軸4.6m、短軸4.4mとほぼ同じである。



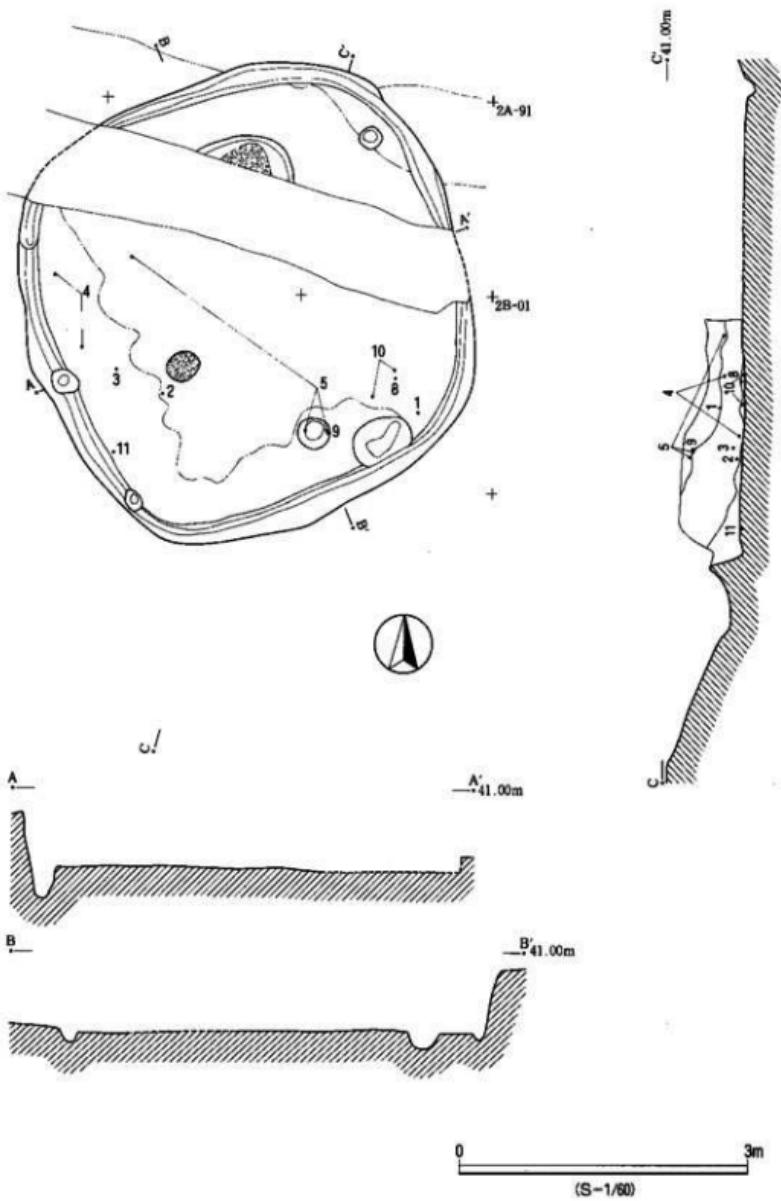
第75図 30号住居実測図



第76図 30号住居出土遺物

長軸は北北西から南南東に向く方向とみられ、長軸の中央からやや北寄りに擾乱によって破壊された炉が検出され、 $1 \times 0.4\text{m}$ の範囲が調査できたが、深さは 0.1m ほどしか残っていない。さらに中央からやや西寄りに炉とみられる火熱を受けた窪みが認められる。遺構の掘込みはしっかりしておりハードローム層に達し、確認面からの深さは最大 0.6m と深い。床面は中央部が踏み固めによって硬化しており、壁際には壁溝が全周する。壁溝の幅 0.2m 、深さ $0.05\text{~}0.1\text{m}$ と浅い。西側壁溝中には小ビットが3か所認められ壁柱穴等の用途が考えられよう。また東側の壁近くにビットが1基検出されており径 0.2m 、深さ 0.1m の小規模なものである。南側には壁からやや離たって梯子穴ビットが1基所在し、径 0.4m 、深さ 0.2m を測る。その東側の壁に接して貯蔵穴状ビットがあり、径 $0.6 \times 0.4\text{m}$ 、深さ 0.15m ほどを測る。本遺構は、先に説明した20号住居との類似性が強く感じられ、建物の方向、形態、規模、壁溝の有無、諸ビットの状況（柱穴は31号では検出されていないが）等が類似している。

遺物は、遺構南西側から若干出土している。1は小型の鉢であろう。橢円形を呈し、口唇部



第77図 31号住居実測図

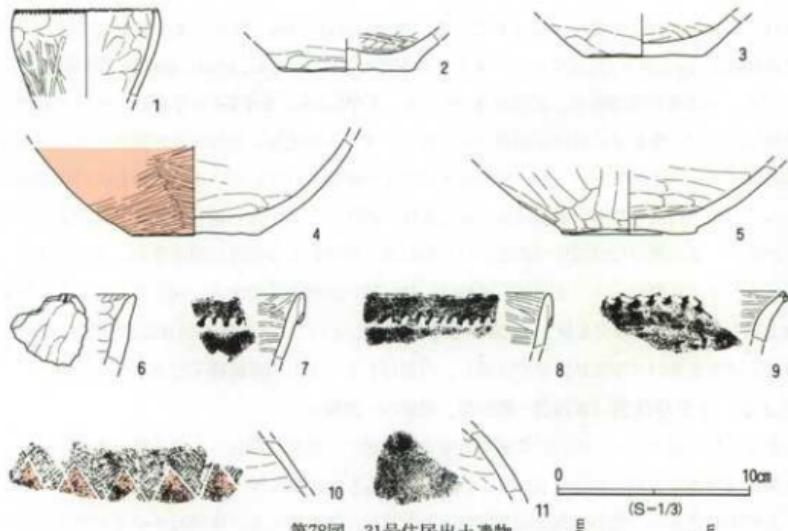
にはヘラ状工具による押圧が施されている。復元口径は7.4cmである。2は壺底部である。復元底径は7.2cmを測る。外面全体にススの付着が認められる。なお、外面に櫛圧痕が確認できる。3、4、5は壺底部である。底径は3が6.2cm、4が6.5cm、5が7.0cmを測る。すべて底面の磨耗は少ない。なお4は外面が赤彩されており、3、5の底面には櫛圧痕が認められる。6は鉢のミニチュア土器であろうか。内外面共に指ナデ整形されている。7、8は鉢の口縁部片であろう。複合口縁を呈し、端部には、繩文原体が押圧されている。両者は同一個体である可能性が高い。9は壺の口縁部片である。口唇部は繩文原体により交互に押圧され、小波状を呈している。また外側は、ススが付着している。10、11は壺胴部片である。10はR L - L Rの単節繩文施文後、山形沈線文を施し、沈線外側を磨り消している。また無文部分は赤彩されている。11は上下を2条のS字状結節文で区画し、内部はL R - R Lの単節繩文で充填している。

(28) 32号住居(第79図・第80図・図版29・図版51)

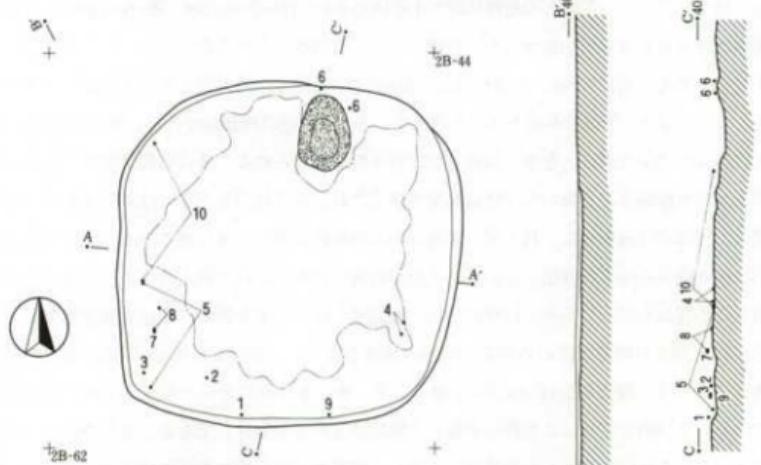
2B-43・53グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、形態は胴張りのする隅丸方形である。主軸をほぼ南北方向に向け、径3.5mを測る。掘込みは非常に浅く0.05mに満たず、ソフトローム層中で留まり、壁の立ち上がりはほとんど検出できなかった。床面は中央部が踏み固めによって硬化していた。主軸上の北側に炉が1基検出され、径0.8×0.5m、掘込みは非常に浅く、炉床面はほとんど焼けていなかった。壁溝、ピット等は検出されなかった。

1は鉢である。底径5.8cm、口径15.1cm、器高5.2cmを測る。内外面ともに上部はヘラケズリのあとヘラミガキ、下部はヘラケズリを施している。2は壺口縁部片である。複合口縁を呈し、復元口径は21.0cmを測る。なお、口縁外面に櫛圧痕が認められる。3は壺胴下部片である。上部にR Lの単節繩文、3条のS字状結節文が施文され、胴下部の無文部分は赤彩されている。胴部最大径は33.8cmを測る。10と同一個体である可能性が高い。4は壺である。頸部と胴部との境に輪積痕状の段を作り出している。また口唇部には交互にヘラ状工具による押圧が施されており、小波状を呈している。口径17.9cm、胴部最大径17.0cmを測る。5は壺胴下部である。上部に繩文施文の痕跡が認められる。内面の剥落が著しい。底径は6.0cmを測る。6は台付壺の脚部であろう。脚部復元径は9.9cmを測る。7、8、9は壺口縁部片ですべて複合口縁を呈している。7は繩文原体による押圧を施した棒状浮文が2本貼付してある。また内面は、赤彩されている。8は口唇部にL R 単節繩文を施し、端部や上面に繩文原体が押圧されている。9は口唇部に繩文原体による押圧が認められる。10は壺胴部片で、L R - R L 2段の単節繩文と3条のS字状結節文を施文し、縱方向に3本、横方向に1本の沈線が施され、一部に繩文が磨り消されている。なお無文部分は、赤彩されている。3と同一個体である可能性が高い。11は高壺の脚部で底径6.3cmを測る。脚部に3か所の穿孔がみられる。12はミニチュアの碗で口径5.8cm、高さ2.1cmを測る。器厚は2~3mm程度と薄い。

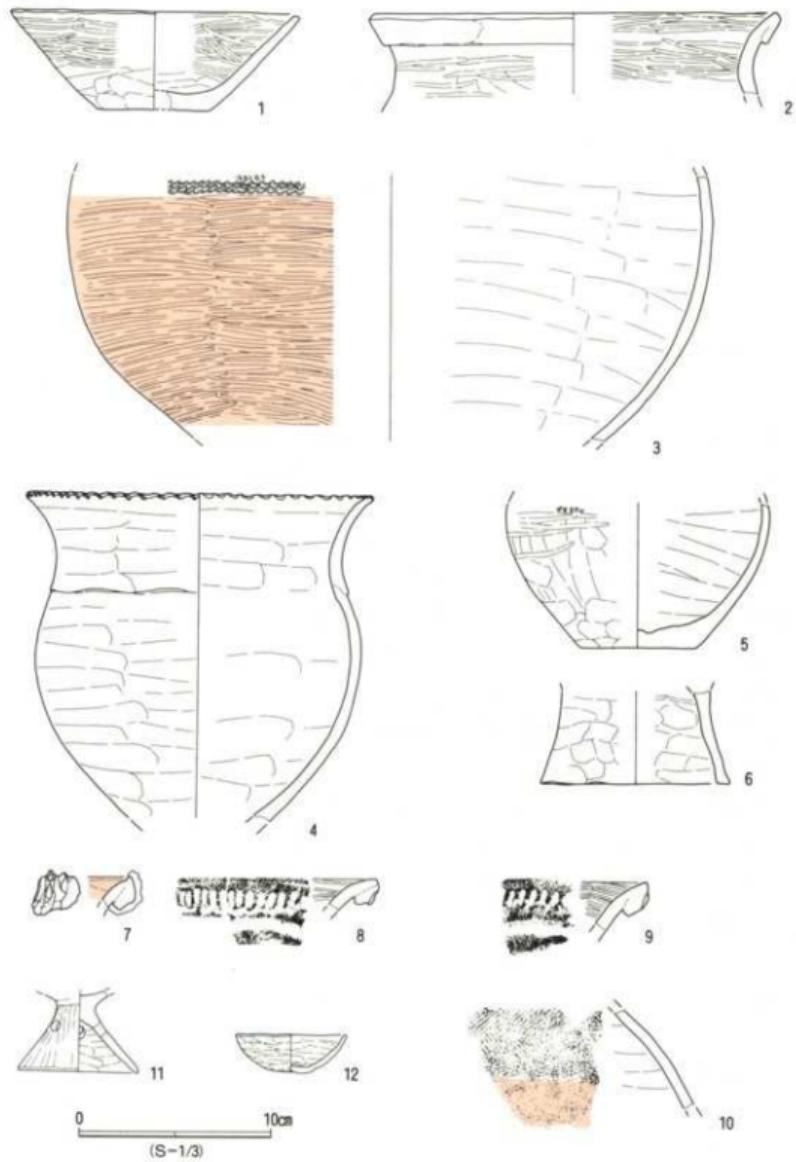
(29) 33号住居(第81図)



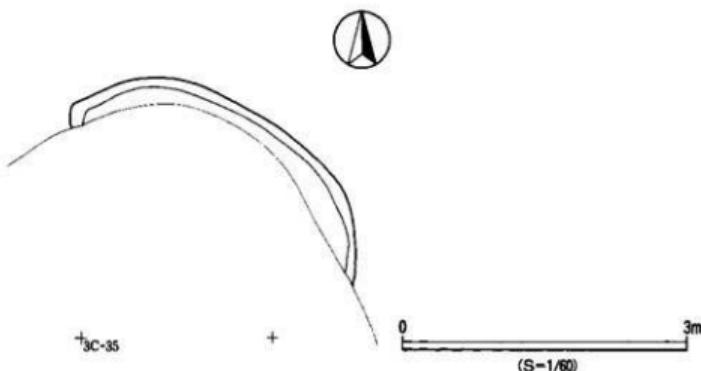
第78図 31号住居出土遺物



第79図 32号住居実測図 (S=1/60)



第80図 32号住居出土遺物



第81図 33号住居実測図

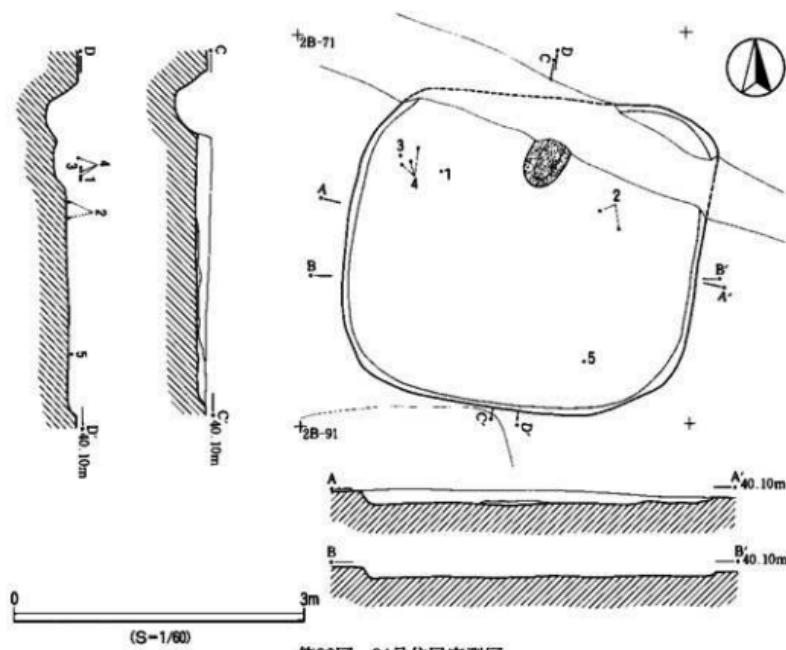
3 C - 15 グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、遺構の大部分を 2 6 号住居によって切られてしまつて、ほとんど遺存していない。2 6 号住居の北側に外側から被さるように、長さ約 4 m にわたつて 0.3 m ほどの幅で広がるように位置し、小型の隅丸方形になるとみられる。規模は不明である。掘込みはソフトローム層中に留まり、深さ 0.1 m と浅く、床面の踏み固め等は確認できなかつた。炉、ピット等も検出できなかつた。

遺物は少量検出されているが、図示できるようなものはなかつた。

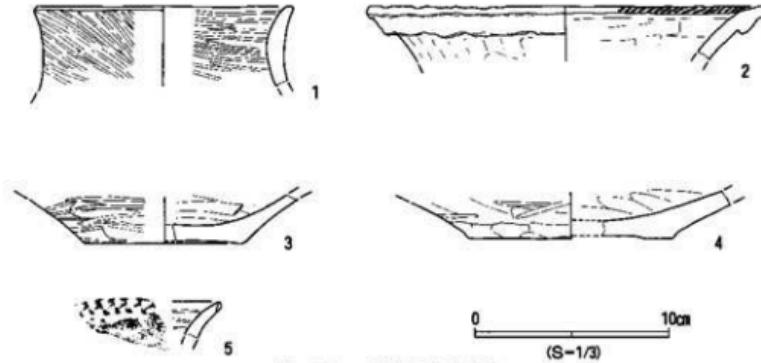
(30) 3 4 号住居（第82図・第83図、図版29）

2 B - 81・82 グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、遺構の北側の一部を溝 6 に切られている。形態は隅丸の長方形で長軸をほぼ東西方向に向けている。長軸 3.6 m、短軸 3.2 m を測る。確認面からの掘込みは 0.15 m ほどで浅く、ソフトローム層中で留まっている。床面はほぼ全面が踏み固めによって硬化し、壁溝は存在しなかつた。床面中央から北側に炉が 1 基検出されているが北端を溝 6 によって切られている。遺存長 0.6 × 0.4 m で、深さ約 0.1 m と浅く、炉床はあまりよく焼けず硬化もしていなかつた。ピット等は検出されなかつた。

遺物は、図示できるものが 5 点であった。1 は小型壺の口縁部である。やや直口ぎみに立ち上がっており、内外に丁寧なミガキが施されている。また内外面ともに全面赤彩されている。復元口径は 13.2 cm を測る。3 5 号住居出土遺物 5 と接合する。2 は壺口縁部片である。複合口縁を呈しており、口唇部には L R の単節繩文が施文されている。なお、口唇部は二次焼成を受けたために、著しく器面が剥落している。復元口径は 20.2 cm を測る。3、4 は壺底部片である。两者とも、底部の磨耗はほとんどみられない。復元底径は、3 は 8.1 cm、4 は 10.6 cm を測る。5 は壺口縁部片である。口唇部には繩文原体による押圧が施されている。また外面にはススの



第82図 34号住居実測図

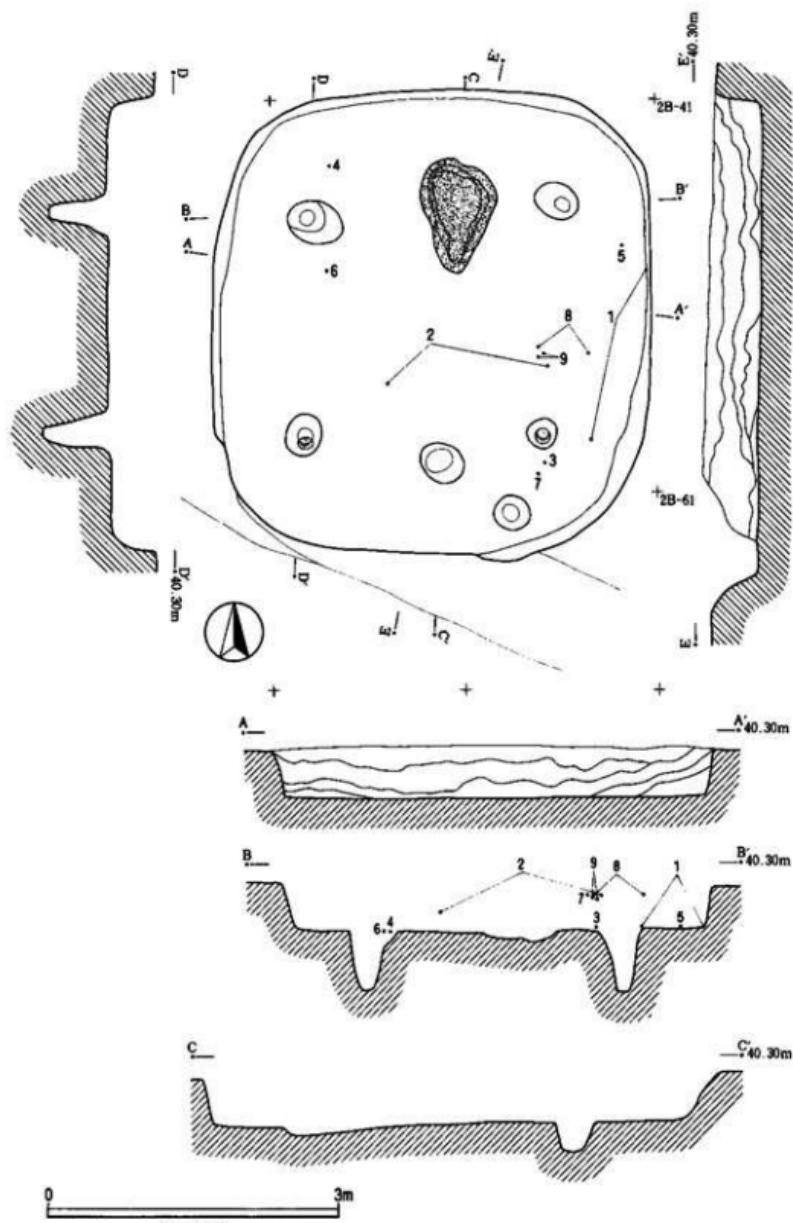


第83図 34号住居出土遺物

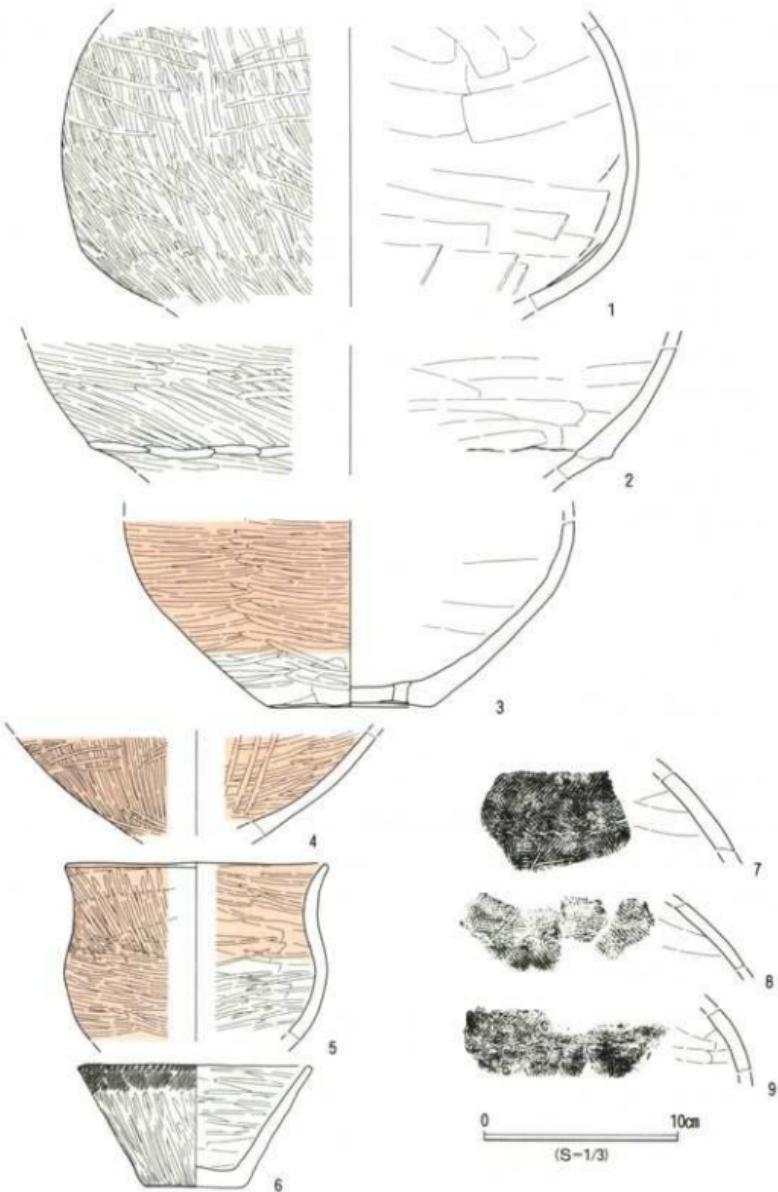
付着が認められる。

(31) 35号住居 (第84図・第85図、図版30・図版51・図版52)

2 A-49・59グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、南西端を溝6に切られている。形態は、主軸をほぼ南北に向ける隅丸方形で主軸長5m、短軸長4.5mを測る。掘込みはほぼ垂直にしつかりしており、確認面からの深さは0.55mを測る。主軸上の中央北側寄りに炉が検出され径



第84図 35号住居実測図



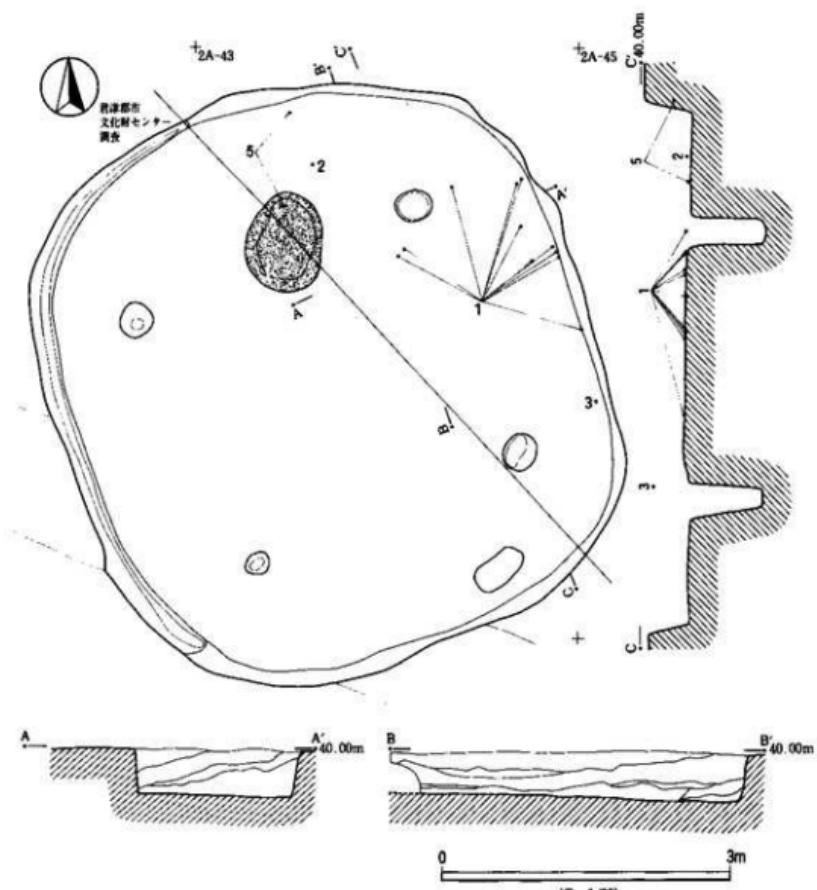
第85図 35号住居出土遺物

1.2×0.8m、深さは非常に浅い。炉床はよく焼けて赤色硬化していた。床面には壁溝は存在せず、柱穴が4基検出されている。規則正しい配列を示し、柱間距離東西方向2.5~2.6m、南北方向2.2~2.3mを測る。規模は径0.4~0.5m、深さ約0.6mである。南側柱穴は、柱痕跡が確認され、柱の直径約0.15mを測る。南側には壁に近いところに径0.5m、深さ0.3mの梯子穴ピットがある。さらに東側の壁近くに貯蔵穴ピットがあり、径0.4m、深さ0.25mを測る。

遺物は1、2は壺胴下部片である。1は胴部最大径が下部にありやや下膨れ状を呈している。外面はミガキ、内面はナデ整形を行っている。胴部最大径は29.9cmを測る。2は胴下部に輪積み痕を残す段が形成されている。外面はミガキ、内面はナデ整形を行い、胎土には長石粒、石英粒を多く含んでいる。3は壺胴下半部である。底径は8.5cmを測り、底面には焼成後の穿孔が1か所認められる。外面はミガキ、内面はナデ整形を施し、外面上部は赤彩されている。4は鉢胴部片であろう。内外面ともに丁寧なミガキが施され、赤彩されている。5は小形壺である。口縁部は、やや直口ぎみに立ち上がり、胴部は球形に近い形状になるものと思われる。内外面ともに丁寧なヘラミガキが施され、外面は全面、内面は頸部まで赤彩されている。口径は13.2cm、胴部最大径は13.5cmを測る。なお、3・4号住居出土遺物1と接合する。6は小形の鉢である。口唇部には、L Rの単節繩文、口縁部にもL R単節繩文が施されている。内外面ともに丁寧なヘラナデが施されている。なお、内面2か所、外面に2か所櫛圧痕が認められる。口径11.5cm、底径5.1cm、器高6.2cmを測る。7、8、9は壺胴部片である。7は上からR L - L R - R L 3段の単節繩文の下に2条のS字状結節文が施されている。下部には沈線で区切られた中を単節繩文で充填し、2条のS字状結節文の下に、R L - L Rの単節繩文が施文されている。また、この繩文上には沈線山形文が施文されている。9は上部にL R単節繩文、2条のS字状結節文が施文されている。

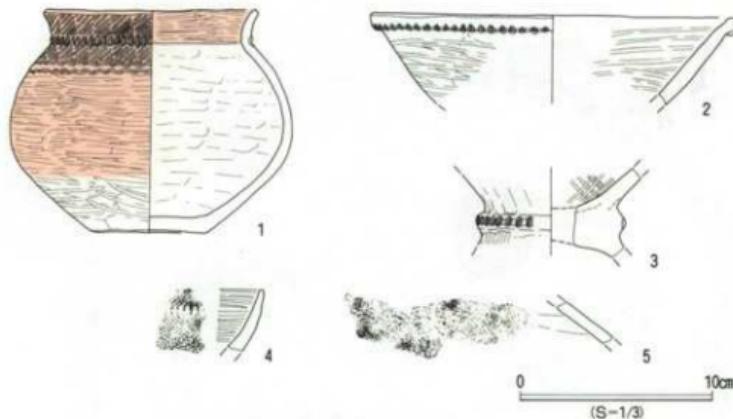
(32) 36号住居(第86図・第87図、図版30・図版52)

2A-43・54グリッド周辺に位置する堅穴住居跡で、遺構の南西半分は君津都市センターの調査区にかかっている。調査時期の違いにより当センターの調査後に君津都市センターが本遺構を調査し、25号住居址として報告されている。ここでは両者の成果をもとに復元し、全体像について説明していく。形態は胴張りの隅丸方形(君津都市センター「文脇遺跡」報文では小判形と表現)で、長軸6m、短軸5.8mを測り、主軸は北北西から南南東へ向く。掘込みはしっかりとおり、深さは0.4~0.6mを測りハードローム層に達している。床面は踏み固めによってほぼ全面が硬化しており、壁溝が北から南西にかけて長さ約6mにわたって存在する。壁溝の幅0.2m、深さは0.1mほどである。炉は両者の調査で分断されたが、径0.9×0.8m、深さ0.1mを測り、炉床は火熱を受けて赤色硬化していた。柱穴は計4基検出され、ともに径0.3~0.4m、深さ0.6~0.7mを測る。柱間距離は東西方向3.1~3.2m、南北方向2.7~2.8mである。床面南側壁寄りには貯蔵穴が検出され、径0.56×0.3m、深さ0.15~0.2mを測る。

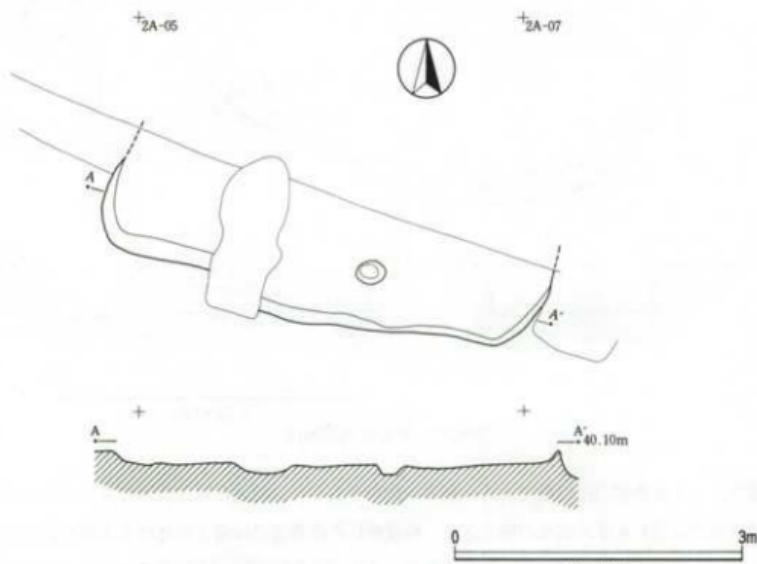


第86図 36号住居実測図

遺物は、1は小形の広口壺である。胴部は球形をなし、口縁部は直口ぎみに立ち上がっている。口縁部にはL R 単節縄文が施され、輪積痕状の段端部には縄文原体による押圧が施されている。またこの段下には、L R の単節縄文、2条のS字状結節文が施文されている。外面は胴部下位まで、内面は口頸部まで赤彩されている。口径10.7cm、底径6.1cm、器高11.6cmを測る。2は高環の壺部であろう。複合口縁を呈し、端部には縄文原体による押圧が施されている。口径は18.6cmである。3は高環のくびれ部である。中央に隆帯を作り、上面を縄文原体によって押圧している。また、脚部欠損部分は磨耗しており、脚欠損後の使用を考えられる。4は鉢口縁部片であろう。口唇部近くにL R 単節縄文を施文し、その下に縄文原体を押圧している。さ



第87図 36号住居出土遺物



第88図 37号住居実測図

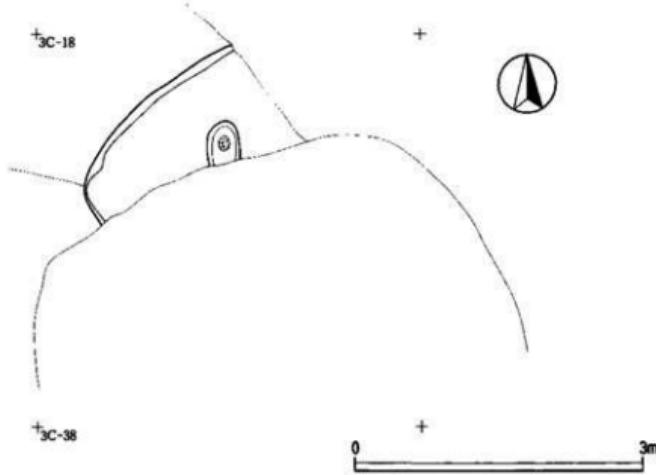
らにその下には、RL-LR 単節縄文、2条のS字状結節文が施文されている。5は壺胴上部片である。2条のS字状結節文、LR-RL 単節縄文が施文されている。

(33) 37号住居（第88図・第89図、図版31）

2A-15・16グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、北側を溝16に切られ半分以上を失っ



第89図 37号住居出土遺物



第90図 41号住居実測図

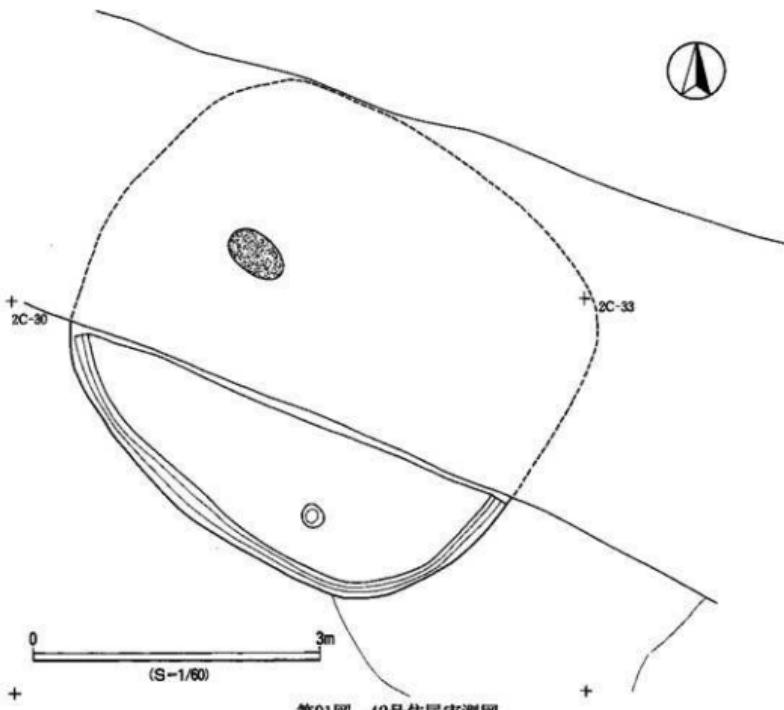
ている。形態は南側の辺をみると隅丸方形になりそうである。東西方向長4.7m、南北調査長1.4mを測る。掘込みはソフトローム層中に留まり、深さ0.15mを測る。床面の踏み固めは少なく硬化の度合いも低い。壁溝、炉はなく、南壁の中央近くにピットが1基検出されている。径0.3m、深さ0.1mを測り用途は不明である。

遺物は、1は壺口縁部片である。複合口縁を呈している。2は鉢または椀の口縁部片である。複合口縁を呈し、R L - L R 単節繩文を施文し、端部には繩文原体が押圧されている。

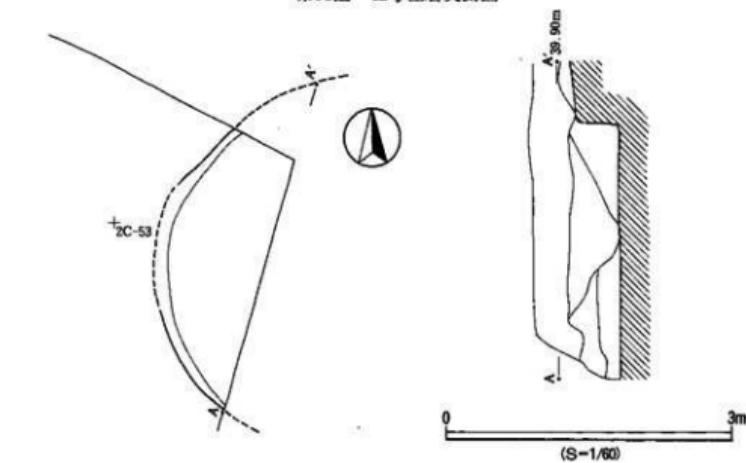
(34) 41号住居 (第90図、図版31)

3C-18・19グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、南側は20号住居に切られ、北側は調査区外となつてほとんど調査できなかった。調査できた部分は遺構のごく一部分である。主軸を北西から南東方向へ向け、北西側の1辺のみが遺存している。それからみると形態は隅丸方形となるようで、1辺が2~3m前後であろう。掘込みは浅く0.1mほどで、床面はソフトローム層中で留まり、床面の踏み固めは少ない。20号住居に南側を切られた炉があり、調査できた範囲は0.5×0.3mで、深さ0.1mを測る。炉床はあまり焼けていなかった。床面には柱穴、ピット等は検出されなかった。

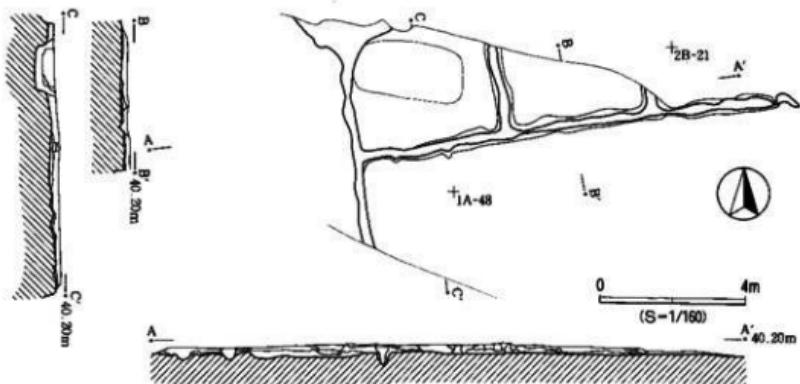
遺物は、図示できるような遺物は出土しなかった。



第91図 42号住居実測図



第92図 43号住居実測図



第93図 あぜ状遺構実測図

(35) 42号住居 (第91図)

2C-31・32グリッド周辺に位置する竪穴住居跡である。北側は現道に切られて遺存せず遺構の大半は調査できていない。形態は隅丸方形で、長軸約5m、短軸約4m位の規模になろう。掘込みはしっかりとしており、ハードローム層に及び深さ約0.5mを測る。床面は踏み固められ硬化し、壁溝が調査範囲中を全周する。壁溝の幅0.2m、深さ0.05mである。炉は現道の部分にかろうじて残り、径0.7×0.4mの規模で炉床の赤色硬化が確認された。南西端部にピットが1基検出され、径0.25m、深さ0.5mほどである。

遺物は少量出土しているが、図示できるようなものは出土しなかった。

(36) 43号住居 (第92図)

本遺構も前述の42号住居と同様に現道によって切られていた竪穴住居跡である。2C-43グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で上部を溝16に切られ東側は調査範囲外となっている。形態は隅丸方形になるものとみられる。掘込みはしっかりとしており、深さ約0.4mである。床面には壁溝、炉、ピット等は検出されなかった。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

(37) あぜ状遺構 (第93図、図版32)

2A-36グリッドから2B-22グリッド周辺に位置する遺構である。畑のあぜのように小さな土堤状の高まりがほぼ東西方向に15m続き、西端では直交して南北方向に走り8mほどのびる。東西方向の途中では約5mごとにほぼ直交して北へのびている。このあぜ状遺構は、20号土坑によって切られ、それ以前の時期のものとみられる。そのためここで取り上げて説明を加えた。このあぜ状の区画は幅約0.5m、高さ0.2mほどの高さで周囲より高く踏み固められている。北端は溝16によって切られ、南端は溝6によって切られ、さらに東端も溝16によって切られている。この土堤状の高まりによって周囲が区画され、あぜ道として機能していたも

のと思われる。あぜ以外の覆土はやや柔らかく地山がやや波打つように耕作されているような状況が観察されていることからも、本遺構は竪穴住居跡周辺の小規模な畠といった機能を果たしていたと思われる。

4. 古墳時代

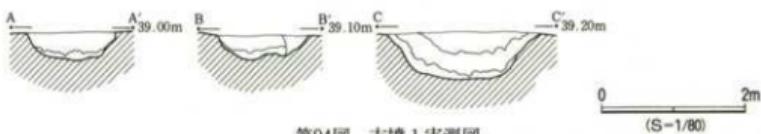
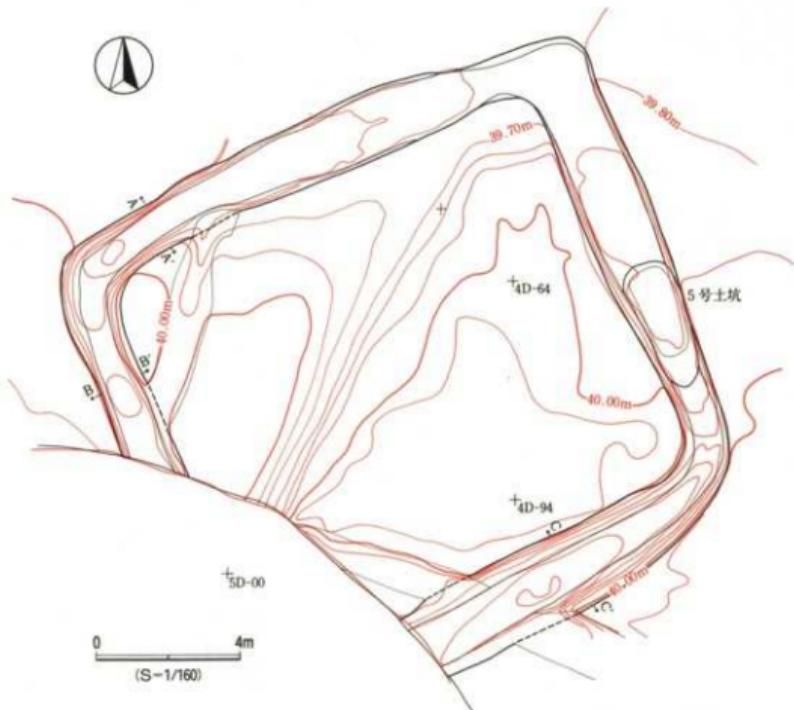
弥生時代でほとんどの竪穴住居跡を取り上げたのでここで取り上げる遺構数は非常に少ない。ただし、発掘調査時点で弥生時代とした方形周溝墓（遺構番号 溝11、君津都市センター調査033号住居址）は、周溝内出土土器から古墳時代前期の方墳とみる方が妥当と判断されたので、本節の古墳時代の遺構として取り上げた。また検出時に注目を集めた小銅鐸を出土した14号土坑（土坑墓）は、今までに古墳時代前期として紹介されてきている。その時期決定については、君津市大井戸八木遺跡からの小銅鐸出土例を参考にして「文脇遺跡」の報文中で、本遺跡小銅鐸出土遺構について遺構の帰属時期の再検討の必要性について触れられているが、ここでは今まで言われてきている古墳時代の遺物として取り上げることとする。

（1）方墳1（調査時遺構番号—溝11）（第94図～第97図、図版33・図版34・図版52）

4C・4Dグリッド地区に位置する方墳である。君津都市センターの調査でごく一部が調査区の端にかかり調査されたが、当センターの調査区で残りの部分の調査を行い、方形周溝墓として調査を終了した。その後、周溝内の遺物の検討の結果、古墳時代前期の良好な土器を周溝底部から出土していることから古墳時代前期の方墳としてここに報告する。

本遺構は、方形に周溝を巡らす古墳である。調査着手以前には墳丘盛土等の痕跡は全くなく、地表面は周囲と同様に平坦であった。しかし、通常の古墳にみられるような立派な盛土があったかどうかは不明であるが、構築時には周溝内の排土を内側に積み上げた程度の低い盛土はあったものと考えたい。遺構の南西端は調査区外となり、君津都市センター調査分との間に調査の空白ができてしまった。また、遺構の上部を溝3、溝7、溝8が横切って掘り込まれている。一方、本遺構は13号住居・14号住居を切って構築されている。

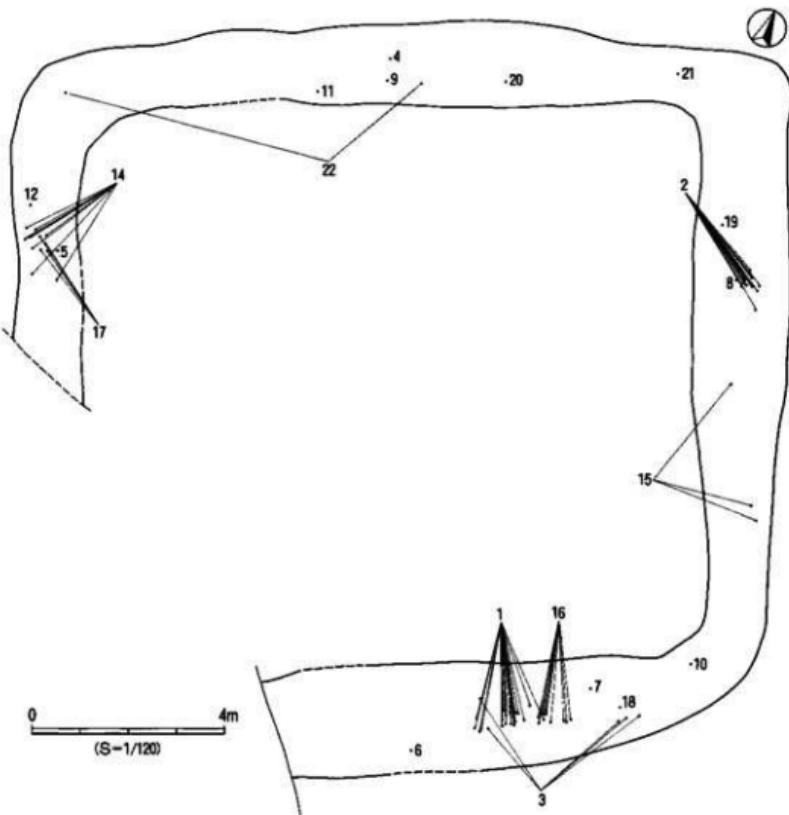
主軸は北北西～南南東に向くものとみられ、他の遺構の方向性と共通する。各時代を通じての土地利用の自然的・人為的な何らかの規制があったのだろうか。主軸方向中央部の周溝上端の外縁間の長さは15.6m、直交する軸方向の外縁間の長さは16.3m、周溝上端の内縁間の長さは主軸方向で12.6m、直交軸方向で12.9mと比較的規則正しい正方形に近い平面形を示す。各辺の中央で周溝の幅をみると、北西辺は1.8m、北東辺は1.9m、南東辺は2.2m、南西辺は調査区外のため不明である。幅は各辺とも中央部が広くコーナーに近づくにつれてその幅を減じ、コーナー部が最も狭くなっている。北西のコーナー部の幅は1.8m、北東部は2.2m、南東部は1.3mとなっている。



第94図 方墳 1 実測図

周溝の掘込みは、ほぼ逆台形を呈し各辺の中央部が最も深く、コーナー部に至るにつれてその深さを減じている。最も深い部分で約0.6m、浅い部分では約0.2mの深さの掘込みとなっている。周溝内には掘り残し等によるブリッジ、大きな段差等はみられず、ほぼ平坦な底面であった。覆土の状態は、下層はローム粒を少し含む褐色土、上層は黒色土が主体で、自然埋没の状態であった。周溝に囲まれた内側部分には、同時期の遺構はなく後世の溝が走るのみであった。土坑、主体部等の施設の存在は確認できなかった。本来の主体部に当たる埋葬施設は、周溝に囲まれた内側の低平な盛土内に掘り込まれた土坑内への埋葬だったとみられる。

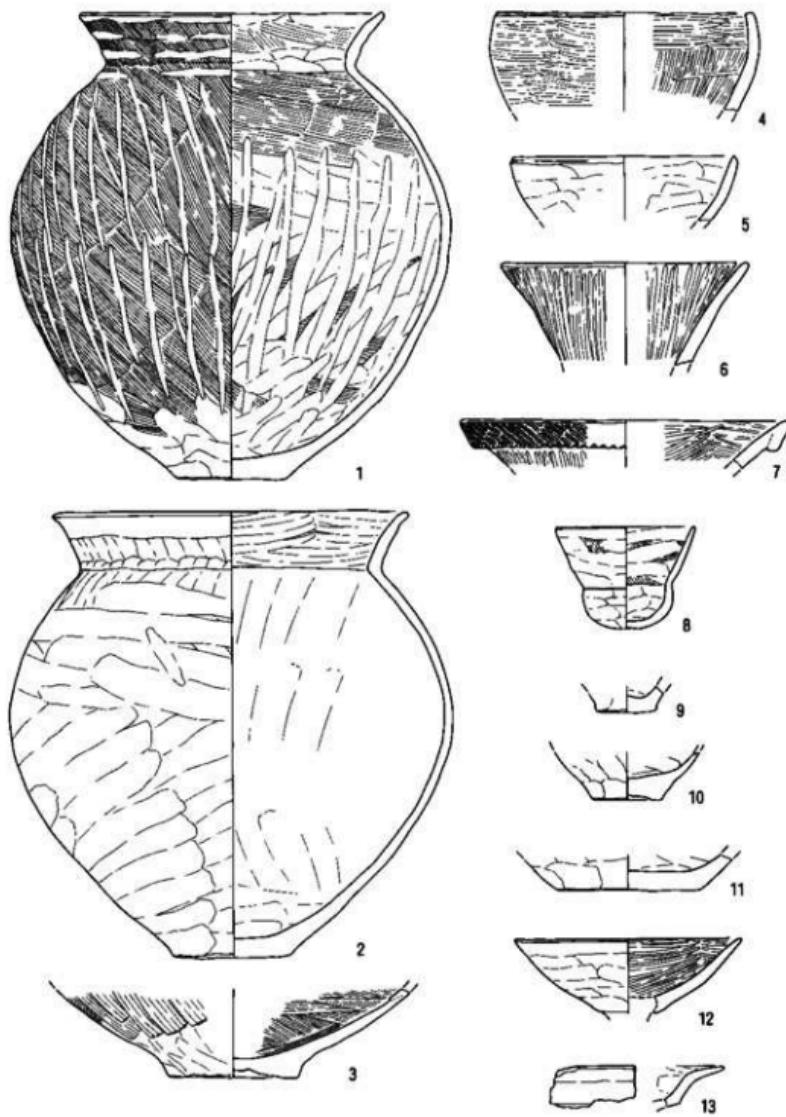
周溝内の出土遺物は、周溝の各辺の中央部に多く、特に南東辺と北東辺の中央部に多い。北東辺の中央部には次に述べる5号土坑が位置し、周溝内土坑という位置を占める。周溝内埋葬



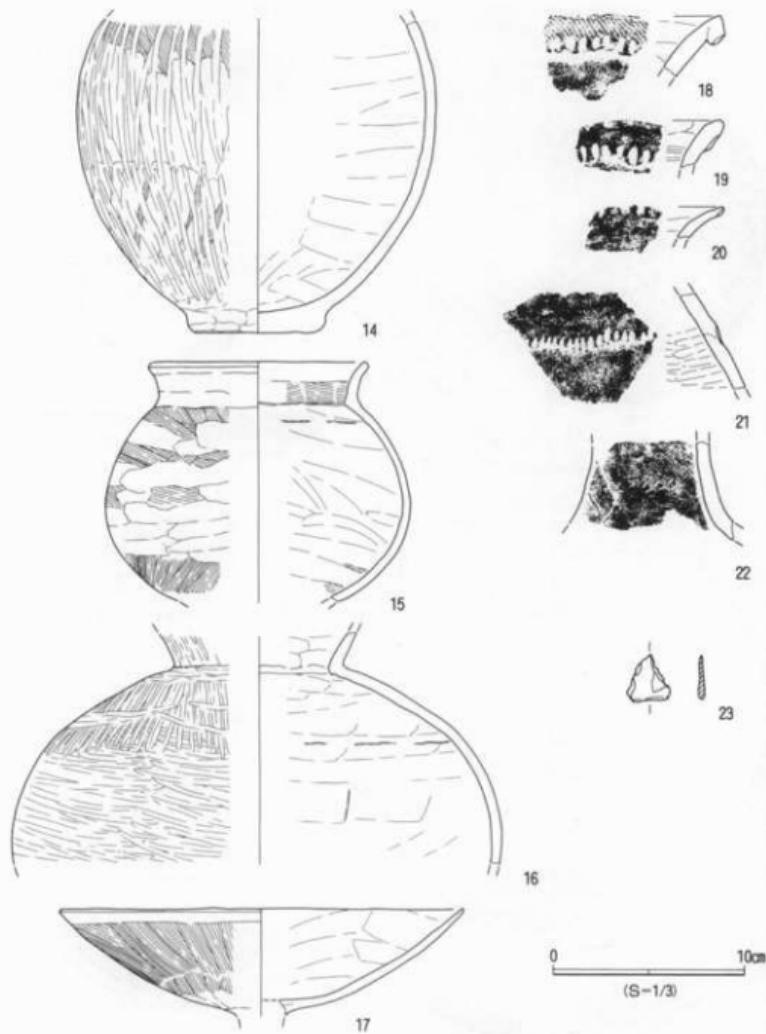
第95図 方墳1遺物出土状況

土坑とすると、主体部ではないにしても埋葬部に対する供獻、奉納等により土器類がほかより集まりやすい状況があったとも考えられる。

1、2は壺である。1は内外面ともにハケメが施され、外面はまばらに、内面は胴部から下方に、その上から一部ミガキが施される。胴部はほぼ球形に近い。口径15.9cm、胴部最大径23.1cm、底径5.7cmを測る。2は1とは異なり、ハケメはみられない。口縁部内面を除きほぼ全面にヘラケズリが認められる。口縁部内面はミガキがなされている。口径18.6cm、胴部最大径25.1cm、底径6.1cmを測り、胴部中央から底部にかけてやや直線的に統く。3は壺の底部で、内外面ともにハケメが認められる。底部は球状の胴部に貼り付けたように突出し、底径6.7cmを測る。4、5は椀の上部片である。4は内外面ともにミガキが施され、口唇部は水平にやや四角く整形されている。口径13.4cmを測る。5はヘラケズリが施され、口径11.5cmを測る。6は壺の口縁部ではば直線状に開く口縁部は内外面ともにミガキが施される。口径12.9cmを測る。



第96図 方墳1 出土遺物(1)



第97図 方墳1出土遺物(2)

7は壺の口縁部片で、複合口縁の外面には繩文が充填され下部との境の段はキザミが認められる。口径17.2cmを測る。8は壺である。小形で口縁部は逆ハの字状に開き、胴部は半球形を呈する。口径7.2cm、器高5.2cmを測る。9、10は壺の底部である。9は底径3.1cm、10は3.6cmを測る。11は壺の底部である。底径7.4cmを測り、やや大型の壺の底部と思われる。12、13は高壺の坏部である。12は内面にはハケメが、外面はミガキが施されている。脚部とのほほ接合部分から破損している。口径11.9cmを測る。13は口唇部がほぼ水平に開き、下方へ屈曲して脚部に達なる形態を呈する。14は壺で、胴上部はハケメの上から一部ミガキを施し、下部はヘラケズリの上から一部ミガキを施している。胴部最大径は19.0cm、胴下部から突出し、貼り付けたような底部は底径6.7cmを測る。15は小形の壺である。短く外側へ開く口縁部から外反してすんぐりした球状の胴部へと続く。外面はハケメの上から一部ヘラケズリを施している。口径11.7cm、胴部径16.1cmを測る。16は壺の上部片で、口縁部から外反し大きく外へ開く胴部の部分である。外面はハケメの上からミガキが施されている。胴部最大径25.7cmを測る。17は高壺の坏部で、口径21.3cmの坏部が脚部との境付近から破損したものである。18~22は小破片で、18、19、20は口縁部片、21は胴上部片、22は高壺の脚部片である。23は鉄製品で、薄い板状の鉄製品の一部とみられ下端部以外は折損している。形態は不明である。

(2) 5号土坑(第98図、図版34)

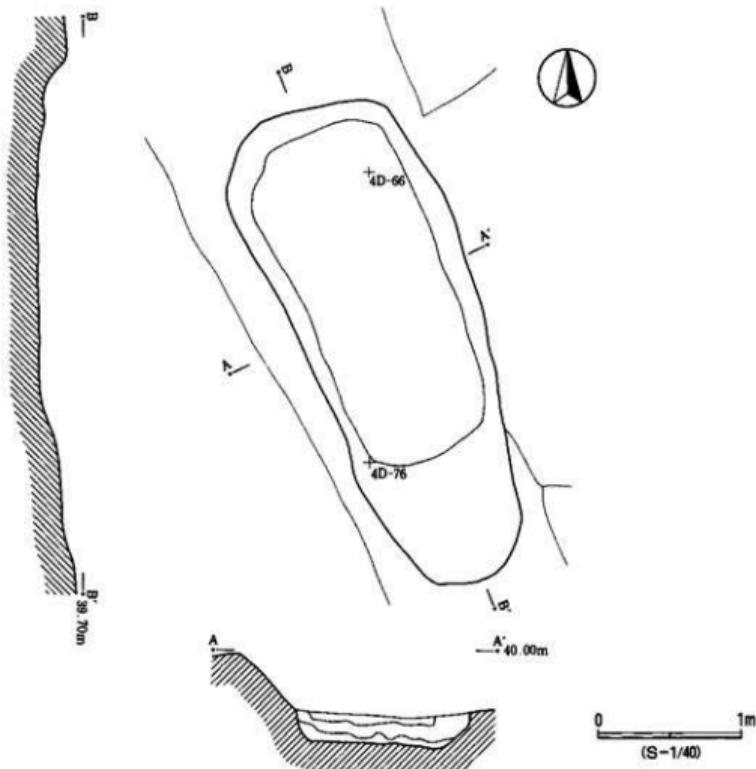
方墳1の北東辺の周溝中央部の底面に土坑が1基検出された。周溝と同方向に長楕円形の土坑が掘り込まれ、長軸3.5m、短軸1.3mの規模で緩やかに掘り込まれ、周溝底面からの最大深度0.3mほどである。掘込みの北側はやや急な掘込みで、南側は非常に緩やかに掘り込まれている。底面も平坦ではなく、掘込みの中央部に向かって緩やかに傾斜している。覆土の観察できた範囲では、覆土上層にロームを含む土層を含み、木棺直葬の土坑であった可能性が高い。土層断面で観察された木棺の幅は0.9m、長さは土層観察ができなかつたため不明で、平面形についても確実につかむことができなかつた。

(3) 14号土坑(第99図~第101図、第7表、カラー図版1~カラー図版3・図版35~図版37・図版55)

ア、遺構

中世の地形造成跡の中の区画C内の6G-11グリッド周辺に位置し、北には中世の15号土坑が接し15号土坑に切られている。木棺直葬の土坑墓とみられ、掘込みは主軸をほぼ北西から南東に向いている。掘込みは中世の地形造成跡の削平により上面をかなり削平されたらしく、最大の掘込み深さで、0.4mしか残っていない。土層断面からみた棺部の遺存深さは、最大で0.3mほどしかなかつた。

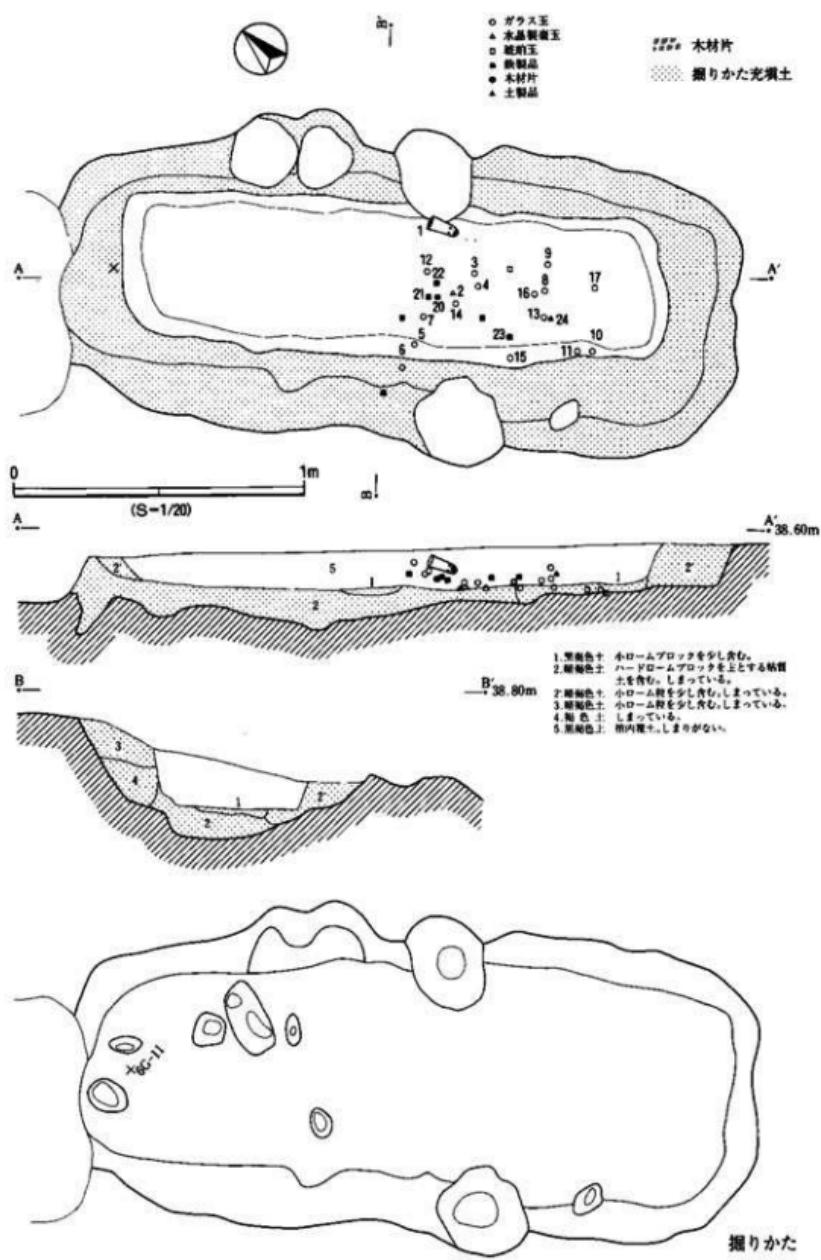
掘込みは、地山から約65°の角度で掘り込まれ、主軸長2.3m、幅1m、深さ0.4mである。掘込みの形態は、胴部をやや膨らませる隅丸長方形である。掘り方の底面は平坦でなく、中央



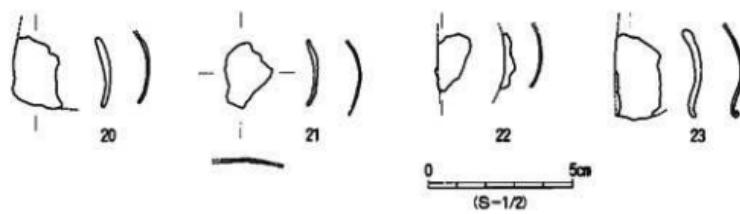
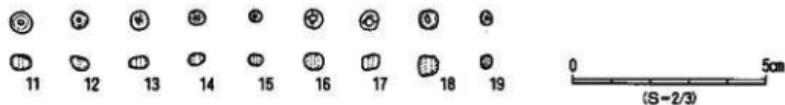
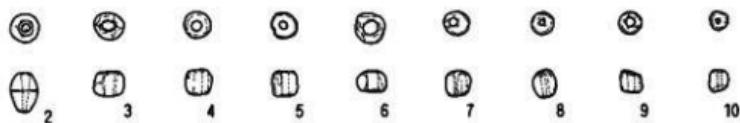
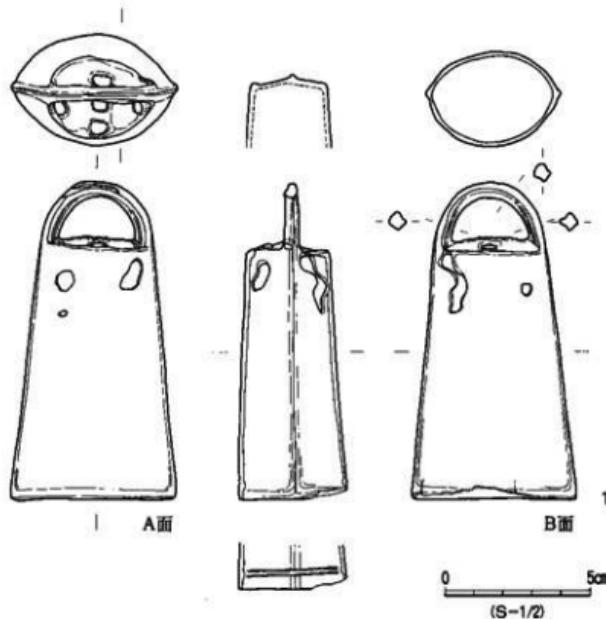
第98図 5号土坑実測図

付近が最も窪む皿状の底面の状況を呈する。底面には小ピットが7基ほど認められた。底面の長さ2.2m、幅0.8mで、掘込みの形態と同様に胸部の膨らむ隅丸長方形である。内部の埋葬部分は木棺直葬とみられ、木棺部の覆土は暗褐色土でロームブロック類を少し含み、少々柔らかく、若干の焼土粒を混入していた。それに対し木棺部分の埋め戻し土は、ソフトロームとロームブロックが主体となるよくしまった土であった。これは人為的に埋め戻されたものとみてよからう。

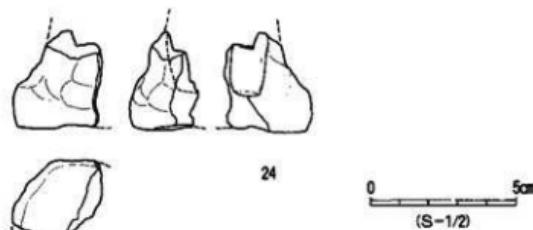
木棺部は、長軸長1.9m、幅0.55mで、棺底に当たる底面は長さ1.75m、幅0.4mで平坦であった。木棺の形態をうかがえるような埋め戻し土の状態ではなかったので、木棺の詳細な状況は不明である。遺物はほぼ棺内に当たる部分から出土しており、棺内に副葬されたものとみて間違いない。棺内からの出土遺物は、小銅鐸1、水晶製棗玉1、琥珀玉片1、ガラス小玉17、鉄製品4、土製品1で、このほかに小銅鐸脇から木材片、布状の有機物（何らかの繊維製



第99図 14号土坑実測図



第100圖 14号土坑出土遺物(1)



第101図 14号土坑出土遺物(2)

品で布地とみられる)が出土しているが、取り上げて出土遺物として取り扱えるほどの遺存状態ではなかった。小銅鐸は棺部の北東側の長軸側壁近くから出土し、棺の長軸と同方向で鉢を東に向け、裾部から鉢をやや下向きに向けた状態で出土した。小銅鐸のすぐそばには、小銅鐸の銅イオンによって保存されたものか、棺材とみられる木片が少量認められた。小銅鐸からやや離れるが、高さからみると小銅鐸の下側に当たり、底面の棺材が遺存したものとみられる。それ以外の遺物は中央からやや南西壁寄りの約 0.7×0.2 mの範囲にまとまって出土している。この遺物の出土状況から見ると、埋葬時の頭位は南東であるとみられ、体の中心からやや左にかけて副葬品類を納めたようにみえる。小銅鐸以外の遺物は、被葬者の体の上面の、主に胸を中心に撒くように納められたのかもしれない。小銅鐸は体の右側、棺と遺体の間の棺底に納められたものであろう。土製品は1点出土しているが用途不明で、土器類の出土はなかった。

周囲は中世の地形造成跡で、地山の削平がなされそれ以前の時期の遺構の遺存状況はよくない。造成時の削平によって浅い遺構が消失してしまった可能性は考えられるが、本遺構が遺存していることから周囲にはそれ以外の該期の遺構は存在しなかったものとみられる。

イ、出土遺物

・小銅鐸

遺存状態が良好ではなく完形で出土した。裾部の一部を少々破損するがそれ以外は原形をとどめている。高さ10.8cm、最大幅5.8cm、重量124gを計測し、鐸身高は8.8cm、鉢の高さは2.0cmである。鐸身上端部(舞部)は、長径3.9cm、短径2.8cmの両端のやや尖った梢円形である。鐸身下端部は(裾部)は長径5.7cm、短径3.9cmの両端のやや尖った梢円形を呈する。鉢はほぼ半円形状に近り、鐸身の側縁は鉢からほぼ直線状に開きながら続いている。鐸身の側縁は稜を持っていますが、鋸はない。鐸身の厚さは1.3~1.6mmではなく均一の厚さである。鉢の断面はややいびつな四角形で、太さは5mmである。鉢の上部は、鋸のためか使用の際の懸垂による磨耗のためか、やや上部が細くなっている。

図のA面の表面は平滑で文様等は認められない。上部の舞部から下に少し下がったところに型持孔が2孔認められる。左側のものはほぼ円形で径6mm、右側のものはゆがんだ梢円形で上

下方向に長く径 5 × 10mm を測る。左側の型持孔の下に小さな穴が認められ径 2 ~ 3 mm である。B 面も平滑で文様等は認められず、A 面同様に型持孔が 2 孔認められる。左側のものは穿孔によるものか、鋳造時の鋳上がり不良か、上部に細長く延び 2 ~ 3 孔をつなげたような状態に観察される。右側のものは一辺 3 mm ほどの正方形に近い。裾部のはば中央を 2 ~ 3 mm ほど破損する。表面上部には舞孔が 3 か所認められ、ほぼ中央に一辺 5 mm ほどの正方形のものと、そこから短軸方向に 3 ~ 4 mm ほど離れて両側にゆがんだ楕円形のものが各 1 孔認められる。これらの舞孔には舌の懸垂が行われたのであろうか、内側に面してやや磨耗しているようである。これらの舞孔とは直交する長軸方向には鉢の付け根付近の A 面側に、径 4 ~ 5 mm の楕円形の孔があり、舞孔に類似する。これは鉢を用いずに本体の懸垂をするためのものであろうか。裾部表面にはやや磨耗痕が認められた。鋸身の内側には、据端から上部に 3 mm ほど入ったところに幅 2 mm の低い（隆起高さ 1 mm 以下）突帯が一条認められ内面を一周する。

第 7 表 14 号土坑出土玉類計測表

遺物番号	名 称	材質	色 調	高さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	その他 (番号)
2	素 玉	水 晶	無色透明	9.5	6.9	2~1	0.59	(028)
3	丸 玉	ガラス	コバルト	6.0	6.7~7.4	2~3.5	0.39	(013)
4	丸 玉	ガラス	コバルト	6.2	6.6~6.8	2.5	0.35	(027)
5	丸 玉	ガラス	濃コバルト	6.1	6.4~6.7	1	0.38	(029)
6	丸 玉	ガラス	濃コバルト	5.1	7.3~7.9	3	0.35	(030)
7	丸 玉	ガラス	コバルト	6.1	6.0~6.2	2	0.31	(011)
8	丸 玉	ガラス	コバルト	6.8	5.2~5.7	1	0.29	(002)
9	丸 玉	ガラス	濃コバルト	5.3	5.4~5.9	2.5	0.22	(003)
10	丸 玉	ガラス	コバルト	5.1	4.5~4.8	1	0.16	(026)
11	丸 玉 (小玉)	ガラス	濃コバルト	3.6	5.0~5.1	1	0.13	(025)
12	丸 玉 (小玉)	ガラス	淡コバルト	2.9	4.0~4.2	1	0.05	一部欠 (033)
13	丸 玉 (小玉)	ガラス	淡緑青	3.0	4.2	1	0.07	(023)
14	丸 玉 (小玉)	ガラス	淡コバルト	3.2	3.7~4.5	1~2	0.07	(012)
15	丸 玉 (小玉)	ガラス	淡コバルト	2.8	3.1~3.3	1	0.06	(024)
16	丸 玉 (小玉)	ガラス	淡緑青	4.0	4.4	1	0.09	一部欠 接合 (022)(032)
17	丸 玉 (小玉)	ガラス	淡緑青	3.4	4.5	1	0.04	半欠 (021)
18	丸 玉 (小玉)	ガラス	濃コバルト	4.9	4.4~5.0	1~2	0.15	覆土中 (なし)
19	丸 玉 (小玉)	ガラス	淡緑青	3.0	3.2~3.3	1	0.04	覆土中 (なし)

・玉類

玉類は、水晶製の棗玉1、琥珀玉片1、ガラス玉17が検出されている。被葬者の胸の上部に撒いたような状態で検出されている。水晶製の棗玉は1点で、琥珀玉は遺存状態が悪くここに提示できないが、形態は多分棗玉で点数は1点であろう。ガラス玉は17点で、大きくやや厚みのある大振りのもの（表中では丸玉と表記）と、薄く小型のビーズ状のもの（表中では丸玉（小玉）と表記）とに分けられる。色調は濃コバルト色、コバルト色、淡コバルト色、淡緑青色の4種類が観察される。

・その他

用途不明の土製品1、用途不明の鉄製品4、布状有機物1である。土製品は上端を破損しており、多分スタンプ状の形態をしていたものとみられる。鉄製品は非常に薄い鉄板で緩く弧を描きカーブしている。4点とも同一遺物の破片であるとみられるが用途は不明である。錆が著しい。

（4）3号土坑（第102図、図版44）

5 E-30グリッド周辺に位置する土坑で、溝1に切られている。主軸をほぼ東西に向かって、主軸長1.4m、幅0.7mを測る。掘込みは0.3mの深さで、壁はやや傾きをもって掘り込まれている。覆土はややしまった黒褐色土であった。

（5）6号土坑（第102図、図版44）

4 E-73・83グリッド周辺に位置する土坑である。南側に新しい土坑が掘り込まれ重複している。主軸をやや北に傾ける東西方向で、主軸長2.3m、幅1.5m、深さ0.3mを測り、隅丸長方形を呈する。南側の新しい土坑は、1.6×0.5m、深さ0.1mの規模で東側にピットが1基認められる。覆土は下層はややしまりのある黒色土で、上層はしまりのない暗褐色土であった。

（6）17号土坑（第102図、図版46）

2 B-91グリッド周辺に位置する土坑である。主軸をやや北に傾ける東西方向で、主軸長2.8m、幅1.2~1.4m、深さ0.5mを測る隅丸長方形を呈する。壁は垂直に近く立ち上がり、覆土は黒色土を中心としたよくしまった土であった。

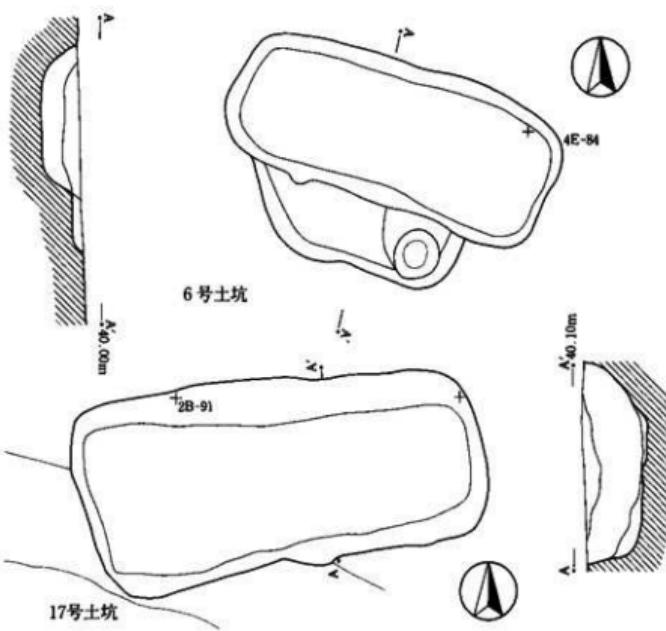
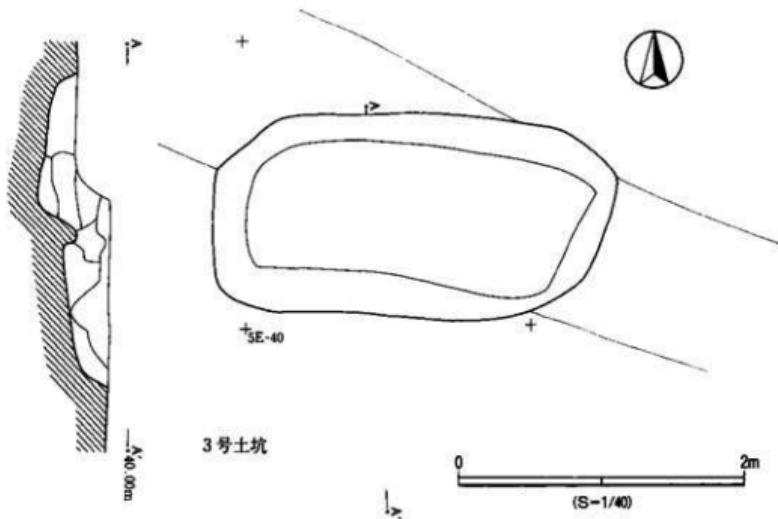
（7）19号土坑（第103図、図版46）

2 B-79グリッド周辺に位置する土坑で、主軸をほぼ東西方向に向かって、主軸長は2.7m、幅1.5~1.7m、深さは0.4mを測る。形態は隅丸長方形を呈し、壁はやや傾きをもって立ち上がる。覆土は、下層はローム質を多く含む褐色土、上層は黒色土であった。

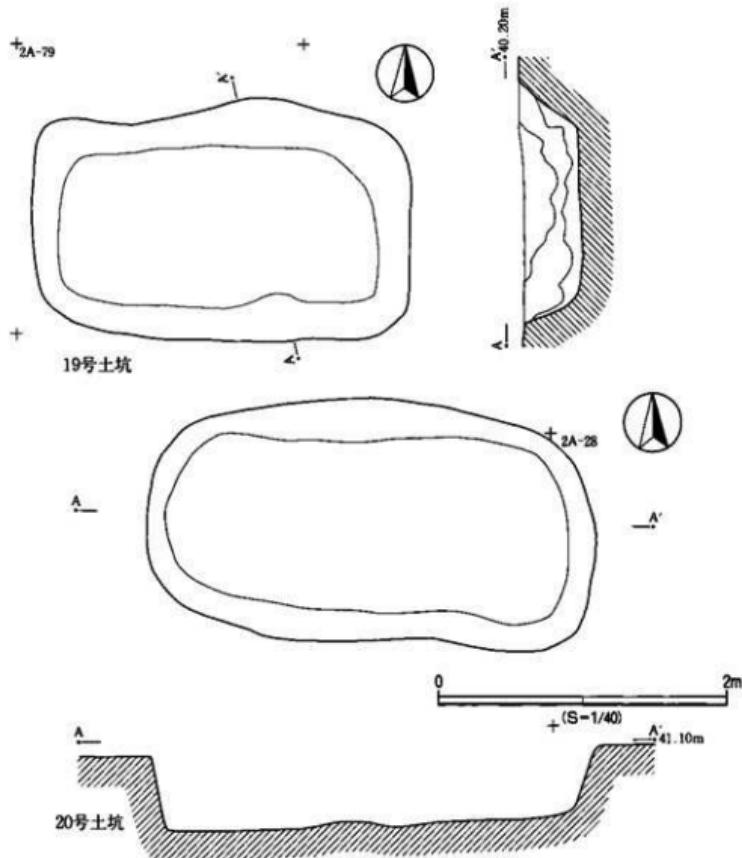
（8）20号土坑（第103図、図版47）

2 A-27グリッド周辺に位置する土坑である。主軸をほぼ東西に向かって、主軸長は3.2m、幅1.7mを測る。形態は長円形で、掘込みは垂直に近く立ち上がり、深さは、0.5mを測る。

（9）土坑出土遺物（第104図）



第102圖 3號土坑·6號土坑·17號土坑實測圖



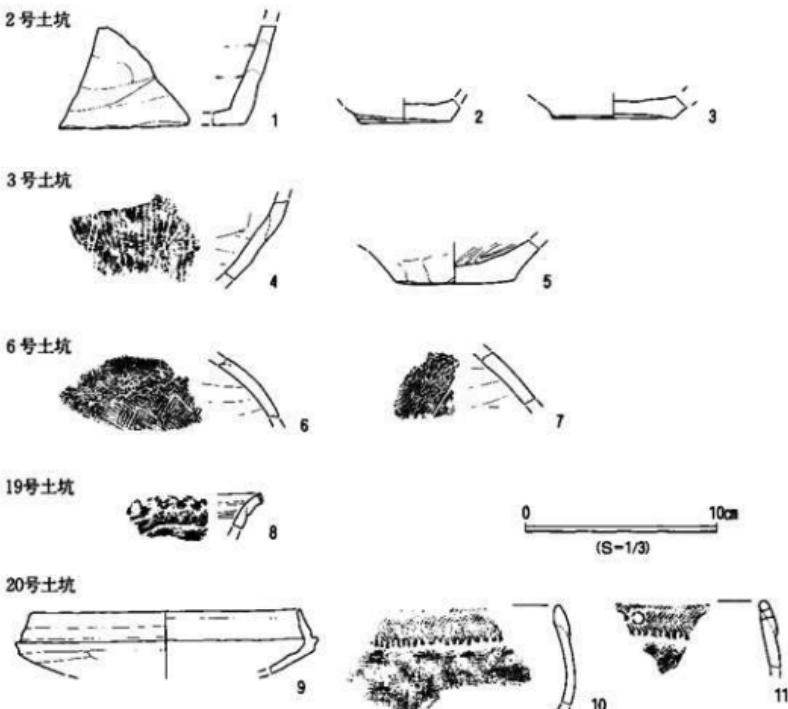
第103図 19号土坑・20号土坑実測図

1、2、3は2号土坑出土遺物である。1は常滑焼の壺の底部片である。表面は黒色で、外側はナデの後にヘラケズリが施される。2、3は素焼きの壺の底部でかわらけの類である。底部は共に回転糸切りで切られている。

4、5は3号土坑出土遺物で土師器の壺の破片である。4は壺の胴部片で、外側に粗いハケメが認められる。胎土に長石粒をやや多く含んでいる。5は壺の底部片である。

6、7は6号土坑出土遺物で、弥生土器の壺破片である。6は、2段のS字状結節文の下に単節繩文を施し、その上から山形沈線文を施文している。7は沈線で区画された中をS字状結節文で充填している。

8は19号土坑出土遺物で壺の口縁である。口唇部にキザミが施され小波状を呈している。



第104図 2号土坑・3号土坑・6号土坑・19号土坑・20号土坑出土遺物

輪積痕状の段を有している。

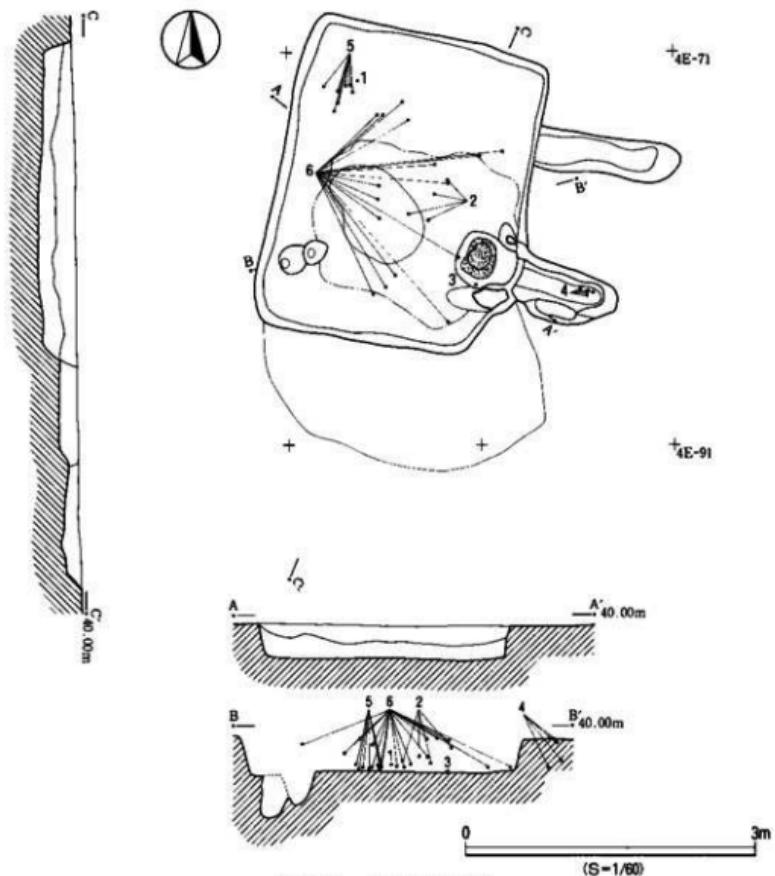
9、10、11は20号土坑の出土遺物である。9は土師器の壊で黒色を呈している。10、11は鉢または碗の破片で、口縁部は複合口縁を呈し突帯状の外面には結節縄文が施され、胸部との境にはヘラによるキザミが施されている。11には突帯上の結節縄文施文部分に2か所の穿孔が認められる。10と11は同一個体の可能性が高い。

5. 奈良・平安時代

当該時期の該当する遺構は竪穴住居跡6軒のみで、遺跡中では活発な活動跡は認められない。君津都市センター調査範囲をみても遺構の検出数が少なく、散漫に竪穴住居跡の分布する寂しい集落といった様相を感じる。

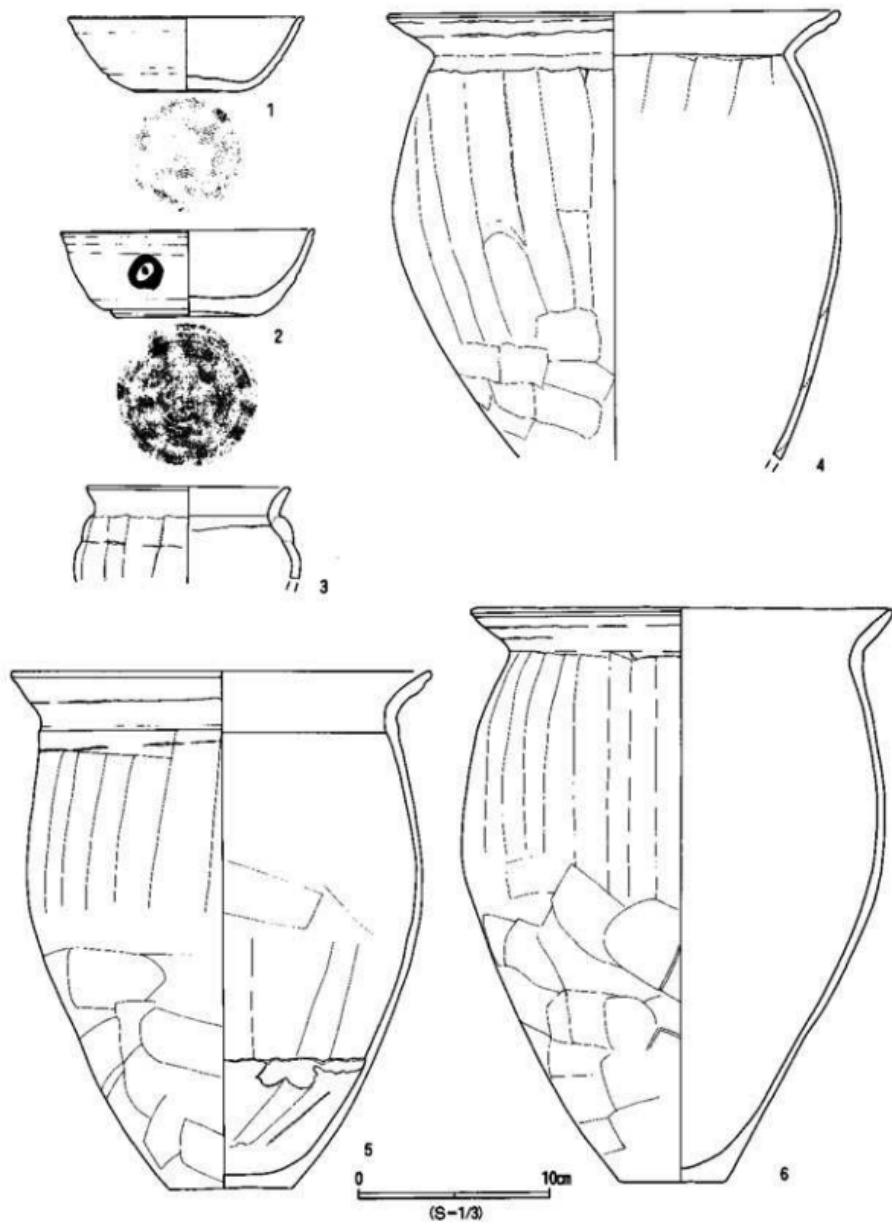
(1) 3号住居 (第105図・第106図、図版38・図版53)

4D-79グリッド周辺に位置する竪穴住居跡である。南側に11号住居が所在し、本遺構は



第105図 3号住居実測図

11号住居を切って構築されている。形態はややいびつな長方形で、カマドが東辺に位置している。カマドを通る部分を主軸とすると、主軸は東南東から西北西に向く。主軸方向の長さは2.6m、直交する南北方向の長さは3.2mを測る。掘込みはしっかりしているが、ソフトローム層中に留まり、深さ0.3~0.4mを測る。床面はソフトローム層中ながらカマド前面を中心によく踏み固められ硬化していた。さらにその踏み固め面の中央部分に、山砂が 1.1×0.8 mの範囲に散布していた。散布の厚さは最大5cmほどであるが、何の意味をもつものかは不明である。ただ重複する11号住居を掘込んで構築されており、11号住居の床面が山砂の混ざったローム層であったことと関連があるかも知れない。壁溝はない。床面西側には小ピットが2基検出され、径 0.6×0.3 mで重複しており、深さは壁際のものが0.5m、内側のものが0.2mを測る。



第106図 3号住居出土遺物

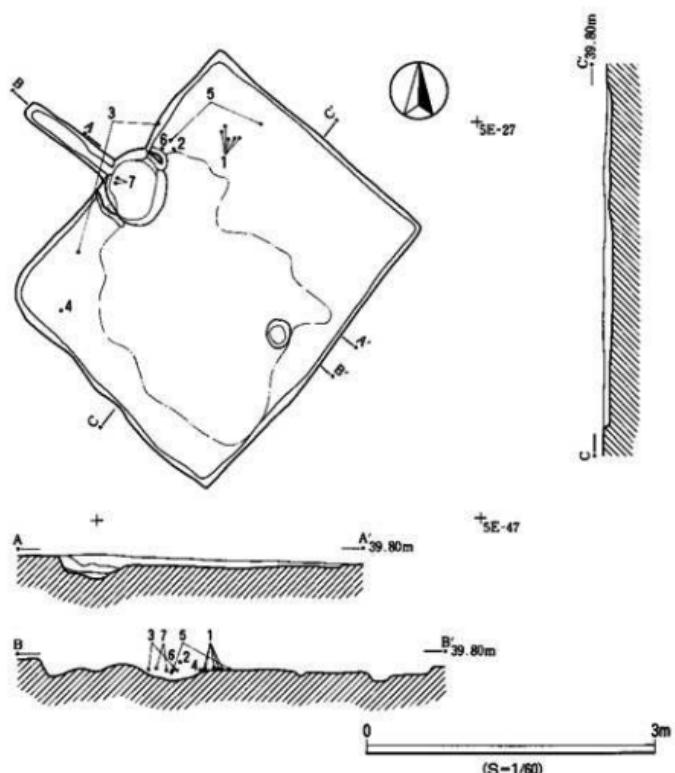
カマドは、東壁の南寄りに1基所在したが、遺存状況が悪く袖の状況があまりよく検出できなかった。袖は山砂を用いて構築しているがあまり硬質でなく、なおかつ赤色に焼けているわけでもなかったので、検出に手間取った。そのため右側の袖は壁近くまでほとんど検出できなかった。炊き口は遺存せず、火床は浅く窪み、火熱によって赤色硬化していた。煙道は長く外側へ延びるタイプで、焚き口側の壁からほぼ垂直に0.1m立ち上がり、確認面からの掘込み約0.3mの深さでそこから緩やかに下がりながら、壁際から外側へ1.1mの長さで延び、そこから上方へ急に立ち上がり途切れる。最終の立ち上がり部分には大型の土器片が検出され、煙道の保護をしていたのではなかろうか。

以上のカマドは住居廃絶時まで用いられたものであるが、このカマドは東壁の中では南に寄りすぎている。このカマドの北側には古いカマドの痕跡が残り、壁から外側に煙道の痕跡が認められた。床面や壁の立ち上がりにはカマドの痕跡が認められなかったことから、住居の拡張に伴ってカマドも作り替えられているものかもしれない。遺存していた煙道は、確認面からの深さ0.15mほどで壁から外側へ長さ0.75mのびて立ち上がっていた。カマドの状況からみると、本遺構は旧来の竪穴住居跡を、長さを変えずにほぼそのまま南側へ幅だけ拡張し、カマドも南側に作り替えたものだろう。

遺物は比較的大型の破片が出土している。1、2は土師器の壺である。1はロクロ整形で、壺部下部にやや強いロクロ目がみられる。底部は回転糸切りによって切られている。一部に非常に低い高台が削り出されている。口径12.2cm、底径5.3cm、器高3.9cmを測る。2は口唇部にややロクロ目が認められ、底部近くをヘラケズリ整形している。壺部に墨書きがみられ、やや太めの丸の中に点を打ってあり、文字と言うよりもどちらかというと記号に近いものである。底部は高台が一部で削り出されるが、顕著ではない。口径13.2cm、底径7.3cm、器高4.5cmを測る。3は小形の壺である。胴部はなめらかな曲線を描かず帯状に膨らんだ部分が頸部下にある。口径10.6cmを測る。4、5、6は土師器の壺である。4は口縁部が大きく外反して開いている。ややいびつで、底部へのすばりがゆがんでいる。口径23.7cm、胴部径23.5cmを測る。5は口縁部はやや開き、頸部下の胴部との境に整形の差による稜がみられる。胴部は中央部から下側は一度くびれるようにして底部にいたる。口径21.9cm、底径6.4cm、器高26.3cmを測る。6は、口縁部は逆ハの字状に開き、頸部から緩やかに胴部にかけて膨らみ、最大径部分から下方はほぼ直線状に底部へと連なる。口径22.0cm、底径5.6cm、器高29.2cmを測る。

(2) 9号住居（第107図・第108図、図版39・図版53）

5E-25グリッド周辺に位置する竪穴住居跡である。形態は主軸を北西から南東に向ける長方形で主軸長が2.9m、幅が3.4mと横方向の方が長い。掘込みが浅く最大で0.15mほどしかなく、ソフトローム層中に留まり、床面のはば中央部分は踏み固めで硬化していた。壁溝はなく、北西辺のはば中央にカマドが構築されている。床面のカマドの反対側には小ピットが1基検出

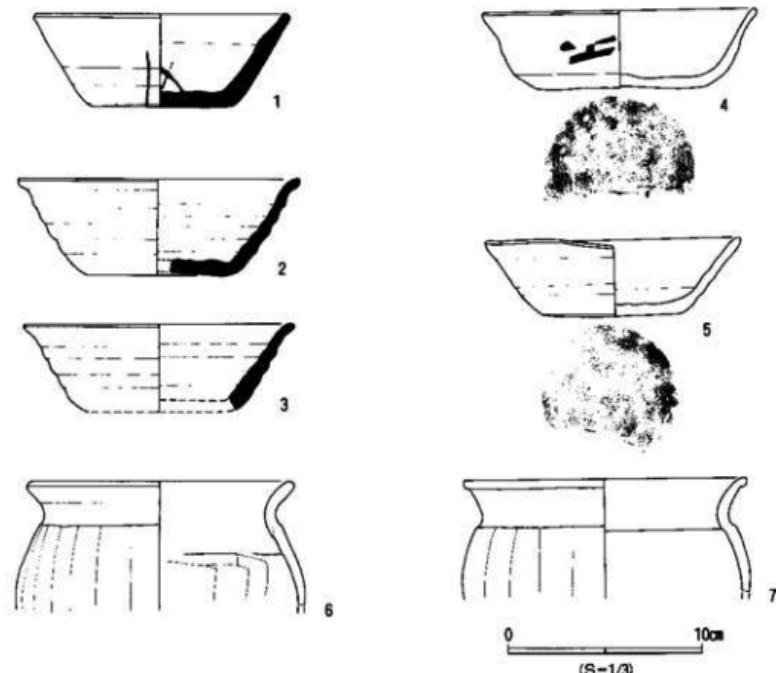


第107図 9号住居実測図

され、径 $0.3 \times 0.2\text{m}$ 、深さ 0.1m を測る。

カマドは、北西壁のほぼ中央に位置し、袖は山砂で構築されているが、遺存は悪く袖の検出に苦労し左袖は長さ 0.4m 、右袖は 0.2m 程度の遺存状況であった。焚き口は遺存せず、火床はほとんど焼けていなかった。煙道は幅 0.25m 、長さ 1.1m と長く、掘込みは浅かった。

遺物は、カマド側に比較的多く出土している。1、2、3、4、5は壊で、そのうち1、2、3は須恵器、4、5は土師器である。1はやや厚手の須恵器でロクロ目は明瞭ではない。火だしきが観察される。口径 13.3cm 、底径 7.3cm 、器高 4.9cm を測る。2、3はほぼ同形の須恵器でロクロ目は明瞭である。4は土師器の壊で外面に墨書が認められる。文字は不明である。底部は回転糸切りの後、周囲をヘラケズリしている。口径 14.3cm 、底径 8.7cm 、器高 4.1cm を測る。5も土師器で、口縁部にややゆがみがあり、底部は平坦ではなく緩やかに中央が突出している。口径 13.2cm 、底径 7.2cm 、器高 3.9cm を測る。6、7は土師器の甕でほぼ同様な大きさをもつ。6は口縁が逆ハの字状に開き、頸部下部に口縁部のナデと胴部のヘラケズリとの境となる稜を



第108図 9号住居出土遺物

(S-1/3)

もつ。口径13.9cmを測る。7は口唇部外面に小さく折り返しをもち、頸部下部に口縁部のナデと胸部のヘラケズリとの境になる稜をもっている。口径14.7cmを測る。

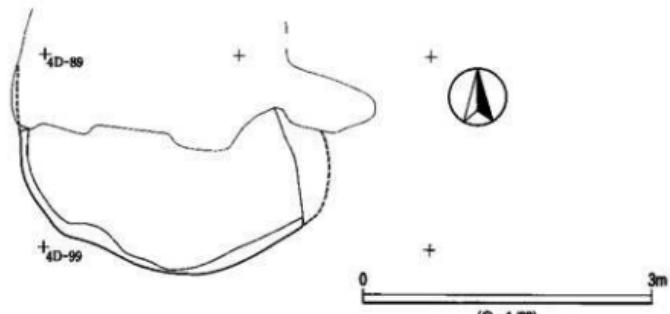
(3) 11号住居 (第109図・図版40)

4 D-89グリッドに位置する堅穴住居跡で、北側には3号住居が接し、3号住居に切られている。形態は、南側しか遺存しないが楕円形になるものとみられる。掘込みは浅く、深さ約0.2mでソフトローム層中で留まり、床面は山砂を含むロームブロックでやや固く踏み固められていた。床面には壁溝、炉、ピット等は検出されなかった。

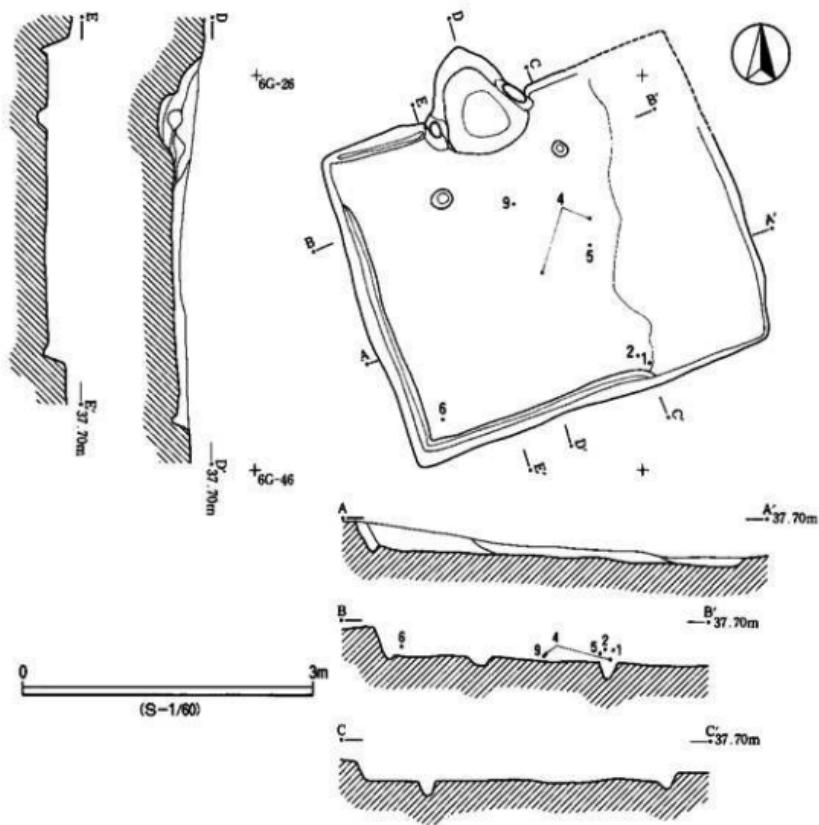
遺物は少量出土しているが図示できるようなものはなかった。

(4) 38号住居 (第110図・第111図・図版40・図版41・図版53・図版54)

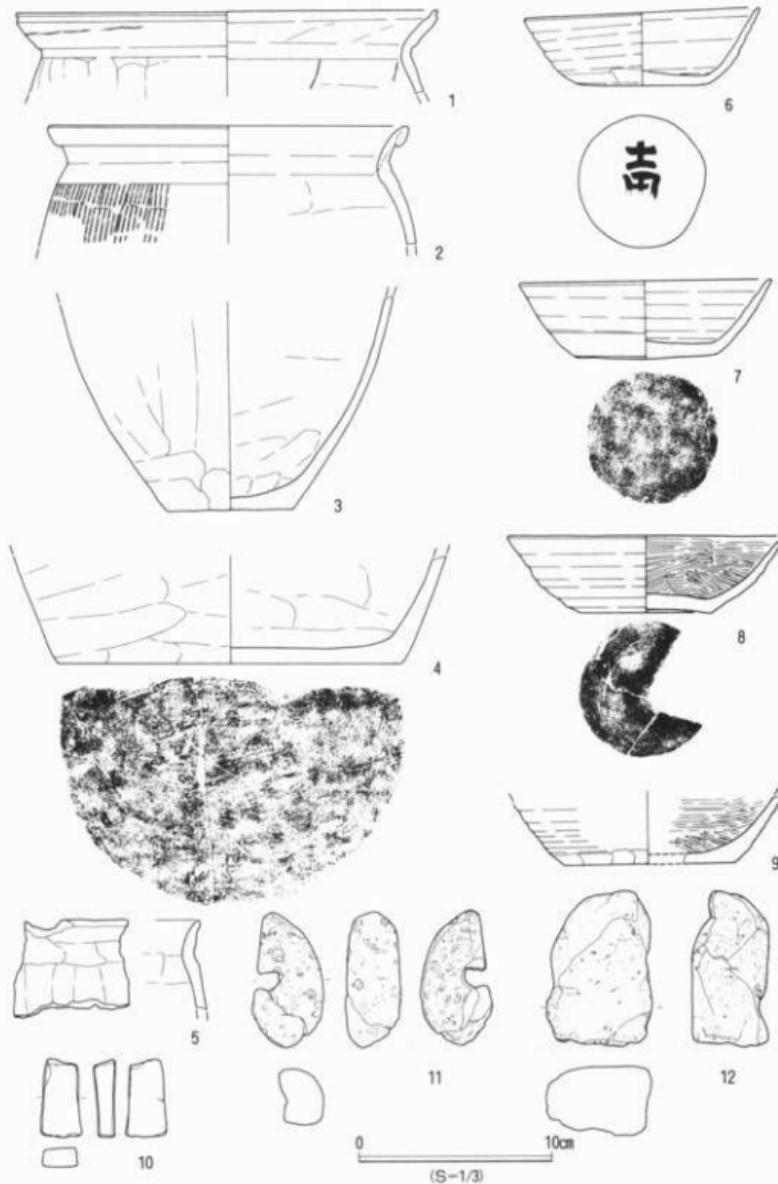
6 G-27・37グリッド周辺に位置する堅穴住居跡である。遺構の北端が一部調査区外になり、全体を調査することはできなかったがほぼ全容はつかめた。主軸を北北西から南南東に向か、主軸長3.4m、直交する輪長4mを測る長方形を呈し、そのうちの北端の1mほど辺を調査区外のため欠いている。掘込みは浅く、特に東側は遺存がよくない。確認面からの深さは最大で0.3mで、ソフトローム層中に留まる。床面は踏み固めによって西側2/3ほどが硬化してい



第109図 11号住居実測図



第110図 38号住居実測図



第111図 38号住居出土遺物

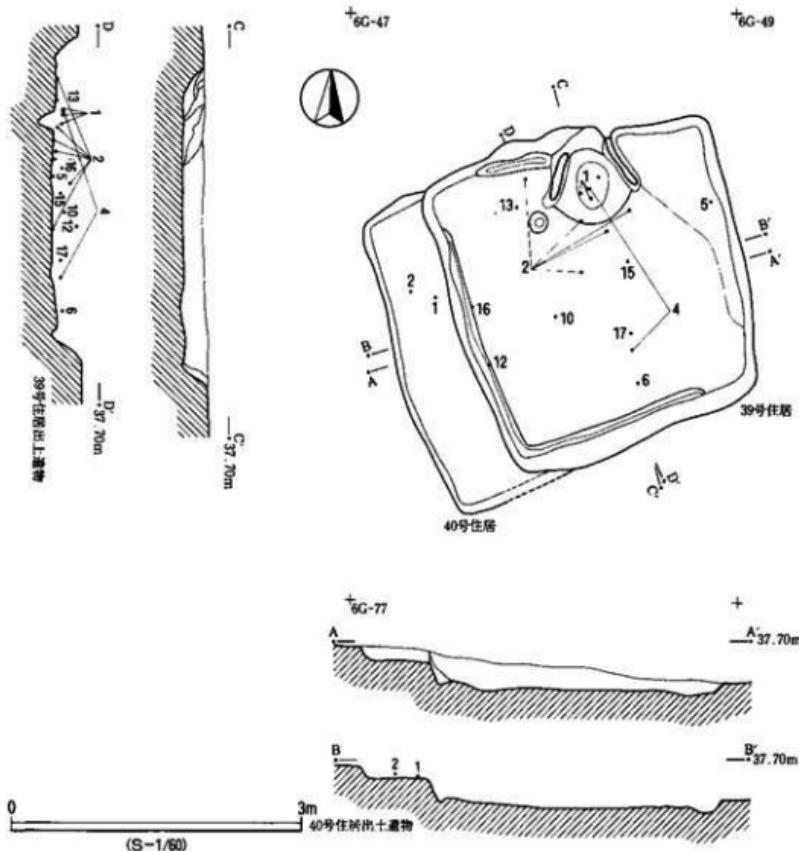
た。壁溝は一部に存在し、西側北辺、西辺の大部分、南辺の西寄りに検出され、全体としては約6mの長さになる。壁溝の幅0.15m、深さ0.05mほどである。床面には、ピットが3基検出され、南東側を除いてほぼ規則正しく配置されている。規模は径0.2m程度、深さ0.1mと浅く、距離は東西1.3m、南北1.6mの距離になり、配置は柱穴としてよい位置だが、浅すぎる点で疑問が残る。

北辺のほぼ中央に、カマドが1基検出されている。山砂で構築されているが全体の遺存は悪い。袖の検出状況も悪く、長さ0.3m程の貧弱な遺存状況となっている。焚き口は遺存せず、火床部も0.2mほどの掘込みになっているが、火による焼け方が少なく硬化の割合も低かった。壁から外側への掘込みはやや大きめで幅0.9m、奥行き0.65mに三角形状に掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。遺構の遺存状況が悪いためか、長い煙道は検出されなかった。カマド内の遺物量は少なかった。

遺物は、全体量は少ないが大型の破片がみられる。1、2、3、4、5は土師器の壺である。1は口縁部のみで、口唇部は突帯状に上方へつまみ上げられている。口径22.0cmを測る。2は口唇部を外側へ折り返し、胴部外面には平行な格子状のタタキ目が上下に走る。口径18.7cmを測る。3は壺の胴下部片で、ヘラケズリの胴下部から底部へと続く。底径6.4cmを測る。4は底径の大きい壺の底部片で、底径17.8cmを測る。5は壺の口縁部片で、頸部から口縁部への不明瞭な稜をもち、口縁部は緩やかに外反している。6、7、8、9は土師器の壺である。6は底部に墨書が認められ「土田」と読めようか。外面にロクロ目が認められ、底部近くはヘラケズリがなされている。口径12.1cm、器高4.1cmを測る。7は内面にロクロ目が認められ、底部内面は中央にやや盛り上がっている。外面底部近くはヘラケズリがなされている。口径13.1cm、器高4.0cmを測る。8は外面にややロクロ目を残し、内面はミガキがなされる。底部は緩やかにえぐられている。口径14.6cm、底径6.7cm、器高4.0cmを測る。9はやや大振りの壺で、外面にはロクロ目、底部近くはヘラケズリ、内面にはミガキが認められる。10は白色蒙灰岩製の砥石で、小形のものである。長さ4cm、幅2.2cmを測る。11、12は軽石で11は環状の製品が破損したような状態である。本来の製品には中央に穴があいていたようで、破損した後も用いられ破断面がいくらか研磨されている。12は塊状であるが表面の何面かは研磨されたような状態で平滑面がいくつかみられる。

(5) 3号住居 (第112図・第113図・図版41・図版42・図版54)

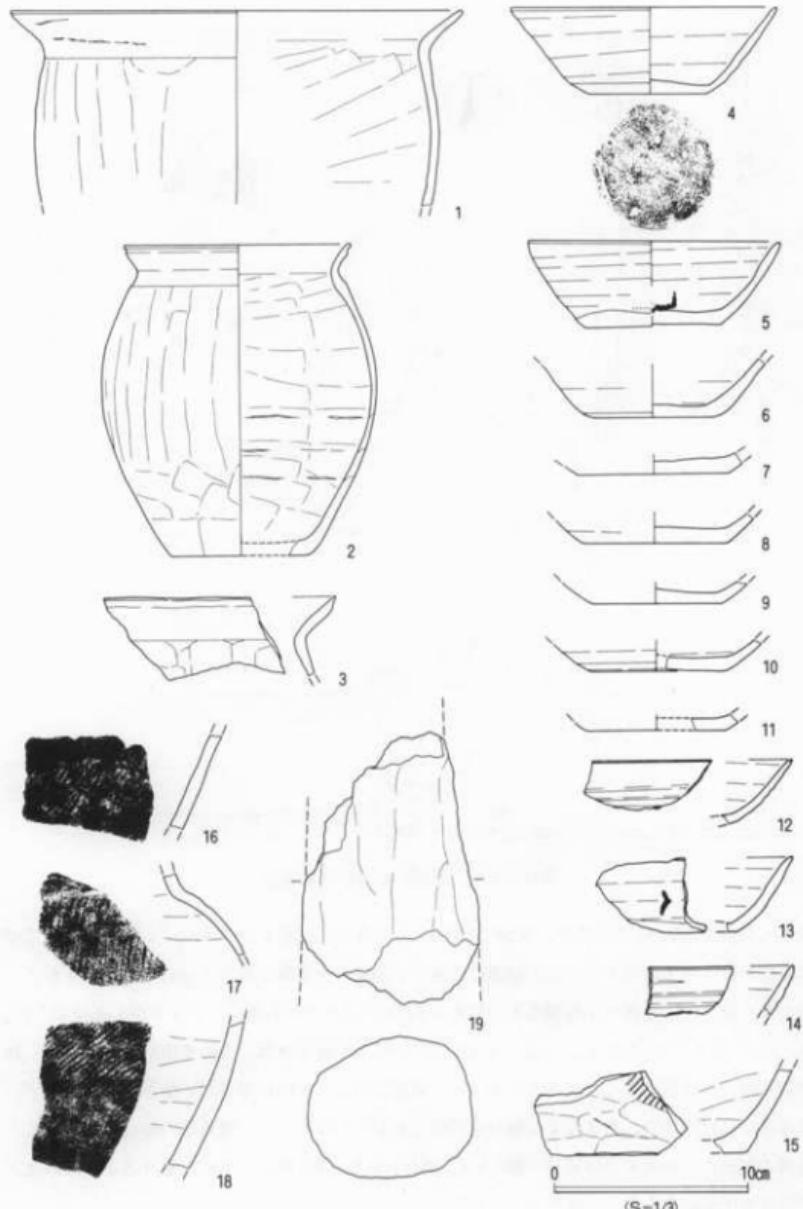
6G-58グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、西側は40号住居と重複している。新旧関係は本遺構の方が新しく、40号住居を切って本遺構が構築されている。両者の配置からみると40号住居の東西辺長をそのままにしてやや東に改築したような状況だが、古い遺構のカマドの痕跡が認められずそうとも断定できない。主軸は北北西から南南東に向かう、主軸長3~3.2m、直交軸2.7~3mとやや南側のすばんだ方形である。遺構の東側の遺存が悪く、掘込み



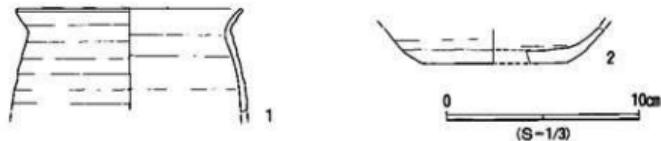
第112図 39号住居・40号住居実測図

深さも西側で約0.2mであるが、東側では0.1mしかない。床面もソフトローム層中に留まるが踏み固めによって硬化していた。壁溝は、カマド西脇と南東側で長さ5mほどが検出された。幅0.1m、深さ0.05m弱の小規模なものである。床面にはカマド右袖前にピットが1基検出され、径0.2m、深さ0.2mを測る。北辺のほう中央にカマドが検出され、山砂で構築されている。袖の遺存状況が比較的よく、長さ0.5~0.6mの範囲にわたって検出できた。焚き口は遺存せず、火床部はほぼ平坦で、あまりよく焼けずに硬化もしていなかった。煙道部の掘込みも少なく、遺構の掘込みの外側までは延びず幅0.5m、奥行き0.2mほどの三角形状に掘り込まれていた。遺物は火床部にやや大型の破片がみられた。

遺物は、大型の破片が何点かみられた。1、2、3は土師器の甕の破片である。1は口縁部



第113図 39号住居出土遺物



第114図 40号住居出土遺物

が逆ハの字状に開き、頸部から胴部にかけて緩やかにふくらんでいる。口径23.6cmを測る。2は底部の大きな甕で、口唇部は外面が細くつまみ上げられ段をもっている。頸部から胴部にかけては緩やかにふくらみ、最大径部分から再び緩やかにすぼまりやや大きめの底部に至る。底部はやや厚めである。口径11.8cm、器高15.7cmを測る。3は小破片で逆ハの字状に開く口縁部である。4~14は土師器の坏である。4は内外面ともにロクロ目はほとんど観察されず逆ハの字状に開いている。口径13.8cm、底径6.1cm、器高4.6cmを測る。5は口唇部がやや内傾する坏で、外面底部近くに墨書が認められるが文字は不明である。底部近くはヘラケズリがなされている。口径13.1cm、底径7.0cm、器高4.3cmを測る。6~11は底部片である。12~14は口縁部片である。12はだらかに底部にいたり、13は外面に墨書が認められるが文字は不明である。14は外面に強いロクロ目が観察される。15は甕の底部片である。胴下部から底部にかけてあるが、上部には平行なタタキ目、底部近辺はヘラケズリが観察される。16、17、18は甕の破片で、16は胴下部、17は胴上部から頸部にかけて、18は胴下部である。ともに外面に平行なタタキ目がみられる。19はカマドから出土した支脚片である。土製で楕円形断面を呈し、火熱によって赤色に変色している。上下を破損している。

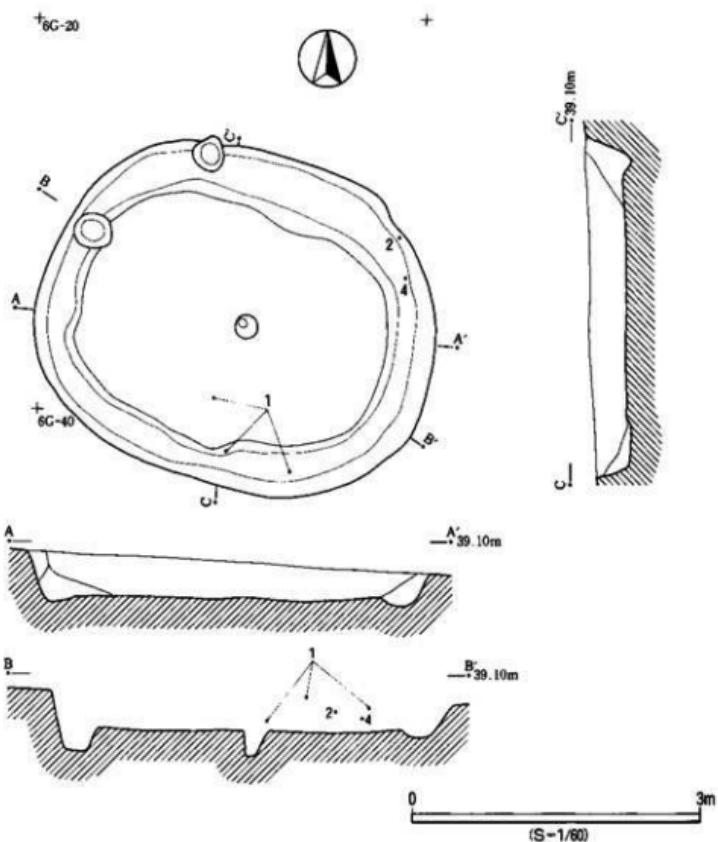
(6) 40号住居 (第112図・第114図)

6 G-57グリッド周辺に位置する竪穴住居跡で、39号住居と重複している。39号住居より古く、39号住居に切られている。主軸は39号住居と同じ方向になるとみられ、北北西から南南東に向ける。主軸長は南北方向3.3mで、東西方向は39号住居のため不明であるが形態は隅丸方形となりそうである。掘込みは39号住居より浅く、0.1mほどしかなくソフトローム層中に留まり、床面の踏み固めはほとんどなく軟弱であった。壁溝、ピット、カマド等一切検出されなかった。

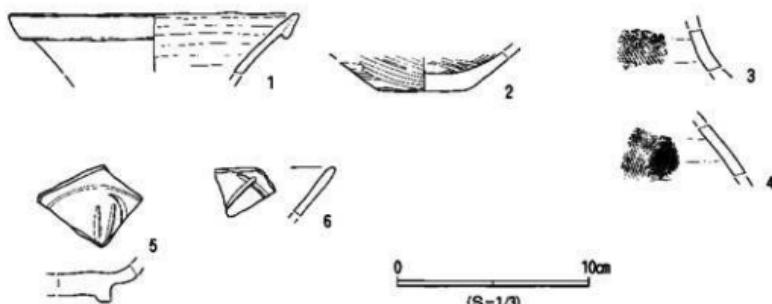
遺物は少量検出され、そのうち2点が図示できた。1は甕の破片で、やや小振りである。口縁部は逆ハの字状に開き、緩やかに胴部へと続く。口径11.9cmを測る。2は土師器の坏で、外面底部近くはヘラケズリされている。

6. 中世

中世の遺構は、調査区南東側の地形造成跡と区画溝、竪穴状遺構、小ピット群、土坑等があ



第115図 24号竪穴実測図



第116図 24号竪穴出土遺物

げられる。地形造成跡は、地山にまで及ぶ削平によって平らな面を造成し、何らかの区画をもたせたもので、その中に小ピット群、土坑群、竪穴状遺構が所在している。造成した区画の性格付けができるような遺構、遺物が出土していないので、区画の位置付けはつかめなかった。遺物の総量は少なかった。

(1) 24号竪穴(24号住居)(第115図・第116図、図版43・図版54)

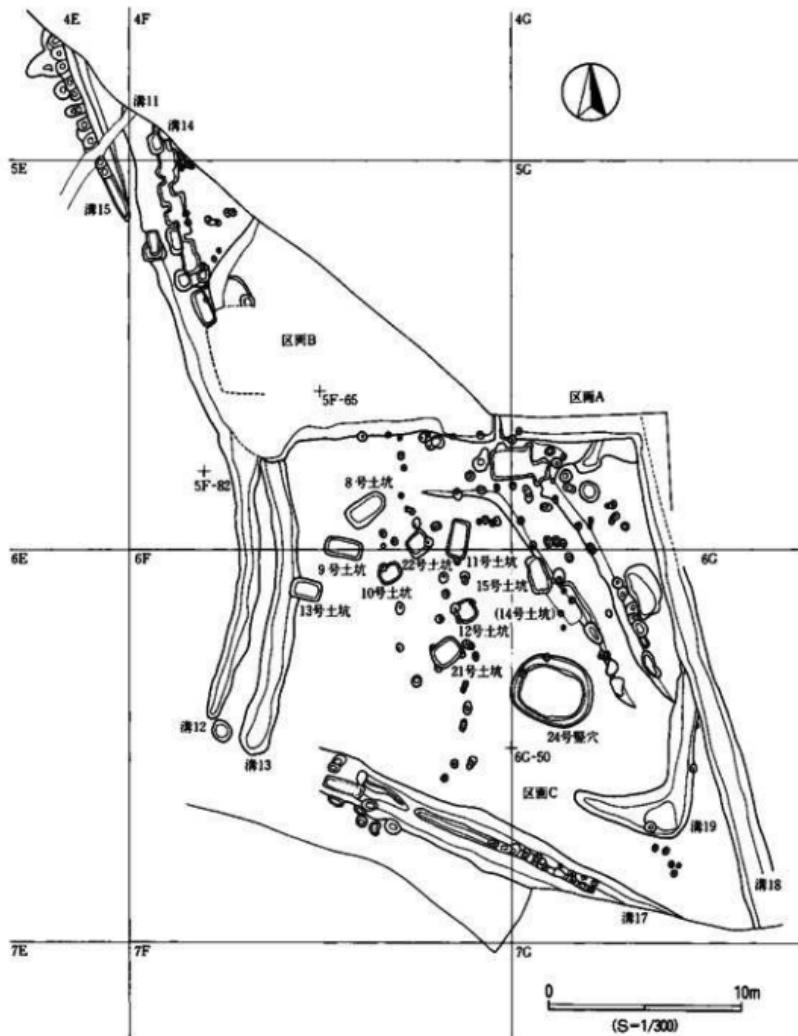
6G-30・31グリッドに位置する竪穴遺構である。周囲は中世の地形造成がなされている。区画の溝にはば四方を囲まれ、その区画の溝からやや隔たり、周囲の土坑群やピット群も存在せず、明らかに本遺構のために一定の空間が確保されていた状態が観察される。東側の区画の溝からは4m、北側の区画の溝からは11m、西側の区画の溝からは11m、南に一部存在する溝からは4mほど隔たり、本遺構の周囲も1mほどは空間が確保されている。

遺構は長軸を西北西から東南東に向ける小判形の形態を呈し、長軸長4.2m、短軸長3.5mを測る。掘込みはやや傾斜をもつがしっかりしており、約0.4mの深さでハードローム層まで掘り込まれている。床面は全面にわたってよく踏み固められ硬化していた。壁との境には壁溝が検出され、幅0.4~0.6m、深さ約0.1mに逆台形状に掘り込まれている。壁溝内の長軸方向北端側と、北側に小ピットが1基ずつ検出され、径0.3~0.4m、深さ0.2mほどである。床面中央に径0.25m、深さ0.2mの小ピットが1基検出されている。これら3基の小ピットの用途は不明である。覆土は黒色土を主体とする自然埋没状態を示している。

遺物は、舶載青磁片が少しとかわらけ、弥生土器、土師器片等で図示できるのは6点である。1は壺の口縁部である。口縁部は外面に折り返される複合口縁を呈する。口径15.2cmを測る。2は壺の底部であろう。内外面ともにミガキが施されている。底径4.6cmを測る。3、4は壺の胴部片であろう。3はS字状結節文の下に単節繩文の押圧がみられ、4は沈線で区画された内区を単節繩文の押圧で充填している。以上の遺物は弥生時代から古墳時代にかけての土器類である。5、6は舶載の青磁小片である。5は青磁の碗の底部片で、底部見込みに印刻の文様がみられる。釉は淡灰緑色を呈し越窯系のものとみられる。6も青磁の碗で口縁部片である。外面に印刻の文様が認められるが小片のため不明である。釉は暗灰緑色を呈し、同安窯系のものであろうか。

(2) 地形造成跡(第117図~第119図、図版43)

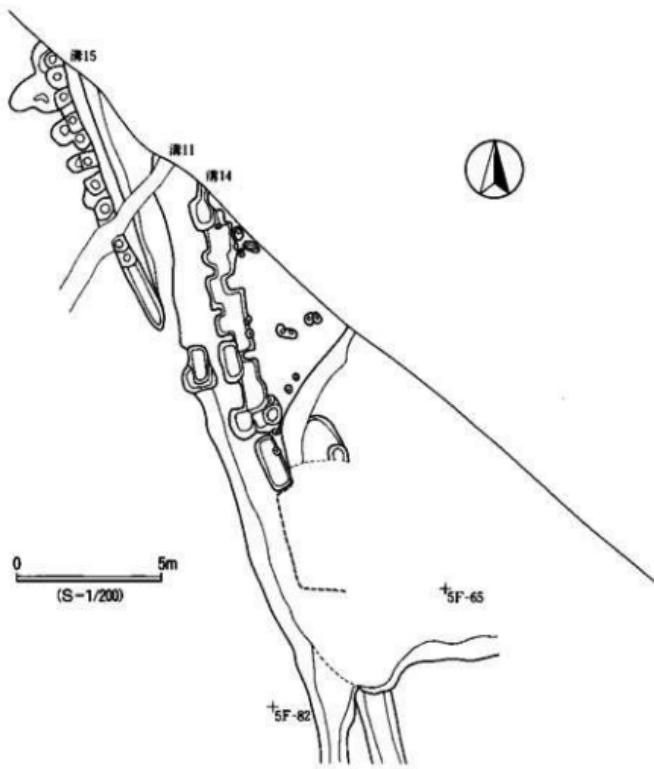
5Fグリッドから5G、6F、6Gグリッドにかけて、地山であるソフトローム層を一部削平して地形を造成し、さらにそこに接続する溝で区画した一角がみられる。この一角をここでは仮に地形造成跡と呼んで紹介をする。今までの報告書等では広く「台地整形」等と呼ばれて報告され、その呼称が普及し一般化したようであり、本遺跡でもそれを使うべきかもしれない。しかし、調査で確認・検出できるか否かはさておいて、地形の造成が台地上でなく低地等の場合をどう呼ぶのかといったことが気になったために、「台地整形」よりは広範な表現と考えら



第117図 地形造成跡実測図

れる表現として、自然地形に手を加えて何らかの造成・整形作業を行った痕跡、という意味で「地形造成跡」という表現をとった。

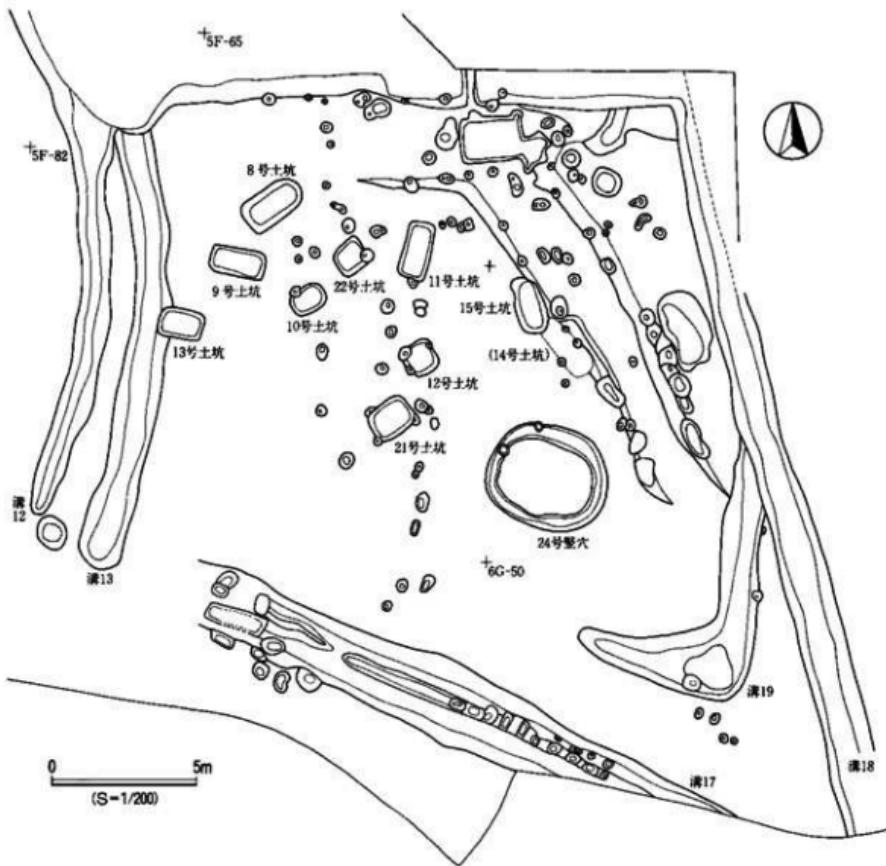
造成の範囲は、西は4E-67グリッド周辺から南へ5E-09グリッドを通り、5F-72、6F-42グリッドまで延びる溝15と溝12を境界とし、東は5G-63グリッドから始まり、南



第118図 地形造成跡区画B実測図

へ6G-96グリッドまで延びる溝18を境界としている。南側は6F-42グリッドから南東に6G-94グリッドへ延びる溝17を境界とする。北側は調査区外へ延びていて終端はわからない。造成された区画範囲を、調査区は北西から南東へ横切るように走っている。造成範囲は大きくは2か所に分けられ、5F-72グリッドから東に5G-74へ延びる造成の境界となる段差によって、北側の部分と南側の部分に分けられる。

北側は、東西幅約22mで、北に25mほど伸びている。北東側は調査区外のため不明であるが、西側は境界の溝15、すぐ内側に溝11、1mほど内側に溝14と溝が3条走り、その内側は小さな段差部分と小ピットが4基ほどある。調査区外の部分を含めて推定すると、面積は550m²以上となる。東端から西に7mのところに北側へ延びる溝が一部認められ、ここで区画すると、東側の区画（区画Aとする）は7×25m以上の175m²以上、西側（区画Bとする）は15×25m以上の375m²以上となる。北の部分（区画A・B）は南側の区画（区画Cとする）より低く、



第119図 地形造成跡区画C実測図

区画Aは区画Cより約0.1m低く造成され、区画Bは区画Cより約0.2m低く区画されている。

区画Bは、西側に溝を3条もち、その内側の溝からさらに小段差をもってごくわずかに掘り下げられて造成されている。一部で遺構の遺存状況が悪く造成状態の確認できない部分があった。3条の溝は特徴があり最も外側の溝15は径0.6mほどの円形ピットを溝でつなげたような状態の溝である。深さは円形ピット部分で約0.2m、溝部分で約0.15m、長さ11mを測る。溝11は、区画Bの西の境界となる溝で深さ0.2mに掘り込まれ、東側はそのまま区画Bの造成された平坦面となっているため特に立ち上がりが検出できなかった。溝14は、方形土坑の多数の重複掘込みによるもので、土坑の連続により最終的に溝状になっているので溝として取り上げた。実体は15基以上の土坑の連続状態である。複雑な重複状態のため個々の新旧関係は

把握できず、一定の規制のもとにある境界に沿って土坑が連続的に掘り込まれた結果であろう。幅は約1m、長さは11mほどで攪乱部分に至りその先が途切れてしまっている。個々の土坑は、規模 1.4×0.7 m、深さは0.3m程度で比較的浅い土坑である。区画Aと区画Bは以上のような状況で、区画された平場の状況しか観察されなかった。

区画Cは、ほぼ全周を溝・段差などで区画され、北辺は区画A・区画Bとの約0.2~0.3mの段差によって、東辺は溝18によって、西辺は溝12・溝13によって、南辺は溝17によってややいびつな台形を呈する。溝12は、幅1.2m、深さ0.1m、長さ6m、溝13は幅1.2m、深さ0.1m、長さ8mとほぼ同じ規模で、2条は掘り直しの結果によるものという見方ができる。溝18は、幅1.6m、深さ0.5~0.6mと比較的深い逆台形状のしっかりした掘込みである。長さは約25mを測る。溝17は、幅2.4m、深さ0.2mで、中央部にさらに一段深い溝が掘り込まれている。さらに一段深い溝は幅0.4~0.5m、深さ0.3m、長さ11mで、一部に円形ピットが連続的に掘り込まれている。溝18のほぼ中央からは区画の内側に溝19がみられ、9mほど南に進み西へ折れ曲がって5mほどで途切れている。折れ曲がりの部分が深く、両側は浅くなっている。

区画の内側には、ほぼ中央を南北方向に小ピットが40基ほどみられ、その西側は何もない空間となっている。小ピットから東側は竪穴状遺構1基、土坑8基、小ピット群、溝等がみられる。区画Cの西側は通路もしくは畠、広場というような空間の利用、東側は竪穴状遺構、土坑ピット群による建物・柵等の施設として用いられているようである。個々の施設についての十分な分析・検討から導かれたものではないが、ここでは以上のような機能的な性格付けに関する予測の一例を挙げてみた。

遺物は、個々の遺構からは少量ずつ検出されているが地形造成跡として特定できる出土遺物はなかった。

(3) 溝1 (第120図、図版48)

5E-42グリッド周辺から始まり、ほぼ西に延び4D-90グリッドに至り、そこから調査区外へと連なる溝である。当センターの調査区外から先は君津都市センターが調査し、19号溝として調査・報告されている。君津都市センターの調査区内ではほぼ東西に走り、70mほどの間に南から3本の溝とほぼ直角に合流している。この君津都市センターの19号溝の約35m南側に平行に走る36号溝・37号溝・38号溝があり、これらの溝と南北に走り直交する31号溝・34号溝・39号溝・40号溝とともに土地を長方形に区画していたものとみられる。これらの区画の東側に地形造成跡が位置し、区画の方向性にも共通性がみられる。溝1は、途中3号土坑を切り、方墳1を切って、溝7に切られている。東端は一部攪乱で検出できなかった。調査できた長さは約25mになる。東端での幅は1.1m、西端近くでは1.4mほどの規模である。深さは、東端で

0.2m、西端近くで0.35mほどで、断面はほぼ逆台形状である。一部に二重に掘り込まれたような跡や、小ピットがみられ、一時期だけでなく掘り直しによる改修がなされているようである。

遺物はほとんど出土せず、図示できるような遺物はなかった。

(4) 溝11(第118図)

地形造成跡を構成する溝の1条である。区画Bの西端を南北方向に区画している3条の溝の中で中央に位置する。調査区の北端の4E-89グリッドから5F-20グリッドまでの長さ8mにわたり調査され、深さ0.2mを測る。西端は溝15とは別の掘込みとして掘り込まれるが、東端ではそのまま地形造成跡の掘込みと共通しているために立ち上がりは検出できなかった。

(5) 溝12(第119図)

区画Cの西端を区切る溝である。北端は区画Bからそのまま掘り込まれ、5F-73グリッドから6F-42グリッドまでの長さ約15mにわたって掘り込まれる。幅は北側で1.6m、南側で1m、深さは北側で0.25m、南側で0.05mと浅くなっている。南端にはピットがあり径1m、深さ0.35mを測る。

(6) 溝13(第119図、図版48)

上述の溝12とほぼ平行に溝12の約1m東側を平行に走る溝である。位置が溝12の1m東側を走るというだけで規模、長さ、深さ等溝12とほぼ同様である。溝12とほぼ同機能の区画の溝で、新旧関係はつかめなかったが改修等による掘り直しではなかろうか。

(7) 溝14(第118図、図版48)

区画Bの西端に位置する溝のうち最も東に位置する溝である。ただし本遺構は溝というよりも長方形土坑の連続した複雑な重複関係により溝状になったものである。複雑な重複関係のため個々の新旧関係は把握できなかった。一定の規制のもとに境界に沿って土坑が連続的に掘り込まれたものであろう。溝として幅は約1m、長さ11mで南側は擾乱のため終端まで調査できなかった。個々の土坑は、規模1.4m×0.7m、深さ0.3mほどで比較的浅い土坑である。

(8) 溝15(第118図)

区画Bの西端の3本の溝のうち最も西端となる区画の溝である。調査区内では4E-67グリッドから始まりやや東に寄りながら南に向う。長さ11mで、5F-10グリッド周辺で途切れる。径0.6mほどの円形ピットを溝でつなげたような状態で、円形ピット部分は深さ0.2m、溝部分で深さ0.15mである。

(9) 溝17(第119図)

区画Cの南端を区切る溝である。調査区外の6G-94グリッド周辺からやや北寄りに西へ延び、6F-43グリッド周辺で溝13と重なり途切れる。調査区外の東側にさらに延びているようである。調査した長さは約20mで、幅2.4m、深さ0.2mを測る。浅く広い溝で、中央がさら

に一段深く掘り込まれ、幅0.4~0.5m、深さ0.3mで長さは11mほどである。一部に円形ピットが連続的に掘り込まれている。

(10) 溝18(第119図)

区画Cを区切る東端の溝である。やや西に傾く南北方向に延び、南北両端ともに調査区外に続いているようである。調査できた長さは約27m、幅1.5~1.8m、深さは最大で0.6mほどで底幅0.8~0.9m、本遺構の東側は地山面が傾斜し谷頭へと続く。断面は逆台形である。

(11) 溝19(第119図)

区画C内に位置する溝である。溝18の中ほどから分かれるように南へ向かい、約8mで西へほぼ直角に曲がり、約5m延びて途切れる。幅は約1.5mで、屈曲部は2mとやや幅広になっている。深さは0.1~0.2mと浅く、屈曲部はやや深い。北端で溝18と合流するが深さ、方向等からみて、区画内を区切るのが溝19であり、地形造成跡とその外との区画をするのが溝18となって、大区画と小区画用の溝の違いといった様相である。

(12) 8号土坑(第120図、図版44)

地形造成跡の区画C内に位置する土坑である。5F-86周辺に位置し南に9号土坑が隣接する。主軸を北東から南西に向け、主軸長2.2m、幅1.2mの隅丸長方形を呈する。深さは0.5mで壁の立ち上がりはやや緩やかである。ロームブロックを多く含む覆土で縦まりがなく柔らかい。

(13) 9号土坑(第120図)

区画Cのなかに位置し、北に8号土坑、東に22号土坑、南に10号土坑が位置し土坑群の中に位置している。5F-96グリッドに位置し、主軸をほぼ東西方向に向ける。主軸長1.9m、幅0.9mの隅丸長方形を呈し、深さは0.2~0.3mで壁の立ち上がりはやや緩やかである。覆土はロームブロックを多く含んでいた。

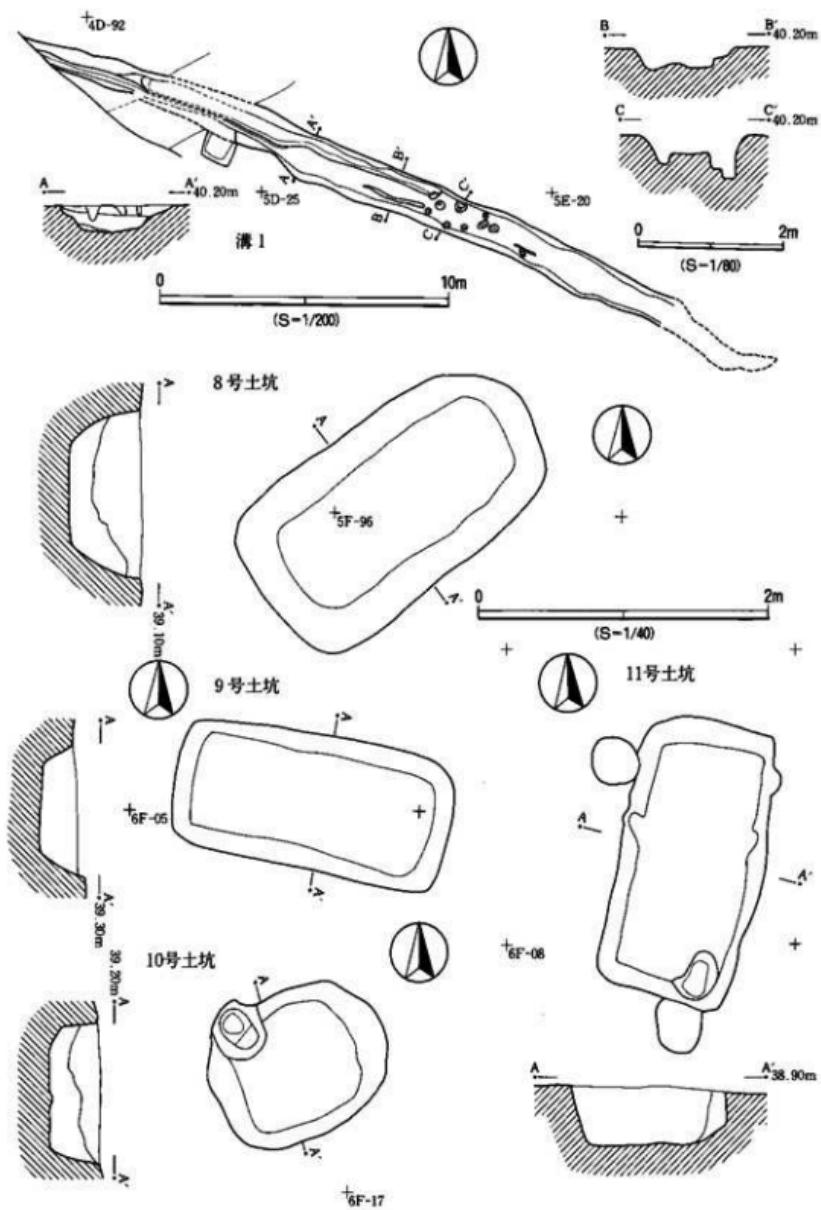
(14) 10号土坑(第120図、図版45)

区画C内に位置し、北に9号土坑が隣接する。6F-06グリッドに位置し、主軸を北東から南西に向ける。長軸1.3m、幅1mの稍円形を呈し、深さは0.3mを測る。北西壁際にピットを1基有し、径0.4m、深さ0.7mと深めで、本土坑に伴うものではなく、ピット群の中の1基とみる方がよからう。覆土はしまりのない土である。

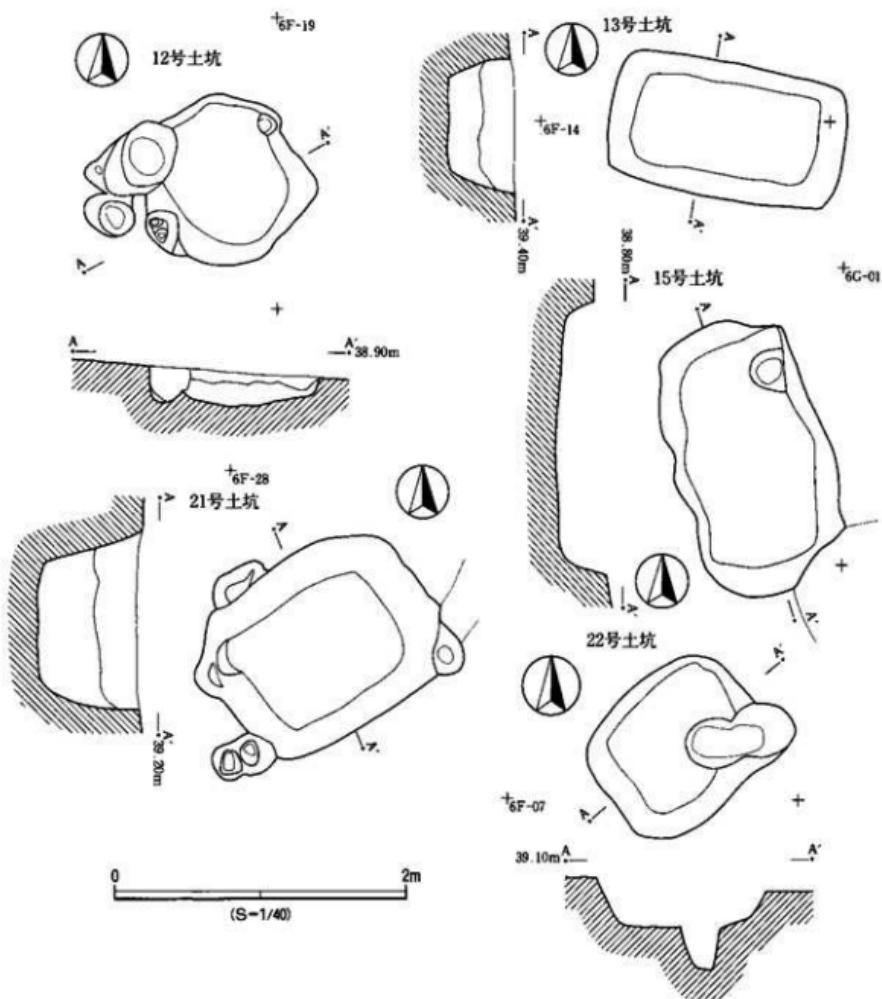
(15) 11号土坑(第120図、図版45)

区画C内に位置し西に11号土坑、南に12号土坑が隣接する。5F-98グリッドに位置し、主軸をやや東を向ける南北方向で、主軸長1.9m、幅1m、深さ0.4mを測る。壁際にピットが3基存在するが、10号土坑同様に本遺構に伴うのではなくピット群のものであろう。壁の立ち上がりはやや緩やかで、覆土はしまりのない暗褐色土であった。

(16) 12号土坑(第121図・第122図、図版45)



第120図 溝1・8号土坑・9号土坑・10号土坑・11号土坑実測図



第121図 12号土坑・13号土坑・15号土坑・21号土坑・22号土坑実測図



第122図 12号土坑出土遺物

区画C内に所在する土坑で、6F-09グリッドに位置し北に11号土坑、南に21号土坑等が存在する。径1.1mの円形を呈し、深さ0.2mを測る。西側の壁際にはピット群が重複している。

遺物は図示できるものが2点あった。1は常滑焼の壺の底部片である。外面はナデによって整形され小起伏が認められる。内面は自然釉がかかっている。破損断面の一部に研磨痕が認められ破片を砥石の用途に用いたものとみられる。2は素焼きの壺の底部片で、かわらけに類するものである。ロクロ整形で、底部は回転糸切り後にナデが行われている。

(17) 13号土坑 (第121図、図版46)

区画C内の6F-04グリッド周辺に位置し、西側で溝13と重複している。主軸をほぼ東西に向け主軸長1.6m、幅0.9m、深さ0.5mを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。

(18) 15号土坑 (第121図)

区画C内の6G-00グリッドに位置し、南に14号土坑が接し、14号土坑を切って掘り込まれている。主軸はやや西に傾く南北方向で、主軸長1.9m、幅1~1.1m、深さ0.4mを測る。壁の立ち上がりはやや傾き、覆土は柔らかくしまりがなかった。

(19) 21号土坑 (第121図、図版47)

区画C内の6F-28グリッドに位置し、北には12号土坑が隣接する。主軸を北東から南西に向け、主軸長は1.6m、幅1.3m、深さ0.7mを測る。壁際にはピット群のピットが重複する。覆土は、ロームを含んだしまりのない暗褐色土であった。

(20) 22号土坑 (第121図、図版47)

区画C内の5F-97グリッドに位置し、西には9号土坑、東には11号土坑等が隣接する。主軸を北東から南西に向け、長軸長1.2m、幅1m、深さ0.4mを測る隅丸方形状を呈する。壁はやや緩やかに立ち上がり、覆土はしまりのない暗褐色土であった。

(21) その他の遺構について

本遺跡には、今までに取り上げなかった遺構があるが、それらは近世以降のものとみられ、比較的新しい遺構である。そのため遺構配置図に掲載し、中には遺構の説明の中で切り合い関係や位置関係の説明で触れた遺構もある。しかし、本文中ではこれ以上触れずに、遺構配置図上に掲載するのみとさせていただく。

(22) その他の遺物について (第123図、図版54)

グリッド出土で帰属する遺構の限定できないものを、遺物の時期に問わらず一括してここに掲載する。

1は土師器の瓶である。ほぼ球形の胴部から底部にかけて遺存し、底部には焼成前に雑な穿孔がなされ、瓶として使用されたものであろう。底径6.4cm、孔径1.9~2.1cmを測る。2は椀または鉢の破片で、口唇部端部には縄文が施文され、外面には結節縄文が施文され、その下に



第123図 グリッド等出土遺物

は1段のS字状結節文が施されている。3は台付甕の器台部とみられ、折り返した台部には結節繩文が羽状に施され、折り返しとの境にはヘラキザミが、その上にはS字状結節文、その上には再び結節繩文が羽状に施されている。4は常滑焼の鉢の破片で、口縁部端部は浅い溝状に段が作られている。5は瀬戸焼の脚付小皿片で、底部に小さな脚部がつまみ上げるように貼り

付けられている。6は白色凝灰岩製の砥石である。下端を折損している。7は常滑焼の擂鉢片で、内面に約5cm幅の平行な横目が施されている。8、9は常滑焼の鉢破片で、8は口縁部で端部が上方と外方にやや細くつまみ上げられている。9は底部片で外面はヘラケズリによって小起伏がみられる。10、11はチャート製の石鎚である。10は長さ4.8cm、幅3.1cm、11は長さ3.7cm、幅2.9cmを測る。

第3章 まとめ

1. 旧石器時代

(1) 出土石器群について

今回調査した石器群は、4か所の石器集中地点から検出された。いずれも第2黒色帯下部のⅨa・Ⅸc層から出土したが、それらを分離する明確な根拠がないため、大略同一時期のものと考えられる。当時の生活面はⅨc層中にあったものと考えられる。それらの中で、集中地点Ⅰは頁岩製の石核の単独出土である。集中地点Ⅱの石器組成は石錐・石核・礫器・剥離痕のある剝片・剝片・碎片・礫・破損礫と貧弱である。集中地点ⅢはⅢa・Ⅲbの2つの集中域に分離され、Ⅲaの多くは礫・破損礫で占められ、ほかに剝片・石核・微細な剥離痕のある剝片が伴う。集中地点Ⅲbでは台形様石器・石錐・刃部磨製石斧石斧・剝片・礫・破損礫が検出された。台形様石器はいわゆる「ペン先形」の形態を呈している。石斧は刃部に研磨が施されており、当該期の特徴的な器種の一つである。集中地点Ⅳは集中地点Ⅲaと同様に礫・破損礫で占められ、ほかに石核・剝片・叩き石が伴う。以上のように、いずれの集中地点も質量ともに充分な資料を提供しているとは言い難い。

検出された石材は頁岩・安山岩・チャート・黒色緻密安山岩・砂岩・泥岩・メノウ・凝灰岩・黒曜石である。集中地点Ⅰ～Ⅳの合計の点数比はそれぞれ26.7/23.7/17.8/11.1/10.4/4.4/4.0/4.0/4.45%で、重量比は32.3/8.8/16.1/11.4/28.2/2.1/0.9/0.1/0.1%となっている。また母岩別分類の可能な頁岩・チャート・メノウについてはそれぞれ3・3・2個体の母岩が抽出できた。その多くが接合関係にあるということは、遺跡の機能を考える上で注目される。接合資料・石核の剥離面構成等から大きく2つの剝片剥離技術を抽出できる。一つは小円礫を利用して短軸方向に打面を形成した後、長軸方向に剝片を剥離していくものである。打面形成の際に、作業面側から細調整を施すものとそうでないものがあり、石材による相違とも考えられる。また作業面側から側面調整を施す例もある。もう一つはやや大きな分厚い剝片を利用して剝片剥離を行うものである。この場合は打面転位を頻繁に行っていることが観察される。石核の素材となる剝片の剥離作業の痕跡は、本遺跡では検出されていない。

出土状況からみると、集中地点Ⅰは単独出土であるので別にして、集中地点Ⅱ・Ⅲa・Ⅲb・Ⅳは径が8m内外の分布域をもつ。石材構成等からさらに小さな集中域へ分離可能な集中地点もある。また、集中地点同士で同一母岩の石材や接合関係の見られる資料が見当たらず、各集中地点で収束しているのも特徴の一つであろう。

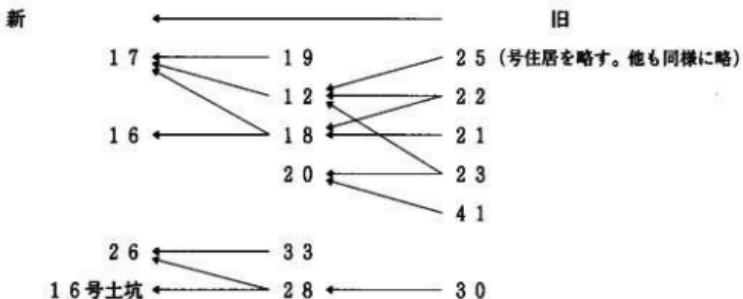
今後は本地域でのⅩ層より上位の石器群の検出とともに、調査・報告の進んだ村田川以北の地域との比較・検討が必要となるだろう。

2. 弥生時代

(1) 集落について

今回の調査は、主として弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡を主体とする集落の一部を調査したものであるが、その時期区分については本文中で触れたように弥生時代後期と古墳時代前期との明確な時期区分が困難なため、区分することはせざり弥生時代として一括して取り扱ってきた。しかし、竪穴住居跡にはいくらかの時期差があるものとみられ、遺構が比較的多く所在する部分では複雑な重複関係の観察から、3時期にわたる新旧の切り合い関係が読みとれる。新旧関係のある竪穴住居跡の中で最も新しいのは、16号住居、17号住居であり、別の一群では26号住居である。これらの新しい竪穴住居跡は、主軸方向がほぼ同一で形態的にはかなり丸みを帯びた方形を呈し、4本の柱穴が存在し、北寄りの2本の柱穴の間に炉が位置し、反対側の柱穴間の壁際にはやや小振りのピットがある。これは本文中では梯子穴ピットとしたが、一般的に呼ばれている呼び方を用いたもので、特に確認があるわけではない。梯子穴ピットの壁際には、貯蔵穴(状)ピットとした、浅くやや大きめのピットが1基認められる。これらのグループ以前の竪穴住居跡は、形態的にはやや小振りで形が定まらないものが多く、また柱穴が規則正しく4本完備しないものが多い。

該期の竪穴住居跡は36軒検出されたが、これらの切り合いによる新旧関係からみると、それほどの長時間にわたって形成されたものではなく、比較的短時間に形成されたような状況である。新旧関係の捉えられたものを列記してみると下のようになる。



上記のように、新旧関係のある住居群をみると、16号住居・17号住居、26号住居が新しい時期のものと言える。

3. 古墳時代

(1) 小銅鐸出土の土坑墓について（14号土坑）

古墳時代の遺構は、本遺跡の中では少なく、方墳1基と土坑墓1基、土坑6基しかない。それらの中で、際だったものは小銅鐸と玉類を出土した14号土坑と命名した土坑墓であろう。遺構自体は、中世の地形造成跡の中に位置し、周辺には該期の遺構は検出できなかった。これは、地形造成時にかなりの深さまで造成工事が行われ、それまでの遺構が削平された可能性も強く、遺構が存在していたことを否定できるわけではない。しかし、本遺構のみ検出され、ほかの遺構が検出されていないことからみると、周辺には該期の遺構は構築されていなかった可能性が高い。また単独の土坑ではなく、周囲に周溝状の溝が巡っていた可能性ももちろん否定できないが、巡っていたとしても非常に浅いもので造成の削平時に消滅してしまったと考えると、通常の古墳の周溝といったような立派なものなく、周溝墓の浅い溝が巡るものといった規模しか想定できない。周溝の在否は重要な意味をもつが、調査時に検出されていないのは事実であり、ここでは存在しなかったものとして取り扱う。

土坑内には木棺が埋納されたものとみられ、土層断面等からの推定で木棺部分の長さ1.9m、幅0.55mを測る。棺底部の長さは1.75m、幅0.4mとなり、木棺の寸法もその前後の寸法であるとみられる。遺体は遺存せず、棺内とみられる部分から遺物が出土している。それらの中で特筆すべき遺物は小銅鐸である。小銅鐸は千葉県内では8例の出土例を数え（平成6年8月現在）るが、そのいずれの出土例も偶然に近い出土状況を示し、本遺跡例のように帰属する遺構の明らかな例は少ない。現段階では、本遺跡例と君津市大井戸八木遺跡例の2例があげられ、君津市大井戸八木遺跡例はまだ正式な報告がなく年報等による概要であるが、本遺跡同様に玉類の伴出が紹介されている。両者の遺跡とも小銅鐸の機能が土坑への埋納という形で終結しており、小銅鐸の機能・用途を考える際の貴重な資料となるであろう。本遺跡の調査からほぼ7年が経過し、県内での出土例は発掘調査当時の4例から8例へと倍増した。出土地区は市原市5例、袖ヶ浦市・木更津市・君津市各1例の計8例であるが、西上総地区からの枠を出でていない。小銅鐸の起源を東海地区に求めるならば太平洋岸からの、後の東海道ルートに当たる交通路によってもたらされたとみる考え方もある。該期の特徴的な遺物の中で時期的に近いパレス壺・手焙形土器、遺構では出現期の帆立貝形古墳等が本地域周辺に特徴的にみられることも、この推測を補強するものと思われる。当時の新しい流れが東京湾岸のこの地域からもたらされていたとみれば、西からの文化伝播の結果とみられる小銅鐸の出土も、その例から漏れないのは当然であろう。

(2) 方墳について

調査区のほぼ中央に1基検出された1辺15mほどの方墳は、その時期を周溝内のハケメのあ

る甕等の出土遺物から古墳時代前期の方墳であると判断した。墳丘は遺存せず、主体部も検出できなかったが、墳丘のないものは古墳時代前期のものとしてはよくみられ、もともと墳丘が築かれなかったのではなく、低平な墳丘が盛土されていたものが後世の耕作等によって削平されて平坦になったものであろう。周辺には中世の地形造成跡がすぐ近くにみられるように、古くから畠等の耕作が進み削平の度合いの著しいところであった。そのために墳丘は早くから削平され、多分墳頂付近に存在したであろう主体部も、当然のごとく削平されてしまったと考えられよう。

北東辺の周溝内の中央には、浅い土坑が1基認められ（5号土坑）、周溝内土坑による埋葬部とみられる。土坑内からは遺物は出土せず、明らかに埋葬部であるという確証も得られなかったが、覆土の状況・位置等からみて本来の主体部とはなり得ないものの、本古墳の周溝内埋葬部であると考えられよう。

4. 奈良・平安時代

（1）竪穴住居跡について

本遺跡から検出された竪穴住居跡は、その数わずかに6軒で主体をなす時期ではなく、君津郡文化財センター調査分をみてもその数は少ない。形態はほぼ長方形を呈し、1辺が3m前後のものが多い。カマドはほぼ北向きにつくられるが、中には東向きのものもあり作り替えが認められている。カマドの袖は不明瞭なものが多く、遺存状態はあまり良好とは言えなかった。煙道は当地域にやや多くみられる煙道の長いタイプのものもみられる。

遺物は特筆するものはないが、中では墨書き器が5点出土し、「日」（？）、「土田」（？）等の文字が読みとれる。瓦片の出土も1点みられるが、図示できるようなものではなかったので本報告書では割愛した。今回の調査範囲が狭いせいもあり、周辺遺跡との特別な関連は見出しがたいが、本遺跡が寺院跡の検出された遠寺原遺跡にも比較的近く、関連をもつ遺物の可能性もある。

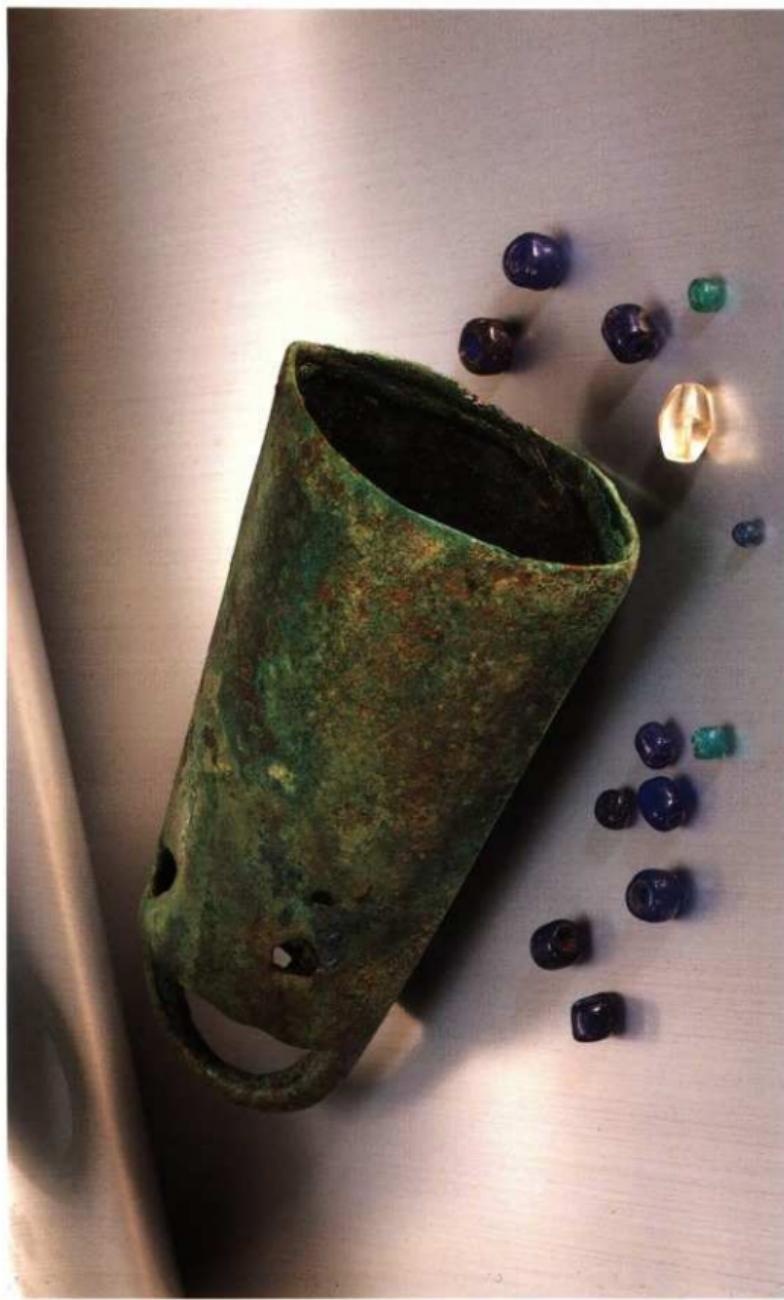
5. 中世

（1）地形造成跡について

調査区の東側に地形を整形し平坦面を作り出している区画が認められ、その部分を地形造成跡とした。平坦な区画を作り出すことによって、土地の境界が明確にされ用途の拡大がなされたものと考えられるが、具体的な用途の解明にまでは至らなかった。区画は3つに分けられ、そのうちの2区画は比較的広く、区画内の遺構も把握された。溝で区切られた区画の面積は、

最大で550m²以上、最少で175m²以上とかなり差がみられ、また区画内の遺構も様々で類型化等はできなかった。最も広い区画には、竪穴遺構、土坑、小ピット群と多彩な遺構が複雑に重複し、多様な土地利用がうかがわれる。竪穴遺構は居住施設ではないとしても何らかの建物跡であるとみられる。西端の小ピット列は塙か柵列といった区画のための施設であろう。北側の区画は、ほとんど掘り込まれた遺構がなく西端に区画の溝と土坑群が認められるのみで、機能・用途を知るには情報が足りない。あぜ跡等は検出されていないが、畑に利用された可能性も考えられよう。以上推定を試みたが、造成された区画の用途の断定は困難である。

写真図版



小鈸鐸及び玉類



14号土坑小銅鐸等出土状況



14号土坑小銅鐸等出土状況



小銅鐸



文脇遺跡周辺空中写真(昭和63年、京葉測量株式会社撮影)



発掘調査前状況

ア



発掘調査前状況



旧石器時代土層断面



石器集中地点Ⅱ出土状況



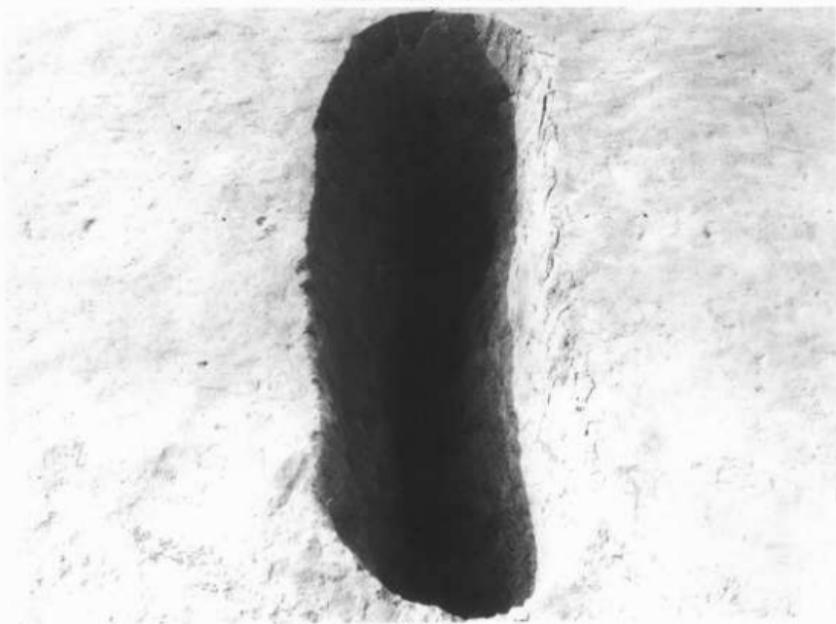
石器集中地点Ⅲ出土状況



石器集中地点Ⅲ出土状況

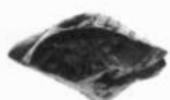


石器集中地点IV出土状況



18号土坑

集中地点 I



1

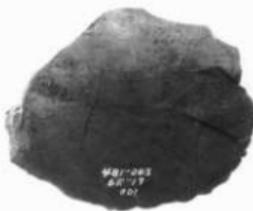
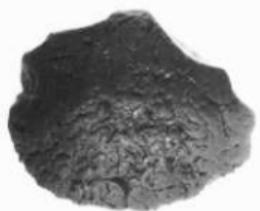
集中地点 IV



1



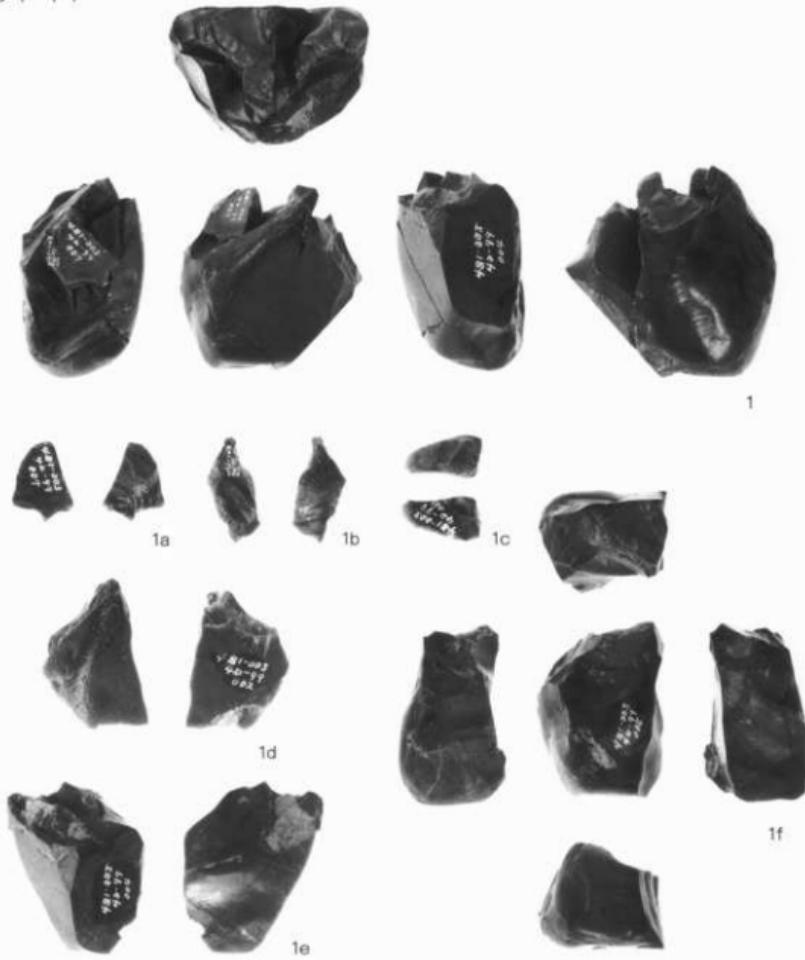
3



2

石器集中地点 I・IV出土石器

チャート1

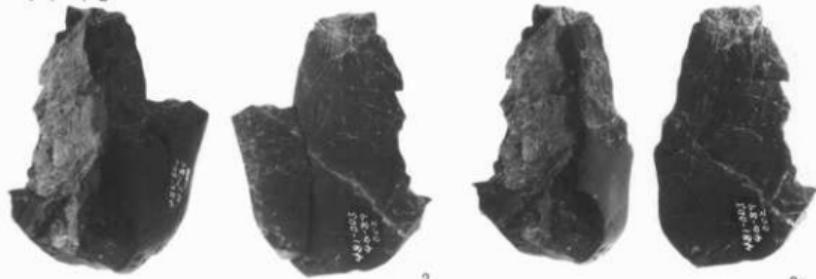


チャート(単独母岩)

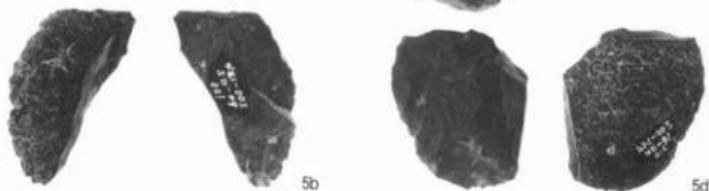
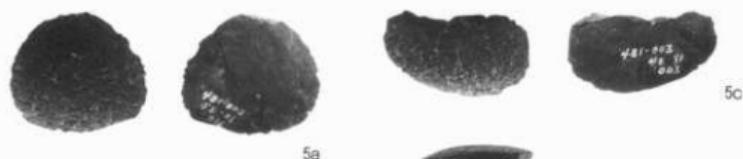
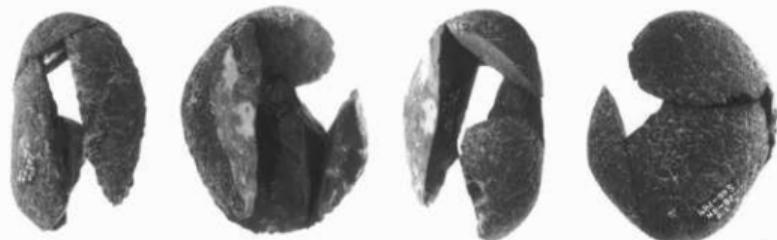


石器集中地点Ⅱ出土石器(1)

チャート 2



安山岩 1



石器集中地点Ⅱ出土石器(2)

頁岩(単独母岩)



8 6 7

11

9

10

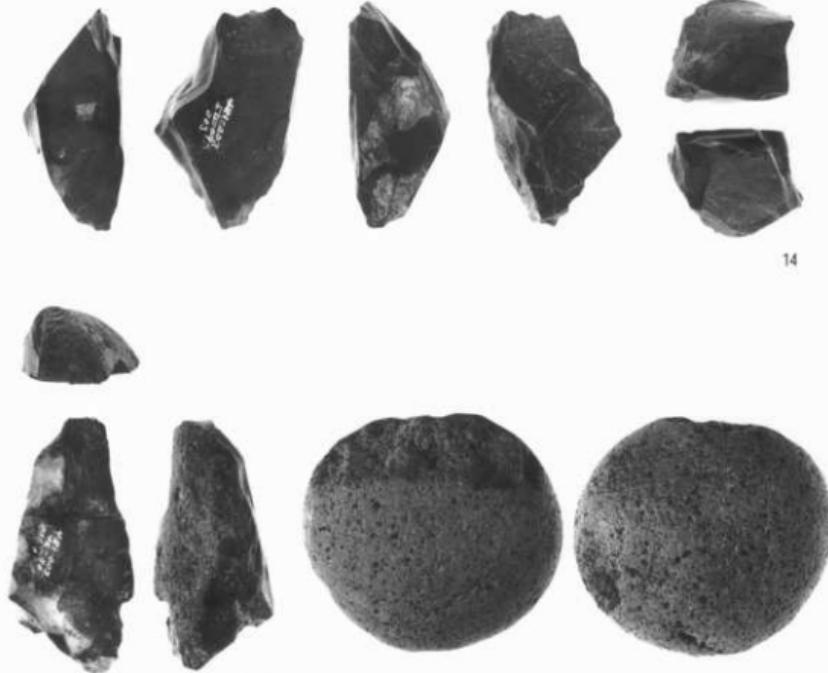
12

14

13

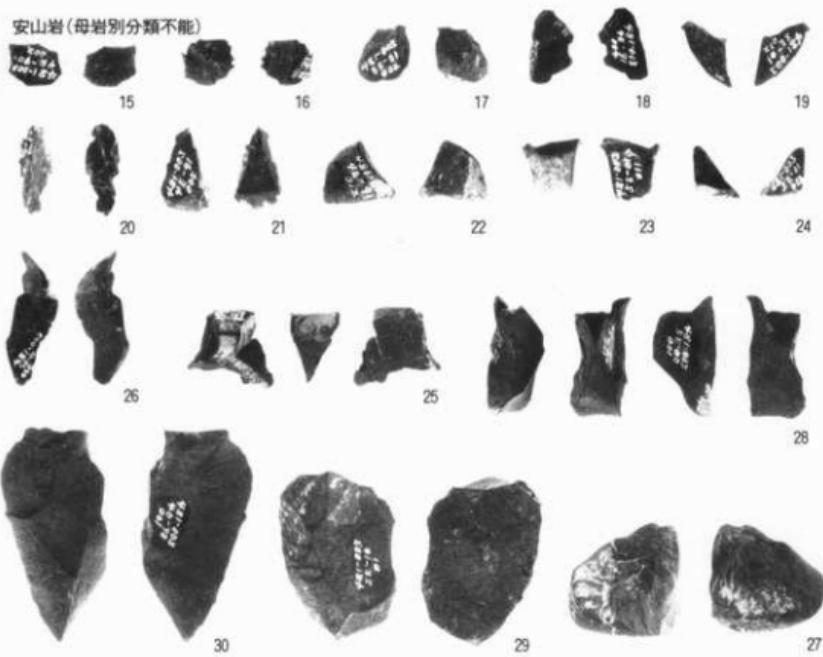
45
(1/2)

石器集中地点Ⅱ出土石器(3)

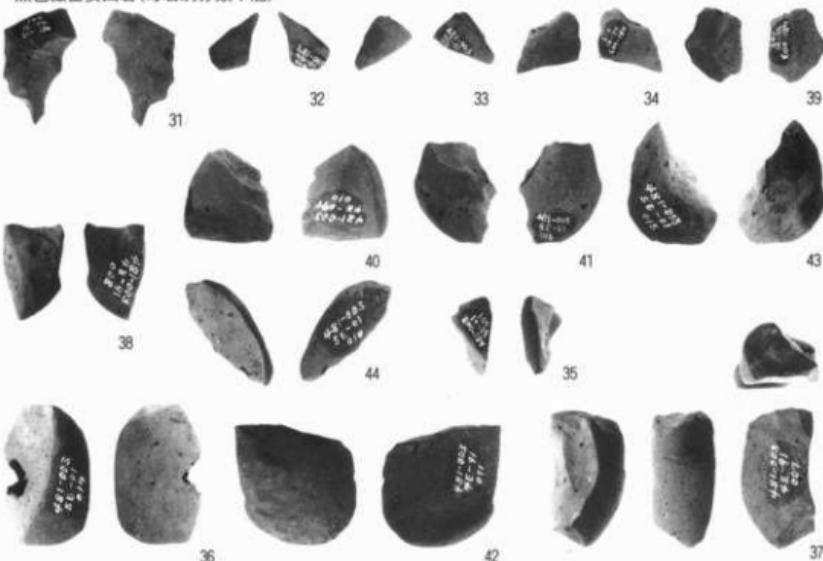


石器集中地点Ⅱ出土石器(3)

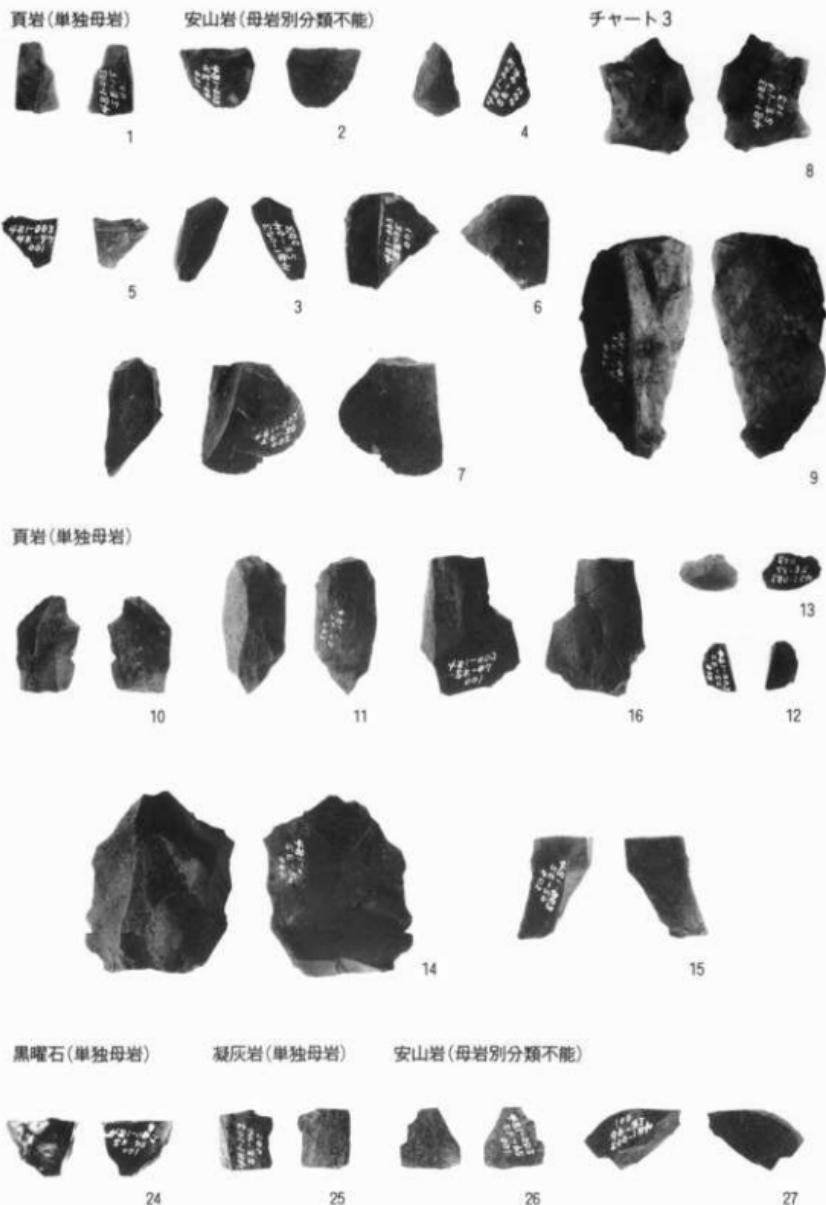
安山岩(母岩別分類不能)



黒色緻密安山岩(母岩別分類不能)



石器集中地点Ⅱ出土石器(4)



石器集中地点Ⅲa出土石器(上段)・Ⅲb出土石器(1)(下段)

頁岩 1



17

17b



17a

17c

頁岩 3

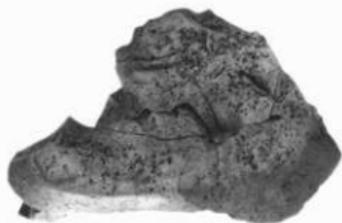


29
(1/2)

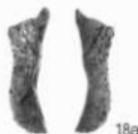
28
(1/2)

石器集中地点Ⅲb出土石器(2)

頁岩 2



18



18a

18b



18e



18d



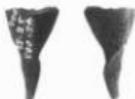
18f



18c



18g



19

メノウ 1



21a+b

メノウ 2



22



石器集中地点Ⅲb出土石器(3)



1号住居



2号住居



2号住居



4号住居



5号住居



6・7号住居



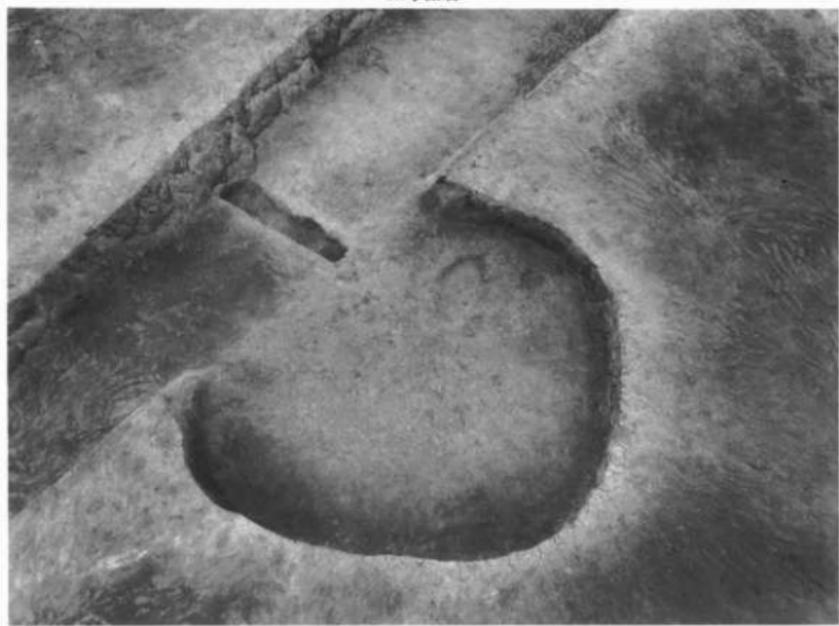
8号住居



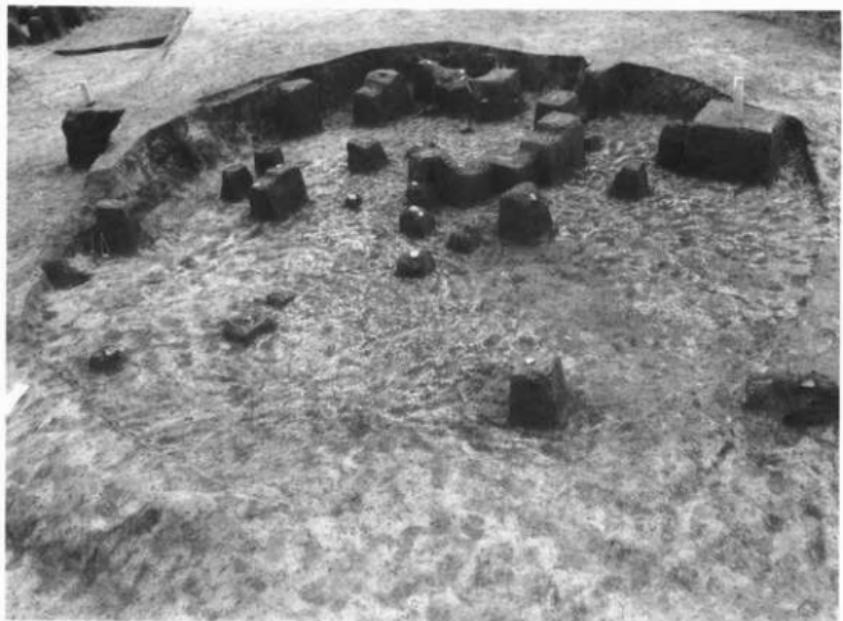
10号住居



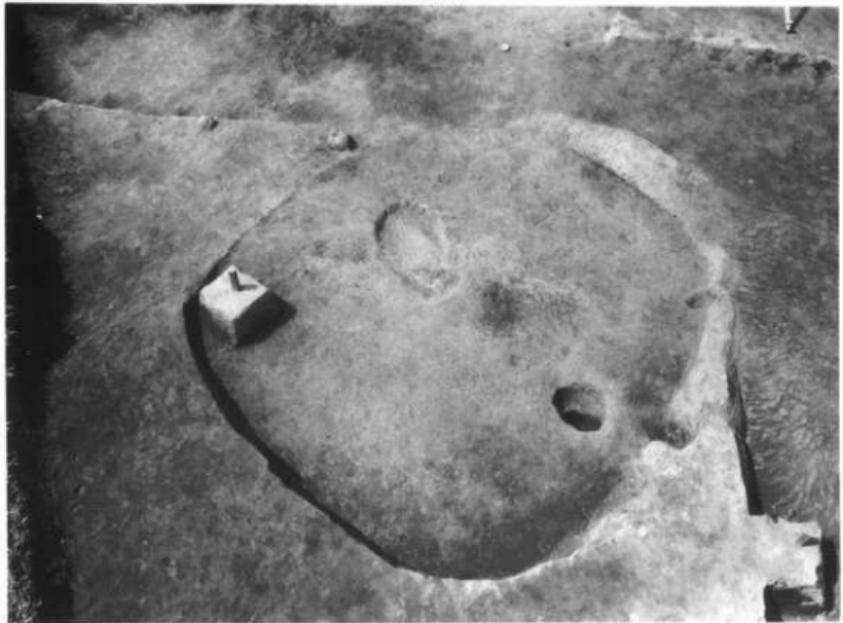
12号住居



13号住居



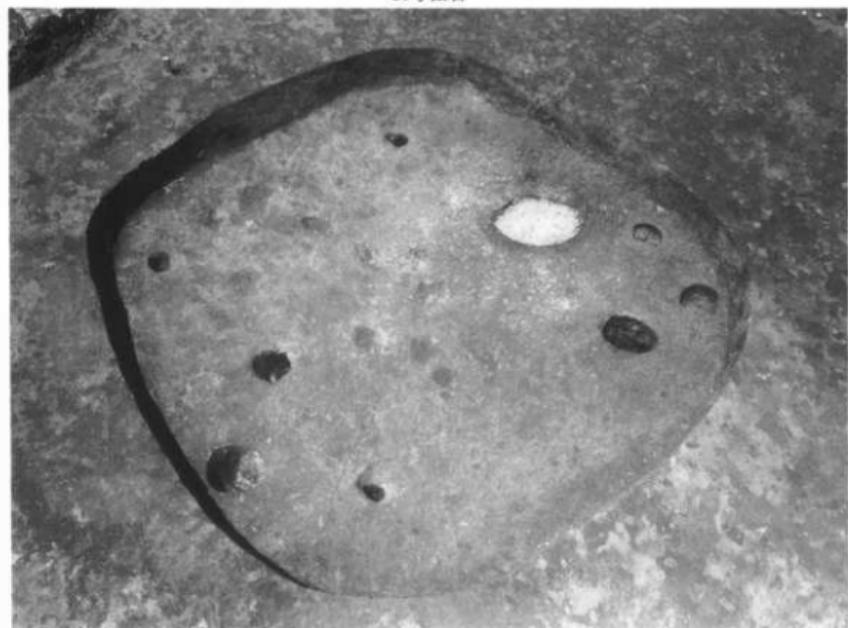
14号住居



14号住居



15号住居



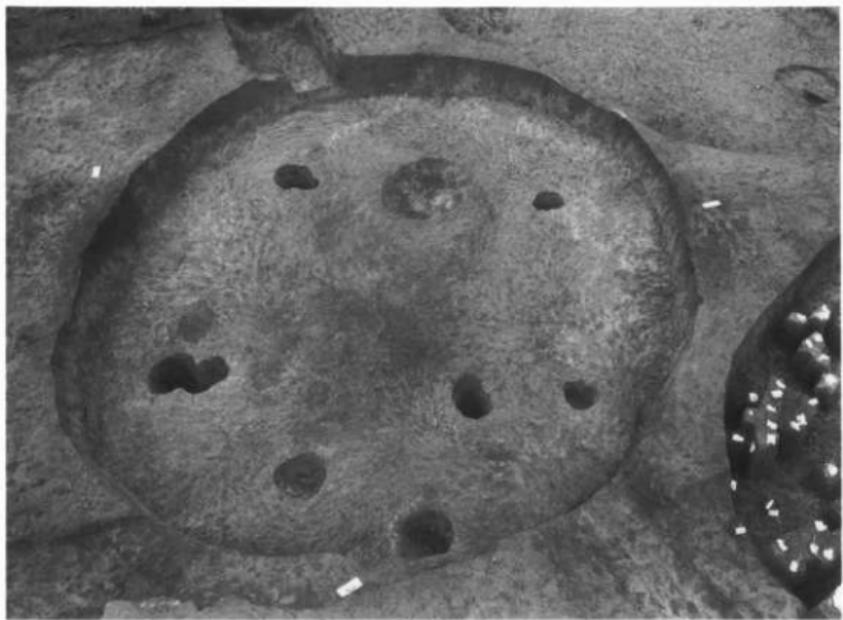
15号住居



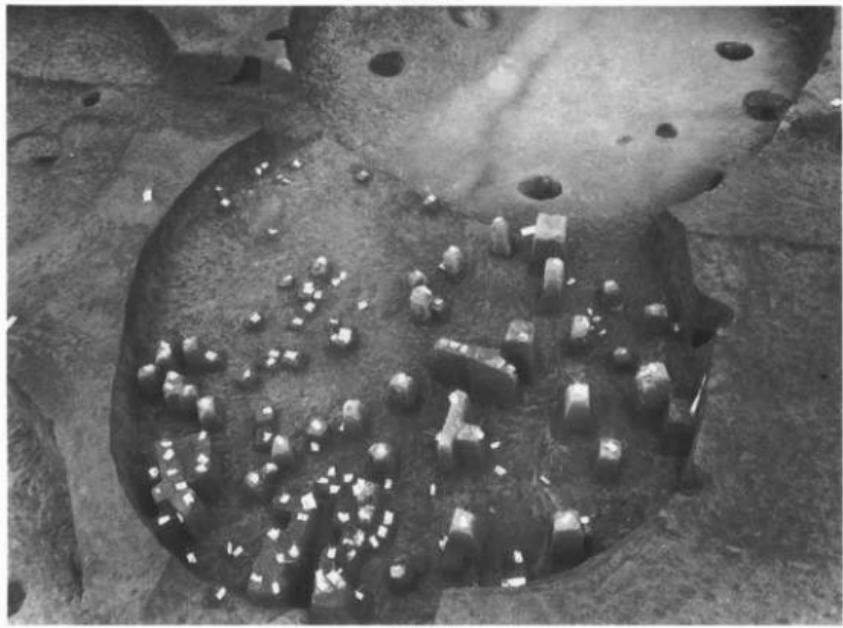
16号住居



16号住居



17号住居



18号住居



19号住居



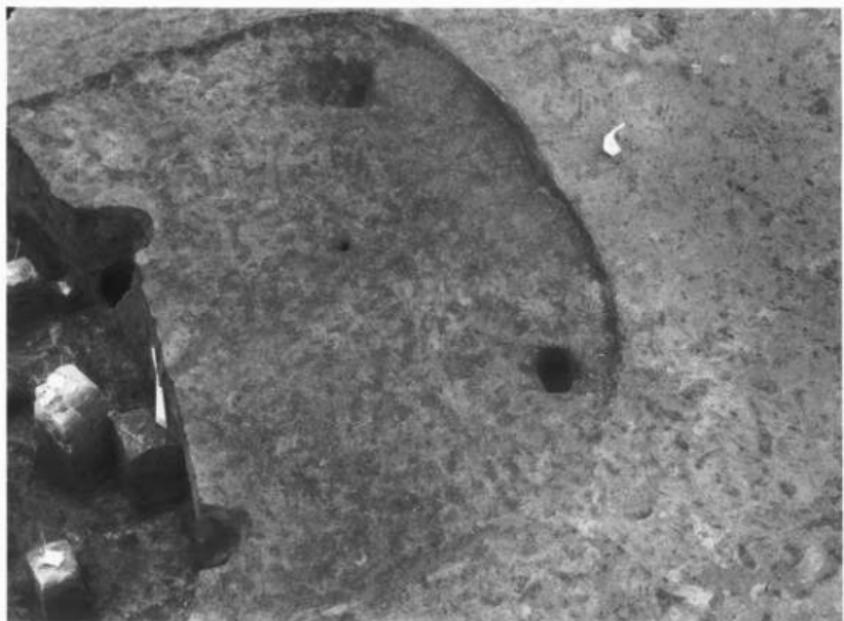
19号住居



20号住居



20号住居



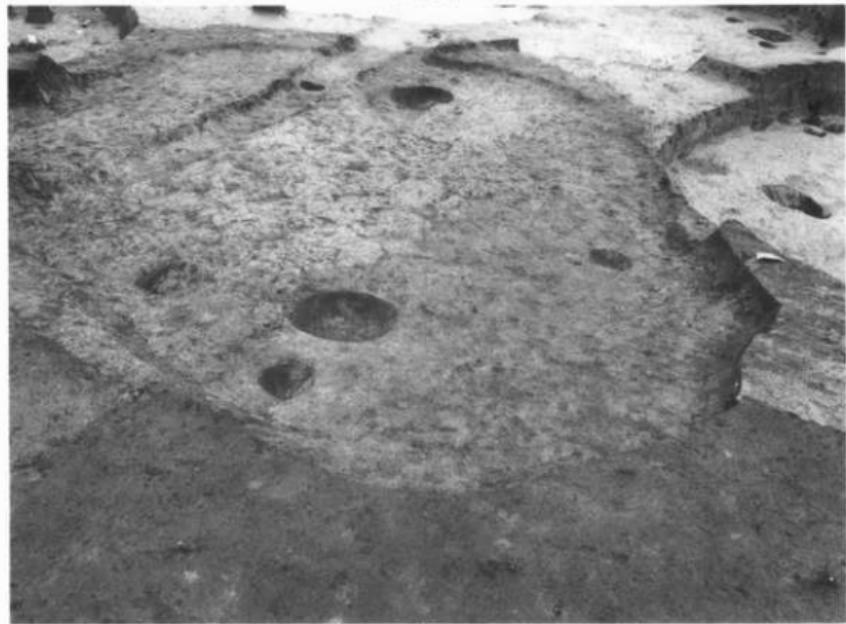
21号住居



22号住居



23号住居



25号住居



26号住居



27号住居



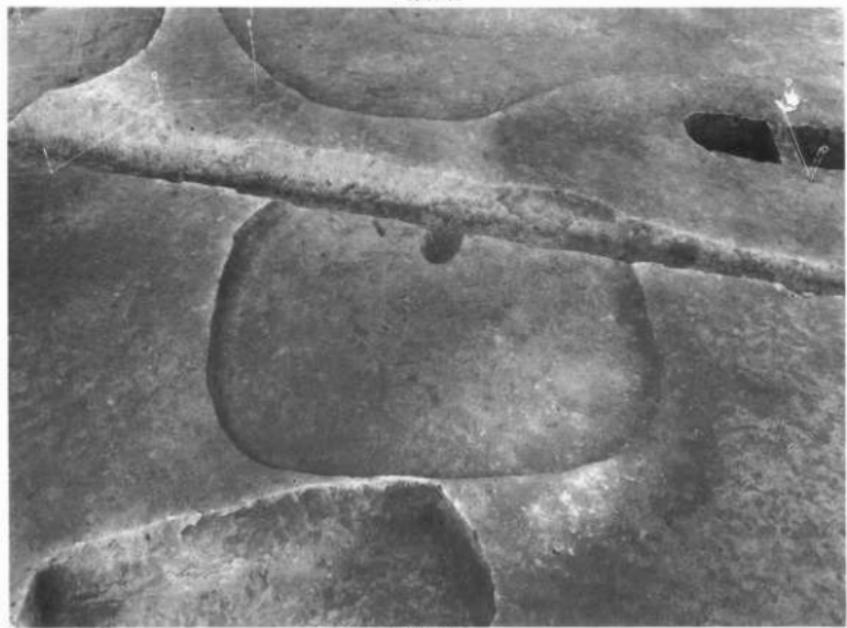
28・29号住居



31号住居



32号住居



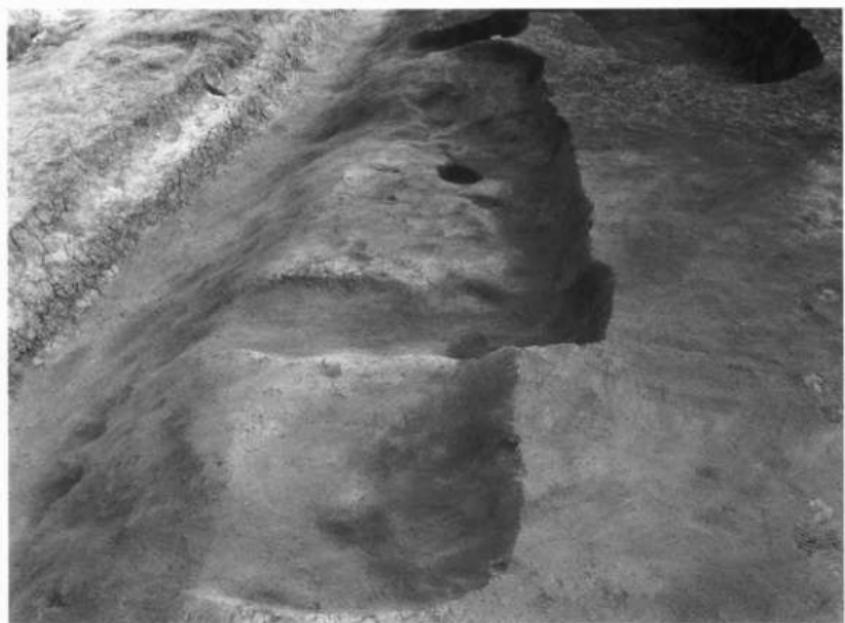
34号住居



35号住居



36号住居



37号住居



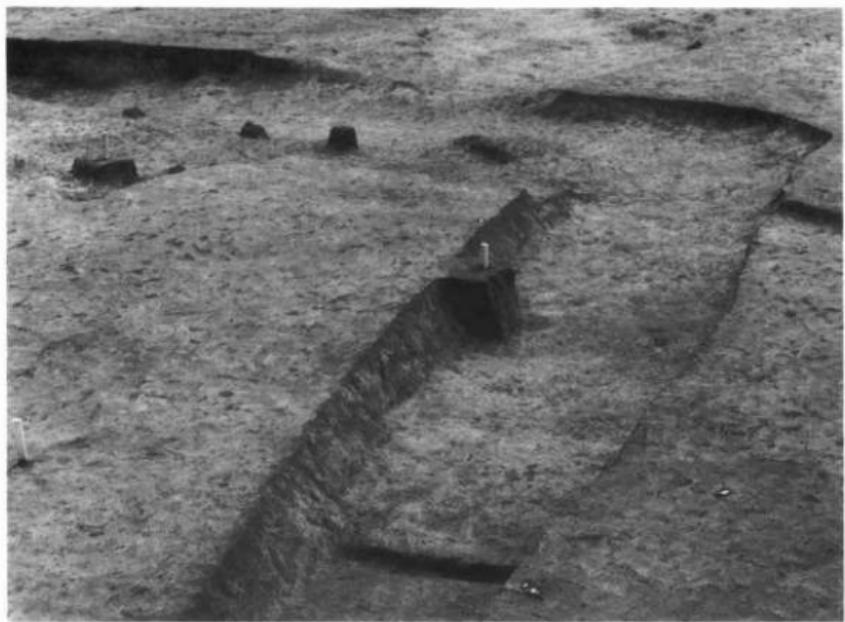
41号住居



あぜ状遺構



あぜ状遺構



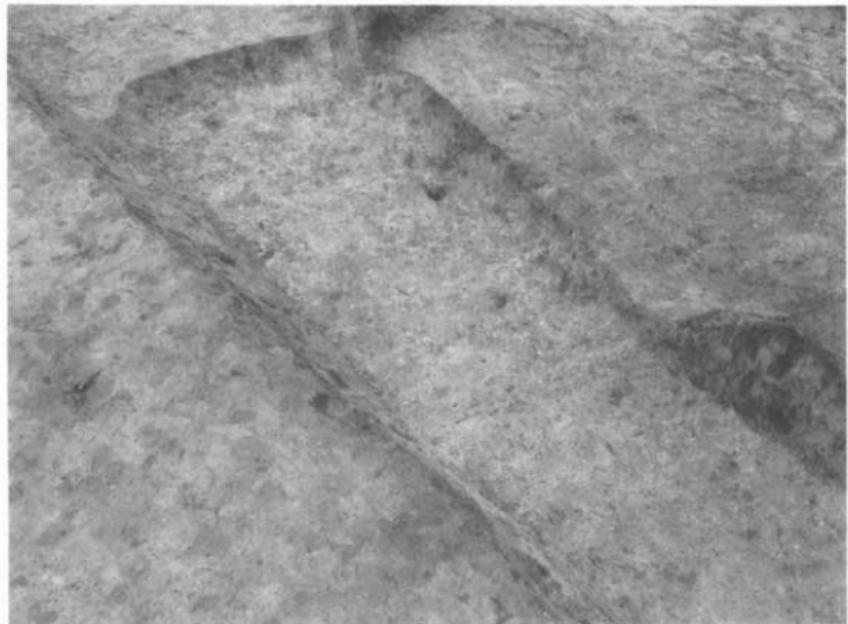
方墳 1



方墳 1



方墳 1



5号土坑



14号土坑



14号土坑



14号土坑



14号土坑



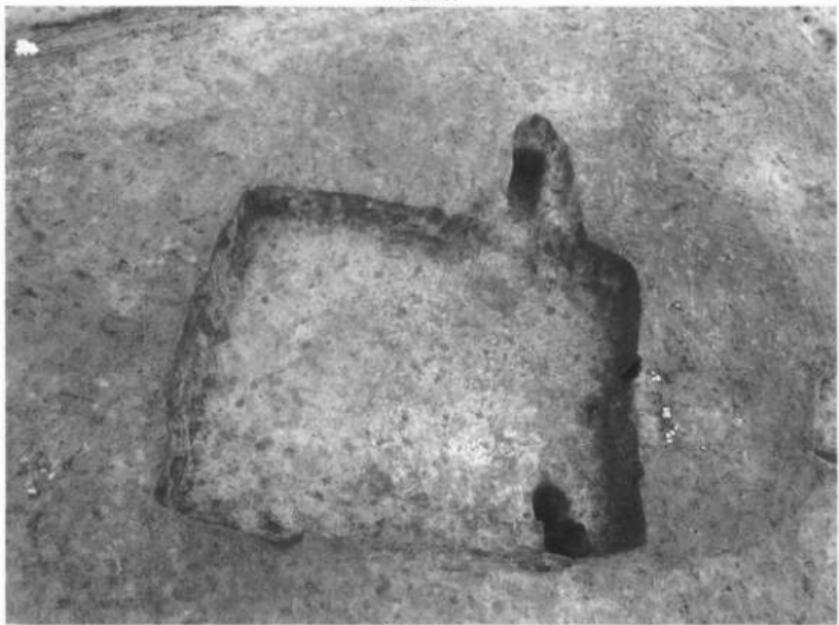
14号土坑



14号土坑



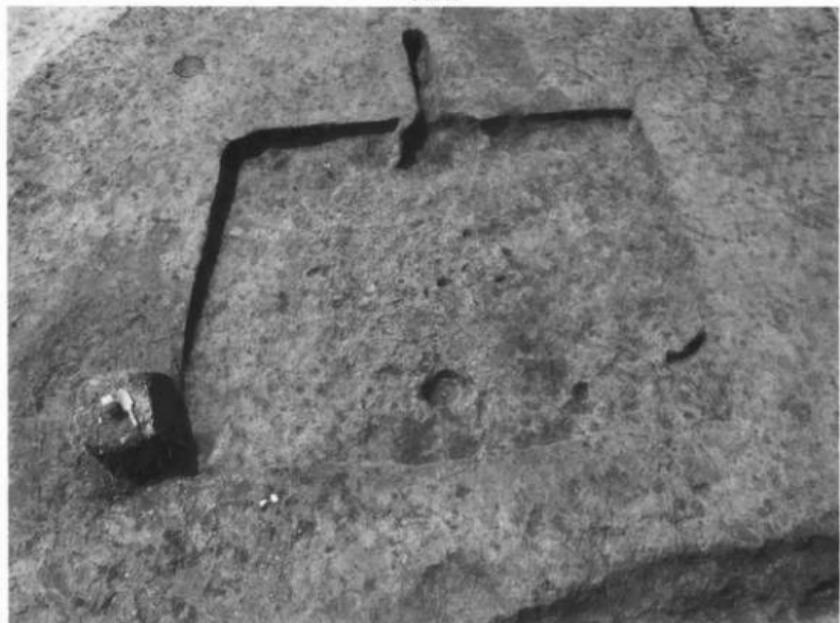
3号住居



3号住居



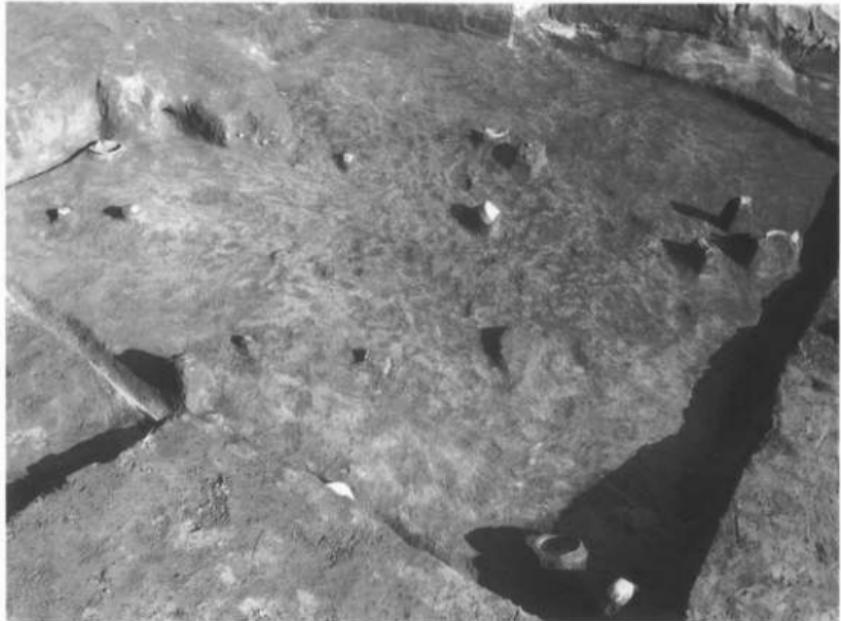
9号住居



9号住居



11号住居



38号住居



38号住居



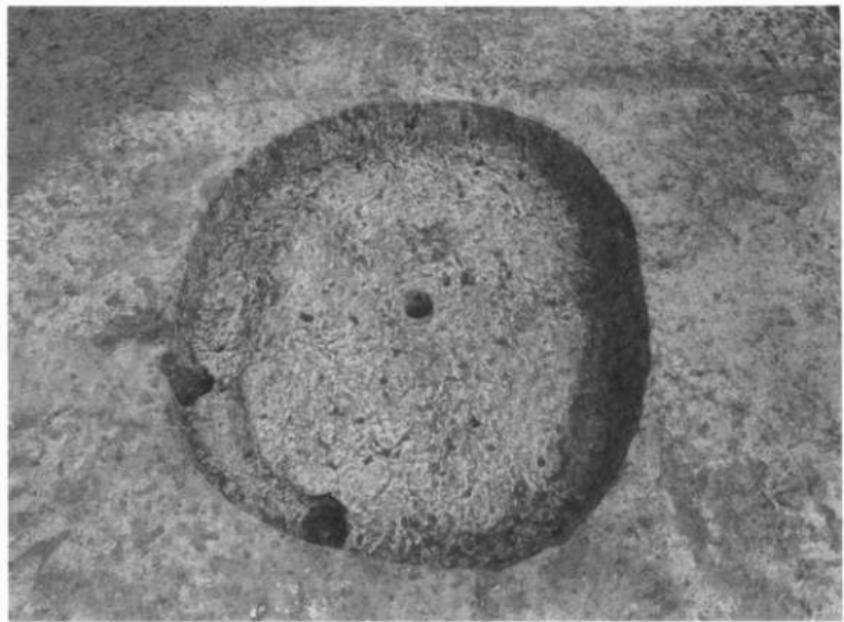
39号住居



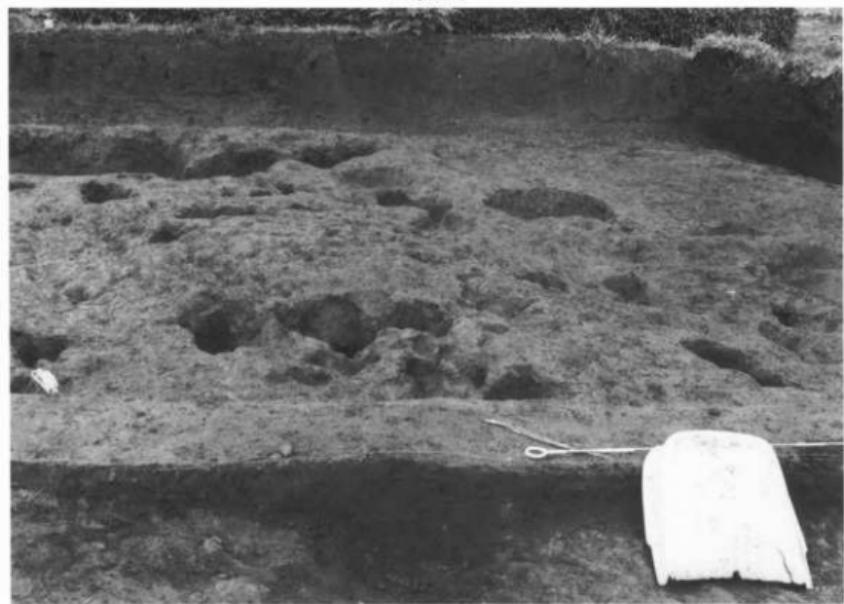
39号住居



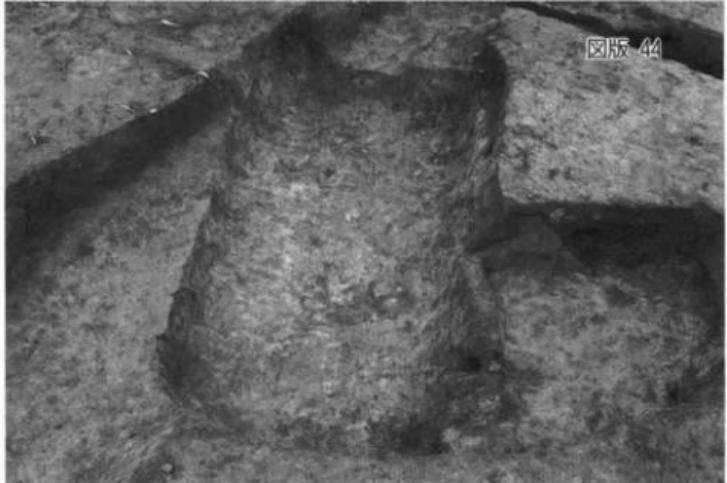
39号住居



24号竪穴



地形造成跡



3号土坑



6号土坑



8号土坑



10号土坑



11号土坑



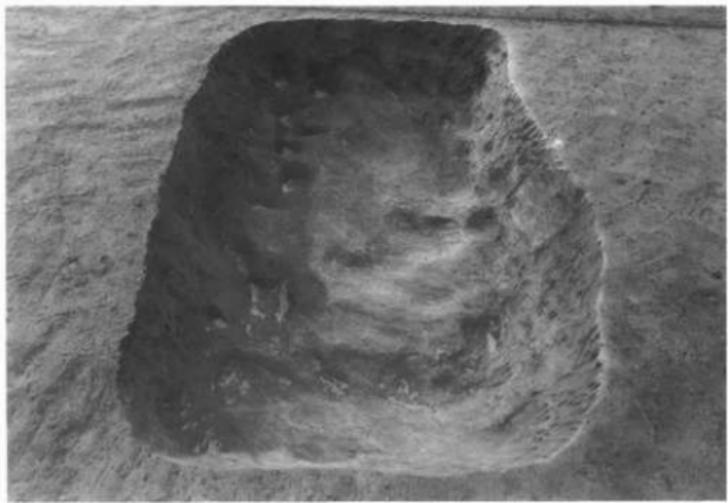
12号土坑



13号土坑



17号土坑



19号土坑



20号土坑



21号土坑



22号土坑



溝1



溝13



溝14



2号住居-1



15号住居-2



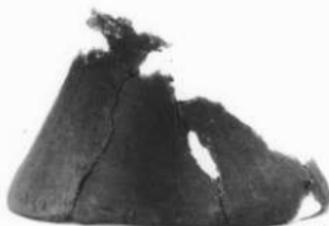
5号住居-1



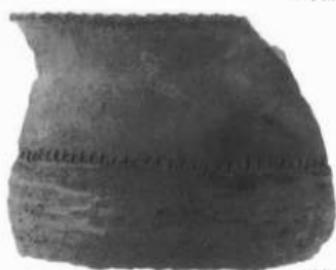
16号住居-2



16号住居-1



10号住居-6



14号住居-1



17号住居-1

出土遺物(1)



17号住居-4



17号住居-4



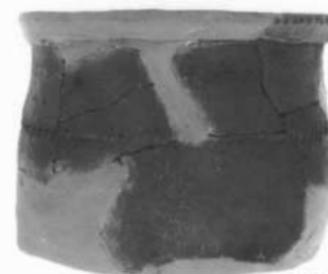
17号住居-4



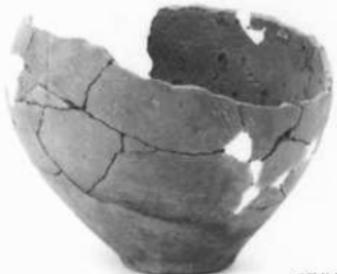
17号住居-7



17号住居-8



17号住居-6

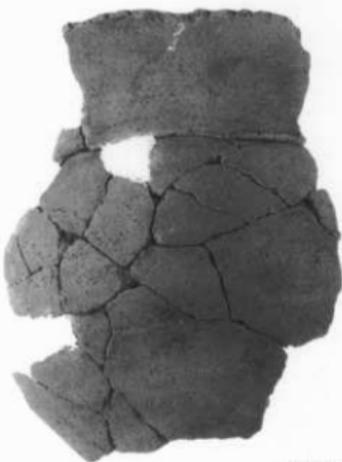


17号住居-5

出土遺物(2)



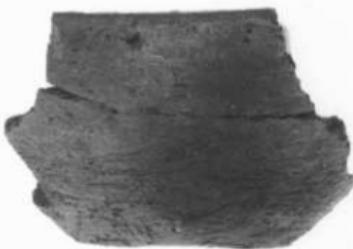
20号住居-1



32号住居-4



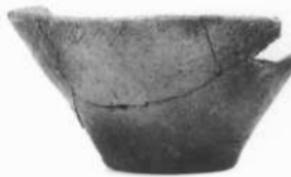
26号住居-14



32号住居-1



27号住居-1



35号住居-6

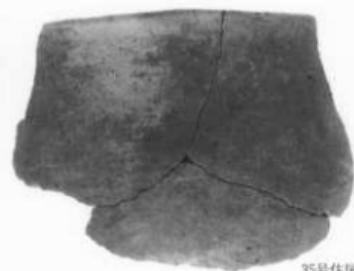


32号住居-5



35号住居-3

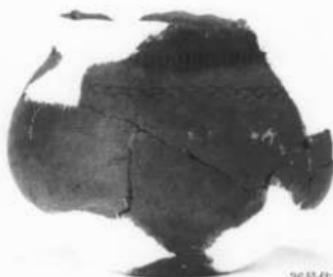
出土遺物(3)



35号住居-5



方墳1-2



36号住居-1



方墳1-16



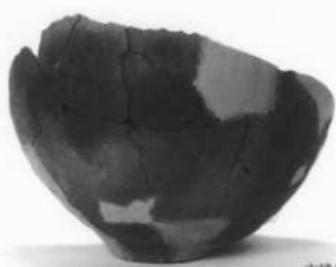
方墳1-1



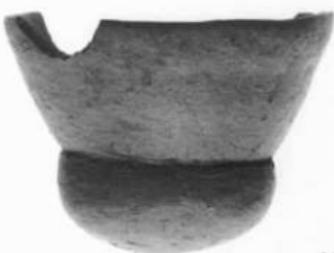
方墳1-3



方墳1-12



方墳1-14



方墳1-8

出土遺物(4)



3号住居-6



9号住居-4



9号住居-1



3号住居-5



9号住居-5



38号住居-7



3号住居-2



38号住居-8



3号住居-1



38号住居-4

出土遗物(5)



38号住居-6



39号住居-5



38号住居-6



39号住居-2



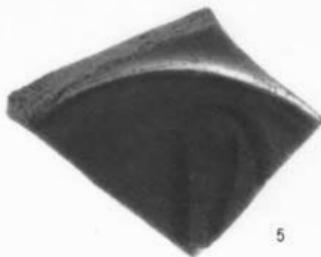
39号住居-4



グリッド一括-1



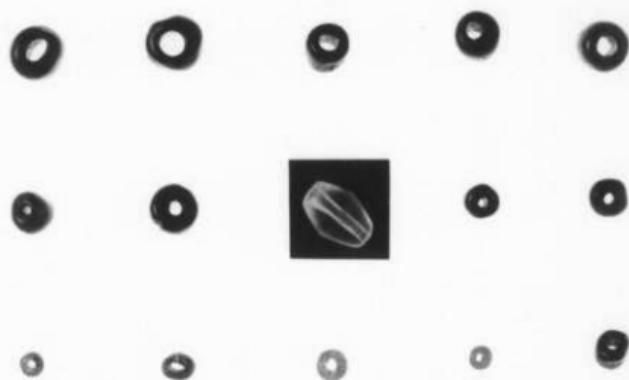
6



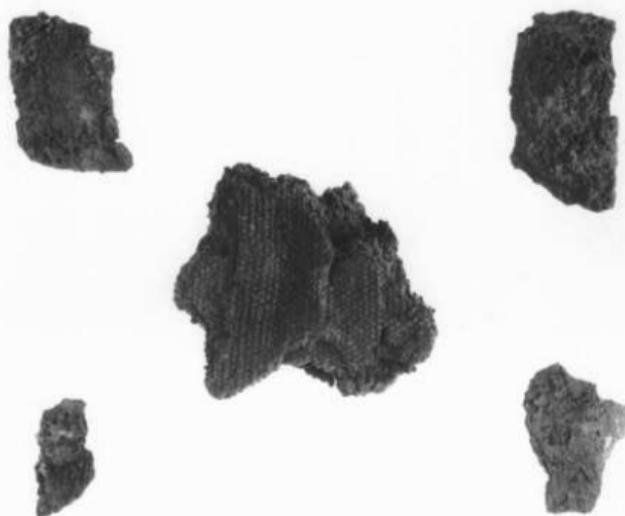
5

24号堅穴

出土遺物(6)



14号土坑出土玉類



14号土坑出土鉄製品・布状製品

出土遺物(7)

報告書抄録

ふりがな	そでがうらしふみわきいせき
書名	袖ヶ浦市文臨遺跡
副書名	主要地方道千葉鴨川線県単道路改良(幹線道路網整備)工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第266集
編著者名	加藤 正信、大谷 弘幸
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811
発行年月日	西暦1995年 3月30日

所取遺跡名	所取遺跡所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
文 脇	袖ヶ浦市 野里	12481	003	35度 24分 02秒	140度 02分 52秒	19880601 19881130	3,150	主要地方道 千葉鴨川線 県単道路改良 (幹線道路網整備) 工事に伴う 埋蔵文化財 調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
文 脇	集落跡 散布地	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安 時代 中世	石器集中地点 陥穴 竪穴住居跡 方墳 土坑墓 土坑 竪穴住居跡 地形造成跡 陥穴 土坑 溝	4か所 1基 36軒 1基 1基 6基 6軒 1か所 1基 9基 9基	台形様石器、石錐、 石斧、剥片等 壺、甕、器台、高杯、 弥生土器 甕、壺、堆、土師器、 小銅鐸、ガラス玉、 蕭玉、鉄製品 壺、甕、瓶、土師器、 須恵器 青磁片、陶磁器片	土坑墓内から小銅鐸と玉類 がまとまって出土した。

千葉県文化財センター調査報告第266集

平成7年3月20日 印刷
平成7年3月30日 発行

袖ヶ浦市文脇遺跡

—主要地方道千葉鴨川線県単道路改良（幹線道路網整備）
工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—

発行 千葉県土木部
編集 財團法人 千葉県文化財センター
印刷 大和美術印刷株式会社
